

奇譚クラス

新時代の風俗雑誌

惑溺の愉悅 特集號



1952 12月号

奇譚クラス

12

定價九拾円
地方売価九拾參円





土多玲子画帖

凄艶！ 獵奇！

玲子画帖の痺れるような妖しい雰囲気は、素晴らしい反響を呼んで、またとなく限定部数を突破してしまいました。其の為、切以後の御申込に對しましては取敢えず一部御返金致して居りましたが、遂に読者の要望もだし難くやむを得ず若干部数増刷しました。此の機会を逃さず今直ぐお申込下さい。尚、一時返金致しました方及びK K通信会員には優先的に取扱いさせて頂いております。

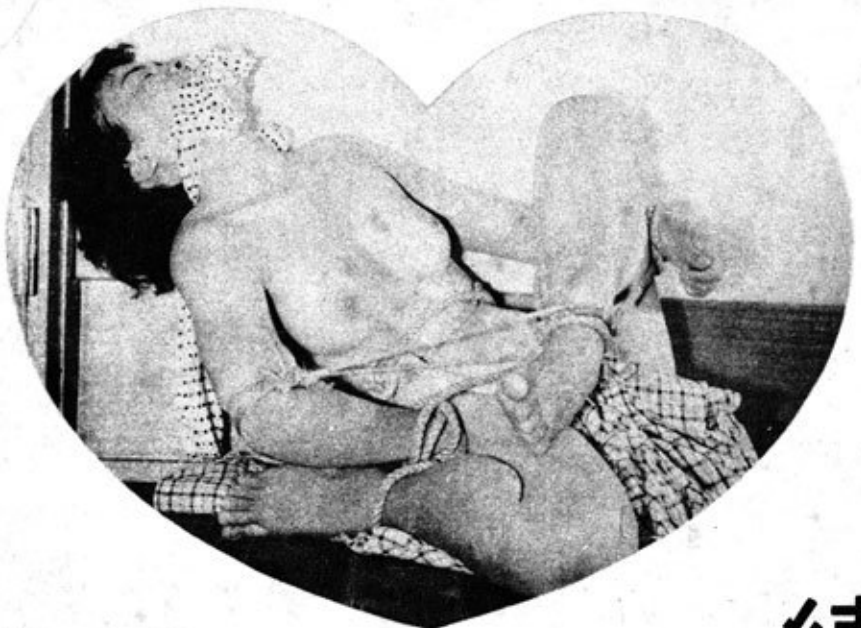
○増刷分、価額 三百六十円（送料別途費共）
○絶対市販は致しません。
○表紙 縦六寸横八寸五分横トデ豪華装美本
○画面 上質鳥の子紙美術コロタイプ鮮明仕上
○各画間に説明文句入り
○申込所 大阪府堺区西菅原通り四丁
曙書房代理部 振替大阪三九五六番

内容

- みの虫（みの虫のみのを取られた丸裸……）
白濁の彼女がくるくろと巻きにされて……
- 時雨（うしろ手の素肌をかなし雨……）
しどろしどろだね。これでもこたえないか……
- 流れ星（素肌を風がながめるにくらしさ）
素肌に細雨が吹込む痛さに身を悶えて……
- 蚊帳（地獄と極楽蚊帳のうちと……）
ウツツツ。金もほしいがこの方も……
- 憂酒（そんな姿はウツツ……たまらないぜ）
これが美人の病気だと思身ながら……
- かきみ（責められる我が身がうろたえ……）
あゝ、もう、そ、そんな……ゆるして……
- 雲の窟（降りしきる雲に裸の身を押し……）
粉雪の降りしきる中に、一糸もたはす……
- 土蔵（土蔵の奥の奥の夜の寒さ……）
土蔵の中の奥の奥、助けを呼ぶにも……

の喉にこの通りじや、八つの時に捨てられ
たお前を拾いあげて十数年、養つてやつたの
は他所の男にやる為ではない、恩を仇で返し
たお前は、あの男に對する未練の糸を地獄の

呻き声は讀者にさえがられて騒亂の苦悶は
タラ／＼と流れる脂汗と共に彼女の全身を悪
魔の舌で撫ぜまわすのだ、それは今にも気が



縛られた女写真集

☆ 縄を纏った女体美の探求 ☆

印刷ではない直接印刷紙に焼付けた責めの写真
真をあなたの貴重なコレクションの一翼へお加
え下さい。

光沢面焼付 五枚一組（一集分）二百円
印刷紙焼付 五枚一組（一集分）二百円
（送料共）

◎ 只今在庫・分譲中のもの ◎

- 第四篇（第三十一集より第四十集迄）十集分
- 第五篇（第四十一集より第五十集迄）十集分
- 第六篇（第五十一集より第六十集迄）十集分
- ◎ 以上各集共一集分は各々五枚一組です ◎
- 御申込次第早速厳重密封の上急送致します。
- 五集分以上纏めて御申込の分には書留送料当方負担にて御送品申し上げます。

◎ 今回、特に読者待望の各種の逆さ吊り責めを敢行
従来引続いて御申込下さった方々に分譲致します
◎ 読者による緊縛感、各種道具による切実感に富み
だもの、鎖を用いたもの等多数を含んでおります

愛好者の方々の熱狂的な
讚美を受けて、その
貴重なコレクションとし
ての役目を果して参りま
した本誌独特の責めの寫
真は、毎号引続いて変つ
た姿態美と緊縛美の新作
品を加えて参りました。
一見恍惚境へ誘ひ込む
美しいその緊迫感には好
家臨臨の的となつており
ます。読者サービスとし
て実費で分譲しておりま
すから、是非お申込下さ
るようお待ちしております。

○ 申込所
大阪府堺区西菅原通り四丁
曙書房代理部
振替大阪三九五六番

耽美派小説名場面集(潤一郎の巻)

「さあ、あかりを付けて仙吉に会わせて上げようね」

ビシッ切火を打つように火花が散つて、光子の手から蠟燭が燃え上ると、やがて部屋の中程にある燭台に灯が移された。

西洋蠟燭の光りは、腰間と室内を照らして、さまざまな器物や置き物の黒い影が、魑魅魍魎の跋扈するような姿を、四方の壁へ長く大きく映している。

「ほら、仙吉は此処に居るよ」

こう云つて、光子は蠟燭の下を指さした。見ると燭台だと思つたのは、仙吉が手足を縛られて両肌を脱ぎ、額へ蠟燭を載せて仰向いてすわっているのである。顔と云わず頭と云わず、鳥の糞のように燃えつくした蠟の流れは、両眼を縫い、唇を塞いで喉の先からぼたぼたと膝の上に落ちていく。声も立てられずにいる私を光子は忽ち後ろ手に縛り上げて仙吉の傍へ胡坐を掻かせた、そして

「蠟燭を落したらきかないよ」と額の真中へあかりをともした。

——「少年」より——



無間の三平は旦那の取持で、梅吉と二人つきりで待合の一部屋に向いあつていました。

三平はだん／＼酔いが醒つて来ると、胆が落ち付き、そろ／＼水を向け始めます。旦那をはじめ二三人の茶着が、中二階の掃き出しから欄間を通して、見て居ようとは夢にも知りません。

しかし今一息と云うところで、茶着の梅吉は旦那とめし合せてあつた通り三平に例の催眠術をかけようとするのです。三平にして見れば今夜こそは、と云う氣持でソクソクしているのですから、場合によつたら「実はあの催眠術も、お前さんに惚れた弱味の証言ですよ。」こう打ち明けるつもりでしたが、

「そら！もうかゝつちまつた。そらら。」

と、忽ち梅吉の顔とした涼しい目元で睨められると、又女に馬鹿にされたいと云う慾望の方が先に立つて、此の大事の瀬戸際に又又ぐたりとうなだれてしまいました。

「梅ちゃんの為ならば、命でも投げ出します。」とか「梅ちゃんが死ねと云えば、今でも死にます。」とか尋ねられるまゝに、彼はいろ／＼と口走ります。

もう眠っているから大丈夫と、隙見をして居た旦那も茶着も座敷へ這入つて来て、ずらりと三平の周囲を取り巻き、梅吉のいたづらを横腹を叩いて袂を咄んで、見ています。三平は此の様子を見て、叱咤しましたが今更止める訳にもいきません。むしろ彼に取つては、惚れた女にこんな残酷な真似をさせられるのが愉快なのですからどんな恥しいことでも、云い附け通りにやります。折角めかし込んで来た衣裳を一枚一枚剝がされて、裸にされたあげく、云うに忍びないような事をされるのでした。

——「無間」より——



奇譚クラブ 十二月号 目次

口絵 フランス貴婦人の變態性生活

(扉) (樂園を追放されたアダムとイヴ) 甘き歡樂の後

讀者通信

(31)
(36)
(43)
(86)
(127)

濁れる愛執

松井籟子 (16)

初夜
月と裸女

笹田 豊 (27)
三富 浩生 (27)

奴隸妻

片矢 薫 (32)

指の秘密

武山 武彦 (54)

戦國愛慾繪卷

男裝寵姫傳

亀岡絃七郎 (59)

孤独なフアンタジー
ある少年の夢想

芳野 眉美 (64)

世界艶美文学紹介

モンテカルロの佝僂男

モオリス・ブルウジエ (44)

性的變質者の記録

中国艶話 毛のない女の物語

赤塚與志夫 (69)

女性器崇拜

雨森 順一 (80)

糊と泥と砂

長岡変一郎 (88)

4Sクラブ探訪記

二俣志津子 (98)

非公開映画

世界の閨房

藤安 節子 (103)

囚衣 (或る人妻の生活記録)

古川 裕子 (116)

陰に關する怪奇な報告

村 田 生 (87)

包皮切斷と龜頭露出

根 上 多男 (97)

SODOMIEの珍裁判

鳴 尾 善治 (123)

ロマンチックなサディズム

森 山 美歌 (138)

香具師放談

浮 家 鷹三 (128)

女囚私刑体験記

小坂多美枝 (124)

セックスの記憶

綾 久 江 (156)

錯乱の倫理

東 規矩也 (162)

夕映え燕の教訓

丘 正 雪 (147)

狂い咲くカンナ 其の後の告白

羽村 京子 (143)

折込口繪寫眞

縛った女を撮す

辻村 隆



鞭は身内の快樂の爆薬に火をつける導火線、痺れるような
肌の痙攣、あの忘れる事の出来ない悦樂が門を開けて待つ
ているのだ。

快^け樂^{らく}の門^{もん}

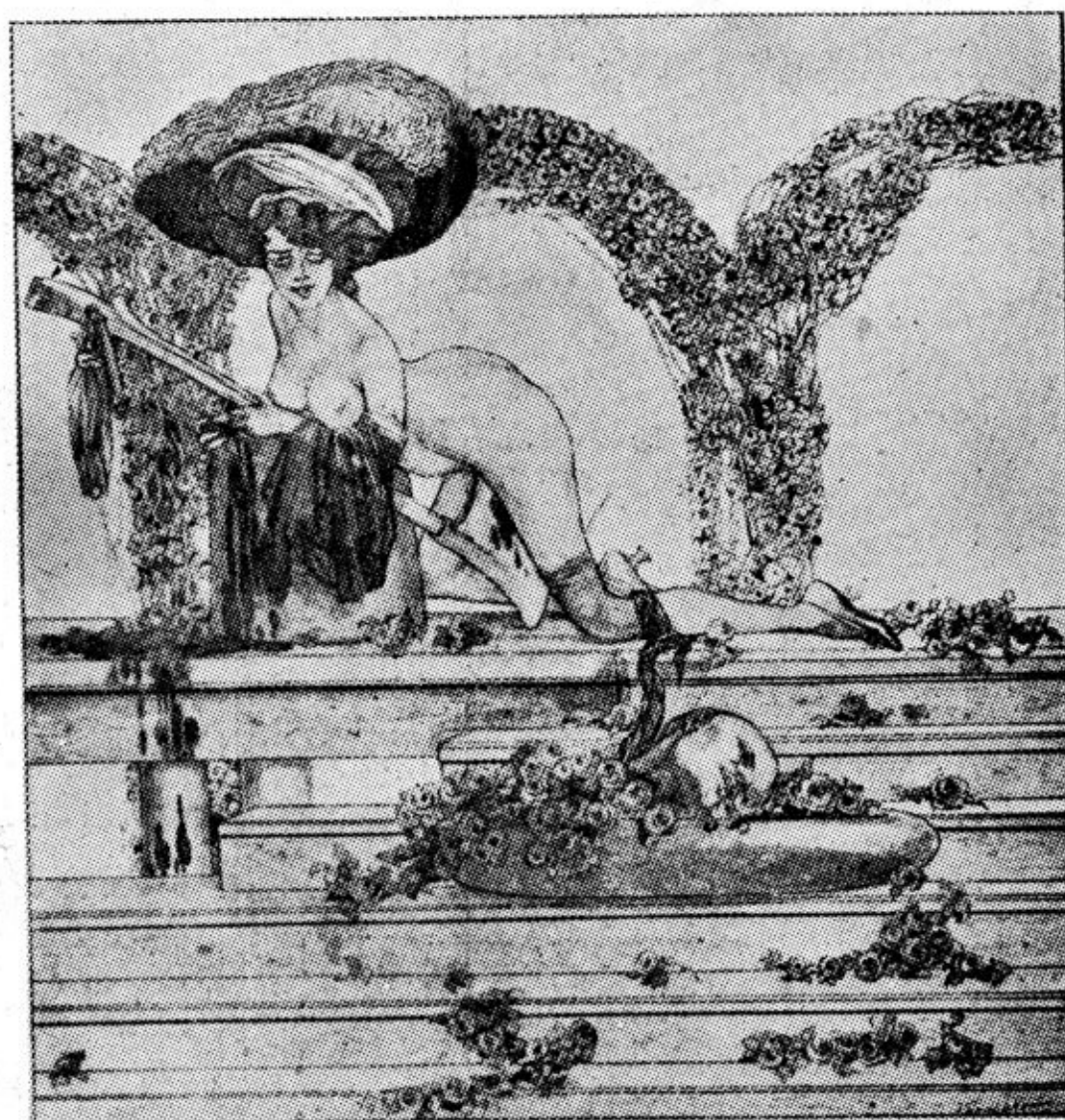
嗜虐の奏でる三昧境

フランス貴婦人の變態性生活

ルイ十四世時代、宮中のお抱え絵師が或る貴婦人の變態性生活をモデルとして当時の貴族の一面を描き自分の情婦に贈った絵画である。

日^ひ時^{とき}計^{けい}の戯^{たわむれ}

夢の花園に眠るような姫君の生活もよもや此の恍惚境には
値しないと思われる程甘く美しい聖壇上のたわむれである。



血のいざない

くれないの美しさを知るものは、自ら加える加虐の斧が肌
を破り肉をさき、腸が出る徹底さに限らない誘惑を覚える

幻想の浴み

ハレムの苑にはさんさんと暖かい光が降り注いでいる。我に若し与えるに自由の幻想を持つてすれば忽ちこの構図を頭に描くだろう。



歓喜の鞭

打つ者も打たれる者も、無心の境に到達すれば、そこには猥雑も淫虐も影を消してひたすら芸術的な美しさが歓喜を讃えている。



痛苦への憧れ^{あこが}

痛苦は必ずしも人に嫌われるものとは限らない。優儒に鞭撻を求めている貴婦人の姿には本能的な憧憬が満ち溢れている。



愛戯の懺^{あいきのえ}

女と女の醸し出す被虐と加虐の同性愛的技巧、虐める者と虐められる者の姿態の美しさがその内容を超越して浮彫りされている。



樂園を追放されたアダムとイヴ



(甘き歡樂の後)

禁断の木の実を食べてエデンの園を追われる
アダムとイヴの二人

新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

十二月号

第六卷 第十二号 通卷第五十号



濁^{にご}れる愛^{あい}執^{しう}

松井 籟子



一

楠瀬久男はアパートの前でふと足をとめた。誰もいない筈の部屋から灯が洩れている。心ではつととするよりも、体がジーンと鳴つた。今時分彼の部屋に誰かいるとしたら、八千代の他には考えられない。

—八千代が来ている—

そう思うと、彼の体がうずくのだ。窓越しの灯を見ているだけで今夜一晩中展開されるであろう図絵が、その灯の明るさと同じように、はつきりと彼の目の前にうかび、彼の体を引き締めたのだ。

しかし、ドアをあけたとたん、

「お邪魔しています」

そういう声は澄んでいた。

「あつ、ユカリさん」

久男は言いながら、それが八千代ではなく、新しく久男の劇団に入つた若いユカリであるのを心で喜び、体が失望しているのを感じた。

「アパートの小母さんに鍵をいたゞいて、勝手に上つていましたの先生、お食事まだでしょう。用意しておきましたわ」

いつもは書きもの、机にしている二月堂の卓の上に、胡瓜の緑、トマトの赤、玉子の黄色など目に美しく、和洋とりませた料理が並んでいた。

「私ね、今度の役で酔つばらう所が、どうしてもうまくいかないんです。お酒つて酔う程のんだことないんですもの。でも変な人とのみに行くの厭だし、ここでのんでもいいでしょう」

「御馳走持参のお客様を追い帰えすわけにもいかないだろう？」

「あら、追い帰えしたいんですか？」

「だつて男ひとりのアパートでユカリさんが酔つばらつたとなると

剣呑だよ」

「大丈夫。覚悟してますもの」

「どんな覚悟？」

ユカリは無言で目を伏せた。

「懐剣でも持つて来たのかい？」

言いながら、久男の目にきらつと異様な光がさした。久男はお姫様のようなユカリに「無礼者」とののしられて、とききました刃物でめつた切りにされる自分の姿を幻のように見たのだ。ユカリの顔が怒りにふるえて、白い肌がよけいに白く、その赤い唇から久男にあびせる罵言が火をはき、手にした懐剣でところきらずに突かれ血みどろになつて這い廻る自分の姿……。久男は目覚めていながらみる悪夢に肌をそうけ立たせた。

しかし、ユカリは甘えるように久男の瞳をみつめると、

「先生の意地悪……」

そう言つて、むすめらしい媚で久男に愛を告げようとしているのだつた。ユカリの「覚悟」とは、久男になら何が起つても拒ばないというつもりらしい。

持つて来たウイスキーのポケット瓶で久男にも注ぎ、自分もぐいとあける。

「酔うわね、酔つてもいいでしょう？」

早くもトロロンとした眼になつたユカリを、久男はただだまつてみていた。

集 惑溺の愉悦

小説も書けば絵も書く久男は、何が定職ともきまらずに、

新劇団の演出をしているうちに「先生」と呼ばれ、結構男一人らしくに喰べて通つていた。私生活を人に知られるのが嫌いで、アパートの位置が所番地で探してもわかりにくい所にあるのを幸、人との用談はすべて大阪の喫茶店ですますことにしていた。

アパートの窓の灯に、八千代と思つたのは、彼の私生活を知つてゐるたつた一人の女性だつたからである。

「でも、よくここがわかつたね」

久男はユカリに聞いた。

「だつて、私、先生のもの、何一つ洩らさずに読んでいますもの、見当はつきますわ、番地はわかつてゐるのだし……」

ユカリはそう言いながら耳たばまで赤く染めてゐる。酔いのせいというよりは、娘心の一とすじに思いつめたものが感じられた。

そうしたユカリの美しさは久男の心を激しくうつ。黒目がちの大きな目、白い肌、唇は赤く仏像のややめくれた唇に似て情感をたたえている。誰でもが一応ユカリを問題にした。しかしユカリの視線はいつも久男を追つて離れなかつた。彼女に好意をもつ青年達が久男を嫉妬したが、久男はむしろユカリの好意をさけているようだつた。その冷たさがユカリの慕情をあほる反対の結果になつていたのかもしれない。

二

「先生、睡眠剤持つていらつしやらない？」

ユカリがきいたが、久男は聞えないふりをしてゐた。

ウイスキーを三杯ぐらいのんだらうか。ユカリは気持が悪いといひ出し、畳の上に伏してしまつたのだ。

久男がアパートへ帰ったのがもう遅い時間だったから、直に終電車の時間がせまってきた。久男は何度かユカリに注意したが、

「気持悪いの」

そう言つてユカリは体をおこそうとしない。そしてまるで、はじめからそれを承知でわざと時間をはずしたように、終電車のゴーツというひびきを遠くに聞いて、

「先生、泊めてちようだいね」
というのだつた。

久男は黙々と卓をわきの方へよせて寝床を二つとれるように部屋をかたずけた。

いつもは二枚重ねて敷く布団を一枚ずつにして並べ、白いシーツを敷くと、久男は又、そのシーツの白さの上に悪夢をえがくのだった。シーツの糊の匂いが、彼に猿ぐつわを連想させる。口の中一杯に無理やりシーツのはしを押しこまれて、顔中縛束するようこのこののシーツでぐるぐる巻きに被われ、目も見えず、口もきけず、耳もぼんやり水底で物音を聞くような感じになり、ただシーツの糊の匂いだけがむんむんと鼻にせまる。そんな自分が、目かくし鬼の鬼のように、部屋中彼女をつかまえようと手さぐりで歩きまわると、足元に紐がはつてあつて転んでしまう。その紐がだん／＼体にまきついて、とう／＼しまいに芋虫の様に転がされて、ハアハアと肩で息をしているだけになる。そうして意識がシーツの糊の匂いの中に溶けていつてしまう……。

久男はそうした起きていてみる悪夢に頭がしめつけられるのだ。

「先生、睡眠剤ありません？」

ユカリが重ねて聞いた。

久男はふつと我にかえつて、

「何故？」

と、それもまだ夢の中から問うように聞きかえした。

「何だか眠れないの」

ユカリはポツンと言つた。二つ並べた寝床で、久男が手をのばせばユカリの体にふれる程近くにいて、たゞ仰向けに何かを考えている久男が、今にも彼女の方に体を向けるか、足のさきでいたずらでもしてくるか、ユカリの体が期待にふるえていたのだ。

据膳食わぬは男の恥という言葉がある。女は膳を据えても、食う食わぬは男の気持でまさか男の口をあけて無理やり食べさせることは出来ない。むしろ、据膳はしても、男が無理やり食べたのだという形をとりたがる。

久男はユカリに口の中へ食物を押しこむように食べさせてもらいたいのだ。それが久男の悲しい性^{さが}なのだ。久男の血の中に濁つたものがあるのかもしれない。

八千代は久男の欲求をみたしてくれた唯一の女性だった。

「思いどおりになるか、なるというまで責めてやる」

そう男に向つて言える女は少い。こうして骨太い男の手を、後手に締めあげて、男を玩具のように恥かしめられる女が何人いるだろう。そうして、そういう形で女の方から無理やりみちびき出してくれなければ満足の得られない自分の欲情を、どうして今、久男がユカリに向つていけるだろう。ユカリの充分の好意も知っている。好意というよりは命がけに近い恋情であることも知っている。だからといって、久男にはどうしようもなかった。

久男はただユカリの唇にそつと自分の唇を近づけた。

「先生！」

そう言つてユカリはぐつと久男の体を自分の上に抱きしめた。ユカリの体が燃えている。舌の根が痛くなるような激しい口づけに久男の息がつまるようだった。息がつまるという感じに久男はふつと欲情した。

しかし、ユカリは男を知らなかった。あとは男にまかせるより仕方ない……。久男の欲情はそのまゝすつと細く消えてしまった。

彼は出来れば正當にユカリを愛したいと思つた。久男は自分が悲しかった。ユカリの愛を受入れてやれない自分を自分でどう責めたいのだろう。ユカリが責めてくれば……。しかしそれは望めないことだった。

彼はユカリから体をはなすと、本箱の引き出しからプロバリンを出してきた。

「これのんで静かに寝たまえ。ね、その方がいい……」

ユカリは久男に背を向けて、夜着を肩まで引きあげた。笛の音のような泣き声が夜着を通してかすかにひびいてきたが、いつか泣き疲れたのか、眠りに落ちたらしかった。



う。なじみのスタンドの二階のおかみの部屋を借りてはじめる宴会の、席につく頃はもう大分赤い顔をしているものが多い。

舞台のそでにいた久男に、

「待っているわよ」

八千代がさゝやいて行つた。

東京から商用で下阪する男の、その時だけの飯の妻を「結構な女房稼業」という八千代は、中国からの引揚着で、叩けば埃が出すぎる程出る女だった。

八千代の体の中に巣くう虫と、久男の体の中に巣くう虫が奇妙にうまが合うらしい。それ以外には惚れたはれたという程の中でもない。

舞台からせまい階段を上つて楽屋へ行つたり、客席へ廻つたり、照明の位置にダメを出したり、夢中で動いた体が芝居が終ると空気がぬけるようにどこかに風穴があく。そのくせ体はまだその日一日の労働の習慣がぬけないのか、油のきれた機械が空廻りするように体の奥で鳴っている。そんな時、人はふつと性慾を感じるものだ。それも性慾とはつきりわかつたわけではない。何かしらん物欲しい血のたぎりが音をたてて体中を流れるのだ。

「待っているわよ」

という八千代の言葉が、体の一部にさわられたようにピリツと電気を起して、久男の体を刺戟した。

三

芝居のらくの日は皆で酒を飲むのがなりたいだった。早いものは楽屋見舞の一升瓶から、メーキャップをおとしながらにはじめてしま

しかし、それはあくまで久男の体の内部の思考であつて、別の思考が今日のユカリの舞台姿を追つていた。

目がしらにつけた青いアイシャドーが青い焰になつて燃えるような、ユカリの演技だつた。

酔つぱらうくたりでも、陽性の酔つぱらいにはならず、陰にこもつた内攻的な酔い方で、反つて抑圧された女の慾情が妙な色氣となつてユカリの肢体にあふれていた。

そんなユカリを久男は美しいと思う。出来ればそれを恋に導いて自分の異常さからぬけ出したかつた。八千代との地獄図絵のような愛慾から離れたかつた。

しかし、ユカリは久男の視線をさけるようにしている。一言、「よかつたよ」と言つてやりたかつたが、ユカリはわざと

の様に他の男優達と乱暴な口をきき合つていた。

スタンドの二階の宴会を早目にきりあげて八千代のもとへ行くより仕方ないと、まだ楽屋で後片付けをしている人達に声をかけて、一足さきに劇場の近くスタンドへ出かけていった。

しばらくすると、

「先生、先生、ユカリさんが楽屋であばれているんです。来て下さい！」

けたたましく呼びながら、ユカリの友達が迎えに来た。

久男が楽屋へ行つてみると、もう大方かたがついたのか、いくつもある電燈の一つだけがボツンと灯つていた。

その下にユカリがスリッパのまゝうずくまつていた。スリッパの紐が一つちぎれて、片方の乳がのぞいている。

「おい、どうしたんだ？」

久男が抱き起すと、

「先生なんかあつちへ行つて！」

と、つきはなした。

「何よ、えらそうな顔して、先生なんかキライ！大キライ！」

そうわめいたかと思うと、子供のように声をあげて泣き出した。

「静かにしなさい。さあ、洋服を着て……」

久男がユカリの服を着せかけてやると、

「いいの！」

ひつたくるようにとつてしまう。

「私、今日は酔うの。どうなつてもいいの。先生なんか知らない！」

久男はそうしたユカリが不びんだつた。しかし、このまゝ若い者の間でこの酔態を放つておいたり、どんなことが起るかわからない「一緒に帰えろ」

久男は言つた。

「いや！もう絶対に先生の所なんか行つてやらない。私なんかどうなつてもいいのでしよう。先生はどうせ私なんか問題じゃないのだから……。いいのよ、私はもうどうなつてもいい。女のたつた一つの捨身な願ひに恥をかかせられて、それでも平気でいられる程私はえらくないの。私にかまわないで！あつちへ行つて！」

ユカリは酔いにすわつた目を畳の上におとしたまゝ、彼に言つたまともに顔を上げて彼をののしるには彼に対するユカリの愛情が深すぎた。

女の恋心はそうたやすく消せるものではない。もし久男が「バカ！」といつて頬の一つもぶつてくれたら、酔いにまぎらせているユカリの心の雲が、かえつて晴れるかもしれないのだ。

しかし、久男はあくまで静かだった。

「さあ、帰えろう」

やさしくユカリに言つて、ユカリが放つた洋服をもう一度着せかけようとする。ユカリがあげればあばれる程、久男は女王につかえる僕のようにユカリの御機嫌をとるのだつた。

ユカリの心がだん／＼静まつていった。

無言で服を着ると、手廻りのものを片ずけて、久男と一緒に楽屋を出た。足許がふらついて、久男の腕を痛い程ギユウツとつかんだ

四

外へ出るとユカリは小暗いかげへしやがみこんで、

「吐きたいの、先生、向うへ行つて」

と、言いながら、もう我慢が出来ないというように、

「私、先生好きなの、好きだから吐くところなんか見られたくない

……向うへ行つて」

言いもやらずガアツとあげた。

嘔吐と一緒に恋の言葉を口にする女も少ないだろう。しかしユカリはそれで胸の中のつかえが一ぺんにすうつとしたのか、案外シャンとした足どりで立ち上つた。

「ごめんなさい、こんなに酔つて……」

いつもの素直なユカリになつた彼女は、当然、久男がつれて帰え

集 惑溺の愉悦

つてくれるものと思つてゐる。しかし、

久男は八千代との約束がある。

どうしようかと思う久男の腕にユカリは手をかけて

「ねえ、先生、お酒くさい唇いや？」

と、ささやいた。

「いやじゃないけど、こゝではまずい」

「どこへでも行くわ」

「だが……」

と、久男は思い惑つた。

ユカリの求愛にこたえてやれない自分のさがを、どう説明したらいいのだろう。たとえ今夜一晚ユカリと寝てみても、到底それで満足出来ない自分の肉体を彼は知つてゐる。ユカリの純心さを傷つける結果になることはあきらかなのだ。

劇場をあとに黙々と歩いて来た。掘割にそつた暗い道だつた。

「死にたい！」

ユカリが小さくつぶやいた。

「先生が私を何とも思つて下さらないのはつきりわかつたわ。私。

……もうどうしていいかわからない。死んでしまつた方がよつぽど

苦しくないかもしれないわ」

久男はだまつていた。答える言葉がないのだ。「いや、好きなんだ、嫌いじゃないんだ」と言えばそれが嘘でない証拠を見せなければならぬだろう。

「私……。自分のうぬぼれがしやくにさわるの。先生に私から思い切つて好きだと言え、かなう恋だと思つてゐたの。まさか先生にきらわれていようなんて……。何てばかなんだらう、私……。この間でわかつてゐる筈なのに、まだ、まだあきらめきれなくて……。でも、もうわかつたわ。ああ、死んじやいたい。私もう生きてるの

いや。先生、もし私が死んでも、先生は何にも気になさることないのよ。私が勝手に好きになつて、勝手に嫌われたんだから。……本当に、本当に死んじやいたい……」

まだ酒の酔が残っているのだろう。ユカリはコツコツと歩く靴のさきを見つめながら言いつづけた。

久男はふつと、人間が自殺するというのはこうした酔いから起きた時に起るのかもしれないと思つた。芝居の公演でもうすである陶酔が思考をしばれさせているだろう。芝居に酔つて、酒に酔つて恋に酔つて、その恋がかなわないとなると、人生の意義を見失つたように空虚になる。

ユカリは死ぬかもしれない……。

久男は愕然とした。

「ユカリさん、僕が何故君の愛情に冷たい顔をするか教えてあげよう。ただ、君にとつてあまりに強烈すぎる人間勉強だと思ふのだが俳優として、そんな人生の裏を知っているのもいいことだろう。君ひとりの胸にしまつておくとだけ約束してくれるかい？」

きつぱりした口調で、そういう久男の顔を、ユカリはげんそうに見たが、

「ええ」

と、うなずいた。

久男は通りへ出ると、空のタクシーをよびとめた。

五

車は京都へ向つて走つていった。

何度か橋を渡り、何度かふみきりを越えて、暗い道を疾走した。

やがて、竹やぶにそつた小さな枝折戸のような門の前で、久男はタクシーをとめた。ユカリをうながして門の中へ入ると、細い道が一とすじに奥へつづいていく。

そこには竹やぶとは不似合に、手入れのとどいた洋館が建つていた。

玄関のベルを押すと、

「随分おそかつたのね」

派手な声で、ダリヤのような女がドアをあけた。そして久男のうしろにおすおすと立つているユカリに気がつく、氷片をとがらしたような視線をなげた。

「芝居がのびてね、この人うちの劇団の花島ユカリさん……」

久男が紹介するのを皆まで言わせず、

「さつき拝見したわ」

女は冷たく言つた。

「僕の友人で関八千代。この家はこの人だけしかないから遠慮することない。おあがりなさい」

と、久男は八千代を体で押すようにして、さきに靴をぬいであがると、

「わけはあとで話す。とに角僕の客なんだ、仏頂面はよせ」

と、八千代にささやいた。

「いいわ、あとでおぼえていらつしやい」

八千代も小さく、それでいてピストルの弾がとび出したような語調で言つた。

「先生、私、帰ります」

ユカリは目の前にはつきり久男の愛人を見せられたように思うと

谷底へ蹴落されたような暗い気持で、靴をぬいであがる気もしなかつた。

「とに角もうおそいからあがりなさい。今日は此処へ泊るんだ。恋とか愛とかいうものは君の夢のように美しいものじゃないんだ。それを今夜教えてあげる。こつちへいらつしやい」

そう言うど久男はユカリの手をとつて、引き上げるように廊下を導いた。

応接間へユカリを通すと、

「一寸待つていてくれたまえ」

そう言つて奥へ姿を消した。

しばらくすると八千代がお盆に

ビールをのせて出て来たが、

「さつきはごめんなさい。失礼して……」

と、案外機嫌のいい声で、

「もうおわかりでしょう？ 私と久男がただの友達じゃないこと……」

久男から聞きましたけど、今日はゆつくり休んでいつて下さいな。

私も若い時は人を好きになつて、随分悲しい思いをしたもんですわ

久男は何かあなたにもつと知つてもらいたいものがあるようですけ

ど、私、あなたを傷つけるばかりだと思ふの。今から帰えると言つ

てもおそいし、ねえ、もう一杯のんで、ぐつすり寝て下さいな。あ

なたのような美しい方が、命をそまつにするのはおかしいですわ。

さあ、一杯のんでちょうだい。私もいたゞくから……。ねえ、恋と

いうものは、かなうよりもかなえられずに、美しい夢で終る方がい



いのですわ」

静かに言われると、「死ぬ」などと言つたのは久男に甘えていた心が言わたのだとユカリは気がついた。急には癒える心の傷ではなかつたが、八千代を前に泣きわめいてみても仕方ないと、ユカリはさかしく思い至つた。さされるまゝにビールをのむと、導かれるまゝに、八千代について、客間らしい日本間の、用意された布団の中へ、入るより仕方なかつた。

六

転々と寝返えりを打ちながら、ユカリは何とかして眠ろうと努力していた。なかなか寝つけなかつたし、しいてのんだ酒の酔に体はだるく、頭が痛かつた。泥沼につかつていような気持の悪さを感じていたが、いつかところと浅く眠つたらしい。

ふと、どこかで呻く声が聞えるような気がして、はつと目が覚めた。覚めた瞬間、夢だつたのかと思つたが

「ううつ！ ああ、ううつ！」

と、低い男の声が、地獄からでもひびくように聞えてくる。

ユカリは暗い中に目をすえて、その声がどこから聞えてくるのかたしかめようとした。

「さあ、どうだ。これでもか。これでも言わないか」

そう言っている女の声のとぎれとぎれに聞える。そして、その声

の合間、合間に

「ああーッ！ うう……ううッ！」

と、のどをふりしぼるような呻き声なのだ。

ユカリは起き上ると、八千代に貸してもらった浴衣の前をあわせ直して、そつと廊下に出た。はじめての家で勝手はわからなかつたが、家中真暗な中で、ぼんやり明るく見える所を目あてにそつと歩いていった。

近よると、女の言葉もはつきりしてきた。

「さあ、おつしやい。あの人を好きなんでしょう。言わないか」

「違う、好きじゃない！」

のどをしめられているような男の声は、まぎれもない楠瀬久男だった。

ユカリははつとして、すべるように廊下をすすんだ。廊下は折れまがつて、一番奥に浴室がある。ドアがとざしてあつて、灯はそのドアの上の開転窓から洩れているのだ。

ユカリは思い直して、そつと廊下をもどると、自分にあてがわれた部屋の窓をあけて、はだしのまゝ庭へおりた。そして浴室のあたりへ廻つていったのだ。

浴室の窓硝子を透して中の光景がやつとユカリの目に入つた時、思わず

「あつ！」

と、声を出すところだった。

そこには久男が素裸のまゝ後手に縛られて、立たせられているのだ。後手に縛つた縄のはしは、高くシャワーにくくりつけられている。シャワーの管は久男の重さをささえるには細すぎる。足はタイ

ルの床についていたが、つまさき立つて、やつと、手を吊り上げられる苦痛から、少しでも逃れようとする努力をしているようだった。しかし、その首には太い犬の首輪がはめられて、鎖はシャワーの管にかけて、八千代の手の中ににぎられているのだ。八千代が鎖を引くと、久男はぐつと爪さき立つて、苦痛に顔をゆがめる。それは咽喉をしめられるだけではなく、猛犬をならす為に使うのか、内側に針のような無数の突起があつて、やわらかい人間の肌には耐えられないような痛みを与える首輪だった。チャラチャラと鎖がシャワーにふれてなる。八千代は面白そうに鎖を引いたり、ゆるめたりしているのだ。

久男の裸体に脂汗がじとつと浮いた。

「どう苦しい？ 少し冷やしてあげようか」

言うのと八千代はシャワーの栓をひねつた。

水が飛沫をあげて久男の体を濡らした。

八千代は手のついてゐるたわしで久男の体をこする。久男は思わず体を動かすが、首輪の痛さに

「ううッ！」

と声をあげて、又、身動きしなくなる。ただ顔中をくしやくしやにゆがめて、歯をくいしばっている。

「いいものみつけたわね。この首輪……。今日一日中はめといてやるわ」

八千代は言つて、鎖をチャラチャラさせた。

犬の首輪が人間の責め道具にされとは……。ユカリは正視出来ない気持だった。

八千代はシャワーをとめると、鎖を栓にひっかけて、裕々と煙草

を口にくわえた。

久男の体は羽根をむしられた鳥のようにみるかげもない。そればかりか、泡粒立つた久男の肌には点々と青黒い痕や、赤い齒型が残っているのだ。さつきからそうして八千代に玩具のように責めさいなまれていたのだろうか……。

「今度は熱くしてあげるわね」

八千代はくわえた煙草に火をつけると、そのマッチの火を久男の体に近づけた。ジュツと音をたててマッチの火が消える。

「濡れているから熱くなさそうね」

と、タオルで彼の体を丹念にふくと、

「さあ、熱いわよ。どう？もう降参？」

久男はだまつている。

「降参しないの？いい覚悟だわ」

言うと八千代は風呂場の隅の釘にかかっている別の細引で、久男の足をぐるぐるまきに締めつけた。

「フフ、。ますますいい恰好ね」

棒の様にされた久男を満足そうに見ていたが、やがて風呂の焚き口にさしこんであつた長い火箸を、濡れ手拭でくるむようにとり出した。真赤に焼けた火箸に、手元の手拭が音をたてて煙をあげている。

「さあ、いいこと？」

集 惑溺の愉悅

その火箸を久男の目の前にみせびらかすようにつき出した。

「熱いわよ」

久男は黙つて目をとじている。

突然、

「やめて、やめて！」

ユカリは窓の外から必死に叫んだ。

久男と八千代はその声にはつとしたように窓の方を見た。

「やめて！」

ユカリはもう一度叫ぶ。

八千代は手にしていた火箸を水道の下へ投げ出すと、ジュツと水をかけた。そして、窓を中からあけると

「見られてしまったわね」

案外悪びれない声で言つた。

「先生を責めないで。あなたは先生を誤解していらつしやるわ。私は先生好きだけど、先生とは何でもないのよ。先生を責めることないわ」

ユカリは思い切つて八千代にいうと、窓をのりこして久男に近ずき、その縄をとこうとした。

「ユカリさん」

久男は自由のきかない体でユカリをさえぎるようにすると

「これが僕の正体なのさ。君に見せようと思つた僕の浅ましい姿はこれなのだ」

と、言うのだつた。

「八千代は僕を責めているのではない。これが僕達の愛の表現なのだ」

ぐるぐる巻きに縛られて吊し上げられ、今の今、焼け火箸をあてられようとした男の口から出た、思いがけない言葉だつた。

「先生、先生」

ユカリはへたへたとそこへ座ると、棒のような久男の足に抱きついた。

「あんまりです、あんまりです」

言いながら、何があんまりなのか、ユカリは自分でもよくわからなかった。

「ねえ、わかつたでしょう？私は見せなくなつただけで、見られちゃつたら仕方ないわ。さあ、あっちへ行つて寝てちょうだい」

八千代が言うのにユカリは動こうとしなかつた。

「さあ、あっちへ行つて」

「いやです！」

ユカリは八千代に向つて強く言つた。

「いや？邪魔するとあんたも一緒に縛つちやうわよ」

「かまいません。私は先生好きなんです。先生がこんなひどい目にあうの見ていられません。いじめるならいじめて下さい。先生と一緒にいじめて下さい！」

ユカリは狂気のように叫んだ。

「あとで後悔しないでよ。私は私達の秘密を見られただけでも、あんたを責めたく思っているんだから……」

「先生が何と仰言つても、私、先生がひどい目に合うの見てもらえません」

ユカリは久男が責められることに陶醉するということが、どうしても納得出来なかつた。ただ、自分をかばつてくれる久男の自分に對する愛情なのだと思われてきたのだ。

「どきなさい！どかないと打つわよ」

八千代が革の鞭を手にとつた。

風呂場の釘にはそうした責め道具が幾つか掛け並べてあつたのだ。「どかないのね」

鞭がビュウツと鳴つた。

ユカリは久男の足にしがみついた。ユカリが呻くのと一緒に、足を引かれた久男が首輪に止められて呻いた。

一鞭、二鞭、ユカリと久男は声をそろえて呻くのだった。

八千代は新しい興奮にかきたてられた。

「おのぞみだから一緒に縛つてあげる。裸になりなさい」

八千代はユカリの着物をはがした。

久男が制したが、縛られている久男にはどう止めることも出来なかつた。

ユカリは久男の体とびつたり合わされて、ぐるぐると縄をかけられた。ほてつた体に久男の冷たい体が押しつけられると、人間というよりは魚のような感じがした。

魚と思つたのはユカリの頭が水底へ落ちこんだようにぼんやりしてきたからかもしれない。そして、ピシツ、ピシツと打たれる鞭の痛さがだん／＼にかすんで、不思議な酔いに全身がしびれていつてしまつたのだつた。

—終—

「麻利子さん……」

「いや……麻利子と云つて頂戴。だつて、あたし今夜からあなたのお嫁さんですもの……」

「じゃ——麻利子」

「あなた」

「あゝ……僕は君を愛している、世界中の何よりも」

「あたしだつて……」

「僕の可愛い麻利子！」

君は何んて美しい髪の毛をしているんだろう。——

ふさ／＼と柔らかく、まるで黒檀のようにしつとりと輝いている……」

「あゝ……あなた……」

「僕の可愛い麻利子！君の目は何んて素晴らしさだ——まるでサファイヤの様に麗わしい……」

「あゝ……あなた……」

「僕の可愛い麻利子！」

初

夜

笹田

豊

君は何ん素敵な乳房を持っているんだ——

まるでティシアン画から抜けて来たような輝かしさだ……」

「あゝ……あなた……」

「僕の可愛い麻利子！何んて可愛いお臍を君は持つているんだろう——まるで貝殻のように小さく可憐だ……」

「あゝ……あなた……接吻して頂戴！あたしの身体、あつちこつち噛んで頂戴！あたしの肌に爪を喰い込ませて頂戴！あたしのオツパイ強く吸つて頂戴！」

もつとしつかり抱いて頂戴！」

「あゝ……可愛い麻利子……」

「あゝ……あたしもう駄目……あなた、早くして頂戴……あら、どうなさつたの、あたしを離して突然立上つたりして！あたし、何かあなたのお気に障る事を云いました？どうなさつたの、本当に？」

獵奇掌篇

月と裸女

三富 浩生

月の出の砂浜を歩いてた私は、波打際に白いものを見付けた。近付いてみると、裸身で横たわっている豊かな女体であつた。折から東の海を離れた丸い大きな月は、血のように赤い光を投げかけている。その光に照らされている死体の顔も胸も腹も、クリーム色に輝き、背の方は灰かに鱗のような光沢を放っている。左の乳の下に小刀が刺さつて、それが血を堰き止めているせいか、赤黒い滴りは、どこにも見えなかつた。

殺人の現場にいる恐怖も忘れて、私は、其の美しさに打たれ、呆然と佇んでいた。女がそれも若い女が、真裸で自殺するなんて有り得ない、これは殺人に違いない、それだけの判断が私には有つたようだ。

後の方から砂を踏む音が近づいて来た。月明りで見れば、鈍く光る眼、ひしやげた鼻、厚い唇、それは作三のものである。

——作三、

「麻利子さん」

「おかしいわ、急に改つたりして。どうして抱いて下さらないの？あたしの身体は斯んなに激しく燃えているのに……」

「麻利子さん。矢張り僕は告白しなければならぬ。何度黙つて置こうと考えたか知れなかつた。しかしそれでは君に済まないそれに僕自身の良心も許してくれない。君の身体が僕の物になつてしまふ前に、どうしても君の許しを得なければならぬ事があるんだ」

「まあ……」

「僕は童貞じゃない。商売女とも何度も寝たし末亡人とだつて関係した事もある。只これだけは知つていて貰いたいんだ——つまり、その女達との関係は皆、その時限りの氣まぐれに過ぎなかつたと云う事。精神的なつながりなぞこればかりもなかつた。君こそは僕が全心全意をこめて愛する只一人の人だと云う事だ。信じてくれるね？それ丈に、僕は君に、んげをして許しを乞う前に、どうしても君の身体を僕の物に出来なかつたんだ……」

「……」

「麻利子さん、分つてくれるね？ どうし

ても男は誘惑の多い物だ。僕だつて何も好きこのんでやつたのじゃない。友達に誘われたり酒の上での事なんだ」

「……」

「怒つてゐるのかい？……御免ね、つまらない事を云つて。……気分が悪そうだね、顔が真蒼だ。僕の罪だ。けど仕方がなかつた……」

「……」

「僕が悪いんだ、僕が」

「……」

「怒つてゐるんだね？ 無理もない……」

「道夫さん……」

「えゝ」

「あたし……怒つてなぞいません。御立派だと思ひましたわ。普通の人出来る事じやありませんわ。……道夫さん……」

「どうしたの？」

「思い切つて申します——あたしこそ悪い女です。あやまらなければならぬのはあたしの方です。道夫さん……許して……」

「分らない、さつぱり分らない」

「あたしは今の今迄打明ける氣は全然ありませんでした。家の者にだつて云つておりません。一生黙つて、知らぬ顔をして、うまく誤魔化してしまふ積りでした。けど、

私は穩やかに呼んだ。

「え、先生か」

ものを彫る事の好きな作三は、十五の時に頭を打つて狂つたので、普通の人間では無いが、絵描きの私には、皆が先生と呼ぶのを真似て、先生と言うのだつた。此の浜で画架を立ててゐると、黙つて見ている、おとなしい白痴だつた。

「お前、お嬢さんを何うしたんだ。」

女は旧家の娘で、継母に反抗して折々態と常識外れた事をする女なのであつた。

「わし、お嬢さんの言う通りしただ。」

私は何度も問い、すかし宥めた。

彫物の好きな作三は、小刀と木片を何時も放さない。彼を嘲弄する青年達の一人が、お嬢さんの裸を木で彫つて見ると唆かした。

昨夜、暗い浜辺を歩いてゐると、女が砂浜に俯伏してゐた。顔が濡れてゐたようだつた。作三は屋間の青年達の言葉を思出した。

「お嬢さん、わしに裸彫らしてくれ。」

何の技巧も無い素朴さに、女は無言で作三の眼を見てゐたが、明日の夜、こゝで、と告げたのだと云う。

今夜、女は暗い海で泳いでゐた。月が出初めると、海から上つて来て、海水着を脱ぎ棄

道夫さんが余り御立派なので、あたしもう堪らなくなつてしまいました。云いますわありの儘に正直に申しますわ……」

「……」

「あたし……もう処女じゃございません」

「何んだつて？」

「御尤もですわ……お驚きになるのは無理はございません。あたしはもう清淨潔白な処女じゃございませんの」

「麻利子さん、それは本当ですか？ あゝ僕は夢を見ているのじやないだろうか。嘘だ、そんな事は信じられない……しかし……若しそれが本当だとすると……これは大変な事だ……麻利子さん、僕に事情をきかせて下さい」

「あたし……強姦されました」

「そいつは……酷い。実に酷い……」

「あたしは力一杯抵抗しました。その男を力の限り叩きましたし、齒で喰い附きました。けれど、男の力はそれ以上強かつたのです。あたしは首を締められました。ふりほどこうとしても無駄で。気がだんだん遠くなつて行きました。そして……ふと気がついた時には……」

「……」

「服の胸は破れ、ブラジャーははぎ取られズロースのゴムは切れ、下腹に何とも云えない重苦しさが残っていました」

「麻利子さん……あなたが下腹に感じた物は案外身をしばれさせるような快感じやなかつたのですか？」

「ひどいわ……道夫さん……ひどいわ……」

「そんな云い方はあなたらしくないわ」

「あなたらしく……冗談じやない！ 自

分の恋人が強姦された話を聞いて、どうして僕らしくしていられるもんか！」

「あたしは、自分に出来る事をして、最後迄闘つたわ。後に起つた事は不可抗力だわあたしにはどうにも出来なかつた。あたし許りじやない、他のどんな女の人だつて、あゝなるより外仕方がなかつたでしょう。だから……道夫さん、許して下さいわね？……」

「さあ？……僕にそんな器用な真似が出来るかしらん？……強姦された愛人を笑つて許す——一寸した美談には違いなね」

「そんな皮肉な云い方——あたし悲しいわ道夫さん、素直に許すと云つて頂戴！ あたし落度はないんだわ。あんな事は単なる災難よ。石につまずいて怪我をする様なもの

てた。作三が黙つて見上げると、女は、是を上げよう、是で彫るのよ、と、一丁の小刀を作三に渡した。作三は自分の小刀を投げ出して新しい小刀を嬉しそうに弄んでいた。

——一寸貸してごらん。

女は作三の手から受取つた小刀を乳の下に当てると、作三に、抱けと言つた。……

作三は崩折れた女を横たえて、木片を探しに行つていたのであつた。

私は察しが着いた。氣に染まぬ男が、一昨夜彼女の家に泊つて行つたと云う。継母が馴れ合いで、彼女を欺まし、その男に与える約束をしたに違いないと、村の噂だつた。女は作三を利用して、死ぬ氣になつたに違いないその死に態の奇矯さが、彼女の性格の強さ、然し脆さを示していた。

私は無理と知りながら聞いた。

——作三、お嬢さんの美しい事が、お前にも判るか

作三は何にも言わずに女の体に近寄つた。

——お嬢さんは動かんのかう

——お嬢さんは死んだのだよ

——死んだ？わしのお母のようには？

彼の頭の中には、死と言えれば自分の母親の死んだ時の事が浮かぶらしかつた。

だわ。あんな事であたしの処女性は失われはしないわ。あたしは清浄よ。潔白よ。あたしは矢張りヴァージンに違いないわ」

「成程、こいつは新説だ。『処女膜の無い処女』か！ふん素晴らしい！」

「そんなにいいじゃないで、道夫さんだつて先刻おつしやつたじゃないの。後家さんや商売女と何度も寝たつて。そんな事は一寸した意志さえあれば防げる事だわ。あたしのは不可抗力だわ。あたしは喜んで道夫さんを許すわ。だから道夫さんもあたしを許して頂戴！」

「つまりバーターつてやつたな。しかし麻利子さん、君の事件が全くの不可抗力だつたとは僕には思えない。そうした種類の事件は、大抵は女の方に可成りのすぎがあるから起ると相場が決つてゐる。君の場合だつて、きつとそうに違いないんだ。それに同じく処女性を失つたからと云つて、男の場合と女の場合とは世間の見方に可成りな相異があるもんだ」

「……」

「強姦された女が処女だつて！ ノーベル賞的新説だね！ それに、君がその男にどれだけ抵抗したかつて事も随分怪しいもん

だ。『ふと気がついた時には服の胸は破れブラジャーははぎ取られ、ズロースのゴムは切れ』だつて？……簡単には信じられないね。君は案外自分からズロースを脱いだかも知れない。オッパイだつて喜んでいじらせたに違いないんだ。君の足は男の二倍三倍の力で男の腰に絡んだ筈だ。男の指が君の下腹を滑つた時、君は我からその指を掴んで目的の場所を教えてやつたのだ。君は男の舌を嬉しそうに吸つた。男の首をしつかり抱いた。そして僕の此の嫉妬に狂つた考えに誤りなければ、君は腰を何度となく持上げたに違いないのだ！ あゝ何と云う事だ。幸福は去つた。もう駄目だ。絶対許すものか。断じて君は許さない。君が悪いのだ。不可抗力なものか。強姦じやない和姦だ。……」

「……」

「麻利子さん、事件は何時起つたのですか？ つい最近ですか、それとも……」

「丁度二年前の今頃……八月三十日の夜十時頃」

「麻、利麻子さん、僕は君を許します。――」

「その男は……僕だ……」 「FIN」

――どうしてじやろう、わしは……彼の表情の無い顔に、始めて醫のようなものが動いた。

――あ、これ、わしの貰うた小刀じや彼は、彼女の心臓に刺さつてゐる小刀を、取ろうとした。私は慌て、「待て」と止めた女は此のまゝで美しい。血が流れない方が美しい、と思つた。私はもう一度ゆつくり女の裸身を眺めた。美しい死の構図である。私は是を描こうと思つた。総てを覚え込む為に私は凝視を続けた。滑らかに脂肪の乗つた肌が慾情を妖しく掻き立てる。房々とした黒い茂りが、なだらかな肉の起伏の谷間に美しい。私は首を振り、警察へ知らせる為に、――作三、こゝを離れるなよ

と歩き出した。砂の足もとで崩れる音が奇妙に耳に着いた。

の月は既に空の高みに上り切つて、いつの間にか白んでいる。振り返る私の眼に、裸女の死体は月の真下に有つて、蒼白い、不思議な艶を見せてゐる。私は、今日、そこに血の斑点一つ無いのが物足りないような気がした。

彼女の皮膚に血の流れを幻想しながら、私は私の描くべき、「死の構図」に於て、血を描くべきか否か、迷うのであつた。

【読者通信】

鹿沢 宏様

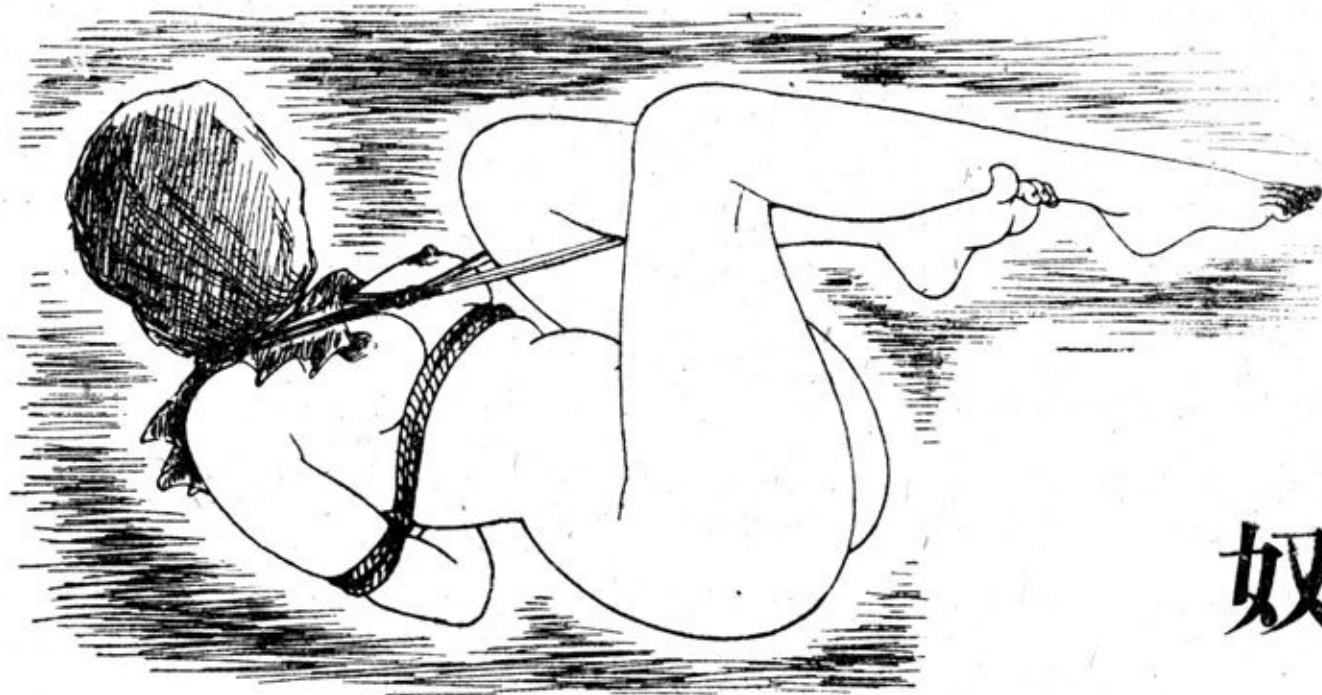
何の御縁か兄を通じまして御手紙を戴きありがとうございます。因縁と申しますか、言うも恥しい変つた女でございます。今後ともよろしくお願い致します。今後は、御返事遅れましたのは、まことに申しわけもございませんが、実はやはり同じような御縁で東京と札幌とから御手紙を頂き、この二人のお方にお会いして参つたので遅くなつたわけで、丁度私が札幌へ参つておつた留守に貴方様の御手紙が参つたのでございます。昨夜帰宅致しました。お許し下さいませ。兄も御手紙で申し上げましたように、私の亡夫がサデヒストでございました。しかしマゾヒストの素質は私の幼女の時代からあつたものでございまして、厳しい両親からは度々折檻を受けましたが、その殆どが後手に縛られることでした。私はこの折檻に次第にひそかな楽しみを感じるようになったのです。ですから御手紙のように私は縛られることは大好きでございます。細引や荒縄や鎖やが肉に喰い込むときの何とも云えない快感は何と申したらよいのでございましょう。亡夫はせいぜい私を縛ることだけに満足していた程度でしたが、却つて私の方からもつともつと請求した位です。だから貴方様のお手紙を拝見しましたときは胸も躍るようでした。私はどのような責めにも堪えます。いゝえそのように扱われたのです。全裸にされ、呻めき声も出せぬように猿轡をはませられ、身動きも出来ぬように高手小手に細引で縛り上げられ鞭打たれる。吊される。こうやつてお手紙を書いております。身悶えるようです。只私は一つお願いしたいことがございます。それは是非とも猿ぐつわを嵌めて頂きたいということ、それも形式的に口や鼻を手拭でくくる等ということでは満足出来ません。徹底的に口の中へ布片をつめて固く固く締めつけてほしいのです。私は呼吸が楽に出来、声が自由に出るようではオルガズムに達しないのでございます。縛られる縄は荒縄であらうと、犬の鎖であらうと、コードや細引、あらゆるもので縛られたことがございまして、お好きなものをお

使いになつて結構です。その時、衣類を着せたままでも、全裸になさうと、それは貴方様の御自由です。猿ぐつわ、後手にされて其の上……を……下さるのとはもつたないようでございますが、私の歓喜これにすぎるものはございません。考えただけで私の……と濡れてまいります。

とに角、私は奉仕しつゝ自ら楽しみたいのです。貴方様は私をどのようにお取扱ひにならうと、私は貴方様の奴隷です。ドレイの歎びはたゞ奉仕するにあるのです。鞭打ちも革、竹、ベルト、竹刀どれも経験がございませう。貴方様のおつしやる「もつと刺戟の強い方法」とはどのような事なのでございませう。私は兄と二人きり両親もありません。最近、いろいろな事情で再婚を迫られております。私はマゾヒストではありませんが、今迄に亡夫以外の方に肉体的な交渉を持つたことはありません。勿論子供もありません。実は結婚しても子供を持ちたいと思つておりません。先程申しました東京と

札幌の方もその再婚についての御相談でした。共にやはりサデヒストの方で、特に札幌の方は年令的にも家庭の事情も私に適當しますので気が動いております。先方も是非と云われております。貴方様のお手紙がなければ、一も二もなく御承諾申し上げたところでした。しかし、このところ三カ月ばかり御交際願つてその上御返事申し上げようときめました。貴方様についてはまだ何も存じ申し上げておらず、本当ならば右の事情で貴方様との文通も御遠慮申し上げますべきでしょうが、尙私は貴方様の御希望や其の他について、もつと詳細に知りたい欲望にかられます。それがこの御手紙を差し上げる気持ちを起させました。ともあれ、地理的に余りにも遠くにいらつしやいますのが函がゆく存じます。私は一度も東京より以西へ参つたことはございません。御手紙お待ちいたします。ただ必ず兄宛に戴きたくくれぐれもお願ひ申しとう存じます。かしこ

大野 咲子



奴

隷

妻

片

矢

薰

夫の俊平が出掛けて行つた後、喜久子は縁側にうずくまつたまゝ、じつとしていた。鈍い朝の光が曇り勝ちな暗さをたゞえて喜久子の背に影を作っている。体のふしぶしが痛んだ。血管の鼓動につれてずきずきとした痛みが甦るのだつた。時たま激しい痛みが、きりきりと錐でもむようにやつて来た。その度に喜久子は「あッ」と微かに呻いて懸命に堪えた。

昨夜俊平から加えられた打撃の跡が痛むのである。それは何処といつて定つた痛みではなく、身体の一部でも動かせば、苦痛は全身に拡がった。肩先から背にかけて、背から腰にかけて昨夜の苦痛がよみがえつた。

然し今朝喜久子はちやんと平常通り起きた少し熱もあるらしかったが、悠長に寝ている

ことなど到底出来なかつた。一寸でも仕度が遅れると、又加えられるかも知れない俊平の折檻が怖しかつたのである。

喜久子は起き出した時から、身体がだるく痛んでいた。俊平と向い合つて食膳に坐ると折り曲げた膝にひどい痛みを感じた。がじつと我慢しつゝけた。これも平生から口喧しい俊平に恐れていたからであつた。

喜久子は縁側に俯伏せになつたまゝの姿勢で、苦痛の和らぐのをそつと待ち乍ら、昨夜のことを想い出していた。

「俊平が昨夜帰つて来たのは、十時を少し廻つた頃であつた。少し酔つていた。平生から幾分狂暴であつた俊平は酔うと殊更その傾向が強くなることを知つていた喜久子は、出来るだけ当らず触らずな態度で接した。

「一杯飲んで来たぜ」

俊平が言つた。既に何となくからむような口振りであつた。

集 惑溺の愉悅

「そう、よかつたわね。早くおやすみなさいね」

「よかつたわね、だと。何だい、よかつたわねとは」

とからみ始めた。

「御免なさい」

謝つてすますのが最上の方法だと思つた喜久子がそう詫びると、それが余計俊平の氣に障つたらしかつた。

「何だい、その顔は、乙にすまじやがつて、ふん 俺はそんな取り澄ました顔が大嫌いなんだ。氣取りやがつて」

「何もそんな心算じゃなくつてよ」

「心算もへちまもあるか、近頃お前変によそよしくなつたな。俺が嫌いになつたのならはつきりそう言えよ」

俊平は酔つてすつかり濁つたような色になつた眼を据えて、喜久子にからみつづけた。喜久子はその眼の中に、ふと激しい憎悪の光を感じ取ると、改めて恐怖に駆り立てられた俊平がこんな眼付をしたときには、必ず無事に済んだことはないのである。

「おい、喜久子、もう一杯飲ませろ、酒あるだろう」

「ないのよ」

「何ッ無い、買つて来いよ」

「だつて、もう遅いわ、何処も起きてなんかいないわ」

「うるさい、ぐずぐず言わずに買つて来ないと……」

俊平がひよろ／＼と立ち上ると、本能的に喜久子も立ち上つた。

「買つてくるわ、買つてくるわ」

そう繰返えし言い乍ら、喜久子は逃げるようにして外へ出た。暗い夜道を歩き乍ら、何故か自分の惨めさが、どつと腰を切つたように身内にあふれて来た。これが夫婦というものだろうか。これではまるで女中と同じである。いや女中より寧ろ奴隷に近い。何一つ反抗が許されず、反抗は暴力によつて押しひしがれ、すべては夫の意志のまゝである。たつた一人でいた頃の淋しさよりも、もつと寂しい氣持がひたひたと全身をひたした。

家へ帰ると俊平は部屋の真中に大の字になつて寝ていたが、喜久子の帰つて来た足音でむっくり起き直つた。

「酒あつたか」

「はい」

「それしろ、怠けやがつて、早く仕度しろ」

喜久子が仕度をしている間中、俊平はねちねちと叱言を言いつづけた。殆んど八つ当りに近いような叱言も言つた。それは、会社の愚痴であつたり、喜久子の家政のまずさから貧乏している、といったようなこと、果ては隣の家の犬が吠えてうるさいということまで怒つた。

やがて仕度を整えた喜久子が膳に運ぶと、殆んど膳に倒れ込むようにして坐つていた俊平は蒼白くなつた顔を喜久子に向けて、丁度下から覗き込むようにし乍ら、

「着物を脱げ」

低い声で言つた。

突差にのみ込めないで迷つてゐる喜久子に重ねて言つた。

「裸になつて酌をしろ」

漸く言葉の意味を呑み込むと、喜久子は、かつと憤怒が全身に働いて来た。俊平は喜久子の裸体を眺め乍ら酒を呑もうと言うのである。何という卑しさだろう。下品な淫猥さであらう。商売女でもこんな恥辱は受けない。

「何を言うの 莫迦な」

我知らず、つい荒い調子になつた。

それを聞くと俊平も一瞬はつとした模様であつたが、忽ち前通りのふてぶてしさを取り戻してにやりと笑つた。

「いやなのか」

「当り前じやないの そんなこと」

俊平の笑いは消えて、やがてぞつとする冷い顔になつた。

「いやでないようにしてやる」

殆んど酔つていゝとは思われない確かさで俊吉は立ち上つた。何処にそんな体力と氣力が残つていたものであろうか、慌てゝ逃げようとした喜久子の襟首がその寸前俊吉の手によつてしつかと掴まれていた。

強い力であつた。が喜久子も必死であつた相手はもう夫であるとは思われなかつた。殺される、とさえ思つた。ただ逃げることしか考へなかつた。

暫く二人は揉み合つた。膳が跳ね飛ばされ酒が膳の上に、こぼれ流れた。争つてゐる中に喜久子の帯が解けた。俊平が解いたのかも知れなかつた。がただ夢中であつた。然し断詮は俊平の力には及ばなかつた。力の限度があつた。力をこめようとしてももう手足は言うことを利かなくなつてしまつていた。時に無意識に映る蒼白いゆがんだ俊平の顔が大

きくクローズアップされて迫ってくるのだけが、すべて夢中の中で意識してゐた。

どれ位揉み合つてゐたろうか。くまなく裸にした喜久子の身体を俊平は所嫌わず殴りつけ、足蹴にした。喜久子は丁度四つ這になつたような恰好で必死になつて部屋の隅から隅へと逃げ廻つたが、俊平はそうした喜久子を隅に追いつめては暴力を振つた。

「かんにん、私が悪かつたの、かんにんして……」

それも俊平の拳と足の許では途切れゝになつた。漸く俊平は打撃をゆるめると

「生意氣言わずに、言うことを聞くか」

とおつかぶせるように言つた。

「はい」

涙声で喜久子は答えるより外なかつた。

俊平の言う通りすることは、つまり女の誇りを捨てゝ、男の好色な卑しい趣好の対象に甘んずることであつた。がそれより以外に、生きる途がない、と思つたのも誇張ではない氣持であつた。

俊平は昂奮の醒めぬ震える手で盃を持つて飲み始めた。その前で着物をまとうことを許されない喜久子は白い豊かな肉体を、電灯の下で露わに見せ乍ら、涙ぐんで俊平の酌をし

なければならなかつた。

羞恥は、女が裸になつた場合、どんな処にでもある。喜久子の身体はふるえ、おののいた。目の前で自分の羞恥に毒を投げかけてゐる夫ではない外の一人の男を感じ乍ら、涙をぼろ／＼落して坐つてゐた。

一一

喜久子は勿論こんな俊平の性癖を知らずに結婚した。もつと厳密に言えば、俊平はこんな男ではなかつた筈であつた。

俊平自身もある時

「俺は、どうしてこんな男になつたのだろう？」

と迷懷したことがあつた位で、勿論本来の性質で無いことは言う迄もない。

喜久子が初めて俊平と知り合つたのは、満洲から引揚げ途中の船の中であつた。着るものも、食べるものも乏しい人達の群がる船中は、お互に牙を鳴らし、爪を磨き合つてゐた。その頃はまだ十八才になつた許りの喜久子には目を覆う風景ばかりであつた。満洲の奥地から港の街まで、何度かの危機をすりぬけて辿りつくまでに、喜久子は両親と離ればなれになつてしまつてゐた。とても生きては

いない筈であつたが、それでも船の中で逢えるかも知れないという淡い期待も今では儚ない望みであつたことを知らされた。喜久子は船の中を探し歩いて、両親はおろか、知つた顔の一つにすら、めぐり合えなかつた。

こうした心細い最中に、これも独りきりのもと軍属であつたという俊平に、何とはなしに頼つたのは無理のない成行であつた。又俊平も献身的に喜久子の面倒を見て呉れたのであつた。

すつかり汗と塵にまみれて、じめじめと汚らしくなつた喜久子の下着を心配して何処からか新しい下着を都合して来て呉れたのも俊平であつたし、ともすると他の人達に押されて取り残されそうになる喜久子の食物の配給も殊更多量にせしめて呉れたのも彼であつた。一人では到底出る勇氣のない甲板へ、俊平に誘われて上り、はるか海原を超えてやがて辿りつくであろう故国の夢を抱けるようになったのも俊平のお陰であつた。

「もうしばらくしたら日本だぜ」

俊平が耳許で囁く。その囁きは、喜久子にとつて日本へ帰れるという喜びの前に、何かしら甘づつばい匂いを吹き込んだのだつた。「でも、帰つても何もないわ、身よりもない

し、勿論家もないわ。それに一枚の着物だつてない」

それは喜久子にとつては本当であつた。本当以上の苛酷な現実であつた。然しこの時、これを言う喜久子の心は確かに俊平に甘えていたのだつた。

俊平はそれについては何も答えなかつた。答えないというより、答えられなかつたのである。それも喜久子にはよく判つていた。が何か一つの言葉で慰めて貰えばそれでよかつた。甘え度いのだつた。何度も何度も同じことを言つて、俊平が同情して呉れるのが此の上なく楽しいことであつた。

何度か同じ事を言つただらう。

或る時、ふ

と同じ言葉を

口にした喜久

子に俊平が言

つた

「頼れる人が

あるよ」

「えつ？」

「俺だよ。俺

に頼ればいゝ

よ」



「……」

「なあ、結婚すりやいゝじやないか。君も俺も独りぼつちだ。独りぼつちが二人集まれば独りぼつちでなくなるだろう。そんなにいい話つてないよ。そうしよう」

この時喜久子は勿論俊平の胸に縋つて喜んだ。夢にも考えて見たことのなかつた事だけに只嬉しいような気がしたのだつた。

本当の喜びは後になつてから沸いた。結婚ということにはまだ実感も遠い年齢ではあつたが、独りでなくなる、然も慕つている俊平とこれからずっと一緒にいられるという喜びは何にましても大きな幸福のように、みる／＼胸一ぱいにふくらまつた。

そんな嬉しそりにしている喜久子の様子に俊平も楽しそうに笑った。

「俺はね、ずっと最初からその心算でいたんだ」

「俊平さんの意地わる」

こんな会話ははずんだ。

それからの日程はがらりと変つて楽しいものになつた。今迄のように他人の横暴も氣にならなくなつたし、赤ん坊の泣声も音楽のようになつた。僅かの食物も俊平と分ち合つて食べる楽しみも出て来た。あてのない帰国であつた憂鬱がとれて、一日も早く帰り度い希望の旅に變つた。

きら／＼とうねる海原に、大きく胸をふくらませて吸込む潮風は新鮮であつた。この波のつゞく彼方に幸福がある。その理念はいかに喜久子を励まし、力づけたことであらう。すべては俊平のお陰であると、漸く女らしくなつて行く心の中で感謝しつづけたのであつた。

今にして想えば、それが喜久子にとつて一番幸せな瞬間だつたかも知れない。とはいふものの、幸福はその後もあるにはあつたのである。漸く日本の港が見えた時、二人は思わず互に、殆んど無意識に抱擁し合つた。最初

【読者通信】

毎月御誌を楽しく拝見して居ります。平生生活軍隊生活を永年経て現在商工組合××会の職員をして居りますが折にふれ学生軍隊時代の男色生活を思い出して居ります。小生身長五尺七寸体重十七貫五百、所謂ガツチリ型ですが自分より以上のがつちりした逞ましい男性にひかれます。妻子はありますが女色の方は普通で、別に女性が嫌だと思つた事ありません。両刀使いという所でしょうか。

——最近御誌をはじめ、各誌に男色の記事がとり上げられ、世の男色礼讃者を喜ばせていますが、こゝで考えます

のに、やれ畜生道に落ちたの変態だの、泥沼に喘ぐだの、と必要以上に罪惡視していることでは。果して男色はそんなに罪惡でしようか。女性とのノルマルな性生活に満足するのもし、男同志の楽しい交渉を持ち続けるのも又別の一生こう思うとそれだけ人生経験が普通の人より豊富で深いわけではないでしょうか。

勿論男色に原因する犯罪もありましよう。然し女色に原因するそれより遙かに少ない筈です。男色を奨励する必要はありませんが、恥しがる必要もありません。多くは先天的なものですから、他人に迷惑を及ぼさない限り、各々楽しめるばよいのではないでしょう

か。(神戸T・K生)

貴誌の記事挿絵には毎度乍ら強く心をひかれる思いにて拝見して居ります。特に喜多玲子様、岡田咲子様、松井籟子様の作品は大変嬉しく存じます。九月号でしたか「すべて猿轡をはめて下さい」という地方の一読者の希望には大賛成です。そして十月号には早速その線で進まれた編集方針にも厚く敬意を表する次第です。私の念願を申し上げれば拷問特集号の実現を期待して居ります。又年末あたり写真帳の形で迫真美のある縛られた女体の分譲を御願ひ出来れば望外の幸せです。

(名古屋 黒綿政雄)

の口ずけもその時であつた。その時喜久子は

涙が沸いた。

声をあげて泣いた。複雑な涙であつた。無事に故国へ縋りついた嬉しさもあつた。改めて父母の事を偲ぶ涙でもあつた。長い苦しみに耐え抜いた歓喜でもあつた。

その時、俊平も喜久子も幾許かの金は許されて持つていた。お陰で当座の生活には事欠かなかつたし、それに贅沢のようではあつたが一軒の家を借ることも出来た。

俊平もその時喜久子の涙に誘れたように泣いた。涙でかすんだ故国の山の緑が痛々しい程に鮮かに可憐に映ると、又ひとしお新しい

小さい狭い家ではあつたが、二人の住居としては充分だつたし、汚い乍ら庭のようなものもついていた。

初めてそこに住み移った時、どれ程この畳を恋い焦れていたことかと、二人は飽かずその感触を楽しんだ。俊平は子供のよう、畳に身体をすりつけて転げ廻り、大声で笑つておどけていたし、喜久子もじつと坐つた足が畳のあつさりした肌触りに、うつとりする位であつた。

「どんな粗末でも、船の中や、山や野原の中で寝るよりやい、なあ」

「そうねえ、何だか嘘みたい」

二人はこの幸福をそう語り合つた。

二人の結婚式は、二人がこの家に住み移つて一週間目に、さゝやか乍ら酒も添えて、花も飾つて二人だけで挙げた。

こんな点俊平は、おかしな程律義というのか、真面目に考える男であつた。それが余計喜久子にとっては魅力となつた。

「さ、これからすべてやり直した」

「頑張りましょう」

そう励し合つた。

「俺は無一文だけど、喜久子という財産があるから、誰よりも幸福だね」

集 或 弱 の 愉 悦

酔い加減に俊平は冗談にまぜて言うのだつた。

「ほんと……」

「ほんとだとも」

他愛のないことではあつたが、それでも楽しかつた。

が、一つだけ喜久子は気になることがあつた。それは俊平の閨房のしぐさであつた。喜久子は勿論、そんな経験もなければ、話にも聞いたことのない程無智であつた。だから俊平が喜久子の身体をどう扱おうと、何等疑う筋は無い筈であつたが、矢張りそこには、女に特有な感があつた。それ程俊平のしぐさは執拗で粘りつくようなものがあつた。

喜久子は俊平の歡喜について行けなかつた自分の身体が海老のように折り曲げられ、息苦しい中に、俊平の洩らす呻き声が、ひどく醜く聞えることがあつた。それ程冷静でいられるのだつた。次第にそのつとめが苦しくなり嫌になり始めた。

「誰もがこうするの」

或る晩、たまりかねた喜久子が、疲れ切つた身体を持て余し乍ら訊ねた。瞬間俊平はちよつと躊躇つたが、

「そうだよ」

と少し不機嫌に答えた。

その俊平のためらいと不機嫌とが、ふと喜久子に或る疑問を持たせた。

その頃から、俊平はかつぎ屋を始めていた主な商ひ品は、繊維類であつたが、収入は少く、疲ればかり多かつた。

喜久子と一緒にいる時だけが、最上の時間のように俊平は殆んど獸欲に近い激しさで、喜久子を愛撫するのだつた。晝夜の区別はなかつた。然かもそうした過度の消耗は、俊平の精神そのものをも磨り減らしていたのである。そうした俊平を見るにつけ喜久子はいとしさといつたような氣持が先に立つて、嫌々乍ら常に拒まなかつた。拒み切れなかつたのである。眼の前が暗くなり、その中に白い点々が無数に飛び交う程に疲れ乍ら、黙つて身体を俊平の思うまゝに任せていたのであつた。

三

喜久子がとうとう俊平の要求を拒絶したのは、結婚してから二年も経つた頃であつた。たろうか、二年の月日は、流石の喜久子にも、何とはなしに正常な夫婦の生活というものを氣附かしめていた。嘗て醜ろげに抱いていた俊平に対する疑問が漸く結実して來たと言つ

てもよかつた。喜久子はこの営みによる快樂を未だ味えないまゝでいたのである。それも夫の行為の不健全さに原因のあることも判つた。従つてこれを正常なものに戻し度い欲求は、当然喜久子の考えていゝことであつたのである。

やがて秋も終り冬にかゝろうとしている或る晩のこと、何時ものように疲れて帰つて来た俊平は殊の外氣むずかしい表情でいた。尤もその時分は俊平のような職業も次第に世間から見放され相手にされなくなつていた時期でもあつたので、余計俊平は腐つていたのかも知れなかつた。

氣懶るい様子でい乍ら、それでも俊平は何時もの通り物も言わず縫物に余念のない喜久子の膝の間へ手をわり込ませようとした。その夜に限つてその行為が喜久子にとつて我慢のならないものと思えた。平生からの不信もあつた。何かしら自分が単に俊平の玩弄物に過ぎないような扱い方をされていゝような氣がしたのだつた。



喜久子は膝を固くして身体をよじつた。だが俊平はちらつと喜久子の顔を見たきり、又元のようになやしく、今度は太腿を蔽つていゝる着物をはだけようとした。

「いやなのよ」

喜久子は再びそう言つた。俊平は一寸手の遣り場に困つたように薄ら笑いを浮べたが、やがてその笑いを陰氣な笑い方に変えて

「何故いけないんだッ」

と怒つたように言つた。

「こんなに明るいところで」

「今晚に限つて変だぜ、何時もこんなに明るくつたつて平氣な癖に」

その言い方が又喜久子をぐつと辱めた。平氣でなんかいゝるもんか。どれだけ恥しい思いをしつてもじつと堪えて来たのに、あまり勝手過ぎる、喜久子はそう言おうとした。がその時急に何か重い力でそれを自制するものがあった。そう言つてしまつては、何も何もお終いだ。

「だつて、嫌なのよ。これからもこんなこと、嫌よ」

そう言つた。

その言葉が俊平にどんな効果を与えたかは俊平の顔色が変わり、唇がかすかに痙攣するので分つた。

「えらそうに言うな。貴様は、俺に恥をかゝす氣か」

「そんな心算じや」

「なかつたら、何故嫌なんだ。えつ、訳を言え、夫に肌を見せることがどうして嫌なのか訳を聞かして貰いたいもんだ」

喜久子には言い度いことが色々

あつた。然し口には出せなかつた。今にも噛みつきそうな俊平の権幕と、それに適当な表現が見当たらないのであつた。とても口に出せるような事柄ではないと思つた。黙つていたそれを俊平は喜久子の見識ぶつた態度と受取つたのであろう。

「何だいその顔は、強情な女だ。お前はな、俺が拾つてやらなきや、今頃パンパンでもしなきやならなかつたんだぜ。考えてみると、そんな偉そうな顔をしていられるか、どうかを」

俊平にはひどい疲れも手伝つていたのであろう。喜久子の聞くに堪えないような罵倒を言いつのつた。然かもその最後の言葉は、これで何もかもお終いだと思われる程の侮辱であつた。

「今でもパンパンみたいなことばかりさせられてるじやないの」

喜久子も思わずかつとなつて言つた。言つた後で失敗つたと感じるものがあつたが、もう遅かつた。

その晩の折檻は喜久子の最初の経験であつた。庭に引きずり出され、両手を後手に縛り上げて自由を奪つた後、垣根に使つてある竹竿で喜久子を打撃したのだつた。喜久子はこ

んな醜い様子を隣人達に見られるのはたえられない氣持が何より強かつたのでじつと齒を喰ひ縛つて声を立てまいと必死であつた。身体を打たれる度に耳に大きく響く竹竿の音だけが不氣味に鳴つた。

そうした喜久子の態度に、俊平は、少しもこたえていないと感違ひしたらしかつた。今度は喜久子の煮物の裾をまくり上げ臀部を露わにすると、じかに臀部を叩き始めた。

「止めて、そんなことだけは止めて」

必死で声を殺して哀願する喜久子に耳もかさず、俊平は蒼白い顔をゆがめて執拗に殴りつづけた。鋭い音をたて、柔い肉体に喰ひ込む竹竿の痛みに喜久子は流石に耐えられなかつた。思わず、「ひえっ——」と齒の間から呻き声がほとばしり出た。

夜目にもそこだけが白く浮んで、もたえ、揺れ、また、く間に紫色に変色し腫れ上つて行くのだつた。

物音に氣附いた人達が二三人、喜久子の努力の甲斐もなく、そつと様子を見に来たが、見るにたえないように皆そつと逃げ帰つた。

この拷問に忍べなかつた喜久子は、結局俊平の思う儘にされることになつて漸く許された。

喜久子の思惑は何の実現も見ず俊平の暴力の前に碎け散つた結果に終つた。喜久子は俊平と離縁することを考えた。恥しくて外へも出られなかつた。

だがいざ離縁という段になると心がしづつた。あまりに忘恩の徒になりはしまいかという自責に追われるのだつた。又そんな時に限つて過去のやさしかつた俊平のことばかりが不思議と記憶によみがえつて来るのだつた。何と言つても今迄の俊平の好意が強い足枷となつて喜久子と引き止めるのであつた。

一方俊平の方はその事件を機にしたように益々狂暴になつた。今迄かぶつていたヴェールを脱ぎすてた氣楽さか、又眠つていた荒淫な血が沸き始めたのが、その判断は喜久子にも、恐らく俊平自身にも分らなかつたであらう。

或る日喜久子は思い切つて俊平に医師による診断をすゝめて見た。が案に相違して俊平は素直にうなずいた。俊平自身もそんな自身を持て余しているのではないか、とふと喜久子は思つてみたりした。

だがどの医師の診断も瞬時であつた。たゞ一種の精神病であることだけは皆が認めた。然しその原因や療法となると誰もが言葉を濁

した。

その中で比較的権威のありそうな一人が、戦場によつて経験した衝動が、その強さの為に潜在し、それが時々発作となつて表れるのではないか、とこれも瞬時ではあつたが幾分論理の通つたことを言つた。そしてその後で物事に昂奮したり過労に陥つたりしない様にとつけ加えた。

喜久子の頭の中には、平気で人を殺し、残酷に婦女子を強姦している俊平の姿が幻燈のように明滅した。

そう言えば、何時かの寝物語にこんな話をしたことがあつた。

「俺が支那のある町にいた頃だつた。一人の女スパイが捕つてね。若い美しい娘だつたが……」

その娘を素裸にして表門に縛りつけ、氷点下の雪の中で水をかぶせ、乗馬用の鞭で叩きとうとうなぶり殺してしまつた。と言う話であつた。

そうした時の変態的な残酷な血が俊平の体内を流れ、それが今逆流し、自分の身にふりかゝつて来ようとしている。喜久子は背筋を冷たい氷のしたたりが伝い流れるような戦慄で俊平の顔を怖々見たのであつた。

その恐れは單なる恐れに止まらなかつた。俊平のそうした血の逆流が既に始つていたのである。

何時かの折檻に懲らしめられた喜久子は何一つさからえなかつた。丁度幾世紀か前の女奴隷のような惨めさと、然かも逃げ出そうとして逃げ出せないつながらりのジレンマのまゝ日を送つた。

一晚中着物を着せられない日はさらにあつた。気分がたぐわないと喜久子の裸体を卑しように蹴りつけたりする程狂暴を極めた。或る時は雪の庭に引きずり出され、或る時は髪を掴まれて家中を引きずり廻された。

次第に喜久子の肌からは艶が失せ、豊かな肉附きも殺がれて行つた。俊平の頬もこけ落ち眼ばかりが異様にぎら／＼と光つてきた。

四

縁側にうずくまつている中にだん／＼痛みが和らいだように思つたので、立とうとした喜久子の耳に、表で案内を乞う声が聞えた。中年の男の声である。物頼いまゝ、

「どなたあ」

と呼んだ。

喜久子の声が聞えたのか聞えないのか、又

何か言つたようだが、その低い太い声がたゞ漠然とした音となつて耳に入るだけで、しかとは聞き取れなかつた。

足をひきずり腰の痛みを手で押えて玄関まで出ると、表戸を半ば開け、そこから身体を半分覗かせるようにして一人の男がおず／＼した態度で立つていた。

「どなた？」

喜久子は再び言つた。

男は最初、これも又おず／＼した声で、「喜久子さんじゃありませんか」と言つた。

そう言われても喜久子は想い出せなかつた自分の名を知つてゐる以上、万更、他人ではあるまいと思つたが、想い出せなかつた。然し何処かで見つたような気はしてゐた。

「はあ、喜久子ですが」

その返事に勇気づけられたのか、安心したものか、漸く男は三和土まで入つて来た。よれ／＼の背広で足にはまずしい編上靴をまゝつけてゐる。左手に驚つかみにした帽子ももみくちやである。

「僕ですよ。満洲で一緒だつた吉尾ですよ」

そう言つて喜久子に笑いかけた。

喜久子はその寸前に吉尾であることを想い

集 惑溺の愉悅

出していた。満洲で勤めていた頃、同じ会社に居た男であつた。うらぶれた姿はしているが、そう言えば、尖つた顎のあたり、くびれた笑い方などにも昔の面影は充分見えた。

「まあ、吉尾さん、御無事で」

「ええ、お陰で……喜久子さんがこゝに居られるつて人に聞いたもんだから、逢い度くなつて矢も楯もたまらなくなつてね」

「そう。懐しいわ。ま、お上りになつて」

「有難う」

喜久子は先に立つて吉尾を案内したが、靴を脱いだ吉尾の靴下がぼろ／＼に破れているのを見逃さなかつた。

「近頃どうしてらつしやるの？」

喜久子は聞いてならないことを口にしたがしらと思つたが、吉尾はあつさり答えた。

「失業中ですよ」

喜久子はお茶をすゝめ乍ら、当時の想い出話や引揚当時の苦難の物語もお互に話し合つた。昔の喜久子であれば、俊平と結ばれた経緯を寧ろ自慢気に話したであらうが、今は何

故かそれを言う気がしなくなつていた。そんな話が一通り済むと、二人はもう話題が無かつた。共通の話題を持つには、余りにも時間的な距りがあつた。

暫くして、

「あーら、嫌だ。何をそうじろ／＼見てるの」

先刻からじつと喜久子を見つめている吉尾に氣附いて喜久子がそう言つた。吉尾は慌てゝ視線を反らせたが、

「余り綺麗になつたから、びつくりしてるんですよ」

「いやねえ」

「生活は幸福なの？」

この問いに喜久子はぐつとつまつたが、やがてこつくり頭をうなずかせた。そのうなずいた頭の中に、血走つた眼で睨んでいる俊平の顔に行き当ると、つい溜息が出た。

「おひる御馳走するわ、ゆつくりしてらつしやいね」

そう言ふと、喜久子は立ち上つた。これ以上じつと吉尾と向い合つて坐つてゐることに堪えられなくなつていた。

立ち上ると又身体が痛んだ。だが少しでもこうした恥すべき夫婦の一端でも吉尾に見ら

れまいと、氣をつめてしやんと歩いた。

その日は風頃から雨になつた。しとしとと陰気くさい天気模様は仲々に晴れそうにも思えなかつた。

中食を済ますと、二人で縁側に並んで庭の両足をじつと見入つていたが、雨の為に吉尾も帰りそびれたらしかつた。

「もうすぐ晴れるわ」

喜久子はこう慰め事を言つたが、風を過ぎた頃から次第に目に見えぬ何かに焦々し始めていた。俊平の帰る時刻は何時も五時近くである。それ迄に吉尾が帰ればいいのだが、そう思い乍ら落ち着かなかつた。若し雨が晴れないで吉尾が帰れなかつたらどうしよう。又若しかして俊平が見たらどう言うだろう。

「もうすぐ晴れそうね」

半ば自分を慰めるように繰返して言つた。五時だとばかり思つていた俊平が突然帰つて来たのは二時一寸廻つたばかりの時刻であつた。

あまりの偶然と不運に暫くは物も言えないでいる喜久子に、

「頭痛がひどくて早目に帰つて来た」

と蒼褪めた顔で言い、縁側に坐つたまゝ、挨拶し度げに様子を見ている吉尾に冷たい視線

をくると、吉尾の座蒲団と並べてある座蒲団にすらつと目を移してから

「早く仕度しろ」

と怒気を含んで喜久子に言った。

喜久子は脅えたように大急ぎで蒲団をのべた。そうした只ならぬ様子に感附いた吉尾は「それじゃ」

と具合悪そうに誰にとなく挨拶すると、帰り仕度を始めた。引き止めることも出来ない喜久子は僅かに、

「何のおもてなしも出来ませんでしたわ」

と言ったきりであつた。俊平は顔として向う側を向いたまゝでいるのであつた。

帰つて行く吉尾を玄関先で見送り乍ら、喜久子は、いつそ吉尾とこのまゝ何処かへ逃げたしまい度い誘惑に捉われた。この儘無事に済みそうのない俊平の見幕である。暫くそうやつて立ちすくんだまゝでいる喜久子を、

「おい」

と呼んだ。驚いて顧るとそこに俊平が立ちはだかつている。喜久子は全身からすつと血が退いて行くように唇がふるえた。

「上れ」

低い声で俊平が命じた。

おず／＼俊平の傍へ寄つた喜久子は、矢庭

に強い力で胸をつかれた。よろめこうとした喜久子の足に俊平の足がからまつた。そのまゝ廊下にどつと倒れた喜久子は裾をかき合はす余裕も無い程強く背を打ちつけていた。

「此の前からいやによそ／＼しいと思つたらあんな男をくわえ込んでいやがつたんだな」そう言うと、俊平はしばらくは動けないでいる喜久子の髪の毛を掴んで居間へ引きずり上げた。

喜久子は抗弁する力も無かつた。俊平のあまりの曲解に茫然とするだけであつた。

やがて後手に縛り上げた喜久子の上衣やブラウスを引き裂き、スカートを脱がせ、下穿きまでも剥ぎ取ると、喜久子の身体を二つに曲げて足首と頭とを結んで合はせようとした。苦しさに必死に抵抗する喜久子の力も及ばずとう／＼喜久子の足首は、強引な俊平の力で頭と結び合わされてしまった。息苦しさから逃れようとする両脚が極端に開いた。恥ずかしさから逃れようとすると呼吸がつかまつた。俊平はそうした姿勢で仰向けになつてもだえている喜久子の前に籐のステッキを持つて立つた。

「あの男はお前のいゝだろう」

いゝとは何ということだろう。俊平はこん

な下品な男だつたのか。然し喜久子は何も言えなかつた。辛うじて呼吸するのが今は精一杯だつたのである。

「返事が出来ないのか」

凄んだ声と一緒に、籐のステッキが、開かれた喜久子の身体の中心部にえぐり込まれた

「あつ、あつ」

「痛い、苦しい、白状しろ」

白状とは何だろう。何を白状しろと言うのだろう。

「ちがう、ちがいます」

「何、違う、しやらくさいことを」

俊平の手に力が入る。

「ひえーっ。か、ん、に、ん」

「じや白状するか、あの男は何んだ」

俊平は力をゆるめずに言う。

喜久子は今にもあらゆる内臓が破裂してしまふやうな苦痛にのたうつた。言葉など何も言えなかつた。本当に殺されてしまふのかも知れない。喜久子は激しいもだえの中でそう思つた。

喜久子はそうした俊平にやがて夕暮れが重くたれ込めるまで苛げられつゝけた。何度か気を失い、何度か絶えられぬまゝ悲鳴を上げた。

やがて俊平の方が責める事にも疲れ果てた時、喜久子は殆んど半死半生になつていた。

身体中は紫色に腫れ上り、身動きすら出来なかつた。喜久子はまるで自分のものでなくなつたような身体の中で、今迄巢喰つていた俊平のあらゆる匂いと感触がすっかり剝奪されたような気がしていた。

十字架上のキリストのように何もかも洗い流されて清らかなものになつた様に思つた。

それから半月ほどして喜久子は俊平と別れた最初は執拗に拒んで聞き入れなかつた俊平も喜久子が毎日のように泣いて頼み込んだので

【読者通信】

小生は教職にあり専門書以外に一般雑誌として、せいぜい「改造」「世界」位しか読まず最近書店に氾濫する娯楽雑誌は「あまとりあ」式猟奇誌にしても「りべらる」式風俗誌にしても知識階級を満足させるだけの追求性乃至科学性或は迫力に乏しく、刺戟性も生ぬるく、私共にはレクリエーション的価値もないので一寸立読みする位の事はあつても買求める迄には至りませんでした。先日当地（長崎）の書店にて偶然御誌を目にとめ、拝見すると一貫性に於

遂にあつさりと承知した。

長らく住み馴れた俊平の家を、いよいよ後にした時、喜久子は後髪を引かれる切ない気持ちであつた。それは彼女が馴染んだものに訣別する際に胸に湧き上つてくるいつもの感傷ではあつたが、夫婦として生活して来た男女の絆は、今迄のようなありきたりな切なさばかりではなかつた。

行くあて先がきまつていない事も彼女の心を重くして、尙更過去に対する甘い回想だけを思い出させたのかも知れない。あの無慈悲だつた俊平の仕打ちには、何の遺恨も起らな

かつたばかりか、それが自分に対する彼の熱烈な愛情の表現ではなかつたかとさえ思うようになっていた。

自分の肉体に加えられた苦痛が今更のように甦つてきて、それが直接肉体につながるものだけに、そのまゝ道端に泣き伏したいような衝動がつき上つてきた。そう自分には彼を愛していたのだ。とそう思い返すと、清々しい空気が胸内を通り抜けるやうで、手にした荷物を持ちかえると、俊平の家へ足先を向けていた。

—終—

て、又狙いに於いて十分注目に値すると思ひました。風俗誌といつても一つの「傾向性」についてあらゆる角度から集中的に追求している点が御誌のよい所だと思ひます。

同好の人は勿論、必ずしもそうでない人にも「他山の石」として人生の一部を知る上に有益であり今後もどうか無駄な頁のない秀れた編集を続けられる様希望致します。

（南星）

貴誌のように隅から隅まで小生の気持にびつたりとする雑誌を今迄に読んだ事はありません。今月号迄は近くの書店で買ひ求めていましたが、私は余り外出しませんし、少しでも早く手にしたいと思ひますので直接御申込致します故来月号よりお送り下さい。本日御送り下さいました写真は実に素晴らしいもので驚嘆しました。いくら眺めても見飽きない気がします。アルバムに順々に貼つて楽しんでいますが、引續いて五集分お送り願ひます。私は昨年妻に死別後、只今遠縁の娘を女中がわりとして使つて広い家に一人で淋しい生活をしておりますが、幸い父の残して

いつて呉れた財産がありますので暮しには不自由は致しません。最近再婚の話の方々から持込んで来ますが、四十に近い齡です。二十前後の娘も如何と思ひますしそれかといつて世の裏を知り尽した中年の女も尙更嫌です。小生の氣断りつゞけています。小生の氣にびつたりするやうな女性があれば直ぐにでも結婚したいのです。が、普通の嫁探しでは中々そういつた希望もいれられません。つまらぬ私事をくどくどと書きましたがお送りしたいと思ひます。

（津山 塙文夫）

世界艶笑文学紹介

モンテカルロの

佻男

モオリス・ブルウジエ・作

1

黒い姿見——

俺は三十有幾年の長い苦悶の生活を経て来た今日でも、うつし世の煩惱の捕虜となつて、齡毎いやましてゆく、己の醜い姿を憎まずにはいられない。

シャルル・ルヴェルという立派な姓名と、有り余る財産を継承して、フランス名門の嫡流として生れた俺は、最高学府に学んだ豊かな教養と、自惚れではないが、明哲な頭腦を持つてゐるにも拘らず、この人並以上優れた境遇の裡で、たつた一つ缺けた俺の外貌の醜怪さと歪な体軀が、人間の総ての幸福から俺を退けものにしたのだ。

俺は過去の生活では、いつも他人を恐れた。

幼ない子供であつた頃の俺は、暴虐残忍な友達の子から揶揄と嘲笑の的にされた。

「やあい、海貌の佻男野郎！」

「もゝんがあの化け！」

二言目には悪童達は、何の罪も犯さない俺に、こうした聞くに堪えない罵言を浴びせかけた。

俺は酷く残念だつた。そして、口惜しいこゝろの遺瀨なさで、幾度俺は母の形見の姿見に向つて、俺の姿を映して見たことだらう。

あゝ、けれども、その姿見の鏡面に映つた自分の容貌——ひどく抜け上つた顔、深く窪んだ金壺眼、剃き出た白い歯——海貌の顔に似ているのだ。背を丸めて首を肩にのめこませた俺の醜い姿態は、もゝんがあの化けと言われる恰好なのだ。俺は泣いても、喚めいても、慰められない悲哀に身悶えした。

俺は情けなかつた。だが、誰に対つて怨み言を云うことが出来るよう？

亡き父にか？亡き母にか？それとも、造物主にか？運命の神々

にか？俺はしかし、たゞ自分の不幸な姿を嘆くことのみしか知らぬ憐れな少年であつた。

単純な少年期を過ぎて、俺は性的に悩ましい思春期の年頃を迎えた。俺の朋輩はそれらの女友達を持つた。それが、美しかろうとそうでなかりと、娘達から相手にされない俺には羨やましかつた。

容姿の醜い俺は、若い娘から軽蔑された。

「シャルル、あたし、あんたのお嫁さんにして呉れない？」

亜麻いろの頭髮の下品な蓮葉娘にまでも、俺は馬鹿にされて嗤われた。

人間は求めて求めきれぬ物事に対しては、激しい熱情を感じるものだが、俺も亦、女と云う未知数に想い悩んだ。漸く若者となつた俺は、成熟した情感の疼くような苛々しい気持と、次第に高まつて体内に溢る性慾の触手に悶えた。

けれども、俺は俺の黒い姿見に映る自分の醜怪さを知っているが故に、女に近ずかなかつた。そして俺には清純な年月が平和に流れて行つた。

それとは逆に、俺の内心ではいつも満されぬ肉慾の暴風雨が吹き荒んでいた。押えれば押えるほど、圧力に二倍三倍する反撥力で、歪にゆがめられた性慾が、妖しくもおどろおどろの空想の夢を、俺の胸の底に根強く瀰漫させて行つた。

俺は空想の中で、絶世の美人を姦した。次から次へと、俺の乱淫な情慾の犠牲は増えて行つた。処女も、人妻も、女優も誰でも俺の眼に止つたほどの女という女は、悉く俺が征服して了つた。

俺は勝手な空想の遊戲に耽つた。世界の女達は俺の命令通りに裸形を曝して、豊満な四肢を自由自在に動かした。俺の汚ない蹠を舐めた。俺は後宮幾千人のハレムの宮殿の王座にも坐つた。それから――。

この性的遊戲の空想は面白かつた。だが、これは次第に俺の興味をそゝらなくなつた。俺は孤独の空想でなく、實在の女を相手にこの素晴らしい性的遊戲をしてみたくなつた。

遂に、臆病者の俺は或機会に、沢山のフラン紙幣を撒いて、街の天使と知合うことが出来た。俺はそこで、本当の人生の歡樂と昂奮を感じることが出来た。同時に、俺はむかしのシャルル・ルヴェルの卑屈な殻を脱した。人生には金に依つて購える凡そ無数の幸福があることを知つた俺は、最早や只単なる不具の不幸者ではなくなつた。幸い恵まれた沢山の財産は、俺の幾多の淫蕩と快樂を遂げさせて呉れるに充分であつた。

俺はやがて、モンテカルロの華やかな賭博場に根城を構えた。俺はルーレットの危険に眩惑されて、破滅の淵に陥込む女達を拐える粘い蜘蛛の網を張つて待つた。

俺は、ルーレットも、ポーカーにも、他の総ゆる賭博にも深入りはしなかつた。然かも俺は、賭博にかけては天才的敏感さを備えていた。俺は如何なる勝負にも、曾つて負けたことがなかつた。従つて、モンテカルロに遊ぶほどの者は、賭博の天才、僂男の子爵ルヴェルとしての俺をよく知つてゐる。けれども、子爵ルヴェルが、賭博場を迎る淫魔と知るものは、秘密を護ることの巧みな当の女達と、本人の俺以外にはなかつた。

世界艶笑文学紹介

そこで、俺は俺の性的生活記録を詳細に記しておいた。次の二三の交渉は、俺の数えきれない乱淫生活のほんの一部の見本に過ぎない。

2

賭博場の華やかな空気に、俺はまだ馴れていなかった。皎々と輝く装飾電燈の大広間の真中に、玉突台ほどの大きさのルーレットが四つ据えられてあつた。その周囲を取巻いた紳士淑女が、廻転する小球の落着く穴を眺めて真剣な顔をこわばらせている勝負最中、俺は静かに一つのルーレット台に近づいて行つた。

「貴紳、少しお賭けなさいますか？」

ルーレットの監督官が軽侮の眼いろを湛えて、背の曲つた不恰好の醜い俺を憐むように云つた。周囲の三四の人々も振り返つて俺を殊更に黙殺するように直ぐ、首を元に戻した。

「うむ、聊か遊んで見よう。」

俺は他人が俺に接する時にいつもする同じ眼附や態度を、表面は軽く受け流すことが出来た。

そして、俺は人々の背後から割り込んだ。

「貴紳、誠に恐縮ですが、五フラン、十フラン、百フラン、百フランの数字があります。あちらでお求め願いたいです。」

「いや、数字はよろしい。私は一万フラン現金で7の数字にアンブテン賭けをしたいのだ。」

「え？、一万フランをアンブテンに？はい、承知いたしました。」

「貴紳。」

監督官は急に態度を改めて、丁寧な口調で応じた。周囲の紳士淑女達も、好奇心驚異をもつて、背丈の低い俺に視線を向けた。アンブテン賭けというのは、一つの数字のみに賭ける方法で、その選んだ数字番号にルーレットの小球が這入れば、賭金の三十六倍払い戻しがある豪奢な賭け方である。俺は千フラン紙幣十枚を無難作に、ルーレットの台の上においた。

ルーレットの回転が始つて、象牙の小球がカチカチと刎ねる小気味の好い音がして、勝負は終つた。俺は最初の一万フランを負けた。

「7に一万フランをアンブテン賭けた。」

俺は平然と千フラン紙幣を十枚、再び台上に投げ出した。俺の紙幣に圧倒された人々は、俺の顔を見直した。然し勝負は再び俺の負けだつた。

「7に続けてアンブテン賭けた。幾度でも構わぬからやつて呉れ給え。」

俺は千フラン紙幣の束を取出して、監督官に示めして命じた。勝負三回目も破れた。四回目、五回目、六回目も続けて負けた。

俺は冷やかにそれを眺めていた。が、流石にルーレット勝負の凄まじい気魄が、賭博者達のこゝろに反映して、真剣な空気が醸されて行つた。

「7数字アンブテン！」

第七回目の勝負は遂に俺が勝つた。俺は平然と三十六万フランの紙幣を受け取つて、ルーレットの席を離れた。

人々は蒼褪めた顔に羨望の表情を浮べて、来た時とは別な眼附で俺の後姿を瞞めた。俺は軽い復讐の遂げられた快よい気持で、賭博場の玄関を出た。

3

玄関前の広場に出ると地中海から吹き寄せるそよ風が、幾分熱した俺の頬に快よく触れた。しつとりと夜露を含んだ何となしに女の欲しいような晩だった。

「貴紳、今晩は。」

椰子の樹の下から出て来た女が、俺に挨拶の声をかけた。

「今晩は。令嬢。」

どうせ、麗性の女と高をくくつて簡単に挨拶を返した俺の眸は瞬間女の容貌の上に吸い寄せられるように止つた。

黒い深みを湛えた円らな眸に、紅の瑪瑙をくわえたような口唇と、上品なふくらみを持った顔の輪廓と、背丈のすんなり高い容姿は、細光燈の光の輪の中で崇高な感じさえ与えた。俺はこの黒髪の南国の女に興味を覚えた。

「いゝ晩ですね、令嬢。貴女は私をどう思いますかね？」

「え？、どうつて、あくし、わかりませんわよ。」

「いや、私をきつと醜く思いでしょうというのですよ。」

「いゝえ、あたくし、ちつともそうは思いませんわ。貴男のお心の美しさが、あたくしに他のいろんな缺点を感じさせないかも知れませんわ。」

伶俐な女はそういつて、嫣然と微笑つた。俺はこの女を、征服

したい欲望にかられた。

「それでは、貴女は私と遊んで呉れますかね？ 令嬢。」

「えゝ、若し貴男が本当にそうお望みなのでしたら——。」

「ふむ、貴女の名は？」

「ロベール。それ以上は何も訊かないで頂戴ね。身分も、生国も」

「総てが疑問の霧に包まれているほど、女は美しく見えますからね。」

「そうかも知れませんわ。けれども、あたくしは貴男に勝てましたるか知ら？」

「というのは、貴女的美貌が私を魅惑し尽して了うかどうかという意味ですか？、それならば、貴女は確かに私を惹きつけましたよ。」

「有り難う。では、何処へでも貴男のお供をいたしますわ。」

「しかし、令嬢。断つておきますが、私は今宵ルーレットに勝つて大変運が好いのですから、或は私と貴女の勝負も、必ず私が負けるとは決つていませんですよ。」

俺はこう云つて、吐ちの中でやりと笑つた。美貌で伶俐な若い女を征服して、思いきり弄んで踏みつけてやりたい残忍な気持が胸の底からむら／＼と沸いて来た。

俺とロベールと名乗る女は、俺のホテルの部屋に帰つて来た。女は入口の扉の鍵をかけてから、寝室の方へ這入つて行つて、電燈のスイッチを捻つた。

次の瞬間、女は身に着けたドレスをするすると脱ぎ棄て、全

世界艶笑文学紹介

裸の片足を俺の寝台にかけて、疊惑的な眸で俺を誘うように視て立った。

4

大理石のようになめらかな白い胸に盛りあがつた乳房のふくらみ、肉附の豊かな太股の辺から腰への曲線美、薄い触れゝばおのゝく陰毛の感じまで、ロベールは容貌の美しさ以上の性的魅力を俺の眼前にひけらかせた。

それは美しい牝豹のいどむ姿にも似て、傲慢にも妖艶な姿態であつた。

「ルヴェル子爵、お気に召しまして？」

ロベールは獲物が完全に自由になることを予想して云つた。

「ロベール。私は――。」

俺はこの時、ふと愉快にも残忍な思附きをした。

「私は貴女にこの紙幣をあげよう。」

裸体のロベールの傍へ近づいた俺は、千フラン紙幣を一枚彼女の鼻先へつき突けた。

「いゝえ、ルヴェル子爵。あたくし、そんなもの戴きたくありませんわ。」

蒼白んだ頬に手をあてゝロベールは云つた。

「なるほど、貴女はお金をいららないのですな？」

「えゝ。」

「では、何を貴女は、不具者の私から望むのですかね？」

「何にも――。」

「何にもお望みにならない。それでは、この不要な紙幣はこうして棄てましょう。」

俺はマツチを擦つて、指先につまんだ千フラン紙の端に火を点けた。火はのろ／＼と紙幣を焼き焦して行つた。俺はロベールの顔をじつと見据えていたが、女は表情の一つの線も変えなかつた。紙幣は灰屑となつて床に落ちた。俺は再びマツチを擦つた。次の千フラン紙幣に火を黙じた。ロベールは素知らぬ顔をしていた俺の指先で、紙幣は脂肪を含んだ焦げ臭い匂を放つて燃えた。それが消えそうになつた時、俺は次の紙幣を持つて、前のに変えた。二枚、三枚、五枚、六枚、八枚、次から次へ俺は千フラン紙幣を燃やして行つた。ロベールは片足を俺の寝台の上にかけたまゝ全裸の姿態で、平静な無関心を装つていたが、次第に顔いろが蒼褪めてゆくのがわかつた。

しかし、女は醜い俺に対して望むものが、金のみであることを最初に拒否した変な見得と意固地から、黙つて俺の無暴を止めようとはしない。

俺は千フラン紙幣の束を持つて来て、最後の燃え残りの紙幣の火を移した。俺はそうすることが、馬鹿げたことではなく、何か非常に痛快な意義のあることをしているような錯覚に捕えられた莫大な紙幣のめら／＼と焰を吐いて行くのを凝視めて、俺は変態的な快感を覚えた。

「悪魔！畜生！気狂いの罰当り奴！」

突然、髪を振り乱したロベールが喚いて、俺の傍へ馳せ寄つて来て、床の上に燃えかゝつてゐる紙幣束を、跣足の蹠で踏みこむ。

つて、泣きながら消した。

5

ぴち／＼躍る白鮫のようなロベールの股や、臀部の運動を見て
いる裡に、俺の身内にむず／＼する情感が沸いて来た。

「不具者のお化け！畜生！何んて
ことをする莫迦者だろう。あたし
は、生れてはじめて、こんな侮辱
を蒙つたんだわ。」

ロベールはおい／＼泣きながら
俺のことを罵った。

「ロベール。私は貴女が好きにな
りましたよ。貴女は冷めたい情熱
の仮面を脱ぎ棄てゝ呉れましたか
らね。」

俺は女の膚に喰い入るような眼
附で、こういつて一足近づいた。

「いやです。そんなことが、どう
なろうと、あたしの知つたことじやないわ。貴男のようなけだもの獣物と
愛の遊戯をするのはもう真つ平だわ。」

ロベールは憎みの刺すような瞳で俺を遮ぎつた。
「ふ、ふ、ふ、ロベール。貴女が嫌だといつても、私は貴女の肉
体が欲しいのだよ。」

俺は両掌を差伸べて、女のこの胸を捉えようとした。ロベール

は、本能的に退いた。

「何をするの？」

「私は貴女を自分の愛慾手帖の一頁に記したいのですよ。」

俺は言葉が終らぬ間に、水泳のジャンプをする恰好に、両掌を
披いてロベールの脚に飛びついた。

「あら！」

不意を喰つてロベールの体は、
俺の上部と一つに纏れながら、床
の上に転んだ。

「よし！そんな乱暴なことをし
ないで！」

ロベールは、胸を、股を、腰を
ばた／＼させて、俺の胸や、顔や
腹を突きつけようと暴れた。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ロベール。大
きな声を出したつて駄目だよ。こ
の部屋へは誰も来ないようにして
あるのだ。黙つて温順しく、私の

自由になるがよいよ。」

俺は女のすんなりした脚から、次第にじり／＼と腰の辺に両掌
を這い伸ばしながら云つた。

「は、はなして！そんな嫌なことしないで頂戴！」

俺は女の裸体の感触を愉しみながら、強くロベールの肉体にし
がみついて、蜘蛛のように貪淫に情慾の焰を燃やしながら、女の



世界艶笑文学紹介

肉体に這入り込んで行つた。

「おゝ、ルヴェル子爵、あたしは、溜らないわよ。まあ、何んて酷いことをするんでしょう！」

ロベールは悶え喘ぎながら、俺の体と一つになつて、印度絨氈の柔かい床の上をごろ／＼転げ廻つた。俺は執拗な性慾の秘技をもつて、女の最後の精力の余燼までも燃えつくさせようとして、全身の四肢をくねらせて、ロベールと争つた。

「おゝ、いとしいロベール。」

6

アン・プランのラヴェル子爵という綽名が、いつの間にか賭博場の連中から俺に呈せられた。俺の人眼を惹きやすい不具な醜い恰好が、古い迷信の勝負事をする前に、佻僂の背に触れて望めば必ず勝つということを想像させて、人々の間に変態的な人気を持つようになった。

「やあ、ルヴェル子爵。今日の運勢は如何ですか。」

見知らぬ男が馴々しい言葉をかけて、俺に近寄ろうとすることもある。そして、俺が軽く挨拶を返して行きすぎ様とする時、必ず彼等は、俺の背にそつと掌を触れて行くのだ。

「おい、今日は素晴らしいぞ。佻僂子爵の背にそつと触れたからな。」

賭博者は朋輩にこんな風に話しているのを、俺は屢々聞いた。道化者——俺の浅間しい姿は、頬紅と白粧に塗りつぶされたあの滑稽な道化師の姿だ。俺はしかし、俺の滲めさを嘆くほど、細

い神経を今では持つていない。反対に、俺の底にひそむ粘り強い反抗心を、変つた形で示めてやつた。

「ほう、ルヴェル子爵が五十万フランを儲けたというのか？」

「あの佻僂は賭博の天才だよ。いつも僕達の金を捲き上げて行くじゃないか。」

今は俺の復讐がルーレットの勝負に賭けられていることを知らずに、俺の幸運を羨み嫉んで、俺にあやかりたいと願っているのだ。

そして、俺は賭博場の一つの王座を勝ち得たとも云える。更に、俺の女性に対して執る陰險な荒淫的毒手は、いよ／＼潜行的にピツチをあげて行つた。

或る朝、俺は賭博場の前の公園を散歩していた。ルーレットにのぞむ前の冷静さを培うためには、朝の清冽な空気は何よりもいい。俺は陽にうきうきと吹きあがる噴水の辺を、逍遙していた。

すると、向うの灌木の影からブロンズの美しい夫人が、しほめたバラソルを軽く振りながらやつて来た。瞳のエメラルドのような輝きに豊満な頬から首筋へかけての線、どつしりと肉附のいゝ夫人は、酷く性慾的な感じだった。

俺の傍をすれ違う折、夫人の右手が極く軽く俺の背に触れた。

「はゝあ、迷信家の夫人は、これから賭博場へ出かけるところだな。ふん、夫人さん貴女は好い運にありつけますよ。」

俺は肚の中でうきうきと、夫人と反対の方向へ歩いて行つた。そして俺は、今夜の収穫を如何に慰むかを、空想しながら愉しい散歩を続けた。

世界艶笑文学紹介

7

俺は真直ぐに賭博場のルーレットの部屋に進んだ。第一の大広間には、俺の目的物は見当らなかつた。俺は扉を開けて呉れるギヤルソンに、フラン紙幣を握らせて次の部屋へ這入つた。

ブロンドのエメラルドの瞳は、そのルーレット台に座り込んでいた。

「おゝルヴェル子爵。さあどうぞ。」

俺の姿をみたバルタディオというイタリア人の賭博者が、席を開けて譲つて呉れた。

丁度その左隣に、夫人が数子を弄りながら、ルーレットの廻転を睨めていた。

勝負は終つて、夫人は五千フランほど負けた。俺は、つかつかと夫人の隣に割り込んだ。

「五万フランをアン・ブラン賭けにして欲しい。」

俺の言葉に、皆が一斉に俺の方に注意を向けた。

俺を知っているものは、眼を輝やせて囁いた。

「アン・ブランのルヴェル子爵がはじめたよ。」

俺を知らぬ異邦人は、五万フランを一度に的中率の少ない賭け方に投ずる俺の無暴を、反感と驚歎と好奇の瞳でみた。

「あ——」

ブロンドの夫人は俺を認めて、軽く可愛い口唇を開けて何か云おうとした。

「夫人、この方を御存じですか？」

前からの知合らしく、バルタディオが俺を指して、夫人に云つた。

「いゝえ。」

「左様ですか。差支えなければ御紹介させて戴きたいのですが」「えゝ、どうぞ。」

夫人は応揚に答えた。

「ルヴェル子爵、この婦人はグルモン伯爵夫人でございます。夫人、シヤルル・ルヴェル子爵を御紹介いたします。子爵はモンテカルロ随一の賭博の名人でございますよ。」

バルタディオは形通りの紹介をした。俺はグルモン伯爵夫人に軽く一瞥して云つた。

「お美しいグルモン伯爵夫人にお眼にかゝれて、私は甚だ光榮に思いますよ。」

「あら、あたくしこそ、貴男様に御近ずきになれて、どんなに嬉しいか存じませんわ。ルヴェル子爵様。」

柔かい微笑を湛えてくれた挨拶を、グルモン伯爵夫人は云つた。

ルーレットの勝負に俺は運がなかつた。五万フランを三度負けた俺は、調子の向いて来るまで退いて止めた。

グルモン伯爵夫人も、瞬く間に、七万フランほどを負けた。伯爵夫人の美しい顔が愁いのいろに曇つてみえた。俺はこの機会を捉えることを忘れはしなかつた。

「伯爵夫人。甚だ無駄けがましい申出でございますが、若し私に出来ることでしたならば何でも申付けて下さいませんか？」

世界艶笑文学紹介

聊かながら、茲に三十万フランほど持合わせがございますから、伯爵夫人の御役に立てば幸せに思いますが——。」

俺は叮嚀に辞を低くして、賭博に溺れるものゝ弱味を突いた。

8

俺はバルタディオ伯爵から夫人が、二三日前から賭博場へ来て数十万フランの金を負けたということ、夫君のグルモン伯爵が急用を帯びてリヨンへ帰つたということを聴き訊した。

グルモン伯爵夫人は俺が貸与えた三十万フランも、数時間の裡に煙のように負けて了つた。俺はエメラルドの腫の憂鬱な曇を視た。グルモン伯爵夫人は、俺のかけた罫に完全にかゝつた。

「ルヴェル子爵様。落みませんでしたわねえ。」

「いゝえ、伯爵夫人。私はそれしきのこととは何の痛痒も感じませんが、貴女は今日大変御運が悪かつたのです。ルーレットにはそういうことが、よくありますよ。」

「えゝ、でも、あたくし、貴男様にお気の毒でございますわ。」

「いや、何でもありません。そんなことを気になさらないで、私のところへいらつしつて氣慰みに旅行の変つたお話でもいたしましょう。」

俺は巧みに伯爵夫人を誘つて、賭博場を出て俺のホテルへ歸つた。俺が美しい夫人を度々連れて戻るので、昇降機アサンスールのギヤルソンが、いんぎんに頭を下げながら皮肉な微笑を浮べた。俺は、ポケットから二十フラン紙幣を取出して、小憎い奴に握らした。

俺は部屋に這入ると、リット・スタンドに燈光を点けた。淡紅

いろの光線が部屋の裡を詩的に彩つた。

「グルモン伯爵夫人、どうぞ、おくつろぎ下さい。」

「えゝ、有り難う。大そう御立派なお部屋ですわねえ。貴男様お独りでいらつしやいますの？」

壁にかゝつたフランス頽廢派の画家の裸体画や、桃花心木の卓や、七宝の花瓶、日本の遊女等の裝飾調度がなまめかしかった。

「伯爵夫人、古いボルドオ酒を召上りになりませんか。」

俺は長椅子ソファに並んで、伯爵夫人に酒杯グラスをすゝめた。

「あたくし、あんまり戴けませんのですけれど、少し頂きますわ。」

伯爵夫人は酒杯グラスを赤い口唇にあてた。俺達は珍らしい旅行の話をしたが、盃の数を重ねた。

「あゝ、あたくし、何んだか体中がぼか／＼と好い氣持でございますわ。」

眼の縁を薄桃いろに染めて伯爵夫人は、胸を抱くようにして云つた。

俺は肚の底でにやりとした。伯爵夫人の酒の中に、俺は催淫媚薬を入れておいたのだ。

「伯爵夫人、貴女は印度の奇妙な風習を御存じでしょうか。男と女との——。」

俺は、そういつて、伯爵夫人の頸筋へ顔を近づけた。

9

「いゝえ、あたくし、ちつとも存じませんわ。」

俺は伯爵夫人の白い頸の肉に、舌をあてゝ舐めた。

「あらッまあ何をなさるのです。失礼な。」

伯爵夫人は長椅子から立上ろうとした。俺はその胸を後方から抱いた。

「伯爵夫人、貴女は私の債務をお返しになるお積りではありませんか？三十万フランの負債は、貴女の夫君グルモン伯爵がお知りになったら、貴女の破滅ですぞ。」

「まあ、何んて、汚らしい。貴男は卑怯な方でしょう。」

伯爵夫人は俺の腕の中で身悶えした。俺は女の胸の乳房をしつかと摑えて云つた。

「さあ、黙つて、貴女は尤も賢明な、気軽い方法で、貴女の負債をお返しなさい。伯爵夫人。」

「あゝあたくし、そんなこと嫌ですわ。」

「いや、それは他人に知れることの場合にだけ通用する言葉です。絶対に、こゝでは貴女と私以外には、この秘密は永遠に保たれるのですよ。私は醜い、しかし、御婦人をお愉ませする技巧テクニツクに長じて居りますよ。印度の男の秘密な愛撫を貴女に教えてあげようというのです。」

「さあ、黙つて私と一緒にいらつしやい。」

俺は伯爵夫人の耳に数々の暗示を囁いた。伯爵夫人の顔の表情に、性的の誘惑に抗する苦悶のいろが浮んで消えた。瞳孔が怪し

い光に輝やき、鼻息が荒く烈しくなつて行つた。それは俺の飲ました催淫媚薬が効目を顕わして来たのだ。

伯爵夫人は夢遊病者のように、俺に従つて次の寢室へついて来た。

「着物を脱いで、すつかり裸におなりなさい。」

俺の命ずるまゝに、伯爵夫人は意識のない催眠術にかゝつたもののやうに、着物を脱ぎはじめた。

真白い弾力のある四肢を惜気もなく伯爵夫人は、寝台の上に横たえた。俺は伯爵夫人の腰に手をかけた。かすかな湿いのある皮膚が燃えるように熱かった。俺も一糸まとわぬ裸体となつた。

長々と寝そべつて、眼をつむつてゐる伯爵夫人の口唇を、俺は
飢え渴したものゝように音たてゝ吸つた。胸のふくらみに顔を押し

しあてゝ、べろべろと舌を出して舐めた。塩っぱい味と、ふんと女臭の匂が俺の味覚と嗅覚を昂奮させた。俺は伯爵夫人の××を

舐めた。べろべろと体中を舐めながら俺は堪られぬ快感に恍惚となつた。伯爵夫人は悶えた。

「あゝ……ルヴェル子爵様、あたくし——。」

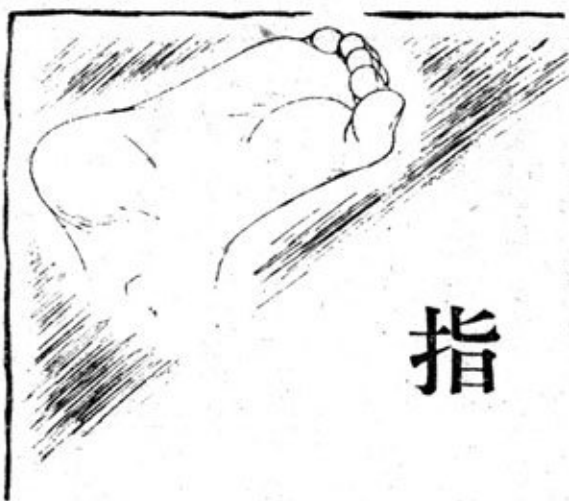
伯爵夫人は寝台の上を転げ廻りながら、俺の肉体を犇々と抱きしめた。

俺と伯爵夫人の情痴の寢室に、向うの部屋からルウト・スタン
ドのなやましい淡紅いろの光線が射し込んでいた。

——終——

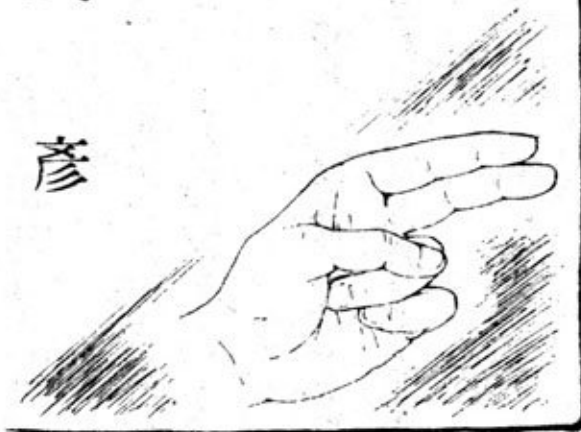
A 10x10 grid of dots. The dots are arranged in a regular pattern. The dots at the corners and along the main diagonal are marked with an 'x'. Specifically, the 'x' marks are at positions (1,1), (1,9), (2,5), (3,1), (3,9), (4,5), (5,1), (5,9), (6,5), (7,1), (7,9), (8,5), (9,1), and (9,9), where (row, column) starts from the top-left.

指の秘密



女の嗅覚はよく訓練された獵犬のようなもの、油断をしてはいけません。

武山武彦



随分待たせるわね。え？妾？妾が誰だか解らないの？嫌ね、悲観してしまいうわ。もうすっかり忘れてしまつてゐるのね。男つて、そんな薄情なものか知ら？未だ、貴方と別れて一年余りしか経つて居ないぢやないの。

やつと山積して居た仕事を片付けて、机の上を整理しながら帰り支度をして居ると、掃除のおばさんが電話だと告げて来た。

もう退社時刻もとつくに過ぎて居るので、電話交換嬢も勿論帰つてしまつて居て、電話は宿直室まで行かねばならない。それにしても、今頃俺に電話なんて、一体誰だろう？

どこかの小料理屋かおでん屋でとぐろを巻いて気焰を挙げて居る飲み友達の顔がちらと頭を掠めて通り過ぎたが、さて思い当る誰もない。

「誰だろう？奇麗な女の子からかな」半ばふざけたように言い捨て、オーバーの片袖に手を通しながら、何気なく見上げた

眸がおばさんの薄笑を含んだ顔にぶつかつて思わず暗闇で何か得体の知れないものを踏み附けた様にギョツとした。

「女の方の様ですよ。お名前をお訊きしたんですけど、電話口に出て載けば解るつて、」何の反響も期待せずに投げた冗談の波紋の大きさに戸迷つた形で、ちよつと狼狽気味で反射的に宿直室へ急いだ。

「もしもし……」こわいものでもきく様な妙に居竦んだ気持で取りあげた受話器の底から少しせき込んだ女のきんきんした金属製の声が聞えて来た。

「もしもし、武山さん？武山さんでしょう。」

ふふ……やつと解つたらしいわね。妾、香代、解つて？随分間の抜けた返事をして居るわね」

文字通り間の抜けた間投詞をひきとつて、立て板に水を流す女の饒舌に、私はやつと女が私の昔の女、もう少し詳しく言えば今の結婚生活に入る迄の多彩な青春行路の中で、一度は結婚しようとして燃えたことのある青樓の女、香代であることに気が附いた。全く思い掛けない女の出現であつた。

「面喰つてゐるわね、御免なさい、私の勝手なお饒舌ばかりしてて。昨日大阪から舞い戻つて来たの。さつき、偶然、この会社の前を通りかゝつたら、もうとつくの昔に真つ暗な筈のお部屋に明るい灯がついて居るのを見ると

矢も楯も堪らなくなつて電話をかけてしまつたのよ。勿論、あなたが居らつしやるなんて夢にも思つて居なかつたけど、どなたかにあなたの近況がきけると思つたの。そうしたらどうでしょう、たつた独り居残つて仕事をし居たのがあなただなんて、神様も未だ我が心を見捨て給わずと言う訳ね——」

妙にはしやいで居る女の饒舌は、電話口で何時果てるとも知れず続いて居た。

初舞台で思わぬドチを踏んだ素人役者みたいに、すっかりあがつて居た私もようやく我に返つて、杜の附近の或る喫茶店で待つ様にどうやら電話口の饒舌に区切りをつけると、意地悪げにニヤリニヤリして居る掃除ばあさんのうす笑を含んだやにつばい、顔に背を向けて、帰り支度もそこそこに会社を飛出した。

二

「あなた、何をそんなにそわ／＼してらつしやるの、時計ばかり覗いたりして嫌ね。——」

そんなに奥様が恐いのか知ら？あーあ、妾あの時、あなたを離さなきやよかつたわ……

……女なんて、みみづちい見栄に本当の幸福を見失うものなのね——」

女のひどく感傷的な饒舌とぐいぐい舐を押

し附けて来る様な激しい情熱と媚惑に押しまぐられて、まるで馮れたように女を行きつけの小料理屋に案内して、さて卓を隔て、一年前の女を眼の前に座らせて見ると、今の結婚生活にはいつてから、妙な潔癖から殆んど浮気らしい浮気もして居ない私は、大切な心の感じてたあいなく音を立てて崩れて行くのを城廓がほぞを噛む様な悔にさらされて居た。

×

こう言つても、何も私が聖人君子だと言う訳ではない。今の家庭生活を築く迄には、さんざん浮気もし、女獺りも人後に落ちず、この香代と言う女とだつて、私との一年余りの腐され縁の為に、大事な旦那を幾度か縮尻りかけた程である。

もう二年以上も昔の話だから、どんなきつかけでこの香代と言う女と相知る様になつたか、詳しいことは思出せない。浮川竹の流れに身を漂わせて生きて来た女なのだが、その割には世帯染みた、言わゞ世話女房型とでも言うような女だつた。

その肉感的な身体付を相手に押しつけるようにして、色気のこぼれ落ちそうな細い切れ長の眸で、男の顔をしげしげと下から覗き込むように見上げて、やたらに意味のない感嘆

詞を使つてねばつこい饒舌が速射砲みたいに続く。

何か一言、物を言うにも相手の男の体のどこかに手を触れずには居れない甘つたるい仕草。私と彼女は、どちらから寄り添うでもなく寄り添つて、かなりの深間の仲に人の口を賑わしたのはそれから一年余り。

女の旦那と奇麗に手を切らせて、二人で結婚しようと言を口説いた事も一再ではなかつたが、その都度、香代は笑つて真面目にとり挙げようとはしなかつた。

「駄目、駄目、結婚は駄目よ。妾つて女は、斯う見えても地道な世帯生活にはとても不向きな女なのよ。私にとつては長いこの社会の生活の垢は簡単にはとれそうもないわ。」

妾はどんなに苦勞しても構やしないけど、それじやきつとあなたが苦勞するに極つてるわ。

結婚はどんなことがあつても素人の娘さんを撰んでなさいよ。私も探してあげるわ。

でも、あなた、妾の事に責任を感じたり、月並な同情や義理に身をせびめたりするなんて野暮なことは止めて頂戴。妾、この儘で結構、幸福なんだから。

けれど、これだけは私の我儘を許してね。

あなたが何処かの娘さんと結婚したら、妾はあなた達の前から姿を消すこと。何故だつてきくだけ野暮、この素敵な人情お涙劇には、どんな勿体振つた脚色だつて出来ると言うもの。

あなただつて、若し御希望^{のぞみ}みなら、お好きな様に、悲劇にでも人情劇にでも、又純情秘話にでも勝手にまつりあげるのは構わないけれど、私は同情されるのだけは真平^{まへら}よ。私の気持はあなたから同情を強^しられる程に惨めでも不幸でもないんだから……」

斯うして、話が真剣な結婚話に至ると、何時もはぐらかして取り合おうとはしなかつたこんな月日が一年余りも私達二人の上に過ぎて行つた。そして、今は全く彼女の汲^きめども尽きない深い情愛の泉を、まるで蕩^{とう}児^このようなうのうとした気持で貪^くり味つて、私は限なく幸福であつたのだが。人間と言う奴は全く貪^く婪^{らん}な野獸^{やぶ}みたいなものである。

此の静かな幸福な花園の中で甘い蜜を思うがまま貪^くり尽して居ながら、私は何時しか他の花壇に飛び交う白い蝶に心惹かれて居る自分を発見して狼狽^{ろうたい}を禁^こじることが出来なかつた。

全く思いがけない心の中の伏兵であつた。

私はこの事を香代に正直に告白しなければならぬ。そして、私達の愛の協定に従つて美しい別離^{わかれ}をしなければならぬ——と心は焦りながらも、矢張り、香代から誘いがあると彼女の花園の甘美な夢を忘れることが出来ないであつた。

この矛盾^{むじゆん}に満ちた私の愛情行路の苦悩も幸福にも女の方で解決をつけて呉れる時が来たそれは、彼女の物的背景であつた旦那に材木商を営んで居た男が、取引の不振から東京の店舗^{たな}を畳^{たた}んで一応大阪へ引きあげることになつた。男の要求もあり、果しない平行線上を歩む様な私達二人の愛情関係を精算するのに絶好の機会だと思つたので、彼女は男と共に大阪へ随いて行く事にしたと言うのであつた。香代は何時かは廻つて来る運命^{さだめ}であつたが自分から持出した私との別れ話にとても辛うであつた。だが、内実それは私にとつては渡りに船と言つた様な都合のよい話であつた然し、流石に私も黙つて口を拭つてその儘別れてしまふ様な不信はどうしてもすることが出来なかつた。私は、私に今、恋人が出来かゝつて居ること、その女とは結婚してもよいとさえ思つて居ること、もつと早く彼女に告白しようと考えながら、今迄どうしても話せ

なかつたことなど、包み隠^{かく}さず香代に物語つた。香代は暫く、その得意の饒舌^{じやうぜつ}さえ止めてじつと私の話をきき終ると、ほーッと私の耳にさえ異様に響いた程の深い嘆息を吐くと「負けた——」と呟^{つぶや}き捨てるや否や、矢庭に私の躰^みに飛びかゝつて来た。そして、狂つた様に力強く乱暴に私の躰^みにしがみつきながら、負けた、負けたと呟^{つぶや}き続けて居た。それから暫くして落着きを取り戻すと、その恋人に会わせよと言ひ出した。私は初めは躊躇^{ちゆうちゆう}したが他見^よながら一度会つて置きたいと言う女の希望が、嘗^{かつ}て自分が深く愛した男の妻となるかも知れない娘を、せめて妻となる前に一度見て安心して置きたいと言う微妙な女心以外に他意のない事を知らされて、私は深くうなずくと早速、娘の勤めて居る事務所に電話をして彼女を呼び出した。

勤務時間中だつたので、ほんの十分許りの立話を交しただけで娘は其の夜の逢瀬^{ほうせん}の約束を嬉しそくに胸にたたんで帰つて行つた。

そのびちびちした若鮎^{わかづな}のような娘の後ろ姿を香代は広告塔の蔭^{かげ}で瞬^{また}たきもせず眺めて居た。

「とても明るい感じのよい娘さんだわ。それに口惜しいけど二人共幸福そうね。頬^ほに触^さる



「ましくなつちやつたわ。妾も、これでど
ら安心して大阪へついて行ける様だけど
代り、一遍に淋しくなつちやつたわ」

「又き抜けて行くような、妙に乾からび
と笑ふ顔だつた。」

「あなた、今晚つき合つて下さるでしょう」
「実は今、あの娘と今晚、晩飯を食う約束を
した許りなんだけど……」

「あーら、最後のどたん場のしよい投げね。
でもその方がいゝかも知れない。あのきれい、

な娘さんを見せて貰つた晩だけに、ひよつと
したら私の心の駒がどんな風にも狂うまいと
も限らないから、この儘あつさり別れた方が
お互の夢を壊さないかも知れないわね」
こうして其の日其の儘妙にしんみりした別
れ方をして一年余りも経つた。この二人の別
離を追つ掛ける様にして結婚した私の新婚生
活も、やつぱり一年余りの月日が経過して居
ることになる訳である。

三

さて、舞台はもう一度元に戻る。

興醒めた昔語りでとんだ道草を喰つてい
るうちに、太舞台では、話もはづみ酒もはづみ
何を言つても嫌で別れた仲ではなし、飲む程

に酔う程に、意馬心猿の何とやら、一年振り
の焼酎木杭、適当に話が進んで、適当に濡れ
場が演ぜられて居たのである。

「大阪での私の生活はとつても惨めだつたわ
そりやあ、物質的には不自由した訳でも苦勞
した訳でもないけど、矢張り水が合わないとい
言ふのね。東京とは、何と言つても、義理人
情風俗習慣がまるで違う。街吹く風の匂いや
味までも違う。私なんかまるで水に浮いた油
どこまで行つても除け者なのよ。遂に、辛抱
しきれなくなつて、まるで家出でもする様に
上京して来たのが昨日のこと。そして、未だ
牀の落附く先も、はつきりときまらないうち
に、何とはなしにあなたの会社のあたりを彷徨
つくなんて、やつぱりこれも女の業と言ふも
のか知ら。あなたにはお氣の毒みたいだけど
こうなりやあもう覚悟をして貰うより仕様が
ないわ。」

思いがけない会合がお互いの心の駒を狂わ
せて行き着く所まで往つてしまつたけれど、
私はもうこの辺で解放して欲しいと思つた。

蜘蛛の絲のような粘つこい女の体臭から離
れて、もう一度これから先の事も考えて見ね
ばならない。独り身の時ならば兎に角、今じ
や女房のある牀だ。私はまだくどく纏りつく

女を巧くなだめすかして、再会を約してやつと其の家を出た。何も尤もらしい口実を造りて妻を誤魔化さねばならない程に女房天でもないけれど、平凡な家庭の平和保持する為には、多少の術策は方便下。今日は、のつびきならない社務

帰りが遅れる事は前以て言い置いてあつたが、それにしても大分子定線を突破些さか一触即発の危険線にまで近づきあると言う現実には認めなくてはならない。した夜の最も効果的な安全弁は、一刻も夜の二人の天地に女房を誘導するに限る。れこそ男性の尊い体験が生んだ極秘の愛の秘訣であるのだ。然し、その夜の私達二人の上はその秘訣がどんな風に果して効果的だったかどうか？、試みにルポルタージュ風に記して見よう。先づ妻の些か尖鋭化した科白から初まるのだ。

「随分、遅くなつたのね。会社の御用ばかりじゃないんでしょう。お酒の匂がして居るんですもの……」

「うゝん、落さない。社用で多少遅れたのは事実なんだが、こんなに遅くなり過ぎたのには外に理由があるんだ。そら、お前も知つてる筈だと思ふが、いや、未だ結婚早々だった

ので詳しく知らなかつたかも知れないが——丁度一年程前に会社の金を少し許り使い込んで会社を辞めて大阪の方へ廻つて行つた同僚があることを。やつぱり知らないのかい？すると僕が話さなかつたかも知れんな。その男とても気の好い男で、僕とはずっと独身時代からの仲のよい飲み友達だつたんだ。

会社の金の使い込みだつて、決して悪気があつた訳じゃないし、それに大した金額でもなかつたんで、会社を辞めて責任をとる程の事はなかつたんだが、潔癖な男だつたので、新規蒔き直しの覚悟で大阪落ちをしたんだ。其の男が、今日、突然僕を尋ねて来たんだ。

一年振りだね、お互の健康を祝そうと言う訳で遂々酒になつたのだ。今では会社勤めを縁切つて、自分でちよつとした店を持つてどうやら羽振りも相当らしかつた。近いうちに是非一度御邪魔して、君達の結婚生活に敬意を表したいと言つて居たからやつて来るかも知れないよ」

嘘と真実を織り交ぜて、それでも一応の筋書に纏りをつけたが私の善良な妻は、この素晴らしいお伽譚で、どうやら納得したらしいと安心して見たら、とんでもない話であつたよく訓練された猟犬のように敏感な女の嗅

覚は、既に私の躰から、他の女の体臭を嗅ぎとつて居たのだ。

私が自分の窮地を一刻も早くのがれるために、先制的に彼女の夜の機嫌をとるに限ると誘導宜しくやつと誘い込んだ床の中で、妻は声をひそめて私の耳許で囁いた。

「ねえ、後生だから、指を奇麗に洗つて来てくださらない？」

瞬間、私は自分の顔色がさつと変つたのを意識したが、幸い、暗くした枕燈にぶざまな醜態は見現わされずに済んだけれど——、私は背筋に氷柱でも差し込まれた様な、鳥肌の立つ想いで、心の底まで冷えて行くのをどうすることも出来なかつた。

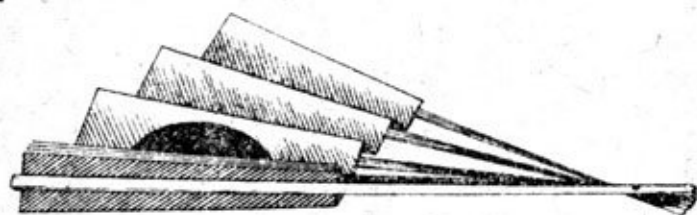
この指こそ、一年振りで逢つた女に、思ふ存分ぶざけて来た暗い秘密を背負つた指に外ならないのだ。指が囁く私の暗い秘密、鋭い妻の嗅覚の前に私は何の防禦楯もなく裸の前に曝されて居るのであつた。

x x
x x
x x
x x
x x

戦 國 愛 慾 繪 卷

男 装 寵 姫 傳

亀 岡 絃 七 郎



「慶次、何とか申したな。そなたの小者が謡一番謡うてくれい」

上杉中納言景勝は、美麗な児小姓を周囲に侍らせて今や上機嫌であつた。少くとも内心の憂悶は面に出ていないのである。慶次と呼ばれた老人は頭を剃りこぼち、ゆつたりと盃を含んでいる。前田利大である。

「いや、もうこの齢になり申して昔の事は」「景勝強つての所望じや。酒興と思うてくれるなよ。所詮我らも泰平の世には住み難い輩のううねめ妥女」

妥女と云うが女ではない。微かに頬を綻ばせて打領うなずいたのは、年の頃なら十五か十六のお小姓、然し統の袴に波打たせて豊かに座つた腰付きの優美さは、容貌の可憐な凜々しさと相通じて嫺やかである。

「お心、身に泌み申す。が、それ、そこのお小姓にお酌願うて、一盞参つてからの事」

指されたのは数日前お目見得の新参、十六才の大島小十郎であつた。慶次とは特に別懇の間柄である上杉家の重臣直江山城守兼継かねつぐが召抱え如何と伺い立てた美形びしやうである。大振には萩桔梗を染め抜き、統の袴に肩衣も艶やかな美少年、腰高に結んだ袴の紐にくびられて

花車きやしゃな体付きは、譬えようもない優雅さ。抜けるように白い顔の小さく紅濃い唇、高く透つて傲らぬ鼻すじ、切長きながの眦、ふくよかな頬誠に傾国の美女にも見まほしい少年である。織い指に錫の銚子も重そうな、そつと片袖支えて傾けた銚子から琥珀の酒が、朱塗りの盃にとくくと音を立てた風情に、景勝は思わず膝を乗り出していた。端座の静かさも然る事ながら、動けば一層麗しさが勝るのだ。へ赤いちよかい革袴

鳥のとさかに立烏帽子

前田慶次が馬にて候

慶次が若く暴れ者であつた頃、加茂河原で愛馬を洗わせながら、小者に謡わせたものである。錆びた声が呑み干した大盃の酒に程よく湿り、明るく碎けた歌詞に似合わぬ、しみふとしたものを漂わす。いや、歌詞の明るい諷刺さが、一層哀愁をこの場合覚えさす。京洛の春の花に暫しの時を過した景勝は、もう数日で領国米沢へ帰らねばならない。戦国時代に数多例のある事ながら、景勝の女嫌いは有名であつた。名門武田信玄の娘、お菊の方をめとつたが、その仲は極めて冷たいものであつた。老臣達の心配は一通りでなく継

嗣に頭を悩ましていた。景勝自身は女を一切近付けない代りに、美貌の少年と見れば金銀を惜しまない。関ヶ原役の失敗で転封になったとはいえ、米沢三十万石、不自由はなかつた。この頃、美童の産は京に限るとされたもので、山十郎はもとより、稚小姓は皆京生れが集められていた。小姓達の間でも女同様寵を競うて反感嫉妬は有り勝ち、新参の小十郎は新知百貫を賜つたまゝ、まだ閨のお伽には召されていなかった。故参の小姓達に対する景勝の配慮もあつたのである。

慶次は兼継の推挙になる小姓を景勝の眼に止らせたいと、酌をさせたのだが、果して景勝はその艶姿に酔心地を唆られた。

「山十郎盃を遣わす」

山十郎畏つて膝でにじり寄り、はッと手をつかえる。指の白さが盃の朱に映えて、山十郎の頬が、ぼつと赫らむ。黒々とした前髪が額にこぼれ、芙蓉の霞が濡れつゝ開かんずる風情である。他の小姓達は羨ましく思つてい



るが、先程故参は一とわたりお盃を頂いた後とて、無言で我慢している。

「其方も何ぞ謡え、隆達なり何なりと」

長く垂らした横鬘の毛が畳につく程頭を下げて、山十郎

「至つて不調法、恐れ入り奉ります」

強つてと責められて、止むなく歌い始めたのは弄斎ぶし

へやぶれ菅笠や やんや

しめ緒がきれていの

おゝえい

さらにきもせず

えい さんさ

捨てもせず

澄み透つた美声、巧みな節廻し、景勝はも

とより、一同魅せられたよう。

「不束でござりました」

頭を下げて末座へ戻るまで、景勝は夢見るような眼付きであつた。

叡山の稚児には、灌頂の秘法があると云う稚児は体を軟かくしておくために、添臥そえふしに先立つて腹を揉み、男色の場合の秘所を、よく洗い、浄め油など塗り誘いおく、とある。

添い臥してから、僧がまづ稚児の帯の結び目に手を掛ければ、稚児心得で自ら解く。

次いで稚児が僧の帯に手を掛け、僧亦自ら解く。然る後僧は左の手を稚児の腰の辺りより入れ、稚児は腰を少し浮かせ手枕する。――その他秘事に至るまで極めて厳密なる作法がある。戦国の武門には、さほどの厳密さはなくとも、男女の秘事に勝る作法が、おのずと備つていた。それは偏えに、行きつく所へ行くまでの情緒を焦らせつゝ深める作用をするからであつたろう。

さて、その夜更けである。

焚きしめた香で匂いが漂う中に、絹の夜具を展べた景勝の寝所で、時ならぬ怒声がひびいた。

「其の方……何故に、又誰に頼まれて、景勝ほどの者をたはか課つたのじゃ。有体に申さねばこ

の場は去らせぬわ」

顔に青筋が浮き、折

角の期待と興味を中断

された許りか、見たく

もない女の体を前にし

て、奔騰する慾情の吐け口を失つた景勝の、

怒りは凄じい。衣服を剥ぎ、凡そ女である肉

体の部分部分を抉り殺したい程の腹立ちであ

つた。

白絞の下着ばかりで打伏した山十郎の若衆

鬚が、わな／＼と震え、豊かな腰の肉付きが

一層目立つ。頸筋の細さ、背の軟かさ、これ

は紛れもない女である。今まで気付かなかつ

た迂闊さが、景勝の怒りに拍車を掛けるのだ

実は景勝、酔つた余り熟睡して、ふと寢覚

めの水を飲んだ時、先刻連れ込んだまゝの山

十郎を思い出した。足許に袴だけ脱いで端座

する山十郎を、ぐいと抱き寄せるなり、一つ

床に横たえ、背の方から手を差し伸べて腰を

抱いた。しつとりと身についた絹を透して、

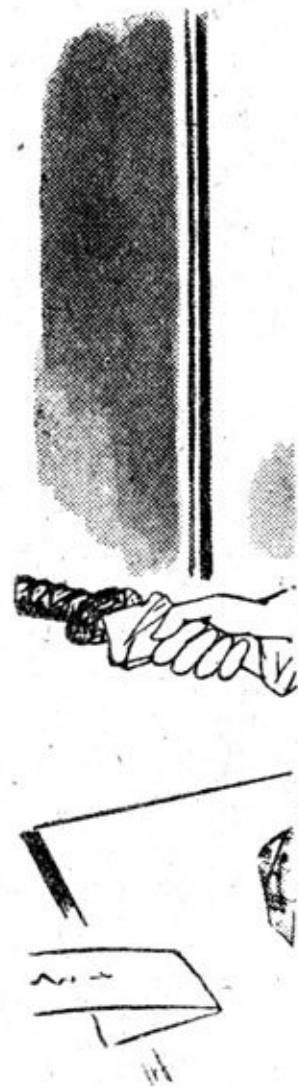
たおやかな触感に、景勝の慾情は火のように

燃え立つ。女のようにぶよ／＼と大き過ぎな

い。二つの丸みを後から撫でながら、彼は自

分の肉体を受け入れる山十郎の嬌羞を想像し

一層昂奮に駆られた。



「今宵までそちを近ずけなんだ身の遠慮、判
るであらうな。情無しと怨むは誤りぞ」

云いながら山十郎の帯を解く。逸る心を抑

えて大振袖を片袖づゝ巧みに脱がせ、もう一

度抱きしめようと、山十郎の腋に手を差し入

れた時である。すべ／＼と絨のような肌りと

思いきや、胸乳堅く巻き締めた晒の布。

「あッ」

小さく山十郎が叫んだ時、その布を探りつ

ゝ解いた景勝の、手に触れた滑かさ。まろま

ろと碗を伏せたような乳房が二つ……。山十

郎は起き直つて突つ伏し景勝も跳ね起きてこ

の仕儀であつた。

きつと振り仰いだ山十郎の瞳にゆらめく涙

まこと、紅閨翠帳の裡、美女、露を含んで哀

艶の趣である。怒り発して天を衝く勢いの景

勝も、その凄艶さに打たれ、詰め寄つた膝の

上で拳を握つた。

「何ゆえ人の差図などでお仕え申しましよ

う。お疑い口惜しゆう、怨めしゆう存じ奉り

ます。妾が父は大谷刑部少輔が臣、刑部殿亡
びて後は長浜にて浪々の中に没し、三つの年
より母一人の身、十二の年には母も亡く、頼
つた男は思わぬ悪人、京六条に浮川竹の身と
なりました。お恥ずかしい……。」

こゝで瞳を伏せ、行燈の灯に涙が白い。

「何故男に生れなんだかと、それ許りが口惜

しく、毎日戯れ歌を口にして氣に染まぬ男に

身を任す。我が身にして我が身でない。男恋

しさに乳房が震う、と申しますが、妾のは厭

さに身の毛のよだつ思いの中で、よき大将有

らば男姿に身を変え、高名立てる戦場もがな

と折節願う所へ、我が君様の御上落」

これは半ば嘘、半ば実である。生れも、又

男になりたい一念も真実であつたが、遊女の

身にならぬ望みと知つていたのである。兼継

が、継嗣欲しさに価構わず求めて、探し当て

たのがこの女、六条に名高い才色兼備の遊女

その源氏名を浮舟と云つた。慶次はこんな奥

の奥まで知らず、たゞの稚小姓と思つて引立

役に廻つたのであつた。

「今宵小姓として閨のお召しは哀しい役目、

お断りもならず、お見頭しは恐しく存じなが

らお従い申しました。男姿の罪科は如何様に

も、なれど、恐れながら山十郎生れて初めて

真の殿御とお慕い申しました。せめて女と御承知の上は、一度のお情けあつて御成敗の程願ひ上げまする。」

如何様にもしてお心に叶うよう計りますと彼女は兼継に明言した。こゝで女と知られて景勝の情けを受けられねば、彼女の面目は丸潰れ、口惜しさは死んでも死に切れない。勝気な彼女の氣象として兼継に会わず顔はなかつた。その上、女には近付きもせぬ景勝に遊女としての習慣で男に不感的になつていた彼女が、却つて女らしさを呼びさまされた。景勝の愛撫に身を委ね切り、その情けを受ければ、斬られても悔いない程のマゾヒスティックな慕情であつた。

一方景勝は、一旦憤りは激しかつたが、凛々しい氣品の中に息づく、女の激しい慕情に氣付くと、これが男なればどのようにも愛せらるゝものを、と口惜しく思い始めた。而も男姿が幸してか、世の常の女どもには持つた事のない感情が起り、再度下腹の奥深く疼くような慾情を覚えた。

「許して取らす」言ひざま景勝は彼女の手を取つた。彼の肉体は、耐え耐えた余り力一杯張りきつていたのである。赤黒く合戦に鍛えた彼の手の中で、白く小さく軟い女の手は碎

けてしまひそうである。ゆつくりと夜具に就く暇もない。景勝の胸毛は彼女の乳房を擦り抱きすくめられた女の体が、折れそうにうねつた時、彼女は身内深く貫いて、えぐつて行くような感覚の流れに溺れた。景勝も亦、深く抱擁する肉の厚みを己れの肉体の一部に感じ、その抱擁が次第に力を加えて来るのに氣付く頃は、忘我の境地に達していた。

山十郎は翌日暇を賜つた。男なれば養子としたものを、と景勝は嘆息しながら米沢へ下つて行つたのである。

女から男へ、男から女へ、山十郎、実は左枝、東山の寓居に景勝を恋いながら泣き暮した。兼継から、又景勝から与えられた金子は不自由なく彼女の独り暮らしを営ませた。

間もなく体の変調に氣付いた彼女は、兼継に知らせた。一夜の情けに妊つたのである。

二年は直ぐ経過し、若君を安産した彼女の体が恢復する頃、米沢から迎えが来た。

下向して三日目、景勝は初児を見旁ら、左枝の館を訪れた。

夜になつて、景勝のための寢所が設けられ酔眼の景勝は、足許も怪しく襖を明けた。すると美しい稚小姓が座つていた。

「左枝、何としたこれは」

向うの部屋へ叫んだ時、此方を向いた小姓の唇が美しく綻び

「妾でございますのに」

それは左枝の男姿であつた。

景勝は、彼女の心根の可憐さに打たれながら、巾広い胸に抱き寄せた。

左枝は身を震わせて

「おなつかしゅうございました」

人目を憚つて打ち解け切らなかつた女心がその囁きに溢れ、景勝は、お菊の前との冷たい仲を思いながら、力限り左枝を抱き締め、静かに帯を解いてやるのだつた。今は思うまゝの姿態に戯れる豪勇の国守と、男装の美女とである。豊かな乳房の盛り上りの中心に、干葡萄のような乳首が色濃く他は、一年前と少しも変らぬ美しい女体であつた。

左枝の幸福の絶頂は、然し永くは続かなかつた。お菊の前の憎しみを受けたのである。

「誰の子やら判らぬものを、殿様もお人好しな、傾城遊女に誠のあるう筈もない。万事は直江の猿智恵、直江が左枝を切らねば、殿様の恥、直江こそお家の仇じや。」

ヒステリックな叫びは忽ち城内に知れ渡つた。

やはり男に生れなかつたが身の不幸、彼女

は又しても怨めしく思うのである。男なれば景勝の愛撫を何時何時までも受けて居れるものを、口惜しい、我が身は兎も角、腹を痛めた若君、重臣直江守の奇難を思うと、耐えられなかつた。この身一つを捨てれば、お菊の前の怒りも和ぐのではないかと、彼女は哀れな決心に導かれるのであつた。

今も変えぬ若衆鬘に櫛を通そうと、鏡の前に座つた。鏡に、襖際に掛けた景勝の寝衣が映つていた。振り返るともう耐えようもなく寝衣を抱き取り、「殿様」と呟いた時、涙が溢れ、体の奥深く哀しみが閃光のようにひらめいた。彼女の指は、何時しか潤いわたつて来た己れの身体の一部に滑り込み、臉を染めつゝ身を震わせるのであつた。一つ時女の情けを、独り進らせるのであつたが、一期の思出にと描いた幻は直ぐ消えた。

やがて静かに湯殿で身を洗い浄めた左枝は

始めて景勝に見えた思出の大振袖、肩衣袴に身を改めて文机に座つた。

若君と直江が身に代り、北の方様の御心静めまいらす。慕いまつる殿の深きお情け、男ならば末永きものを、女の身の果敢なさ次の世こそ男に生れ変らん一念こめて、せめて男のするよう、腹切つて先立ちまつる。大島小十郎。十七才。

遺書は短かつた。景勝が召抱えの日手ずから賜つた脇差の鞘を払い、作法通り双肌を脱いだ。振袖で刀の柄を巻いて握り、豊かに張つた下腹を撫でた。己が掌の触感に、ふと景勝の思出が蘇り、涙が又一滴、白い肌を濡らしたが、それを振り払うように、思うさま刃を脇腹に突立てた。女には稀な切腹の決心をしたのは、男の真似というよりも、最も女らしい臓器を含んだ下腹を開くことによつて、女らしさを捨て去る幻想に満足していたのか

も知れない。激痛が恍惚とした自虐を呼び、力を込めて臍の下を右へ掻き切つた時、血汐は雪のように白い下腹を紅に彩り、俯伏しながら彼女は息絶えて行つた。

北国の秋、夜は長く深い頃であつた。

夜明けと共に馳せつけた景勝は、冷たい彼女の頬に、髻の濃い頬を押し付け、仰臥させてある床の上から抱き上げて

「不憫や、次の世は男に生れ変れよ」

と呟いて、白く冴えた額に唇を接けた。

左枝の瞳は見開かれたまゝ、静かに澄んでいたが、景勝は、そつと撫で、眠らせた。

若君が定勝となり、兼継を母の仇と斬り棄てたのは、又後日の物語りである。

附記

(材を奥羽水慶軍記に取る。)

☆KK通信☆ 増頁断行、内容刷新

大好評！ 第三号出来（第一号は品切れ）

無代進呈（月極愛読者には毎号贈呈致します）

異色ある短篇読物と読者の便り満載

（見本一部 十円・半年分実費 百円）

◎吊り三態写真集◎

選りすぐつた代表的な吊り下げられた女のキヤビネ版、未発表品の逸品！

キヤビネ版 三枚一組 五百円（荷造送料共）

代理部へ

孤独な FANTASY

ある少年の夢想

芳野眉美

私はしやがみこんだ。

やがて窓に灯がつく。真白な便器が目にしみる。内の戸があいた可愛い二つの足が便器をまたぐ。着物をまくる布ずれの音がかすかに耳をまさぐる。しやがむ。膝にズロースがまるで白蛇の様にまきついている。

シヤアシヤアという激しい水の音。

白魚の様な指が三つ、やわらかな紙をつまみあげる。それだけしか見えない。

こわれた街の便所の中で一人の女がうごめいている。

女が出ると私は入った。

赤黒い血痕がべつたりへばりついている便器を見ていた。便器にたまつた尿を見ていた。それはたつぷり半分程入っていた。そして濃い香色な物が二つ三つ底に沈んでいた。強烈な女のおいをかいだ。

私はやにわに便器に顔を一つこむと、女が捨てたばかりのまるま

つた紙を取り出した。便器のかけらに咲いた一輪の花だった。それは白くやわらかくほのかなしめりがついていた。

私はそつと接吻した。

たえられない、何故こうも女の尿にひきつけられるのか。たえられない。

誰かたすけてくれー

神秘的な、超自然的な、形而上学的な、空想的夢想的。私は分離性々格者か。私は遠く夢を見ている。レンブラント。ベルナル。排泄物狂崇症はそれ程異常ではない。

「宇治拾遺」や「玉勝間」に書き残されている中古三十六歌仙の一人平貞文の話が、芥川の「好色」に、潤一郎の「乱菊物語」に各々脚色されている。本院の侍従に恋した風流子平中が恋しさのあまり侍従の尿尿をうばう話である。その絢爛たる筆は王朝文学の結晶である。

「好色」を読んで聞かせてほしいと雪子未亡人によばれたある夏の

夜の、雪子未亡人のあの恍惚として聞きほれる顔を。私は忘れられない。耽美的な世界におぼれる未亡人の爛熟しきつた肉体が、読み終った私に白蛇の様にまきついたあの夏の夜を。

「お廁におなり

突然私に命じた未亡人は着物をまくりあげると私を押し倒して私の上にしがみこんだ。

薄い香色の水がこんもりした繁をふるわして私の口に落下した。

その快感、私はごくくく呑んだ。暖かくて――

雪子未亡人は面白そうに腰を動かしては私の顔に目茶々に尿をひつかけた。もつとのみたい？

×

×

×

私はさまよう。

用便をしている女性が見たくてたまらず、便所へ身を

かくし、はては放尿に近ずきその尿流を口に入れる男。

小間使のスカートに這い込み、彼女の臀部へ顔をくつつけてにほいをかく男。

妓樓に上り便所の近くの部屋に泊る。別に女はよばず便所に女が入ると直談判に及び、糞をもらい受けハンケチにつつんで持ち帰り女の顔を思い浮かべながらなめる男。

ひまにあかして海岸を歩き廻り、若い婦人が苦しき岩蔭などで用を足すのを見計い、いそいでその跡へかけより尿にぬれた砂に顔をうずめる男。

あるいは――



誰かが私に話しかける。アンリ・ド・レニエのド・ブレオ氏の「色ざんげ」読んでごらんさない。

私の足は悪魔にみいられた様に女便所の戸の前に止つている。誰か知らない。その戸には小さな穴がいくつもあけられてある。そしてちよろちよろというせせらぎの様な水の音が私の耳をくすぐった私はそつと近寄つた。

×

×

×

狂人の様に私は未亡人の肉体を求めた。もう一度でいい、雪子未亡人の便器になりたかつた。召使の小女がにくらしかつた。私はしのびこんだ。

そこはトルコ風のベットだつた。古い屋敷の中に新しくたてられた新婚の寝室。未亡人はひとりでもだえていた。過ぎ去つた夢の事を。毛布をまるめしつかり股の間にはさみ、うつらうつらとまどろむ酔いしれた悩ましい姿態それは「愛の夢」フラナゴール。または可愛い少女と

「愛のまどろみ」が、未亡人の白い指がほのかにかいた少女の乳房をまさぐり、赤い唇は可愛い少女の口をおく。深い嘆息。そして安らかな寝息。クルーベ。

ベットの下で主人公を守る忠実な雄犬ムツシエは、ただならぬ主人のもだえに首をあげる。そして開かれた足につめたい鼻をくつつける。長い燃える様な舌はきちがいの様に未亡人の肢体をくねらせる。私の眼はいつしか壁の絵に釘づけになつた。

ミケランジェロ「レダ」。



激しい性の慾望。レダと戯れる美女は性の歡樂に耽溺する。
やがて――

雪子未亡人の美しい白い肉体が床の上に四つばいになる。膝をついて前身をひじでささえ両足を出来るだけひろげる。

――さあ、ムツシエ。

誰もいない。

私は未亡人の寢室に入った。そして未亡人のおいを求めて、ベットのの上に倒れた。ほんのりとなつかしい体臭をかきわけて、私は夢中になつて夜具に顔をうずめた。ふと、そこに一枚のズロースが脱ぎ捨てられてあるのに気づいた。美しいレースと美事な刺繍がほどこされてある。私はそつと手にとつた。そのやわらかな感触。まだなまあたにかかった。脱いだばかりなのだろうか。この桃色のズロースは大部よこれがひどかった。私はなめつてみた。馥郁と香ぐわしい香気が私をうつとりさせた。

――フフ

という笑い声に私はびつくりしてふりむいた。戸口に雪子未亡人が立つていた。

未亡人はほゝえんだ。目の粗い編物で出来ている黒のガウンは、未亡人の裸体を蔽うすべを知らなかった。

未亡人はやわらかい低い長椅子に身を滑りこませた。熊の皮で蔽われたその椅子は、沢山の座ぶとんや枕を以つて一つの立派な愛の



渠になつていた。身体をあとに沈めながら手を頭の下に組み合わせ仰向にねながら両足を少しひき寄せる。静かにまぶたを閉じると異様な表情が美しい顔に浮かぶ。ほゝえむが如く唇のまわりが動く。私はじつと失神した様につゝたつていた。しばらくして眼をあげて私を見る。肉のしまつた太腿を引きしめる。それを少し開きかげんにして、それから下のボタンをはずす。

こんもりしげつた草叢の間からしつとりぬれた一輪の可愛い赤い花が見える。未亡人の右手の指先が草の繁をかきわけて、赤い花びらをいじくる。

やがて甘い蜜がぼとりこぼれ落ちた。

――いかが？

未亡人の眼はうるんでいて。のみたい？

× × ×

――家宅侵入罪よ、

裸にされた私にこう云うと未亡人は私の手を縛つた。

あなたも認めるわね。

私はうなずいた。

未亡人は腕を背中にくりくりつけてしまうと楽しそうに私を柱にしばりつけた。

びしっ！鞭が私の背中に鳴つた。

身体中びくつと痙攣して、鞭はメスの様に肉に喰込んだ。

どのくらいつたか知らない。私は床の上のところがついていた。私が眼をあけると、気がついた？といふ未亡人の声がした。

私は顔をあげた。

「フフ、どう気持は？」

未亡人は足で私の髪をいじっていたが、やにわに両足で私の顔をふんずけた。色はほんのりと白く小さくほつそりとしており、骨の無いみたいにくにや／＼とし、ぼつてりした未亡人の足がようしやなくあばれまわる。

「なめる？」

私の口の中に足をつゝこみながら未亡人は笑う。なんでもなめるのは好きなんでしょう？フフ……

私は未亡人の激しい愛慾の下でわずかにうごめいているだけだった。

「おたち

ほゝえんではいるがあくまで冷酷な未亡人の声がきびしく響いた私は身を動かした。だが――

びしっ！つと鞭が臀部に打ち下された。

「おたち

未亡人は私の髪をつかむと、無理矢理私をひっぱっていった。

便所に電気がつけられた。

そして――

集 惑溺の愉悦

「この中にお入り
未亡人は便器を指
さした。壺は大きく
たまつた尿尿はもう

汲取口まで来ていた。

やにわに未亡人は私をつきおとした。

ぶぶぶぶと私の身体はもぐつた。こんなに深いとは思わなかった丁度首のところだとまった。

「気持ちいいだろう。今待つておいで、私のをのませてあげるから一瞬間暗くなつた。雪子未亡人がまたがつたのだ。不思議な快感の旋律が全身を駆けめぐつた。雪子未亡人の尿尿の中にいるんだからズロースをさげる。しやがむ。次の瞬間激しい尿流が私の顔をうちつける。すぐやむ。まだよ。という未亡人の声がする。これからもつとおいしいものをあげるから。くす／＼という笑い声、あかりが動く、位置を変えた様だ。むつちりと丸い未亡人のお尻が私の口の真上に来てゐる。なんて白いんだらう。そのうちにすう／＼と細いやわらかいものが落ちてくる。糞だ。私は甘美の絶頂に達した。私の鼻にぐんにやりかぶさる。大きく口をあけて次を待つ。すると、ゆつくり落ちて来た糞がうまく口に入つた。あまりにも大きいので口からあふれ頬におれまがつた。口からつばきが出てとけ始める。急に息が苦しくなつた。又一つ、又一つ。眼が見えなくなる。激しい陶酔――

破れた築地のほとりから老幼男女の排便をうかがい、その尿尿をたべる食糞餓鬼。それは不浄の食を沙門にあたえた人になるという「餓鬼草紙」――鎌倉時代の作。そして、糞尿地獄。または、沸尿地獄。やせおとろえて骨ばかりの身体に腹だけが妊婦の様にぶく





くふくれあがり、人糞をさがしてうろつきまわる餓鬼。

しかし、そこに私の求める世界がある。

ある夜、半ば狂った様な少女を見た。あの雪子未亡人の召使の少女だった。両手にしつかりと未亡人の愛用した寢室用の便器をかゝえて。あまりにも激しい同性愛が、未亡人の死によつて異常をきたしたものだつた。

少女はくるりとお尻をめくつて私に云つた。

「ねえ、なめてちょうだい。」

それは、未亡人が少女にあたえた毎日の仕事だつたのだ。

少女は毒害されている。

私も毒害された。

私はうろつきまわる。

いくら泣きさわごうとも、もだえ苦しもうとも、平中の様に、半死の腫から紫摩金の円光にとりかこまれて嬌然彼には、笑みかける侍従を、思い浮かべるだけだ。

その後、少女を見ない。

×

×

×

私はつかれた。

私はうろつきまわる。女の尿を求めて私は夢想する。

あまりにも未亡人の肉体を求めすぎた性の神秘が、私をこんなにさせた。単なる性器と排出器の錯覚ではない。未亡人を求めれば求



める程意識して未亡人にもてあそばされ、あぐくのは排泄物狂崇の味を教えられた。私は女を求める。私は女の前に頭をさげる。それは被虐症だ。私はうろつく。女の肌膚の前で立ち止る。ズロースをぬすもうかと考える。

私は今孤独だ。

私は思う。誰かよごれた肌膚でもズロースでも私にくれる人はいないかしら。いや、私を便器にしてくれる人はいないかと。

くだらない事だ。

私はうろつく。

私の足は、いつのまにか女便所の前に来ている。宿命か。私はもたえる。

激しい性慾の正当なはけ口をあやまつた私の罪なのだ。仕方あるまい。

×

×

×

私は便器を見ている。

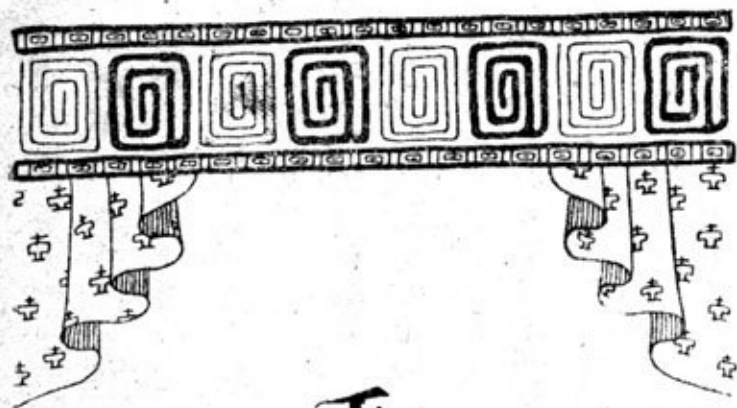
やはらかな紙が便器一面にひろがつている。一枚、二枚、三枚――そつととりのぞく。

真赤にぬれた棒状の紙が横たわっている。

そつと手にとる。ぐちゃぐちゃしてあたたかい。たつた今すませたばかりなのだ。

なめてみる。にがい。

赤い血がべつとり手ににじんだ。



毛のない女の物語

中國艶話

赤塚 与志 夫

これは百年程も昔のこと、羨ましいようなそれでいて世にも不思議な話しではあるので、

南京もずつと片隅といった所に、三十軒程も集まつた、あまり上等とは云えない軒並みがありました。住民は例によつて例に違わず

大工、駄菓子売り、はては日雇い人夫といった種々雑多の人間達で、それは云いかえるとどんな大きな町にも必ずその一端として附随して在るものゝつまりその日暮しの貧民街でありました。

その、とある一棟の三軒長屋に、王長栄という^{うらな}占いで口を糊する男が住んでいました。この物語りの発端はその長屋から始まるのですが、その王長栄の家の隣りは、もう随分永

く空いていて、独り者の王には、それがひどく淋しい思いをさせていました。右隣りの黄夫婦の姦しさに比べて、片隣りがまるで人気がないがらんどうでは、頭上でがんに怒鳴られ乍ら、下では足をすくわれるような果敢ない頼りなさがあつたのです。他人事と云えば云えますが、王にはそれがこたえるのでした。



ところがそんなところへ一人の若者が引越して来ました。名を銀舒伸と云つて、年は二十五、眉の秀でた素晴らしい美男子です。しかし、惜しむらくはそんな垢抜けのした風貌にも似ず、あまりてきぱきと体の動く方ではなさそうでした。少くとも王にはそう思えたのです。朝がおそく、夜がおそく、起きてる間は一日中でも机で何



かしているといった具合なのです。土台持つて来た机が大きすぎるのです。三坪程しかない部屋に、その机を置くと、もう立居にも不自由な位です。そのくせ、世帯道具といったら、鍋釜の類がたつた五、六点。他には何もないのです。

王は初め、そんな銀の様子を見て、この若者が、一体何をする男か、まるで見当が付きませんでした。しかし、気の置けないのは事実で、ものゝ十日も経たないうちに、すっかり仲良しになつてしまいました。朝晩の挨拶などは、拳大にも明いている壁の穴から気軽るに交した程なのです。

そしてある夜のことでした。王は持病の癩で七転八苦、全く死ぬような思いでありましたが

「小父さん、これ呑むとすぐになおるよ」

銀が壁の穴から手を差し出しました。見ると掌には五、六粒の黒い丸薬がのつています。王は、どうせそんなものではなおるような俺の病気か、とは思つたものの、今のその苦しみといつたらどうにもなりません。傍の薬缶を手にとると、その水を口にふくんで、丸薬は噛みもしないで一息にのみ込みました。するとどうでしょう。薬が腹におさまつたか

どうかと思ううちに、あんなに苦しかった腹痛が嘘のようになおつていたのです。王はそれで初めて銀を見直しました。

「有難う。凄く効き目の早い薬だね」

そう云い乍ら壁穴をのぞくと、銀はそんな言葉はまるで耳にもとめないように、一心に本を読み続けているのです。ランプの炎だけが時折りゆらりと揺れているだけなのです。

とにかく、後でわかつたのですが、銀はそんな年で、医師の免状を持つていたのでした試験は二十の時に受けて、たつた一度で合格したのです。全く天才といつていいのでしたその上、銀は絵も描けたし、詩も読めましたそしてそんな余技にさえ非凡の閃きがあつたのです。王はそんな銀を見ると

「成る程、何処か違つていゝとは思つていたよ」

と、独り言を云い乍ら、すっかり愉快になつたのです。

そして、或る日、戯けて云いました。

「どら儂があんたの運勢を占つて進ぜよう。きつと素晴らしい運勢を持つてゐるに違いない。うむ。矢張りそうだ。あんたは今に古今稀なる医学の大家になれる。しかし……これはどうだ、間違えば夭折の懸念がある」

王は眉をひそめました。

「どう間違えば若死にするんだね？」

銀が笑い乍らそう云いました。

「なあに、儂の卦はあまり当らないからね、そんなに心配することはないさ」

王は自分が云つたことを強いて打ち消すようにそう云いました。

「じゃ、医学の大家も怪しいな」

「いや、それは本当だよ。これだけは間違いない」

そして二人は、爆けたように笑いました。そんなことがあつてからも、銀は毎日、本を読んで暮していました。

ところが、一ト月も経つた頃でしようか。或る日、珍らしくも銀の家へ若い女が訪ねて来ました。丸ぼちやの顔も初いゝしく、笑顔の可愛い娘でした。

「さもあらん。いくら実直なようでも若いかな。好きな女の一人や二人はあると思つた」

王は独り言を云い乍ら、それでも矢張り何となく嬉しく思いました。銀の幸いが、自分の幸いのように思えるのです。娘はそんな喜びを胸一杯に抱えて来たような感じでした。そして一日中でも笑い転がっているのです。娘

の間は箸が落ちてもおかしいと云いますが、全くその通りだと王は思いました。澄んだ高い調子の声で笑っているその様子は、まるで十七八の小娘みたいです。ところがその様にして夕方になつたのですが、娘は一向に帰つて行くような気配は見せませんでした。はて？と王は思いました。男一人の住いなのに、今夜は泊つて行くのかな？……そう考えたのです。今が今まで処女だと思つていたのが、そうだとすると、満更の処女ではなさそうです。何れにしても、王は変なところに気が揉めて来しました。

そして夜になりました。娘は矢張り帰るような様子は見せません。さすが壁の穴には、



反古紙で栓を作つて押しこんでおきました。何しろ壁一重の隣りの部屋のことです。少し静かにしていると二人の話し声はよく聞こえます。王は何時の間にか耳を澄ましていました。勿論、二人は相愛の仲らしく、言葉もすつかり打解けていましたが、とりわけ娘は鼻にかゝつた甘い声で、しきりに銀へ何かをすゝめているのです。

「勉強は故郷でだつて出来るじゃありませんか。何もこんな所でなくつたつて……」

帰国をすゝめていたのだと王は思いました「でもね」

今度は銀の声です。

「矢張り、田舎よりは便利なんだよ。覗みたい本もすぐに手に入るし、それにわからないところが有ればおしえてくれる人も居るしさ」

「でも、妾、とても一人じゃ居れませんわ。淋しくつて……」

「それあ僕だつてそうさ。僕の方が君より、もつとそうなんだよ。しかし、僕は早く博士

になりたい。博士になれば君とも晴れて一緒に暮せる。つまり僕がこうしてこゝで勉強しているのは、一時も早く君と一緒に暮したいからなのさ……」

とにかくその様な甘つたるい会話でした。そしてその二人の睦言は、綿々と夜更けまで続きました。王は聞いていて、いゝ加減に草臥れて来しました。しかし、そんな話し声も何時か静かになつた時、

「もう、おそいから寝ようよ」

そんな言葉がぼつりと一つ聞えました。これからだ。そう思うと王の聴覚が異常に昂つて来しました。四十代の男、それも独り者では無理も有りません。それに銀の部屋には、ベッドが一つきりしかないのです。野暮な話ではありますが、一ヶ月振りで逢つた恋人同志が、一つのベッドに寝るのですから、当然、行わるべき事が行われるに違いない。

王はそう思いました。やがて、柔らかない衣ずれの音がして、着物を脱ぎにかかる気配です。そして、それもほんの暫くの間に始まりました。あのリズミカルなベッドのきしみが始めたのです。それから、あの細い泣き声さえも耳につき出したのです。初めは息を殺した吸り泣きが、後になると、もうどうにもならな

い、あの悩ましい女の泣き声なのです。王はそこで遂に蒲団を被つてしまいました。そのまゝ聞いていたら、それこそ頭の中が火になりそうに思つたからです。しかし、それからどの位経つていたのでしよう。何時の間にか眠りこんでいた王は、ふと眼を覚ましました娘の泣き声が違うのです。あの甘美な泣き声、何か悲しい調子に変わつてゐるのです。王はベッドから壁際に降りました。そして火箸の先で紙の栓をとつてみました。すると、どうでしょう。娘がベッドの上で、下半身をあられもない恰好に拡げてゐるではありませんか。そしてつと驚いたことには、銀がその間に体を入れて、娘の、あの神秘の場所へまざく／＼とランプを突きつけてゐるのです。そして、右手に持った剃刀で、その神秘の場所を覆つて柔かく養生した娘の若草を、するすると剃り落しているのです。そんな有様を見ては、王でなくとも、誰にしたつて驚くのは当り前です。銀は震える手を一心に動かしています。その表情はまるで悪鬼の様です。娘は堪えられない羞恥に、着物の袖で顔を覆つていますが、やがて、銀のその仕事も終つたようでした。銀は剃落したものを掌にのせて立ち上ると、今や全く変り果てた娘の股間

を、狂暴な眼付きで見詰め乍ら

「これでいゝ……」

と呟きました。すると、娘はよゝゝと泣き崩れたのですが、

「有難う。これで僕もつまらない嫉妬に苦しむことはないんだ。落ちついて勉強が出来る……」

銀が再びそう云いました。銀はそうすることによつて遠く離れた愛人の行動を監視しようとしたのです。成程、そうしておけば、女はそんな体で他に男を作ろうたつて、出来る筈がないのです。しかし、愛する男に敢えて、恥部の一端を預けた女の誠実こそ哀れでは有ります。それにひきかえ、銀のそれは何という男の自己主義エゴイズムでしょう。神が造つた女の神秘へ、狂暴にいどみかゝつた不逞さもさること乍ら、その神苑の草むらを一気に剃り除いてしまつた罪は空恐ろしい様にも思われます。

「何か、後で悪いことが起らねばいゝ……」

王はそう云い乍ら再び壁際に離れたのです。王に取つてそれは全く悪夢にも似た一夜ではありました。

〔二〕

翌日、女は朝早く帰つて行きましたが、王は、一寸出掛ける用事が有りまして、十日程銀には逢いませんでした。そして帰つて見て驚いたのです。銀の相貌が意外に險しく變つていたからなのです。恋しい愛人と、爛たれる様な一夜を過した憔悴しょうすいもあつたのでしようが銀の眼には、一種の狂つたような血の色があつたのでした。人は或る一種に限つて専念すると、往々にしてそんな事があるのですが、事実、銀はそうだつたのです。と、いうのはこんな径緯いきさつが有りしました。銀は女が帰つてからも、剃り落した娘の毛を片時たりとも肌から離しませんでした。それには、あまりにも切実な女の肉感があつたからです。それを出して眺める時は、更に如実な女の体臭さえ甦よみがえつて来たのです。銀は一日中でもそれを眺めていました。遂には掌に載せて愛撫までしました。その時でした。銀はふと、或る事実を発見しました。掌に載せたその毛の二三本が左右に撫でる指に沿つて片方へ沁ひり落ちたのです。そしてそれからも続いて沁ひり落ちるのは、只、その限られた一方のみだつたの

です。銀は天眼鏡を出して来ました。天眼鏡というのは、勿論あの拡大鏡のことですが、銀はその眼鏡で、たんねんにその毛の一本を観察し始めました。すると、驚くべし、あの神秘の場所に生えていたその毛の一本は、その眼鏡の向うに、実に奇妙な姿で写し出されたのでした。根元から先端まで、そしてその根元から先端へ向つて、無数の鋭い荊とげが生えているのです。只限られた方向へ落ちて行つた謎はそれで解けたのですが、銀はその時、更にある一事を思い出していました。陰毛に關して記した一冊の書籍を読んだことがあるように思つたからなのです。銀は早速立つて行つて、書棚を漁つていましたが、到々薄汚れた赤表紙の本を見付け出しました。そして頁をめくつて見たのですが、左の一文が眼に止りました。

陰毛、ソノ形態ニヨリ分類スレバ、凡ソ左の五種トナル。

即チ

- 一、天行毛
- 一、地行毛
- 一、直行毛
- 一、甲狀直行毛
- 一、乙狀直行毛

而シテ、コレガ性、極メテ微、且ツ細妙ニシテ人各々、コレヲ以ツテソノ運勢ヲ計ランカ、ソノ明ラカニシテ確カナルコト、正ニ暗夜ニアツテ、星ヲ見ルガ如シ。

そして、これは頁を追つて読んで行くと、実に微に入つた詳述がなされ、数字的にも幾何の誤謬さえない整然たるものでした。そして更に驚くべきことは、銀が戯れに占つた娘の過去がまるで掌を差すような正確さで出て来たことでした。娘とは幼馴染みの間柄でしたが、娘が十才の時母を失い、十二才の時叔母に別れたなど、銀が知れる限りの範囲内でそれは確かに違つてはいなかつたのです。

こゝに至つて、銀はその占い法に絶大な興味を覚えると同時に、今度はその一身の全貌を占つて見たのです。ところがです。売占者の言葉を借りて云うなら、その銀の将来には一群の暗雲在りと出たのでした。そして、それはその一命をもおびやかすだろうということです。それが事実とすれば実に容易ならざる事です。しかし、事実かも知れないのです。何よりもさつき占いの結果が、その的中して誤らぬのを証明しているのです。過去の些細な一茶飯事の類たぐひいまでがあんなに的確に証明されたのです。銀はばたきと本を閉じ

ました。人智で以つて人の将来を知ろうとする不逞の恐しさが、一瞬、身内を走るのを感じたからでした。

そして二三日経つた或る日でした。到々、密かにおそれていた事がやつて来たのです。娘の計報でした。娘はふとした感冒が元で、呆気なく一夜の中に不帰の客となつたのでした。

銀の心は、途端に重く沈みました。もはや恋人の姿は、胸にのみしか生きては来ないのです。相見ようとしても逢う術はなくなつたのです。銀はそれから悲歎に暮れる毎日を送りはじめましたが、王が帰つて来たのは丁度そんな時だつたのです。しかし、王はそんな銀を見ても、何とも慰め様もないようでした。

「そんなに力を落さなくてもさ、南京の街まちには凄くきれいな女が居るよ。代り云つては気に喰うまいが、早く、もつとききれいなお嫁さんを貰つて、あの娘さんのことは忘れるんだね」

そんなことも云つて見るのですが、銀は返事さえしないのです。銀にとつて、あの娘は矢張りあの娘只一人の存在だつたのです。あの娘に代つて、この胸を癒してくれる娘はあ

りやあしない。銀はそう思つて止みませんでした。王も、今では、そうまで思い詰めた銀には、遂にいうべき言葉もなくなつていました。しかし、

「毎日そうしていちや、体に毒だよ。時には賑やかな街へ出て見るのもいいかも知れない。歩いてる人はみんな幸福そうな顔をしてるよ。」

そう云つた王の言葉で、さすがに銀もその氣になつたようでした。

そしてそれから三日も経つてからでしょう。銀は久方振りに街へ出て見ました。成程行き交う人群れはみんな楽しそうです。その中に肩を並べて歩いている中に、銀もどうやら、心が軽くなつた様でした。そして芝居を見たり手品を見たり、それから甘いものも鰻腹食べて見ました。そうして遊んで廻ると一日も案外短いものです。銀は夕刻になつて、ようやく引き上げることになりました。

「少し疲れたな」

そう呟き乍ら帰つて行く足どりが遊び疲れた子供の様です。そして、街から村に入つた時でした。

ふと、行き交つた馬車の中から、美しい扇が一本、ぱたりと銀の前に落ちて来たのです

素晴らしい女持ちの扇なのです。銀は振り返つて声をかけました。

「扇が落ちたよ」

しかし、馬車は止りませんでした。それどころか、

「構わないからそのまま行つて……」

そんな言葉が耳に入つたのです。若い美しい女の声でしたが、突嗟に銀の心に激しい怒りがこみ上げました。

「待てつ」

一言、物申さねばおさまらないのです。馭者がその権幕に驚いて手綱を引きました。

馬車が止ると、

「どちらの方かは存じませんが、私は市内の梅杯町に住む銀舒伸と云う者です。折角の親切を迷惑ととられる理由はどういふのでしようか……」

そして、銀が更に続けて云おうとした時でした。垂れが静かに開いて、二十二三の美しい女が顔を出したのです。

「失礼致しました。高貴の御方と一緒にもの



ですから……。実は、この辺りは無頼の徒が多く、若しもの事でもあつたら、と懸念致しましてついあの様な失礼を申し上げました。どうぞ御許し下さいませ。

丁寧な言葉です。そう云われるとあんなに意気込んだのが恥かしい位です。

「いや、僕も、つい怒つちまつて……」

その時、その女の後から、もう一人の女が顔を出しました。

「どうぞお許し下さいませ」

その女も丁寧にあやまりました。しかし、銀は黙っていました。いや、黙っていたのではなく、声が出なかつたのです。その女の気高い美しさに、一瞬、心を打ち砕かれたので

す。銀は凝然とその女を見詰めました。天女の様な、ともいうべきか。雲の様に白く透つた肌、黒耀知の様な大きな瞳、血の様に鮮やかな唇、それに彫りの深い鼻すじ、召使らしい初めの女もさることながら、この女の美しさは全く銀を前後不覚にしたのでした。

「また後ほど改めて御礼に伺いますが、今日は急いでおりますから、これで失礼させていただきます。」

馭者の拾い上げた扇をとると、女は軽く頭を下げて垂れを下しました。そして馬車は走り出したのですが、銀はその馬車が見えなくなるまで、ぼんやりとそこに立っていました。

〔三〕

その夜。

銀の家の破れ戸をひそかに叩く音がしました。

「銀舒様様の御住いは、こちらで御座居ますか」

女の声です。

「どなた？」

「あの方、風間、馬車の中から御眼にかゝつ

た者で御座居ます」

「あゝあの時の方」

銀は飛び降りて行つて戸を開けました。

あの時の召使いだつたのです。

「晩く伺いまして……」

「いや、僕の方は構いませんが、わざわざ御出になる程のことでもありませんよ。あの位のこと……」

「いえ、あの扇はお嬢様が大変、大事にされていたもので御座居ます。運良く貴男の様な方に拾つていただいて、御嬢様もどの様にか御喜びで御座居ました。それに、今夜は是非御連れする様につて、云いつかつたものから……」

「えッ？」

銀は思わずそういゝました。

「お嬢様が直々に御礼を申し上げたいとおつしやるものですから……」

「いや、それにはおよびませんよ。それに、あなたがわざわざ御出で下さつただけで充分なんです」

しかし、女はしつこく、是非お出で下さるやうに、と中々帰りそうにはないのです。

「でも、今夜は失礼致します。又、折を見て御伺い致しましょう。」

そういう銀を見ると、女も遂にあきらめたのか

「では、致し方御座居ません。これはつまりないものですが、ほんの御礼のしるしで御座居ます。どうぞ御納め下さい」

そう云つて大きな菓子折を置いて帰つて行きました。

「どうだい。街へ出た効果はてきめん。おもいも懸けぬいゝ事があるだろう？」

見ると壁の穴から王の眼が笑つています。「何んだ、見ていたのか。是非来て呉れつて云つて弱つたよ。何故そういうのか知れないけど、不思議な女達だよ」

「何の不思議なことがあるもんか。君に惚れたのさ。どんな女だつて君を見た日にや、一目で惚れ込まずにや、おれないからね。それはそうといゝ物を貰つたね。俺にも呉れるんだろう？」

「うん喰べたけりや、みんな喰べてもいゝよ僕、街で喰べて来たからあまりほしくもないんだ」

「じゃ、貰うとするが、今の女、凄く別嬪だね。全くだい男にや生れたいものさ。そんな別嬪が向うからわざわざ菓子折りを下げてやつて来る。俺にもそんな方策が有りやあゝ」

んだが、この顔じや到底駄目だね」

「なに、小父さんも聞いていただろうけどあの女の主人というのが扇を落したのを、一寸教えてやつたからなのさ」

「うん、それにしても大したもんだ。俺達風情には、御礼だつて云やあしないよ。それでその御嬢さんてのは別嬪かい？」

「うん。今のに輪をかけた位……」

「ちぎしよう。全くもつて羨ましいね」

〔四〕

扱て話は愈々、これから本すじに入るのです。

女は翌晩もやつて来ました。それからその翌晩も……しかし、銀は仲々に、うん、とは返事をしませんでした。考えることがあつたからなのです。

そして或る晩。女は到々泣き出してしまいました。

「どうして貴男は妾の願いを御聞届け下さらないのでしょうか。これでは妾の立つ瀬が御座居ません。お嬢様は貴男に逢い度くて狂いそうだとおつしやいます。そのお嬢様の御気持ちも御察し下さつていいのではないのでしょうか」

うか。それに妾だつて……」

「あなただつて？」

「……」

「あなただつてどうなんですか？」

「お慕い致して居りますわ」

変なところで変なことになつたものです。

女は、お嬢様の気持ちをうつたえようとして自分の気持ちを洩らしてしまいました。銀だとして、そんな、女の気持ちはとうから察していたのです。しかし、それでも素知らぬ風でいたのは、実は女がそう云うのを待つていたからなのです。

「有難う。貴女がそう云つてくれたので僕も嬉しい。実は、僕も貴女を憎からず思つていたのです。お屋敷へ行くのも承知しました。しかし、それには、条件があります」

「どんなことでしょうか？妾に出来ることでしたら……」

「貴女が御気持ちを打ち明けて下さつたので僕も御願ひする勇氣が出て来ました。それは貴女が僕の自由になつてくれることです」

女は、ぼつと顔を赭らめてうなずきました。寧ろ、女の方が望んでいたことなのです。

「じゃ、承知してくれませんか？」

銀はもう一度、念を押しました。そして女

が羞恥の為に、よろ／＼とよろけそうになつたのをいきなり抱きしめたのです。

女は、もはや、ぐつたりと銀の胸の中に倒れこんだまゝです。銀は静かにベッドの方へ連れて行きました。そしてそこへ寝かした時女は細い声でいゝました。

「灯り、消して……」

しかし、銀にはその灯りこそ必要だつたのです。何故なら銀は女の陰毛が欲しかつたからなのです。一度体験したあの占い法が忘れられなかつたのです。

「僕、あなたの陰毛が欲しいのですよ」

「え？」

女が驚いて体を固くしました。

「僕、あなたの、絶対的な愛の証しがほしいのです。あなたが僕を愛するのだつたら、僕の前で堪えられない事は一つだつてない筈です。僕はそれが試したいのです」

女はそこでようやくうなずくと、静かに眼を閉じました。銀は灯りと剃刃を持つて来ました。しかし、さすがに羞恥に震え乍ら、女は更に顔を覆いました。

「いゝですね？」

銀が、女の腰の辺りに立つて云いました。すると、愛に勝る勇敢さが外にあるでしょう

か、女は静かに、そのボーズを取るのでした。銀は女の毛を剃落しました。銀がそうした仕事を終った時、女はさすがに泣き始めたのですが、銀にもそうした女は堪らなく愛しかつたのです。いきなりその上に覆い被さつて行きました。

銀と、その女はそうにして一時間ばかり同衾しました。勿論、その時の女は処女だったのですが、やがて起き出して帰つて行く時は、もはや処女でなくなつていたのも当り前の話では有りました。

それから二三日は、何故か女はやつて来ませんでした。矢張りあんなことをした直後では羞かしくつて、そう何時ものようにたやす

くはやつて来れないのが当り前なのではないか。銀はそう思つていました。ところがそう思つている矢先に、あの何時もの馬車の鈴の音がきこえて来たのです。書き忘れていましたが、女は銀の家へやつてくる時は必ず鈴がついた馬車でやつて来ていたのです。

「到々、来た」

銀の胸も躍りました。一度馴染んだその女の肉体が変に恋しくて堪らなかつたものです。鈴の音が止まりました。今度は歩いて来る女の足音です。そしてそれが戸口で止まつた時、銀は待ち構えたように戸を引き開けて女を抱き入れました。そして燃え上つた銀の情熱がいきなり女の体を抱き上げ、すぐにベッドへ運びました。そして、

そのまま、……しかしその時、女が云いました。

「お待ちになつて、その前にこれで」女が顔を覆つて差し出したのは、剃刃なのです。

「どうするの？」

銀はそう云い乍らもその時、ふと気がつい

たのです。成る程、あれから三日も経てば女の神秘の場所にもいくらかの毛が伸びている筈です。話が露骨になりますが、短かく伸びた毛程、その処置に困るものはないのです。それも、最も柔らかく、最も感覚の鋭敏な股間にあつては尙更です。おそらく歩くのにさえ、不自由を感じるでしょう。銀は早速、女をその姿に寝かして再び毛を剃り落しました。そして、前のように一時間程の同衾の後その馬車に乗つて女の屋敷へ行くことにしました。あまり断り続けるのもどうかと思つたからです。

馬車の中では、女がああ何かも捧げ尽した後の大胆さで、体を静かに投げかけて来ます。銀も、女の腰を抱き乍ら、しつとりとした重量感を楽しむのでした。そして快い馬車の動揺の中で女は云いました。これから行く屋敷は、外交官、白包順の家であること。お嬢様というのは、その一人娘で名を春蘭といふ、年は二十一であることなど。それからその春蘭は、大変氣質が優しいけれど、生れが生れだけに一面我儘な所があり、その我儘の故に自分は貴男との仲を取持つ様に命令されていることなど。

そんな話をきいている中に馬車は屋敷に着



いたようでした。こつそり事を運んでいる為めか、召使いの姿も見えませんが、銀はすぐに春蘭の部屋へ通されましたが、出て来た春蘭の喜びようは格別です。そして型のような御礼の言葉、そして山海の珍味といった御馳走が出されました。銀も葡萄酒などを飲んですつかり、いゝ気持ちになりました。

春蘭はそんな銀を見ると

「今夜は御泊りになつても宜敷いんでしょ？」鈴を振ると云うのはこんな声かと思われる涼しい声で云いました。

「いや、泊るのは困るんです」

「どうしてでしょう。じや暫くお休みになつてから……」

銀も少し酒の酔いで体が大儀になつていました。暫く休みたい気持ちはあつたのです。

春蘭が去つた後、再び出て来たあの女が、

「では、こちらへお出で下さい」

と云う後からついて行くと、長い廊下を幾つも曲り、女はつと、或る部屋の前で止まりました。

「こゝで御座居ます」

女が、扉を開けてくれました。見ると、部屋の中は婀娜めかしい調度で一杯です。一目で女の部屋だということがわかります。ラン

プの灯りも、赤い薄絹で柔かく落し、かぐわしい香料さえ漂っているのです。

部屋の片隅には桃色のカーテンが垂れ、そこにベッドが置かれてるように思われました。銀は用意された寝衣に着替えてそのカーテンを開きました。

「あつ」

銀は思わず息を吞みました。純白のベッドの上には、たつた今、別れたばかりの春蘭が一糸も纏わぬ全裸の姿で横たわつていたので、何という神々しい美しさ。さすがの銀もその裸体を見て棒の様に立ちすくみました。

大理石の様に艶やかな白い肌。それに、銀が一瞬眩惑されたのは、二つの小山のような乳房だつたのです。それは、胸というよりもその胸の代りに乳房があるといった方がいゝかも知れません。胸一杯に隆起した二つの白い小山なのです。そして春蘭が身動きする度にその二つの小山はゆらりと揺れるのです。春蘭の体に圧倒されたのはそれだけではありません。括れた様な細い腹部、それでいて大き過ぎる程に偉大な腰。全く造化の神の傑作と思われまゝ。そしてその春蘭は、その体を除々に大胆なポーズに開いて行くのです。全べて、既に仕組まれた事であることを銀はそ

の時覚りました。もはや尻込みする時ではなかつたのです。銀はカーテンを閉じると、そのまゝ春蘭の上に倒れ込みました。

〔五〕

翌晩、例の馬車が迎えにやつて来ました。

女はさすがに乗つては居ませんでした。銀は待ち構えていた様にその馬車に乗りました。そして馬車が屋敷に着くと、待ち焦れていた春蘭は、いきなり寝室へ誘うのでした。そして何というそれは激しい豹変振りでしょう。昨夜は、女になるためにあのように手古ずらせた春蘭でしたが、今夜はそれがまるで反対なのです。春蘭はすつかり体を濡らして、夜明けまでも銀を離そうとはしなかつたのです。

それから銀は毎夜のように迎えの馬車に乗つて出掛けました。何もかも忘れてしまつて、頭に在るものは只、春蘭の肉体のみなのです。それに四日目毎には、あの女も剃刃を持つてやつて来るのです。女が来れば必然、同衾するし、近頃では銀の顔にも、どうやら憔悴の色が見えて来ました。

隣家の王はそんな銀を見ると或る日、云い

ました。

「近頃毎晩出掛ける様だが、少しは家に居たらどうだね？大分疲れているようじやないか」

しかし、銀はそんな言葉には耳も借さないのです。相変らず出掛けて行くし、女が来れば同食し、性の営みを続けました。

「悪いことは云わない。君の顔には死相が表われて来たよ」

王はそんなことも云いました、しかし、銀は更にきゝ入れる様な様子も見せません。それどころか、近頃では春蘭の体の毛をその度毎に抜いて行くのに夢中になつていたのでした。

と、云うのは、何とおかしな話では有りますが、銀は、女の体の、あるべき所に毛のあることが奇妙に物足りない気がして来たのです。剃落してしまつた後の形が、その女によつてそれぞれ異つてゐるのにも異常な興味を覚えたのですが、春蘭のそれは殊の外に素晴らしく思われたからなのです。初めは春蘭がクライマックスの時、思わず抜いてしまつた

のですが、春蘭は今ではそれを自ら望む様になつていたので。そうすることが堪らなく快よい刺戟となるからなのです。

銀にしても、立木が五六本づつなくなつて山肌が見えて来るあの感覚が堪らなかつたのでした。そして今では春蘭のそれも、その半ば以上が失くなつてゐるのでした。銀は春蘭のそうしたものを見ると、震える様な戦慄を覚えるのです。しかし、春蘭のそれが、だん／＼山肌を表わして行くにつれ、銀の眼が落ちくぼんで行くのも眼に見えて来ました。王が見ると、それが死相だと思われたのでしよう。そして銀は、もはや帰つて来ない晩さえ続く様になりました。事実春蘭の寝室で、昼夜の別なく同食してゐるのでした。そして或る晩のことでした。春蘭の部屋から一夜中、あの天国に遊ぶ声が洩れてゐました。嘗つてなかつた甘美な声では有りませんでした。夜が明けてから女が扉を叩いて見ました。昨夜は召使いの女達の部屋まで、それが聞えたとし、今朝はそれに比べて静かすぎる程に静まりかえつてゐるのが不審に思えたからなの

です。部屋の中からは何の音も聞えませんが、召使いの女が思い切つて扉を開けて見ましたすると、どうでしょう。ベッドの上には全裸の銀と春蘭の体が一分の隙もない様にびつたりと抱き合つて、そのまゝ息を引取つていたのでした。正に天国に遊ぶ、そのまゝの甘美な表情と姿だつたのです。女は静かにカーテンを閉じました。あまりにも美しい二人の姿に胸を打たれたからなのです。

話はこれで終わりますが、一言附記しますと春蘭の神秘の場所には、丁度、その時、一木もなくなつていたのでした。

(完)

◎読者の告白文を募る◎

- 一、夫婦生活を初め男女の性生活に於ける異色ある告白文
- 一、用紙枚数は問いません。
- 一、誌上匿名は自由です。
- 一、文章の巧拙は問いません。
- 一、採用篇には薄謝を呈します。

(編集部)

ヨ ニ シ タ ス
女性器崇拜

雨 森 順 一

女性の性器を印度人はヨニと呼ぶ。アジア地方の僻地では今尚このヨニの崇拜が盛んでこれらの信徒をヨニシタスという。

ヨニとはサンスクリット語で、陰門、子宮を云い現わした言葉である。

古代印度人の信仰によれば、この地上に男女の別が生じたのは、最高の創造主の体が二つに別れて、ブラーマと、自然とを型造つた。そして、ブラーマから全男性が生れ、自然から全女性が生れたと解している。殊に、女性には自然に於ける現実の現われとせられ、崇拜すべきものであるとされた。

我々は先ず出産及び創造力の礼拝からはじめて、ヨニの象徴へと話をすゝめてゆこう。

シエリマンの発見したヨニの一偶像はトロイ市の廢墟から出たものであるが、年代から云えば恐らく四千年以前の作品で、この三角形の表徴の中には卍字が深く彫まれている。而もこの三角形はイシュータ女神の陰毛を表徴するように巻毛で装われている。

これと同様な方式の巻毛のものは、三万年以上も昔に住んでいた南ヨーロッパの洞穴人種の彫物の中に発見された。

男子が自分の妻の生殖器を最も神聖に、又絶対的所有として価値あらしめたように、陰阜の女性三角形は人生のすべてに根ざす、神聖、純潔、貞節、真実の表徴とされたのである。

エジプトの廢墟寺院の女神の像は、皆この意味に於て用いられたものである。

ノスチツ教、初代キリスト教時代に於ては種々の呪文が使用せられ、その中でも最も流行したのは「アブラ・カタブ呪文」である。

これはヘブル語の父子の聖靈によつたものらしいが、これを金板に彫刻しておく、災禍除けになると信ぜられた。而も、これは女性三角形に並べられることになつていた。

そして、この三角形の表徴の下向きの頂きが切裂いてあるのは、陰毛を除いた陰阜で、これは婦人がヨニを礼拝する時、聖壇台に両足をのびし拡げて坐つた時の状態だと云われている。又、東洋の或る種族では陰毛を剃れたり、又は抜いたり、脱毛法を施しているものもある。けれども、妙齡の女になつて、少女の陰唇は次第に拡がり、乳房はふくらみ、陰毛が麗わしく密生することは、それが多ければ多い程女としての美が増すものゝ如く考

えられ、じつとそのまゝにしておく種族もあった。

エジプトの或る寺院の壁画には、主婦が透明な衣を着て、陰毛三角型を明かに見せているところが書いてある。又、エジプト女が、香料で陰毛を髣らせ、つとめて人の注意を惹こうと骨折つた時代もあった。

古代エジプトとユカタンは、陰毛のすぐれて濃厚なものは肉体的魔力があると考えていたので、男子は毛の多いのを愛し、又巻毛を愛し、そして陰毛のことをブッシー（小猫）と呼んでこれを愛玩した。

二

一般の女性に性的愛撫が必要である如く、この性的愛撫の一つの性的技巧として、ヨニいじりが早くより行われたことは事実である。

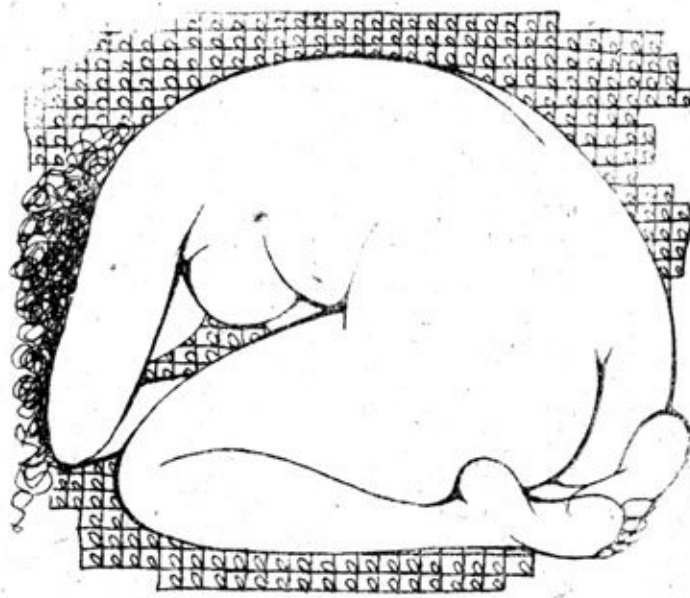
又、最もよき方法として乳房のいじりも、女を興奮させることは、古代の人々たちも夙にこれを知つていた。そしてこのいじりに関してはソロモンの頃である雅歌第五章四節に「我愛する者我戸の穴より手を入れしかば、我心彼の為に従えり」と花嫁の唱つていることによつても想像することが出来る。

然し、若い少女の陰毛のない陰阜はこれ又実に美しいものである。

現代の美術家は、陰毛も唇裂も図や彫刻に現わさないが、これは其筋の圧迫に原因しているもので、古代の美術家は、完備した女性に光榮があるとし、又尊敬した。古代フェニキア人の多産の女イシタル巻毛の意匠は、一寸風変りで誠に珍重すべきものであるが、その数は非常に少く、その最もオリジナルなものは、象牙製の極く小さなものが英国の美術館にある。

ギリシヤ、ローマ人の生理的並びに乱交的愛の女神である催情神即ちヴィナスは常に裸体で、その容姿は素晴らしく美しく豊かなものであるが、その中でも、注目に価するのは婦人の魅力の中心とも云うべきその乳房と陰部とである。

このヴィナス女神を祀つた寺院に於ては、ヴィナス女神を礼拝する一つの儀式として、男女は互いに乱淫する。ヴィナスの本名はウリエネスである。英語のヴェネーレシヨンの語源はこゝから発しており、崇拜とか尊敬と



かを意味する言葉に止まつているが、煎じ詰めると乱交乱淫を崇拜する意味にもなる。

然るに、この女性崇拜、その本来の尊敬的崇拜の形を放逸な方向へ導き、又、極端な多淫に奔らせて了つた。旧約聖書もそのよき例証を示してくれる。モーゼはその書民数記略第三十一章十七節に次のような命令をイスラエル人に出している。

「然らばこの子等の中の男の子を尽く殺しまた男と寝て男しれる婦人を尽く殺」と。

また列王記略十五章十六節に「その後メナヘルザよりいたりてテファとその中にあるところの者およびその周囲の地を撃てり。

即ちかれら己がために開くことをせざりしかばこれを撃ちてその中孕婦を尽く刳剔したり」と。

ユダヤ予言者ホゼアはサマリヤ人に対して云つてゐる。

「サマリヤには人家絶えん。其の幼児は千々に裂かれ、子供を連れたる婦は凡て姦さるべ

し」(ホビア書第八章十節)

これ等はアジアの未開国に於ける交戦国の特色である。

第一次歐洲大戰の起らぬ一寸前に起つたトルコがアルメニア人を虐殺した時、妊婦を捕えて、その胎児を男か女かと賭事をして勝負を争つては妊婦を裂いて胎児をとり出したというものである。

楽器の中にあるシストラムは、これは古代エジプトの寺院で用いたものであつて、ヨニに錠又は横棒をかけた表徴である。少女の陰阜に錠をかけて処女の母として崇拜される女神イシスが、この処女貞操のシンボルであるシストラムを捧げているところがある。

このヨニに棒をさし、若しくは錠をかけ、それが処女であり、又、貞操を表わしたのはその原因としては可なり古い時代に、サンダニに於て行われたもので、今日に至るもなおこの習慣は伝つてゐる。又、十字軍の戦に出征した騎士たちが、家庭に残した妻の貞操を氣使つて、この貞操帯を用いたことは事実である。

三

アフリカに於ては、婦人は一つの動産とし

て取扱われ、一種の家畜のように売買されているが、処女は最も高価なものとされている。だから、アフリカのある処では、父がその娘に嫁たるべきを示すために、その陰唇へ鉄環を通し、売約済となるまでは処女としておくことが屢々ある。

夫となつたものがこの環を切り、それに代えて、夫だけでもつてゐる錠つきの錠をそこにはめて貞操を守らせるのである。この貞操帯は今も尙歐洲の或る地方では盛んに行われてゐるという事である。

古代諸宗教は、主として自然現象である性慾の説明であるから、自然界の多くは、この完教思想を以て説明せられたのである。例えばギリシヤ、ローマでは、オセアヌスは父であり、ガエア又はテラは母、河はその子たちである。

洞穴、小洞、その他これに類したものはその表現であつた。アーチ、墓の入口などは悉くヨニの象徴である。アジア風の神社に於ては、会衆席は女性を現わす楕円形であり、屋根の尖閣を男性の表徴としてゐる。

又、各種の舟及び櫃は女性を表わすもので中でも契約の櫃はその代表的なものと云えよう。

昔は多くの洞穴は皆神聖なるものとされ、この考えは今日に至るも尙止まない。例えばインドに於けるウメルナス○洞穴などはまさしくそれで、こゝは巡礼の靈場となつており野牛が礼拝される。

又、教会の窓、壁龕なども、多くヨニの形を示している。完教彫刻の建築として、屢々休憩室がこれらのもので飾られているのは、われ／＼は到る所で発見することが出来る。或る完教に於ては「再生せられたるもの」として、又はその罪を洗い浄めるシムボルとして、ヨニの形をしたアーチを潜らせる儀礼がある。

又、ヨニの表徴として貝が使用せられることも普通である。ヴィナスはしばしば貝と一緒に表わされる。元来、彼女は海の泡沫から生れたものゝことを表わすものであるが、表現法がたりない所があるので、美術上では貝をもつて強く海を表現しようとするのである。

ヴィナスは生理的恋愛の女神であるから、貝を用いたことは敢て説明するまでもないがこれも亦ヨニの表徴である。

ローマ人が寺院にゆくと、男神女神の前にゆくまえに、先ず第一に聖水にて手又は指を

洗う。これは日本の習慣と甚だ似通っている。それから神々を讃美して接吻を神に投げ或は像に、或は足に接吻するのである。この讃美の方法は現今カトリック教会でも行われている。聖水は多く貝類状の洗礼盤その他のものに盛られ、又時には天使がこの貝を持っているところのものを使用する。

ヒンズー族にはヨニ

の女神がある。二つ共にヨニを拝させるために作られたものがある。

一方のヨニは審美的であるが、他方のヨニは菱形として変形的表徴を取っている。この女神の名をマヤデヴというのである。此の表徴



は生命の門、即ちヨニ崇拜の目的に作られたものである。これは印度ボンベイのジャンナ

も洞穴居人の古ダゴダにある。ホルスがその母イシスを礼拝しているところで、イシスはヨニによつて表徴されている。

現代教会美術に於て聖母、キリスト、聖徒等の全像を包囲する仰形、即ち女陰形の後光を用いることがある。或るものは魚形である

という者もある。魚はギリシヤ語で「イクスウス」という。これがイエス・神の子救世主のギリシヤ文字の頭を組合せたものであるという者がある。

故にキリスト教美術に於て魚は神聖なものとして見られていた。ブラーマ教に於ては、ヴィシ又神が魚の形の化身となつてこの世を救う

のであると説いている

両尖端楕円形はヨニの表徴であるとして最もよく知られているところである。公衆娯楽場、便所等礼拝的な使用している。これは単に「女」だけを意味するものである。なぜなれば女の骨盤がよ

りはまるからである。この再尖端楕円形にすつか

四

古代ローマに於て貞操心のないもの、或は売娼婦等は「クヌヌス」から由来したのが即ち下層社会に用いられる「カント」なる語である。これに反して尊敬すべき婦人をスカト

トと呼んでいる。であるから、古代宗教に於て、最も人格者の婦人の姿即ちヨニは完全なる婦人の表徴である。従つて、決して悪い淫乱な婦人の表徴ではなかつたのである。けれども道徳心厚い婦人、又は女神として、又は自分の母イシスを礼拝するハーボクラット又はホルス以上のものを表徴するとして用いられるようになったのである。

又時としては、この形は子宮を表わす場合がある。一五二四年にヴェニス発行の而も異端問所で公認された「祝福せられたる処女ロザリ」という本の中に「潔白なる妊辱」という挿画があるが、この中にはヨニの形で表わされている。

今もコロニエにある紀元一四〇〇年代作の聖像画にマリアとエリサベツの会見のところがある。二人は妊辱すべきことを天使から聞いたという聖書に出ている。そこで、この二人の腹部には両尖端楕円形に子宮を表わし、その中にエリサベツの聖バプテスマのヨハネ、マリアのそれにキリストがいる。ヨハネはキリストに向つて手を合せて礼拝しているところを描いたものである。

イエスは「我は生命の門なり」とか、「我は復活なり、生命なり」と云つた。ラファエ

ロとベルジノの筆に、復活はキリストが永生の「永遠の生命の門ヨニ」の中にいるところがある。

又一つの画に悪魔が赤ン坊に病気をさせて殺そうとしている。その母はマリアに祈つてゐる。マリアは生命の戸中に現われて、悪魔の計画を無効ならせつゝある。この画は二ツコロ・アルノの作で一五〇〇年のものである。

アメリカのイーストレイク・モルモン教の本山は楕円形である。又昔シェバの女王として有名であるシェバの地方の或る寺院は皆楕円形である。イスタ女神は皆この形とせられて崇拜される。

南アラビアのイエメンに於ける寺院はイスタ女神を拝む意味で長楕円にしてある。これは円形の菱形である。このイエメンには多くの寺院があるけれども、此處で説かれた宗教に就ては殆んど知られない。然しアスターはこの日の神、シンは月の神、而してヤスターの母は太陽そのものであるらしい。

ラスキンはこのダンブレイン・アイベの窓を示して英国に於ける最も美しい窓であると称している。これは陰門の画と比較してみると面白い対照である。ヨニの各部が明白に表

現せられている。

又、或る中世紀の教会には玄関の戸アーチの要石に写實的なヨニが彫まれたものがある。或る時代に雌駱駝が死んだ時、そのヨニは切離されて、悪魔払いに、又は幸福のために——とその小屋の出入口に釘けられたものである。後に至つて馬蹄がこの意味に使用されるようになった。これは実物ヨニを使用するよりも優美である。

ヨニが教会、家、又は建築物に作られたことも勿論である。

更に、我々は女性崇拜の他の形式で普通習慣とは云い難いけれども、広く行われるものへと筆を進めてゆこう。それは、即ち多情の男子がその口唇又は舌を以て、その性慾相手の体を舐める愛の表現に就てである。

唇で異性を愛撫する方法は、動物間では最もよく目撃するところである。

例えば牝牛が仔牛を舐め、犬が仔犬を舐め交尾の際に牡が牝局部を舐めることは誰でもこれを知っている。エスキモー人はあの寒い地方で水浴するが、丁度、猫のように母親がその子を舐めてやるといふことである。

婦人の身体のいずこを問はず、舐めたり接吻したりすることは、性慾愛撫として最も適

当なものであることは、凡ゆる性慾学者が説いている。

インドはシェバとサクチ・カリを表わすとして、男根及び陰門の組合せたものが数百万の信者によつて崇拜され、彼等がこの女性崇拜の儀式として美少女の裸体の舞踊娘をヨニ女神カリの御臨在として置かれる。この少女の実物の陰具は僧侶によつて礼拝される。その時、少女は聖壇で両脚を拡げて愛しきヨニを見せるのである。

すると僧侶はこのヨニに敬々しく最敬礼をして接吻する。そして、アルカ(ヨニの形をした盃)に酒を入れて捧げ、ヨニに触れさせて参会者に分配するのであるが、ヨニに触れたものはすべて清浄なものとされている。

又メキシコのビユイウイロボチ神の礼拝として、喰べる菓子には、中欧で聖ならしめた女陰形の菓子をもつてする。この式では僧が経文を唱えたと娘たちは陰部を露わしてエジプトの「腹ダンス」に似たような踊りをする。エジプト寺院で発見されたものを見ると、奇妙な柱状物は、開花した蓮花である。蓮花は男子の表象である。そして両側にある蕾は睾丸を意味するもので、動物が舌を出して花と柱との間にある性器を舐めようとしている

ところがある。

エジプトの寺院にあるものでブータ神がシストルムを拝しているが、シストルムは処女又は貞操を意味したもの。

「開貝（男根）を手淫しながら出して、これはヨニに対して舐める状態——即ち信仰の熱心を現したものだという」

シリアには奇妙な宗派があつて、それは「ネザイレス」という。キリスト教にアジアの生殖器崇拜を掲ぎ混ぜたようなものであるが彼等は神を拝するけれども、キリストは一言者に過ぎないとしている。旧約聖書の予言者、新約聖書の聖者マリアへ祈願するが、その祭典の中でも最も振つてゐるのは子宮祭である。この祭日に於て、多くのものは最も厳肅に集り、婦人は丸裸になつて前へ進む。男子は最敬礼のもとに婦人の股を抱いて謙遜に又熱心にその下腹部及び陰部に接吻するのである。この宗儀から彼等は子宮崇拜と呼ばれてゐる。

現にシカゴの博物館にあるが、アラスカにあつたトテム柱は両側に開いたのが女の脚である。なぜなれば、この脚先にヨニと乳尻の表徴がつけられているからである。

この舐める方法は太平洋沿岸の諸島はグリ

ーランドの氷山界からインドの果まで知られない地はない。

「アゼチック太陽」又は曆石というものがあつて、メキシコの「キソキカルコ」の記念碑に彫刻されたものであつて、これは女又は女性崇拜を意味する。この彫刻は十字架形になされてゐる。

或る著述家は云つた「メキシコの記念碑の凡ては、地に注がれた光りと熱とを表わすために、突き出した舌で表示するものである」と。

さて、次に神々の交合象徴にまで筆をすゝめて見よう。

五

更に吾々は神々の性的結合の象徴に就てのべよう。事実、各国の凡ての神々は悉くその相手を所有していると云つても過言ではあるまい。

印度のブラーマとマヤを始め、シヴァとカリ。又エジプトのオシリスとイシス、ブータ

とバシユト。それからギリシヤ、ローマに於けるジュピターとジュノー。ヴルカンとヴァイナスなどがそれである。

キリスト教初代に於けるノスチック派。この宗旨は各自の本能的情熱に従うのが男子の第一義務として、その祭典には男女は真暗な一室に丸裸のまま集まつて、男子は女子を誰彼の区別なく押倒して交接するのである。従つて血族、親子の交合ともなつたが、宗教なるが故に許されていたというのである。



此のノスチックの宗派章は男子の三角と女子の三角との交合してゐる図があるが、此の

形はしばしば煉金術者が用ゐる。

又種々な恋愛として、時には三角形の二個の石又は木片等をもつて互いに組合せなどして作られたものもある。

又ユカタン及び中央アメリカの有史以前のエセテイツク寺院の廢墟にもこの表徴がある。即ちユカタンのウクスマルにて発見されたものである。それから又メキシコのエゼテツ

ク寺院にも亦発見されている。

スカンデナヴィアの神話では、雷を示すにこの紋章を用いている。之はトールの槌と呼ばれているが、然しこれは矢張り男根の表徴である。これでもつて新婚夫婦を祝福し、神聖なものとするためにトール神が用いるものであると皆信じていた。

その他性慾結合の写實的表徴は、中世紀のフランスは勿論のこと、英国等に於てもキリスト教に用いられ、教会の入口にはアダムとイブの普通裸体にて現わし、又交合の所を現わしたのも中々多い。

ドイツのヒンデシヤイムの聖ミハエル教会

◎読者通信欄について

本誌並にKK通信誌上に掲載しました読者通信投稿者の住所氏名等は従来切手封入の照会者に対して御返事申し上げ、又切手貼布の封筒を同封の私信は投稿者に対し、各々転送を致しておりましたが、今回左記の通り規定を改めましたので御承知おき下さい。

記

一、愛読者相互間の文通翰旋は一切本誌を通じて行います。本誌に掲載不適のものは

の天井には、小羔乳指として頗る淫猥なフアン・アイクの画がある。

現今、メキシコに於ては種々の春画が密売されているが、これはその秘密を青年男女に教えるものとして使用されている。

又、エジプト女神マウトの象徴は男根と陰部の組合——性慾的交接の「アングフ」の表象である。

インドには多くの生殖器を有する聖所があるが、その多くは女陰の中に男根のあるもので、云うまでもなく交合の状態であるが、男根を表わすには必ず女陰と交合せるものを神体としたものである。

KK通信上に掲載いたします。

一、投稿者に関する御問合せ及び私信の転送は当分の間郵券封入の如何に拘らず一切中止致します。

一、私信の交流翰旋はKK通信会員及び直接購読者について別途に考慮いたしますが、詳細はKK通信誌上に発表致します。

一、本号発行前に到達された文書は一応全部転送済であります。

(読者通信係)

又、現今盛んに一つの儀式として行われている指輪は、装飾的と思つていゝものが多いが、これは実は性交の表徴である。

パリにあるラファエロ作「処女マリアの結婚」というのがある。これは女の手に夫たるべき男、即ちヨセフが指輪をはめさせている。これは明かに交合を意味するものである。尙僧のつけた衣には僧の男根の上の処に丁字形の十字架を現わして一層この氣分を明白にするが、これは即ち処女膜を破る意味である。

(完)

【読者通信】

投稿歓迎、文通翰旋

小生は身長五尺四寸、体重十三貫八百、胸囲八四釐、昭和三年六月生の青年です。学歴は工業学校の応用化学科卒業、只今或る工業会社に勤めて居ります。小生は常々マゾの傾向のある独身の女性と文通したいと願つております。そういった女性の方に満足を与える自信を持つて居ります。本名其の他詳細は編集部に届けてありますが、誌上にて御返事下さる様願います。

宇治山田市 H・K生

女性の腔に関する

奇怪な報告

村田生

直腸で造った腔

一婦人が直腸によつて三十五年間糞尿を通じ、尙又十一年間同じく直腸を通して月経があつたと云うのである。此の婦人が三十四才の時即ち一八七二年の春彼女の夫のチブスの看病をやつていて、遂に彼女自身も夫の病気に感染したのであつた。そして病臥四週間の内に小陰唇が脱落し、又両便が腔からもれるに至つた。そこで同年病院に入り、数回の整形手術を行つて瘻を治療しようとしたが不成功に終つた。そこで一八七五年キーン氏は其の穴の聞いた瘻部を取り除いて其代り直腸を移植して完全に其の腔の瘻部を治癒させようとした。手術は成功した。

彼女はそれ迄看護婦をやつていて殆んど四年も勤めていたのであつたが、彼女の働く環境が陰気なせい、余り生き／＼としていなかった。しかし此の手術を受けてから彼女は急に生き／＼として社会的に復活

したようであつた。

処がそれから三十年の後、一八八八年の十二月に今度は小水が断続的に出るようになったと述べて来たのであつた。処が小腸で造つた腔の瘻管が非常に縮まつて僅かに指を入れるに足る位になつていた。それから其の腔内には一つの結石が生じて丁度球弁のようになっていた。そして此の結石の爲めに尿が挙続的となつてゐる事が解つた。其の結石は容易に粉碎する事が出来調べて見ると、それは糞便の小塊の上に尿の中の塩分が推積して出来たものであつた。そこで再び治療を施して五年目の五月即ち一九一一年五月廿四日に死んだと云う事である。

Annals of surgery, June, 1914 vol.69)

二つの腔の持主

患者は印度の婦人で四度目の流産に際して博士の来診を求めたのである。患者の云う処によると、出産に当り友人の印度婦人

をたのんだのであるが、どうしても胎児を分娩する事が出来ないのがある。が検査してみると三ヶ月半位だつた胎児が股にはさまつていて指に臍帯が触れたのである、そして其の臍帯の処に胎盤のようなものが手に触れた。処がその臍帯の中央の処が腔内に於て二つに分れてひつか／＼つてゐるのである。扱て胎児をひっぱり出そうとして局部に指を入れて見た処が一個の子宮頸とそして子宮口が指に触れたのである。博士は不思議なので、腔壁をしつかりと指で圧し乍ら子宮口の処で其の指を曲げて見ると明かに恰も腔内に膜があるかのようなのである。初めて二重腔である事を発見した。で先ず胎児を引っぱり出して置いて二週間後に更によく検査した処、今度は一見して、腔が二つある事が明瞭になつたのみならず其の形に於ても同一であり、且つ何れもが使用にたえる事が分つたのである。前の様に一方の腔から指を捜入すると、他の一方に指が表れた。即ち腔の中央を仕切つてゐる隔膜は指の三分の二の処で無くなつてゐるのであつた。しかし此の外には何等異状と認めるべき者が見出されなかつた。

(British Medical Journal, Alec, 1922.)

糊と泥と砂

長岡 変一郎

え・えいじろ



これから書きます此の物語は私の一生の裡で最も異常性の激しかった時代の告白です。

文中のS野町というのも、周囲の地名の伏字にしてないところから、大阪居住の方ならば凡そ何処を指しているかお分りのことゝ存じます。唯、太平洋戦争の頃には、もうこの文中の砂山や溝川は埋立てられてなかつたことを、私はあとで現地へ見に行つて承知いたしました。私は現在北九州の或る炭坑で働いております。異常な生活であればあるだけに、その当時がいとほしく、又大阪の町がなつかしく思われて仕方がないのです。私は限らない憧憬を抱いてこの半生記のペンを執りました。

一

私は大阪市南区難波桜川二丁目の大きな紙問屋の次男として生を享けました。私の子供の時代は奉公人を十人近くも雇つており、土藏付の邸は広々として奥深く庭樹が繁つていて、私はいつも附近の子供達を集めては、いろ／＼の変つた遊戯をしておりました。それは丁度谷崎潤一郎の小説「少年」に登場する信一を髣髴さすものがあつたようです。

然し幼年時代の事は又何れ機会を改めてお話するとして最も異常性の激しかつた私が三十歳前の頃へ一足飛びしたいと思います。日支事変が初まつた年でした。旭区S野町。こゝが当時私が住んでいた町です。省線京橋駅を間近かに控えて寝屋川の支流に架るS野橋を渡ると、もうその小さな街へ入つてゆきます。大体が小さなゴミ／＼とした家並の続いている此の街は、そのS橋通りを入れて、こ

れに略平行している三筋の主要道路によつて囲れているので、尙更人家や町工場が目しろ押しに入り込んで、まるで玩具箱をひっくり返えしたような恰好で形作つていたのでした。

私は此の三筋の道路の中通りの十字路角にあつた二階建のK洋裁所に、裁縫職人として住込んでいたのです。その頃は私の家もすっかり没落していて両親兄弟もなく、所謂天涯孤獨の身をそれが為に一層度を越しつつある変態性慾への執著のみに生き永らえているようなものでした。

これ迄もそうでしたが、私はなるべく家人や同僚達の少い家を選んで住み込むようになっていました。そして、K洋裁所が気に入つたというのも、此の家の従業員はみんな肉親で主人夫婦とその子兄妹が、終業後に階下に降りてしまうと、あとは私一人になれるからでした。

その頃の私の可成り激しく昂じていた病癖というのは、次に述べるように人一倍変つたもののなのです。終業後の二階でたつた独りぼつちになつた私は頑丈な麻縄をグル／＼と足首から胴中へかけて強く巻き締め、その緊縛感に恍惚と酔いしれたり、又、露店で買つてきた匂いの強い固練白粉を胸や腕にコテ／＼に塗りつけて体温に溶け込んでゆく、その臭いを嗅ぎつゝ寝に就いたり、それは／＼随分と変てこな事をやつたものです。分けても、その頃の私の極度に強い執著を示したのは糊だつたのです。あの洗濯物に使つたり、物を

る異常感覚は、私の幼い頃にも覚えのあることでした。まだ幼い包莖のペニスを目虐して、その尖端に洗濯物使う為に置いてある糊を塗りつけて、何んとかなくほのかな喜びを覚えたりした事を――。

これも一種のマゾヒズム的な性格に起因するものでしょうか。三十に近い歳になつていながら、私はどういふものか、此の軟かい粘々とした感触の糊を弄る事に無上の歓喜を覚えるのでした。

洋裁の既製数物仕立には糊を用います。それが冬物の場合ですと尙更相当量の糊を使つて芯地張り等を致します。日支事変勃発の年と言いますと、まだ米糖の統制になる大分以前の事で、その頃糊屋というものがあつて百匁以上、大量の入用は、その糊屋の製造直買が得策であり、一銭二銭の端下なら、近所にある駄菓子屋か荒物屋で又買ったものでした。

糊と申しますと、不易糊とか、ダイヤ糊とかいう事務用のものもありましたが、私が好んで用いましたのは、只管米糊ばかりでありまして、私は買つて来た糊を一目見るなりそれがまだ出来たての新しいものであるか、或は出来てから大分日の経過したものであるかが判ります。その時の様子を皆様に実演してお見せ出来ないのが残念ですが、とも角、こんな点についても異常に昂められた私の第六感の然らしめるところとでも申しますのでしょうか。

さて、私はその新しい糊が洗面器か何かの器に百匁以上もうず高く盛り上げられて買つて来たのを見ますと、もう鳩尾のあたりがムズ／＼として参ります。それはもうまるで久しく逢わなかつ恋人人同志の出会いとか何かの時の様にです。いや然しこの形容詞は當つていないかも知れませんが、また当り過ぎてゐるかも知れません。何

特集 惑溺の愉悅

貼るのに使う米糊
にあつたのです。

糊——糊に対す

故ならば、私は未だ恋人を作ったという事がありませんから。

そんな時私は「この糊がどうか今晚中に使わずに済みます様に」と心の裡で祈るのです。随分妙な話なのですが、それは矢張り私のこの孤独性のかもし出す一つの感傷とでも申しますか、こう云う訳なのです。

買つて来た糊に手が付きますと、自然周囲の塵芥等が附著して何となく汚ならしくなるのと、又一つには分量が少なくなつてしまつては終業後に行うアノ変態遊戯に魅力や快感が薄らぐからなのでしたでは、折角買つて来た糊を使わぬ事があるのか。とお尋ねの方がお在りでしよが、御座います。数物既製洋裁の下張りに使つております時の糊は、全く一カタキも無く成つてしまつてからでは間に合いません。

何故かと申しますと、糊の製造卸売所なんてものは日暮と共に店を閉じてしまいます。と云つて駄菓子屋や荒物屋での小買は、損得は知れていても水の中に保存してあつたりするので粘着力がなく、又腐敗している事もあり、もつと困るのは品切れでした。そうなる間に合いません。そこでいつも未だ有る裡にアトを買つてストックして置くと云う事になるので、都合のよい時には其の日は以前の分をすつかりかすつてしまつて間に合わせ、明日から新しい分に手を付けよう。と云う事になります。

さあ、そうなればもう占めたものです。

私は胸をワクワクさせ乍ら、早く／＼とその日の終業を待つのです。

私はそんな夜。家族の者がみんな階下へ降りてしまつて一人ぼつ

ちの二階で、世にも奇怪な妖しい欲求と取り組むのです。

その頃の私はまた、美しい女の虐しく後手に縛り上げられた——そんな絵画の蒐集も行つておりましたので、その蒐集品の傑作をズバリと竝べて悦に入り乍ら、うず高い糊山の真只中へ自分の——をズブリと突きさしたまゝで………を行ふのでした。

それが行えない時の糊に対する私の妄想執著は猛烈を極めました。私は柔い粘つこい感触のその糊によつて、鼻口や咽喉を塞がれて窒息状態までに陥つてみたいと思ふ様になりました。

私はよく夢を見ました。

それは或る大きな糊製造工場で、人間の背丈以上もある様な大きな桶がいくつも／＼竝んで置かれています。そして、その桶には皆それ／＼に出来上つた糊が一杯に入つていて、若し人間が誤つてその中に落ち込んだとしたら、無論窒息死する筈です。それなのに私はそんな危い桶の縁を平気で渡り歩いているのです。嬉しくて胸をワクワクさせ乍ら——あツとう／＼足を這らせて桶の中へ墜ち込みました。「失敗つた」私は大声を上げて糊の中から這い上ろうと身をもがきます。然し駄目です。体の重みでゲン／＼深くはまつて行つて遂に窒息してしまふ。とこんな夢でした。

無論真実に窒息したわけではありません。

私自身としては窒息しても構わぬ気持なのでしたが、いつも際どい処で目が醒めるのでした。きつと蒲団か何かを顔の上に載せている時でした。

病癪が益々昂進して参りまして、どうにも我慢が出来なくなりましてので、私は愈々この糊による窒息の快感を実験してみる事に致

ました。

仕事の方ですか？無論本職の洋裁はさつぱりでした。そういつた異常な不自然行為の結果視力はかすれ身体は倦くいつも能率が上がらないので主人達からは請がよくありませんでした。が私はどうしてもこの病癖が止まりませんでしたし、主人達も真逆私がそんな異常性の持主だとは気がつかぬ様でした。

私は先ず人差指に糊を掬つて鼻口の片方だけに詰め込みます。次に大きく口を開けてその中へも一杯に詰め込み、上から手拭か何かの布切れで猿轡の様にその口を縛ります。すると次第に息がし難くなつて来て、僅かに残る片方の鼻口だけで息をして居る事になります。そうして暫くマゾヒズム的な快感に浸つておいて、今度は思い切つて残る一つの鼻口をも糊で塞いでしまいます。そしてこの瞬間寝床の上へ仰向きに寝転びます。

遂に息が出来なくなつて苦しさが次第に増して来ますが、私は水中に潜つてゐる時の様にジツト息をつめて我慢しています。

私としては、このまゝ窒息して死んでしまいたいと思うのですが、つい苦しさに辛抱が出来なくなると、ツンとあの鼻をかむ時の要領で息を強く吹き出しますと、鼻口の糊が飛び出してやつと息が通ふ様になります。

こんな、何度やり直しても一向に死に切れもしない変態遊戯が、しかし私には大きな魅力と快感でした。私はこの窒息一步手前の快感を、糊への執著と共に満喫してから床に就く事にしていました。

その頃。こんな事件が起きて又々私を興奮させまし

た。それは、私の働いていたこのK洋裁所の近くに飴製造会社で、職工さんが昼休みの雑談中に不図した冗談から駒が出て喧嘩となりお互いに掴み合つてゐる裡に一方が思いきり突飛ばされて、その男は製造中の練飴の真只中へ頭を突込んで、もがき苦しむ、窒息しそうになつたので慌てゝみんなで引出してやつた。というのです。

私は、この話を聞いた時。若し私とその突飛ばされた職工さんであつたらどんなに嬉しかつたらうと、その人に限りない羨望を覚えるのでした。

私はもう一層の事洋裁をやめて、この飴会社かそれともどつかの糊屋にでも働こうかとも考えましたが、どうも思わしい機会に恵まれないのも決断力に乏しかつたの



とで、この方は遂に実行が出来ませんでした。

が。その裡に私は実に素晴らしい変態新遊戯と、その遂行の場所とを発見致しました。

勝利ぬ健康の蒼白い顔色で、私は昼食と夕食後の休憩の一刻を、雨の降らぬ限りは必ずこの洋裁所の戸外に出て、その辺をブラブラ歩き乍ら何がなしに又別の妄想構想に耽るのでした。

S洋裁所を出て、前の十字路から向い側の家のその裏手の方へ廻つて行くと、幅二間余りの薄汚い溝川が流れていて、その溝川の対岸には、伸鉄工場だの、硝子工場だの、又は製罐工場等の極めて小規模な個人経営の町工場が、ゴタ／＼とく／＼き合つて立並んでいるのでした。つまりこの溝川は、それらの工場とこちらの側の家並びとの裏合せの中をせいて流れているのです。

そして又この洋裁所の在る十字路の周囲にも、××セメントの倉庫だとか、回収した古鉄の置場だとかあつて、四辺は至つて寂しい場所なのでした。

私は、しかし又その寂しい処が非常に好きなのでして、絶えずブク／＼とメタン瓦斯を吹き上げている真黒な水の流れるそのドブ川の縁を歩いては、水の干いた個所のその黒いドブ泥に、彼の糊の感触に余りにも似ているであろう事を思い浮べては、そのドブ泥に飛込んで見度い衝動に駆られるのでした。そして私はそのドブ泥が底深く、自分の背丈が没してしまつた時の幻想を浮べては一人悦に入るのでした。

然し所詮はこれも幻想であり妄想にしか過ぎませんで、実際にそんな泥深いドブ川等容易にある可き筈がないのでした。

妄想と幻想と、そしてその後に来る失望と厭世感に身も世もなく懊悩を續けている裡に、私は漸くに又新しい遊戯の方法とそれを行う場所とを発見致しました。

それは、このドブ川のこちら側の川岸に工場裏の少し空地になつてゐる場所がありまして、其処を矢張りこの近くに事務所を持つてゐる土砂商、土徳商店の砂利揚陸場^グに使つてゐるのでした。

S野橋の下を今福の方へ流れて行く寝屋川の支流から水を引き込んでゐるこの細いドブ川には、満潮時でなければ舟は入れないので従つて土徳商店の砂利舟も、若しそれが干潮時であつた時は大川との接続のところに舟をもやつて置いて、満潮時を利用しては入つて来て積荷の砂利を揚陸して行くのでした。

尤もこの作業を私が目撃したのは昨日今日ではないのでしたが、御承知の通り潮の干満と云うものは毎日時間が一定しておりませんので、自然このドブ川へ入つてくる砂利舟もその揚陸時間には大きな浮動がある様でした。この事は私が毎昼食夕食後にドブ川の畔を散歩する時、そこに揚陸されてゐる土砂を見て知る事が出来るのでした。

但し私がいつも奇妙に感じる事は、例えば昼食後の散策の折に可成りな大量な砂利を揚陸してゐる現場を目撃しておいたのに夕食後に又その現場へ行つて見ると、もう風の彼の砂利の山は無くなつてゐる。かと思ふと翌日は又々いつの間にか沢山の砂利が出来てゐるといつた具合でした。

これは私という者が食後の限られた時間にしか戸外に出ず、相手の砂利揚陸はそれが仕事の一日掛りなのだから、別にさして奇妙な

集 惑溺の愉悅

事柄でもないのですが、さあそこが私と云う人間のエキセントリックの然からしむるところでも云うのでしょうか？ 勿論この揚陸された砂利の無くなつてしまうのは、その砂利置場から土徳商店専属の土工がセツセと陸上を何処かへ運んで行くからだ。と云う事も判つたのですが、私はその砂利山の移動を眼に止めている裡に、遠い少年時代の変態記憶を呼び起しているのです。

思い起す小学生の頃潮干狩に行つて干潟の砂に体を埋めて何となく快感を覚えたあの時の事を。

又、後に他の海水浴場等で矢張り浜辺の砂に全身を埋めて貰つて居る中学生をみて、自分もあの様にして埋めて貰いたい衝動に駆られた事も。

「そうだ、この砂利の中へ体を埋めてやろう」

そう思い始めると、もう矢も楯も堪らなくなつてきて、私は毎日の食後为例の如くドブ川の縁をブラ／＼し乍ら、それとなく注意してこの新しい思いつきを敢行する機会を狙いました。

無論機会は夜を待つより仕方がありません。然しまたその夜に例の様に砂山が無くなつていては、それも叶いません。

私は私独自の感を働かせて、夕食後にこの砂利置場を見に行き、大丈夫これならば今夜半迄砂山は残っている。と見極めがついたら今度は家の方、つまり洋裁仕事の終了時について意を用いなければ

なりませんでした。

その当時の洋裁職は随分遅く迄夜業を致しまして、夜半の一

時二時になる事もさして珍らしい事ではなかつたのです。

しかし、そんなに遅くなつてしまつては、私は却つて戸外に出て彼の砂場へ行く事が出来ません。さきにも申上げておいた通りこの家の者はみんな肉親ばかりですから、余り終了時が遅いと早々に表に施錠して寝てしまいますから、私がそんなに遅く戸外に出て行く事を恐らく怪しむ筈です。いや或は案外平氣だつたかも知れないのでしたけれど、矢張りこちらは異常行為に対するヒガミがあつたのです。

そこで私は一番適当な時間として、夜の十一時前後か十二時頃迄に夜業の終了する日を待つのです。仕事の都合で時にはそんなに早く終る事もあつたのです。

しかし又、砂場の都合と仕事の早仕舞の時とが、そうそう旨い具合に合致する日は滅多にありませんので私は大いに焦燥を感じるのですでしたが、それでもどうやら二回ばかり機会を掴みまして、この新遊戯（埋もれ）の実験に取りかかりました。

初め私はこの砂山の頂上に垂直の穴を掘つてその中へ身をスツポリと入れ、小学生の頃歴史で習つた埴輪の様に砂の中から首だけ出してみたらどんなに気持が良いだろうと考えて、その実行に取りかかりました。

しかし、此の方は直ぐに断念しなければならぬ事に氣附きました。

柔い砂利の山でも、手で垂直に掘ろうとしますと、深くなるにつれて砂のしめりと重圧でだん／＼固くなつてきております。それに穴の深さは自分の腕の届くところ迄しか掘れません。いや、もつと

早くそれ迄に自分の体の重みで掘つてゐる穴は崩れてしまうので、これではとても体の背丈迄掘り下げる事は不可能でした。

そこで、このやり方を諦めて、今度は彼の海辺の干潟でやつた時の様に、自分の体を横に臥せるだけの横穴を掘る事に致しました。

この穴の方は先のような事はなく、暫く懸命になりますと十分体を横たえられるだけのものが掘れ上るのです。

そこで私はその穴の中へ、先ず体を仰向きに臥せてみて大丈夫な事を確かめると、上半身を起して両手で足首の方から次第に体を埋めてゆくのでした。掘り上げた砂が、そのまゝ穴の深さを補足するかの様に周囲に積み上げてあるので訳のない事でした。

足首から次第に尻の辺り迄埋めて十分砂を叩いて下半身が動けない様になると、残る上半身は起して居るのが辛くなつて来ます。そこで上半身も完全に倒してしまつて、今度は右手だけを使用して、左手も一緒に片手の届く限り砂を冠せて体を埋めます。がさすがに残る右手を埋めてしまふ事は出来ません。

無茶苦茶にアガキまくつたとしても、上半身の右側になる方は、ずつと浅く埋もれたと云うより砂を少し冠つたと云う程度にし過ぎません。

これ以上はたとえ顔迄砂を冠せたとしても、結局は彼の糊の遊戯の窒息寸前にハネ起きるのと同じ道理で、自分一個の力では到底窒息し切る勇氣等出そうもなく、よい加減遊んだ後には体に附着した砂を気にし乍ら帰宅して何食わぬ顔で寝てしまふのでした。

しかし皆さん。猫の子一匹通らぬ深夜の工場裏の砂山で、体を埋めて恍惚境に入つてゐる私の姿を、若し偶然にでも誰かそこを通

つて眺めたとしたら、どうだつたでしょう。

それから約一カ月余り、私は健康を害したのと梅雨期で雨の日が多かつたりしたのとでこの埋もれの変態遊戯を行う機会を失つていました。

然しそんな間にも私はおとなしく沈黙を守つていられませんでした。

戸外に出られねば出られぬ程、私の気持は焦々するのでして、恰度その頃手に入れたのが彼のクラフト、エビンクスの、変態性慾の研究、の訳書でした。

私はその書物の中にある、一少女の告白の自分の咽喉を絞扼して快感を覚える個条に異常な興味と昂奮を覚えまして、又してもソロ／＼この実験に取掛つていたのでした。

そして、それに依つて得ました結論は、既に法医学に依つても証明されておりますところの、自殺の目的を以て自己の頸部或は咽喉を絞扼しても、その目的を達する事は容易でないと云うことと自己絞扼に依つて快感恍惚境を得る場合は、その絞扼の程度と個処を考慮しなければ駄目であること（後者は私の体験にて）等でした。

二度、三度、と手を用いて咽喉の絞扼を繰り返しますと、最初の程には快感を覚えなくなり、尖骨に当つたりして痛みを感じ寧ろ不快な気持になる事もありました。

紐や縄を用いてみた事も勿論でした。

然しこれとても、私の真の目的を満足させては呉れませんでした。十秒そこ／＼の恍惚感の後には、無意識の裡にいつか紐や縄をゆるめ解いてゐるのでした。

「首を吊れッ」てですか——。
 どう致しまして。そんな、私は
 苦しんで死に度くはないのです。
 私の目的は、自分の好きな変態遊
 戯に恍惚境をさまよひ乍ら死に度
 い。ところなんぞ御座いますか
 ら。……

うつとしい梅雨があがりまして
 私は又ぞろ溝川の傍の彼の砂利揚
 陸場に行つてみようかな、とその
 機会を狙つておりました。

と、この時でした。実に素晴らしい機会の近づく、ある事を私が
 知つたのは。……

私がこの、遂に命を落しそうになつてしまふ程の変態遊戯を実行
 したのは、日華時変勃発の翌年に当る六月上旬のどんより曇つた夜
 でした。

私がこの夜を無上のチャンスとして撰んだのは、前夜からの二タ
 夜が防空演習の為の燈火管制を命ぜられていたからで、しかもこの
 夜は日没から夜半迄の長時間を、空襲管制として真暗闇におかれる
 事を知つたからでした。

その頃の民間の灯火管制と云えば、まだくよい加減なものでし
 て、それに日没から夜半迄等と云われてはもう、一層の事宵の口か
 ら寝てしまふ。と云う様な家も可成り有りました。

私の働いて居りました洋裁所でも、仕事は出来ず、解除を待てば



夜半になつて、それから又仕事
 にかゝるのも大変だと云うので
 これも外面だけは体裁よく見せ
 て置いてその実みんな寝てしま
 う事に成なつたのでした。

待望のチャンスでした。

私がおとなしく寝てしまふ筈
 がありません。

私は努めて気付かれぬ為に履
 物をはかず跣足で、かねて用意
 の黒のメリヤス海水着一枚にな
 りソロリと家を抜け出しました
 行先は勿論彼の溝川縁の砂山で
 した。

天の恵み……とても云おうか、
 空はどんよりと曇つて管制下の正にうば玉の闇でした。

さなきだに平素から寂しいこの四辺に、しかも工場裏のそんな砂
 山に恐らく私の外に誰が好んで行く可き者が居りましようか。

私はもう疼く様な嬉しさに胸をはずませ乍ら、猶少しも早く次の
 陶酔を求めて懸命に砂山の頂上を掘り始めました。

それにしても今夜の砂山の何と素晴しく嬉しい高さである事よ。
 そして例の如く身体をやつと横われる程の、穴が掘れ上ると私は
 素っ裸になつてその中に飛び込みました。

唯、今夜の遊戯のそれがこれ迄の方法と変つてゐることは、下半

身を出来るだけ深く固く埋めて置いてから、今度は用意の赤い女の帯揚げで頸を絞めてみる事でした。

上体を後に倒す時、その反動で下半身を埋めた砂が弛まぬ様、今夜の穴は出来るだけ深く掘つたので、下半身を埋めてしまつた残り上半身に属する穴の周囲は、底部から凡そ三尺近い高さの断面を為していました。

頸を絞める時私はその布切れを後から廻して咽喉で交叉させ、元の後頸へ戻してそこで二重結びにしたのでした。法医学で謂う後頸部の二重結節でした。こんな場合の死亡は他殺と看做して十中九迄間違ひなし、とされている程で、相当強気の者でも自殺の目的ではこの方法は執る事が出来ないよりも成功しないのでした。

私も真逆この時死のう等とは思っていませんでした、その証拠には二重結節は作りましたけれどもその代り（当然そうしか出来ないのだが）頸の絞め方は弛い目にして倒底窒息等する訳はなく「出来るだけ種々な変態遊戯をやつて楽しんでやろう」とそれが私の願望だつたのです。――

この時も、頸を絞めて少し気分を出してから上体を倒し、そして又かの埋没の遊戯にかゝる可く――だつたのでした。

さて、私は残る上体を倒しました。頸を弛く巻き絞めたまま。すると、どうでしょう。

弛い目に巻き絞めていた筈の、帯揚げ布地がとたんにガツと緊りました。

瞬間私はアノ無限の恍惚境をさまよい始めました。頸は弛い目に

絞めておいても、上体を倒せばとたんに緊る事を忘れていたのは不覚でしたけれども、然しアノ恍惚感は永く共ものゝ二十秒も経過は自然消滅して、その僅かの境にはね起きるだけの経験はあつた筈なのに。――

いや勘くとも私は左様信じていたのでした。

しかし四辺の様子がどうも変なのです。誰も居ない筈のその砂山に、子供が両方からコツソリと十人近く上つて来ました。男の子ばかりです。

何のためかひどくコツソリと抜き足さし足の恰好です。

然し子供達は私には気付かない様子です。伏せた姿勢のまゝでお互いが気付かれるのを嫌っている様子です。私は頸を絞めたまま上体を穴の中へ倒しました。その瞬間、双方の子供達も砂山の頂上に辿りつきました。

あ――掴み合いの乱闘を始めました。

誰かが私の上体に当る辺りの砂の断面を踏みました。砂が崩れて上体の一部が埋りました。

と思う間もなく誰も彼もが乱闘の中で目茶々々にその穴を踏み潰してしまいました。

私の体は完全に砂の中へ没し去りました。

))))))
(((((((

欧米人は人体解剖図を見ても分る通り、その陰茎亀頭の大部分は包皮で掩れてゐるが、此れに反して日本人は亀頭が裸出している者が多い。我が国では昔から包茎を「皮かぶり」「すぼけ」等といつて此れを恥じ嫌う風習があり、従つて少年時代より包皮を機械的に反転せしめて亀頭を裸出する習慣がある。此の様な民族的な風習は、割礼、即ち包皮切斷の遺風ではないかと想像される。

幼児の包皮を切斷する風習は、一つの宗教的儀式として今でもユダヤ教、回教の信者の間に行われている。包皮切斷の原因については、他の種族より識別し得べき民族的特徴としてこれを行うとか、或は包皮の存する時は恥脂が堆積して分解して炎症を起し易いから此れを切斷するのであるとか、或は包皮を切斷すれば亀頭の知覚が鈍感となるため性交の時間を延長して、相手に多くの快感を与える為に此れを行うと言ひ、或は人身犠牲の遺習として包皮を切斷し、此れを神に捧げるのであるという様にいろいろの説

がある。

今日でも東印度諸島の現地住民の間には貴賤貧富を通じて包皮切斷の儀式が行われている。ポリネシアの蠻族等は、陰茎の亀頭を以て生命の力を賦与する神聖の部分なりと信じ、此れを掩蔽させない為に包皮を切斷するのであると信じている。

我が日本列島に於ける先住民族で九州附

★包皮切斷と亀頭露出★

日本人の亀頭裸出

根 上 多 男

近に棲住した「倭人」の祖先が南洋方面から移住したものであると認めるべき点の多いことは南九州に住んだ「隼人族」の風習がインドネシア族の中でもボルネオ現住民に類似していることは顔面文身の風習や髪に頭髮をつける事、赤白土で彩色を施す事、禪を用いる事、舞踊を好む事等より推察することが出来る。

こゝに日本人児童の中、陰茎包皮を翻転して亀頭を露出している者の調査をした渡辺氏の記録があるので参考の為に掲げてみよう。

検総査人員、男子児童一万百六十三人中亀頭を露出している児童は六百二十三人、その割合は六・一三%に達している。此の亀頭露出児童六百二十三人について分類してみると左記のようになる。

亀頭露出程度

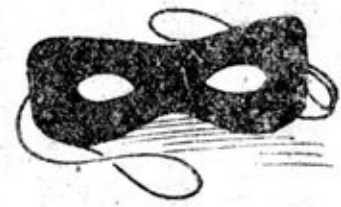
第一度 亀頭の尖端が自然に露出したもの

第二度 亀頭の中央迄露出したもの

第三度 亀頭の全部が露出したもの

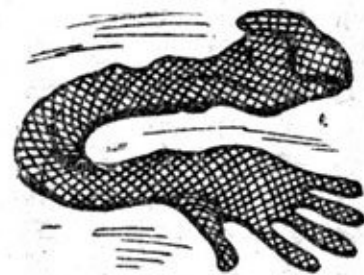
概 括

一、尋常小学校男子児童八〇五〇人中亀頭露出の者三七五人にて率は四・六五%
一、高等小学校男子児童二一一人中亀頭露出の者二四八人にて率は一一・七三%
一、尋常小学校と高等小学校を比較すると約三倍弱の開きがある。これは性の自覚と関係があるものであろうか。
一、露出程度は各年齢共第二度が最も多く次は第一度第三度の順序になつてゐる。



4 S クラブ探訪記

二 俣志津子



1

4 S クラブ。と云う会がS県I県にまたがつてあります。会員にはPTA会長、小中学校校長、市、町議員、会社社長、重役、二号さん、町長夫人、踊子、旅館女将等々で名前は伏せさせてもらいます。

いつ、どこで会合を開くか、風のように電話連絡で四方八方にされるらしいので、それは全くその寸前までは会員でさえわからないのです。その会合に出席出来る機会を、私も得たのですが、その日の直前に盲腸炎をやつて、残念乍ら機を逸してしまつたのです。その日は会費三千円で、K劇場専属のストリッパー達が、各会員に付添うことになつていた

そうで、矢張り映画は上映したことでしょう。どんな催しかなされたかは想像外です。

そして、次の機会が来たのです。

私は盲腸炎が直り、剃られた毛も幾分生えかけた頃、はからずも会社社長のM夫人を訪ねたのです。写真機をねだりに行つたのですが、M夫人は唇に微笑を浮べて鋭く私を見つめていました。が頤を支えていた手をぴくぴく動かして、

「いいよ、パールでいいだろ？」

「ライカが欲しいんだけどな？」

「ライカ？ふん、いいよ。だけどたゞじや貸さないよ」

「そりや、わかつているわ」

「わかりがいいんだね。じや云うが、今度の4 S クラブの集會に、私の代りに女王になつておくれ。4 S クラブ。知つてゐるでしょう？知つてゐる筈さ。1にセツクス、2にセツクス、3にセツクス、4にセツクス。」

M夫人は頤から手を外して、カメラを取り出し、意味あり氣に私を見てにやりと笑つた。「女王がいやならいいやでいいんだよ。ほらカメラは無条件で貸すよ」

そう云われると、それが術だと知りつつも負けず嫌いの性質で、ぐつとしやくにさわるのを堪えられず。4 S クラブに女王で出席することを承諾してしまいました。

私は社長宅を出てからも、4 S クラブについての想像で、写真のことなどそつちのけでした。会合の時の一時間前に電話をするからその時はすぐに家まで来るように、とのM夫人の言葉がなか／＼耳から離れずに、弱りました。大体M夫人の声は、女でも、いや、すごい男つたらしの響きがあります。美貌、豊かな肢体——を想い出した時、急に私は不安になりました。一体、M夫人の代役が私に出来るだろうか。これと同じ質問をしたらM夫人は笑つて、私以上だよ。と、言つたのが冗談に聞えてなりません。

私は素裸で、それこそ、サルトルの水いらずではないが、一条もまとわず、毛布にくるまるのが好きなので、夏でも冬でもそんなのです。

私は寝つかれず、転々としていました。九時が鳴り、十時が鳴った。もう今日は大丈夫会合はない。そう思っているうちに、とろろと眠つたらしい。ふと、物の気配で眼をさますと誰かドアをノックしている。

「カミー」

兄だ。瘦せた、純真そのものの兄が、当惑そうに私から眼をそらして、

「電話だよ」

「誰から？」

「M夫人」

私ははね起きました。

「今、何時？」

「十二時五分钟前」

「そう。ごめんなさい」

私は素早く服を着てカメラを握み、兄を押しつけて部屋を出ました。兄は黙つて従いて来る。

「M夫人がすぐ来るように、つて」

「そう有難う。ハイヤー呼んでくれない？」

私はこの兄を連れて行こうかな。とちらつ

と思いましたが今夜は一人がいい。と、ハイヤーに乗りました。ハイヤーの中でカメラのことが心配になった、取上げられる可能性が多いにきまつている。三十六枚撮りで、フィルムは一巻き入っている。

私は車がM夫人宅の前で止る寸前に、カメラケースのまゝをズロースの中に入れて、その位置を真中に、つまり丁度股ではさむようにして、ぎこちなく車を降りました。一寸我慢すればいいだろう。と、簡単に考えて――

M夫人は自家用車の中で待つていました。で私はハイヤーからM夫人の車に乗替えるとM夫人は黒いドレス。黒いマスクで、夫人は私にマスクを渡し、動き出した自動車の中で私の服を脱がし始めました。

「いい耳！」

M夫人は突然私の左耳を吸いました。熱い感じが、ジーンとして私は身震いしました。ブラジャーをむしり取るように外しズロースに手をかける。私ははッ。としました。カメラ！

M夫人は私をその豊かな膝へかゝえ上げる瞬間に器用に私のズロースを引はいでしまい



ました。
「これ、何よ。フフ。」
M夫人はカメラで私の前をぐいぐい押ししました。私は身悶えて、痛い。
「どこへ入れておいてもダメ。身体検査は厳重この上なしさ。」

そして、私にはドレスも与えられません。薄い頃までの桃色のペール。それだけこれでは車外に出られたものではありません
車はごつごつした切通しの坂をのぼつてい
るらしい。川の流れが眼下に見え
る。

車は崖上の洋風の建物の前で止つた。ドアが開いた。私は身を固くして、服をさがしました。と、
M夫人は私を抱え上げて、いや、横抱きにして車外へ出ました。そして、しつかりした足取りで建物の入口に向
いました。私は手足をばたつかせ、いや、いや。と、殺した声で、M夫人に訴えました。

「許して――」

「もうダメよ。覚悟した方がいいよ。」

「ごめんなさい、許して。」

「ダメダメ」

玄関は開け放され、人気はなかつた。私は
玄関に立たされました

「歩くのよ」

M夫人の手にいつの間にか銃口が冷たく光っている。M夫人は奥へ向つて叫んだ。

「電燈はどうしたのよ、女王様の御入来だつて云うのに！」

電燈が一斉に点いた。私は羞恥のために危くその場に蹲りそうになった。

階段を幾つも降りて行く。暗い窓から川風が吹込んで来る。幾つかの部屋を通りすぎるそして、小さなドアから広間へ押出された時もうM夫人は居なかつた。そうして、私は薄い幕のかゝつた王座めいた高壇の真中に立っていた。

広間はこうこうとした明るさで、ざわめいていた人々は、私が入つて来たのを知ると、一斉に鳴りを静めた。

「女王だ」

そんな呟きが、聞えた。溜息。

「まるで処女のようにじゃないか。M夫人、相変らず、若い！」

「毛はないのか」

「いや、ある。薄いのだ」

「いや剃つて来たのさ。僕はふさふさとあるのを見たことがあるんだ」

「乳房の形がいつもと違うようですね」

王座のすぐ下に二人の若い女が居て、それが歌うように声を揃えた

「女王様、どうぞ、王座に」

私は、言われるまゝに座に着こうとして、この身だしなみのいい淑女紳士達を見廻した。知っている者は一人もない。ほつとして私は席に着いた、と同時に全部の電燈が消えてしまつた。すると、背後で映写機の音、そして一度似たものを見たがそれよりも更に精彩な性交の場面の映画が初まつた。

「どうぞ、殿方は下のものをお脱ぎなさいますよう」

M夫人の声である、

糞落付いている。M夫人は私の脇にいつのまにか屈んでいたのである。そして、私の耳に囁く。

「どう？」

「……………」

「こうするのよ」

M夫人は、あつ、と云う間もなく私の前に手をすべり込ませて……………私は幾度も深い溜

息を吐いた。声もなく身悶えた。何と云う触感！何と云う感覚！

「さ、あとはあなたのお好きなよう。最初は私が見本を見せますからね」

夫人はすつと立去つた。私は失神したように、目がくらんで何も見えなかつた。

映画が終つて、再び真の闇となつた。

「淑女方、下のもの脱ぐよう」

きびしい調子である「いつものことながらお互いに、身体に傷をつけてはならぬ。よろしいか」

そして沈黙に入つた広間は次第に重苦しくなつてきた。かすかなざわめき！

と、私は、何かで足をなぜられたような気がした。それから、太股、それは、触れるかふれないか位の——感じである。人の息使いがするように思つた途端、大きな手で両の乳房をギュツと握まれ、私は思わず、あッ、と叫んだ。

「むほんだ」

その声と共に電燈が一斉に点いた。遅まし



い青年が、私をギウギウ、この時をせんとと椅子に押しつけていた

広間の紳士達がばらばらと駆け寄つて、青年を広間の真中に引据えた。

「女王様、この反逆者を如何がしましょうか？」

頭の禿げた赤ら顔の男が殊勝らしく、私を仰いだ。

「よきよう」

又M夫人の声だ。

「はッ。十字架にかけても宜しいでしょう？、それとも……」

「まず、服を引上げ！」

「はッ」

青年は忽ち全裸にされてしまった。

「それから？」

「よきよう」

「はッ」

紳士達は、青年を縛りあげてしまった。そして一人が

「女王様じきじきに御鞭をいただきたい」

「さて。わらわの前に桂、あれを。」

私の足元に居た娘の一人が小さな赤い棒を持って縛られた青年に歩み寄つて、屈み、赤



い棒を青年のお尻の穴に押し込み始めた。棒はなかなか入ろうとしない。桂は額に汗をにじませて呻いている青年を押しつけ、とうとう半分ほど押し込んでしまった。

「次に、槓、」

もう一人の娘が出て行つて青年の尿道にマツチの軸ほどの棒をこれは難なく差込んだ。青年は泣声をあげて身悶えた。

「次はわらわじや」

その声に私は思わず立上つた。

男女は潮の引くように後に退つた。私はその二つの棒を代る代るに押しした、その度に青年は呻くのだから、何とも云えない快感である。フクシユウをしつつあるような。前の小さな棒の方が痛いらしく、私は、その方をむごく扱つた。

「鞭は肌に傷がつく」

M夫人の声が私の口から出ているようで、

私は次第に恐ろしくなつた

「桂、縛められた男と、騎乗位！」

前の棒は外されたが、尻にさゝつた棒はそのままに、騎乗位——私は初めてみた。桂は軽快に、如何にも楽しそうにリズムカルに男の上で全身をおどらしている。

「槓と交替！」

槓は桂よりも瘦せていて荒々しい。男は、呻きもやめて、たゞ全身で荒い息をしているだけになつた。

やがて槓は男の上から降りた。男の物はぐつたりとしなびていた。

「女王様、どうぞ、最後の刑罰を！でないとむほんが次々に起るおそれがあります」

そうむほんをおこされては大変である。が身体に傷をつけないで、どんな方法があるか云うのだろう。

「まだじや、みんなで撥れ！」

男も女も青年に寄り合いあらゆるところをくすぐり始めた。つばをつけては、まさつするのだ。つねつてゐる者もいる。私は嘔吐を催して、それでも、このリンチを見つづけた青年は息絶え絶えになつた。私は、それからどうしていいのかさっぱりわからないので、それに幾分青年が可哀そうにもなり、

「もうよい」

と。口走つた。すると、禿頭の男がぎろりと。私を眺め、それから、隣りのチヨビヒゲの男に何事かささやいた。さゝやきが、次々に伝つた。私の近くに居た大柄な、女将らしい女が、いきなり、私のペールを引剥いだ

「ちがう。M夫人じゃない！」

私は忽ち女達に取おさえられ床にねじりふせられてしまった。

「お前は誰だ」

「どこの者だ」

「M夫人にうまく化けやがつた」

「引裂け！」

二人の逞しい女が私の両足を左右に引き始めた。

「もつと、もつと強く」

私は血の出るほど唇を噛んだ。

「こいつ、処女だよ。処女膜保全されあることを証明す。か」

「どうだろう。この女をマリヤにしたら？」

「マリヤ、つて何だね」

一人の中年の男が口をはさんだ。

「馬鹿だね処女カタイさ」

「どうするんだね」

「この女をこのまゝ逆さまにして、殿方達はみんなで……をしてそれをこの女にふりかけるのだ。上の口にも下の口にもさ」

「そいつは変つてらあ、よかろう」

私は両足を左右に引かれたまゝ逆さまにされ、気が遠くなつた。暫くすると生暖い液が私の股を濡らし始めた

「エス・キリストはかくて生れ給いぬ」

「各々の……をこの女の口で洗え」

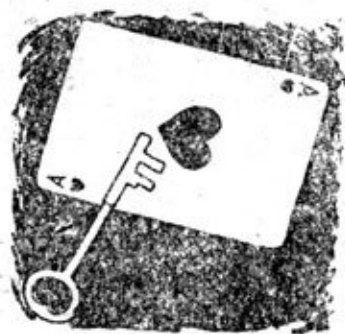
私はもうなにもわからなかつた。私はやがて柱に縛りつけられたように思う。男も女も暫くしてみな素裸になつたのを知っている。

四つ這いになつて寄つて来た一人の男が私の乳房を強く吸い。他の一人が髪を掴んで仰向け、酒を口に注いだようで、気が付いた時はベットのの上に横たわつていた。……のかゝつたあたりの肌はごわごわし、どこもここも痛んだ。処女膜は無事であつた。

2

それから私は罰として三回4 Sクラブで素裸のまゝ会員の命令のまゝになり、以後会員にならなければならなかつた。私はベットに転つたまゝM夫人からのその宣告書を読み返した。私は思った。若し性交せよ。と、命令されたら——、私は来年の春結婚しなければならぬのだ。婚約者と先にしてしまえばいいのだが、彼は東京に居るし……

屋近くなつて私はやつと清涼亭と云う崖上●閣御殿を、M夫人と共に出た。私は病人の



ようにM夫人の腕にすがらなければ歩けなかつた。M夫人は非常に優しく私を車に乗せ、顔にも眼にも頬にもキスをする。私は反抗も何も出来ない。乳房がいたんだ。

次の日私は速達で婚約者を名古屋へ呼んだ。私は東山公園旅館で事実上の結婚をした。勿論、私が処女であることを確めさせ、出来るだけ勿体をつけて——。彼はもう夢中で陽が高く上つてもベットを離れようとしなない。

私は、今度はもつとしつかりと4 Sクラブについて書けると思うもう誰にも負けやしないし、大胆に、やつてやる。私は、彼が私の谷間の奥をさぐるのを、眼を細め息を殺してなすまゝにしている。

私はもう処女ではない。今迄のような中途半端な物の見方や考え方をしないつもりだ。此れからは徹底的にやつてやる。男になんか負けやしない。奇譚クラブの愛読者の皆さまどうか、此の志津子を応援してやつて下さい。次号には、もつともつと凄く体験記を書いて御目見えする筈ですから。

さようなら

非公開映画

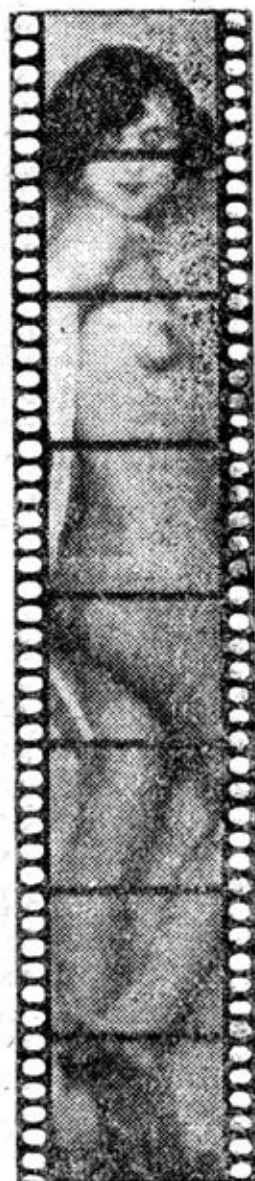
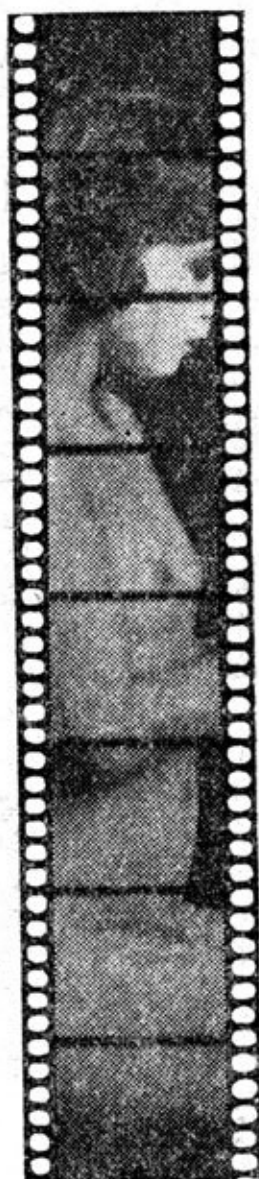
世

界

の

閨

房



藤 安 節 子

一、共同便所の女

花巻省三が元伯爵夫人毛利圭子と運命的な邂逅をしたのは、裏寺町にある、或る薄汚れた共同便所であつた。

その夜も花巻は、酒を飲んだり、踊つたりしたあと、夜の繁華街をひとり歩いてゐた。いつの間にか、しよぼしよぼ雨が降

り出して彼はレインコートの襟をたてた。映画館はハネ、商店街もそろそろ店を閉じはじめる時刻である。

レインコートのポケットに、両手をつゝこみながら歩いている花巻は、ふいにこみあげてくる官能にかられ、女にありつきたくなつた。彼はパンパンを買うつもりで、四条大橋の方へ行こうとしていた。そこに

は、顔見世で有名な芝居小屋があり、この夜の花は、橋畔から芝居小屋横の薄ヤミに咲き乱れるのである。

花巻はそうして歩いているうちに、酒を飲んだのと、つめたい雨に濡れているせいで、そそろに小用を催して来た。彼は用を足すために、新京極から、裏寺町へ入つた。

京極から眼と鼻のさきに、おや、こんなところがあるのかと思われる、それは新京極を河原町と四条通りの繁華街にはさまれた、突にうら淋しい小路である。夜空を彩るはなやかなネオンの影に忘れられ片側はくずれかゝつた寺院の白壁が並び、そのむこうは墓地になつてゐる。

折しも、そのくずれかゝつた寺院の暗い壁に、立小便をしている男のうしろ影があつたが、花巻は一町ほどさきにある、汚らしい共同便所までテクテク歩いていつた立小便をするに恰好の場所や時間であつても、花巻は決して立小便などしない男であつた。

下鴨や、太秦の撮影所にいた頃から、花巻のドンファンは有名であり、あの方面の

ベテランとして、彼の毒牙にかゝつた女優は数多い撮影所仲間の彼の呼名は「青大将」であり、また、スピロヘーダー・パリの保菌者として、撮影所関係の女たちからひそかに恐れられていた、かつての大スター、立原照子のみじめな発狂は、彼の病毒による結果だった。

実際、花巻は比類ないほどのドンファンで通徳観念に乏しい男であるが、半面役者としては珍しい東大出のインテリであり、生れがよいせいか、立小便すらやらかさなほどの行儀のよい男であつた。

その共同便所は、みるから不潔な便所でアムモニヤの匂いをふんと放つている。花巻はズボンの前に手をかけながら、急ぎ足に便所の中へ入つていった。と、一歩足を踏み入れるやいなや、彼はギョツと棒立ちになつた。

コンクリートのタ、キで出来ている小便所には、ひとりの女がこちらむきになつてスカートをめくり、腰をやゝかがめて、いましも用便の真最中なのであつた。女のかたちよいナイロン靴下の脚は左右にひらかれ、そのあいだに一条の液体が、さかんにほとばしり出ている。花巻の視線は、自然

そこに落ちた。

女は花巻を見ると、「あら、まあ」と驚きの叫びを挙げ羞恥の表情で、ひらいた両脚をこゝろもちあわせ、スカートの前を下ろそうとした。ひどく恥しいと見えて、そのしぐさはいじらしいくらいである。が、いつたん腰を切つた小便は容易に止まらないう。一見、有閑階級とも、パンパンともとれる、ひどく金目のかゝつた服装をしている美貌の女であつた。

女にかけてはベテランの花巻であるが、彼はまだ女が小便するところだけは見たことがない。しかも、こんな美しい、どこもなく上品で知的な、近代的女性が、共同便所の小便所で、このような恰好で用を足すとは。

奴さん、よほど小便がしたくて、大便所まで入る間がなかつたのかな。それとも、大便所が使用中で、止む得ずこゝでやる氣になつたのかなと、花巻は一応外へ出ようともしたのだが、何を思つたのか、ニンマリ笑うと、ずかずかと女の横に並び、すぐ彼もシヤアシヤアと小便を شدした。

小便しながら、花巻の視線は、女の尻のあたりにそゝがれていた。そこにはズロー

スが下ろされ、女の真白い尻がのぞかれています。かなしいほど白い尻であつた。やわらかくて、まるくて、豊かな尻のあいだから相変らず一条の清冽な液体がほとばしり出ている。

あゝ、と花巻は小便しながら嘆息した。それはあながち、彼の欲情からだけではなく、今度撮影する映画「世界の閨房」の場面に、尻の美しい女がぜひとも必要だつたからである。

そのうちに、女は小便をすました。チリ紙で拭い、ズロースをあげ、スカートを下ろすと、出て行こうとした。花巻は小便しながら顔をふりむけていた。女を呼びかけるか、何か冗談を云いたかつた。

そのとき、女は何を思つたのか、チラリとふりむきニツと微笑むと、用便中の花巻のそばまでツカヅカやつて来て

「遊ばない？」

ほほほ……と笑いながら、花巻の腕に手をかけ、身体をすりよつた。

そのときちかじかと寄り添つた女を、花巻ははつきり見た。真正面に二人の視先ががっちり会うと、女もひどく驚いた。

「まあ」

女はまぎれもない、元伯爵毛利邦彦夫人
圭子だったのである。

二、元伯爵夫人

花巻省三は十数年ぶりで、思いがけず毛利圭子と邂逅したのである。しかも京都の夜更けの薄汚れた共同便所で、遊ばないなぞと声をかける種類の女が、かつて高い憧憬をもつて、仰ぎみつめた伯爵夫人であるとは。

そのむかし、花巻は学生時代から新劇運動に凝つて、毛利郎にはよく出入りした。毛利邦彦は人も知る、新劇座の創始者で、日本でも有数の演出家である。

花巻は毛利伯爵に師事して、しばしば美しい伯爵夫人と出逢い、ひそかに恋をしていた。花巻は女となると、きまつて関係せずにはいられないのだが、何しろ相手が貞淑な伯爵夫人であるため、女優や女給のようにはいかない、その頃は彼も若くし、夫人にはとう／＼指一本触れなかつた。

花巻はいまでも女と一諸に寝るとき、女が愛撫を受けながら、他の男のことを考えるように、彼もぼんやり、他の女のことを考える。その彼のイメージの女は、必ず毛

利伯爵夫人であつた。あのたぐいなき美貌と、あらわな肩と、宝石と、そして黄金に輝くゆたかな陰影をしめす肉体。

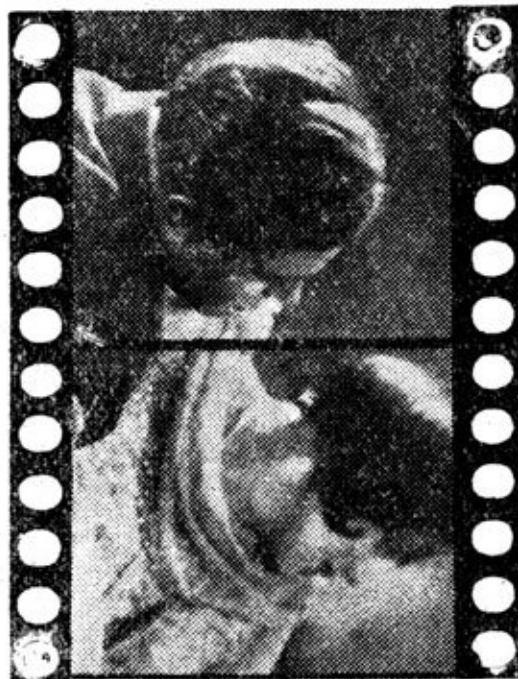
元伯爵夫人が特権階級の没落から、パンパンに墮ちたとしても、ちつとも不思議ではない世の中なのである。もともと毛利郎は、伯爵が新劇運動に大部分資産を投じていた上、生活が派手で、戦前から可成りの負債があつた。

それに伯爵の新劇座は、戦時中軍部の弾圧で解散を命じられ、伯爵は左傾しているという理由の下に、囚われて、獄死したことを花巻も知つていた。

終戦後に於ける特権

階級のみじめな没落は現在、花巻と同棲している加島陽子はその一例である。陽子は元貴族院議員加島侯爵の令嬢である。

侯爵邸は京都の門跡と深い関係があつて終戦後、京都へまで落ちのびて来たのだが、陽子は間もなくストリップとなり、或るキャバレーで踊つていたのを、間もなく花巻に思出され、撮影所入りをして、花



巻の監督した性交映画、アンリ、バルビュスの「ランフェール」に出演した女優である。

花巻は新劇俳優から、間もなく映画界に転じ、長い間大部屋マンとして、あちこちの撮影所をゴロついていたが、終戦後、或る小さな映画会社に入社し、非公開映画「歌麿の浮世絵」「地獄」「チャタレー夫人の恋人」等を脚色、監督して、赤字つゞきの映画会社に大あたりをとつたのである。

ことに、「チャタレー夫人の恋人」は発禁で世間を騒がしていた矢先、当局を

尻眼に嚴重な秘密のもとに公開された。それもサツカー版の原作による大胆な映画化で、こくめいな性的描写はもとより、ロレンスの思想にも忠実な演出であつた。

非公開映画なので、花巻省三の名は誰にも知られていないが、彼の製作するエロ映画は決して単なる低級な猥褻のみのものではなく、芸術の概念をよく擲んで濾過され

真のエロシズムにまで美化されたものなのである。

さて、共同便所でふいにめぐりあつた圭子は、小便をしているところをあらわに見られたことや、自分がパンパンであることがあまりが悪いと見え、表情が一瞬間くたつたが、忽ちあでやかな微笑で押しかくすと、

「まあ、花巻さん、やごさいませんの。お久しぶり……オシッコしているところまで見られて、あたし恥しいわ。ねえ、花巻さん遊ばない？」

圭子はすこし酒を飲んでいると見え、しどけなく彼によりかゝつた。

花巻はその「遊ばない」という圭子の襲い鼻声にニンマリ笑つたが、彼は感慨無量であつた。そのむかしの豪奢な生活、女王のように振舞つた旧夫人が思い出され、顔をさかさに撫じられるような薄気味悪さであつた。そして、女というものの順応性に感慨をあらたにした。彼の女である陽子も性交映画にまで出演して、もう夜の女も同然である。

「君はいつから京都へ？」
「もう五年ほどになるわ」

圭子の語るところによると、終戦後、東京の生活にも喰いつめ、京都へ落ちのびていまは進駐軍や第三国人が出入りする国際的キャバレーのエロシヨウに出ているのだつた。

「あたし、パンパンじゃないわ。ただオシッコしているところ見られた視近感からちよつと、いたずらしてみただけよ。ホホホ……」

共同便所を出ると、二人は曲りくねつた裏寺筋を繁華街へ出た。そして、通りがかりのタキシードを拾うと、蹴上げにある温泉ホテルと命じた。そのホテルは、つい此の間まで、進駐軍高官専用の慰安所であつた。花巻は今夜は思いきつて豪遊するつもりだつた。

三、鏡の中の蛇

エレベーターを昇り、赤いカーペットを敷きつめた長い廊下を、二人はボーイに案内されて、扉をひらき、一步部屋へ入るや否や、「あつ」と深い感嘆の声を洩らした。

豪奢な部屋の内部は、ベットとバスだけ文字どおりの閨房である。そして舞踏場

のように磨かれた床から、天井へかけて、周囲の壁が総鏡張りであつた。

圭子は「あッ」とうめき、底知れぬ鏡淵に思わず熱狂して走りよつた。

「あたし、裸になるわ」

圭子は鏡の前で、一枚ずつ衣類を脱ぎ捨てていつた。イヤリングとネックレスだけを残して。覆いもなく、裸になつた。どんな女でも、このすばらしい鏡を見たならば裸にならずにはいられないだろう。

裸身に飾る宝石、成熟をしめす実れる果実中年の円熟した肉体は、さながら、そびえ立つ白い塔のようである。鏡はあらゆる角度から、圭子の裸身を写し出している。裸になつた女の肉体は、反響を伴い、群裸となつて溢れ、あやしい影像の世界と化する仕組である。

圭子は覆いもなく自分の全裸を鏡に写しながら、さまざまポーズをとつた。そうしておもむろに肢体を振じ曲げ、病的な魅惑をもつて、無意識に舞踏の輪舞を織り出すのだつた。

それは彼女がエロシヨオで演っている、情炎の踊りであつたろうが、声は生い茂り小川のせーらぐ茂みに、深くわけ入り、幻想

にみちた岩石のあいだを、燃える岸辺へと
みちびいていく錯覚だった。

世界を閨房にみちびくために、

世界を閨房にみちびくために、

情炎の踊りが、はげしい苦痛のクライマ

ックに達したとき、花巻も全裸となつて、

圭子を抱きしめ、放縦な接吻をした。

鏡に写しながらその抱擁は、欲情をいやが

うえにもつのらせる。

ふたりはさまざまな破

廉恥な姿態を、鏡に演

じた。

圭子の蛇のようにう

ねる周辺と、この襲と

この襲！

下腹のあたりの線は

拋物線をたて、むつち

りと膨らんでいる。そして、その線は何故

かヒクヒクうごめいて、この部分にだけ、

この女の全生命はひそんでいるかのようだ

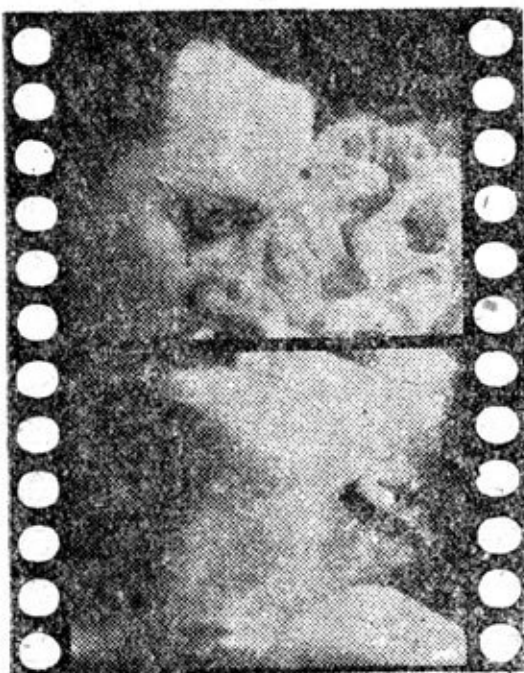
った。花巻の手は、圭子のその部分に離れ

ていった。

神秘なる鏡の中に、女の肉体は、欲望の

ためになかばひらかれてくる。情炎の肉塊

倦怠に嚙まれた官能、かつての伯爵夫人



の壮嚴な肉体は、何の操作を加えずとも、
いまは姦淫、墮胎、梅毒のいまわしい蒐集
にまじっているのだった。そして口紅を塗つ
た子宮には、あらゆる国際人の血が流れて
いるのである。

日本ばかりが相手でない圭子は、あらゆる
性交景に通じており、花巻は圭子のその
皮膚の色を異にした何人もの男に戯れ果て

た末の肉体の深さに

おどろくのだった。

永遠の寝台の底に穿

れたこの大いなる洞

窟花巻はその無限の

肉の深さに埋れた。

その夜は二人とも

酒を飲んでいるせい

もあつて、上になつ

たり、下になつたり、うしろむきになつた

り、坐つたり、立ちあがつたりして、その

姿態をいちいち鏡に写しながら、坂道の上

で、ブレーキをかけることを誇にした。こ

の坂道にかゝつたら、他の者ならどうにも

ならず、すべり落ちてしまうだろう。二人

は最後の愛撫のふちで、端の端で立ちどま

っていた。それは花巻の意志で、圭子の抵

抗ではない。——というより、彼の方が圭
子に抵抗しているのだった。こんなときに
於いてすらなほ、花巻は映画・世界の閨房
のことでいっぱいだつたのである。射撃
してはならない。圭子もそれによく堪え
た。あの極地へ、たゞそれに近づくだけの
さまざまな肢体を、彼は幾度も鏡に写して
眺めた。

熱狂した性愛というものは、実に醜惡な

もので、もし当事者がそれを見たならば、

人類は破滅してしまうだろうと思われるが

花巻は懈怠と戦慄をもつて、人間の始祖の

贖罪を鏡の中に見出したのであつた。

その夜、ふたりはとうとう一睡もしなか

つた。この快楽の極み、この破滅、それは

死に値するものだつた。底知れぬ鏡の淵に

死の舞踏の輪舞は妖しく映し出されてい

たのである。

ふと気付くと、圭子の不滅のすがたは、

彼の傍らでぐつたりと眠っていた。

四、世界の閨房

新日本プロダクションは、終戦後、或る
大きな映画会社が分裂して出来た、小さな
映画会社なのである。西日本配給系で、俗

悪な大衆映画や、ニュース映画を製作する傍ら、極秘に、セット内で性交映画を製作して、ひともうけしているのである。

「世界の閨房」と題する映画のクランクは九月初旬から、京都の郊外にある撮影所ではじめられた。無論、セットばかりの映画で、十月中旬の封切に間にあわせるため、撮影は毎日、時間外まで強行された。

この映画にはストーリーはなく、世界地図に於ける四十八ヶ国を、だいたい四十八手で表現していくという、世界閨房秘録である。それも、単なる猥褻さばかりをねらった、いゝかげんなシロモノでは決してなく一種の学術映画といつても申し分ないのである。

その国の人種、風俗を研究の学者をはじめとして、帰朝がえりの大学教授、財閥関係者、芸術家、新聞記者、つまり色好みの紳士諸君を網羅して、調査を依頼したところ、異常な熱狂をもつて、この映画に参画してくれたのである。

わけでも、滅びいくアイヌや、エスキモの風俗研究に、生涯を賭けた二人の老博士も、すゝんで貴重な文献を提供して、監督の花巻をひどく感激された。

その上、この映画は日本ではまだ一度も撮られていない、テクニカラーで、美術装置を、日本画の大家、堂島画伯に依頼した豪華版であつた。

撮影はまず、アメリカやヨーロッパの先進国からはじめられた。花巻はこの映画の主演女優に、来日中の白人の踊り子、エヴァ・ブブノアと、一躍主役に抜擢した毛利圭子を出演された。圭子の美しい肉体と放胆さはこの映画にはもつてこいだつた。

何しろ、ストリッパーとちがひ、スパンゴールもバタフライもつけない、全裸で、しかも性交映画であるため、非常な高級にもかゝらず、出演を拒む者が多いのだが、圭子によるこんで引き受けたのだつた。

ステージ内には、撮影スタッフ四五人いるきりで外からの出入りは堅く禁じられていた。撮影は時間外になつていたので、テストを軽く、二回くりかえしただけで、本当の声がかゝつた。

その日の撮影は極東の性交場面であつた元伯爵夫人の毛利圭子と、相手役の高峰正吾の男女が、一条もまとわぬ裸体で、寝台の上に横わっている。

足場を組んで天井からも、周囲からも、

眼のいたくなるようなライトが、二人の横わっている寝台にそゝがれる。

カメラはやゝロングに引かれて、その横に、ベレーをかぶつた花巻が立つていたブザーが鳴つた、場内が静まりかえると、助監督の大沢が、カチンコをカメラの前へさしだした。

カメラのモーターが、ほとんど音もたずに廻転しはじめ、カチンコが鳴つた。

圭子の寝台に横つた高峰は、まづ女の唇に接吻し、それから双の乳房にふれ腕に強く抱いて引き寄せた。

彼の手は、女の腰の絹のような手触りの曲線を愛撫し、やわらかに尻のあいだを下つて、女のあの急所にしだいに近づいていった。

前戯がはじまるところから、カメラはレールの上に前進してきて、近写になるのだつた。

このところから、もう会話はなく、沈黙の儀式となつた。男の手、あの不思議な気の遠くなるような愛撫のなかで、女は無意識にうめき、叫び、吐息するのだつた。そして、女の肉体は徐々にひらかれていき、男の肉体に……まづたくひらかれてい

つた。仁王たちになつた男の……密接して
いく場合に、キヤメラは更に近づいていつ
た。そして二人は暗く……あつたので
ある。

テストのときとちがつて、圭子の演技は
真に迫つていた。テストのときと比較にな
らぬぐらい、二人は強く、はげしく、秘戯
の演技にはいつていつた。

そして、遂に最後の場面になつた。キヤ
メラはじり／＼と被写体に近ずき、極点に
達した二人の恍惚の姿は、強いライトを浴
びた。

このとき、圭子は「あ」とうめき、男は
ゴクリと唾を飲みこんだ。この瞬間、監督
の花巻は思わず眼を伏せた。演技でないも
のが、二人のあいだにあり、あきらかに監
督の演出以上の、オーバー・アクトであ
る。しかし、演技とすれば、こんな素晴し
い迫力をもつた演技はなく、それはまつた
く真に迫つていた。

そうして、クランク・アップする最後の
セットに、その最後の撮影は終了したので
ある。

五、秘密倶楽部「アルゼリア」

秘密倶楽部「アルゼリア」——と云えば
ああ、あのエロ映画の……と、京阪神在住
の、色好みの紳士淑女諸君のなかにはうな
ずかれる人が、相当あるにちがいない。

アルゼリアは、新日本映画会社の直営で
会員制度により運営されている。会費の高
額である点から推しても、会員はすべて、
その道好みの新興成金や、有閑階級である
ことは申すまでもない。

このような秘密倶楽部、終戦後四年も五
年も維持され、到底公開不可能な性交映画
を、カットなしで公開しながら、まだ一度
も猥褻罪や罰金刑に問われていないという
事実、は、不思議に思われるにちがいない。

しかし、これは警察の眼を巧みにくらま
しているというわけではなく、いわば公然
の秘密なのである。それには非一般公開映
画としての会員制にあると思われる。会員
のなかには、関西財閥の横綱をはじめ、警
視庁の連中も含まれているからである。

ここで、作者たる私を登場させることを
お許し願いたい。かくいう私はこの道の好
き者で終戦後はさかんにエロ小説を書きま
くつてゐることは、本誌「奇譚クラブ」の
読者諸氏のすでに御承知のとおりである。

私の良人、藤安泰三は某繊維会社のいわ
ゆる「三等重役」で、この道の好き者であ
ることは申すまでもない。良人と私は「ア
ルゼリア」の会員であつた。

「アルゼリア」は京都駅方面にある。まず
こゝで封切られた映画は、フィルムがぼろ
ぼろになるまで西日本一帯に廻わされてい
くのである。

この種の映画の観客は、ちようどストリ
ップの観客層のように、すべて男性に限ら
れ、特にこゝの会員は、経済能力に乏しい
若い男は少く、四十代、五十代、六十代の
重役連中に占領され、同伴は僅かに紅一点
か、二点の存在である。

私はこの「アルゼリア」、花巻省三の監
督した「ランフェール」「チャタレー夫人
の恋人」「歌麿の浮き世絵」「世界の閨房
」などの性交映画を観て、非常な感動を受け
昂奮するのだつた。

「地獄」も「チャタレー夫人」も、出演者
は全部、白人や混血児であつた。私たちは
減多に見られない、モーヴ色の肉と、プロ
ンドの体毛と、どちらも原作に忠実である
から、大胆な肉体の露出と、交接場面に終
始している。

奇譚クラブ最近号 主要目次

○六月号 戦争と性慾特集○

口絵 戦争と性慾画集、ハレムの美妃

「責められる女のみ」写真集

好色秘本 バルカン戦争

戦争と工口

貞操特攻隊の悲劇……………杉山 清詩

モスコウの妖花……………藤田 盛治

ナポレオンの兵隊……………松谷 茂

成吉思汗の性慾戦術……………中沢 公平

テルマ病院の点描……………花本 史郎

人間便所の妄想狂……………二宮 忠一

男子同性愛難考……………浅倉 文朗

陸軍特設第七天国……………直鍋 吟吾

港々の女たち……………下山 雄

南方特殊慰安施設こぼれ話……………三嶋 彰太

太平洋戦争戦塵漁色余話……………高原 順三

今は昔戦線エロ落穂集……………下出 章一

中国兵の妻となつた女……………田島由美子

戦争と娼婦……………田森 浩志

魔性私刑……………街 啓介

小説・京マチ子……………夏目 千代

淫蕩歌舞伎図絵……………猛 緑比古

男子同性愛者からの書信……………南里 文彦

女性陰毛の生理……………田中 芳生

女性性腺線突破……………浪速 三郎

特選小説

○七月号 女天下時代特集○

口絵 縛られた裸女十態……………喜多 玲子

緊縛裸婦写真集「美しき苦悶」

女天下時代(マゾの男達)画集

女の奴隷、マゾヒスト群像……………高取 辰治

女体の下に蠢めく男たち……………阿久津 猛

淫乱婦女伝……………花本 実

疾患の鶏……………藤安 節子

或る変態夫婦の死……………藤崎 洋美

お座敷ストリップ色勇伝鬼山……………絢策

女剣劇王健在なり……………富士 芳季

国際文通好色噺……………二俣志津子

上海の売突婦 野鶏族……………野中 愛三

変態艶書……………岡田 咲子

世界奴隷艶情史……………野溝 草兵

少年好色奇譚……………松谷 茂

維新志士漁色競べ……………花山 剣作

性交なき遂情行為……………鳥上 源一

性愛と残酷……………仁比山 等

恥毛と腋毛……………田中 芳生

女の足の蠱惑……………赤坂 剛

夢性の美少年……………三村 幾夫

読切 張形の謎……………緑 猛比古

小説 倫落の岐路……………壬生すみ子

都々逸に現われた性愛感情……………安部 雨紅

性愛 獣類にも恋愛はあるか……………絹島 増夫

談義 張型を用いた性愛の技巧……………白川朝子

性愛の研究

女天下時代

読切

性愛

○八月号 責めと男色特大号○

口絵 浴場と浴室のエロチズム

惨虐の芸術(合巻に現れた殺し)

男色天国繁昌記画集

女体相撲艶色史……………増田 志郎

変態コレクトマニヤ……………庄司 浩平

男の天国・女工情史……………早崎 稻穂

ソドミーとレスボスの愛……………染田 玄

夢性の美少年……………三村 幾夫

【変態心理】自虐淫楽……………三富 浩生

日本性見世物変遷史……………潮 マリ

乳房を失った女……………竹谷 十三

男色殺人事件……………井口 正憲

男性的女子の記……………藤安 節子

変化中条流……………緑 猛比古

讀切 青い濁流……………竹内 節夫

MとS……………岡田 咲子

温泉ホテルの母娘……………矢代 文世

不貞の倫理……………貴崎 郷子

姦淫私刑考……………丹波 太郎

悦虐の記録……………喜多 玲子

拇指反つた素足の美……………的場 通

王朝好色本 音なし草紙……………宮内早次郎

喜多玲子習作集「縛られたる女の十五歳」

折込口絵写真集 「緊縛美の断片」

神戸暗黒街探訪記……………久木田 堅

光源氏の性的生活……………畑村 連治

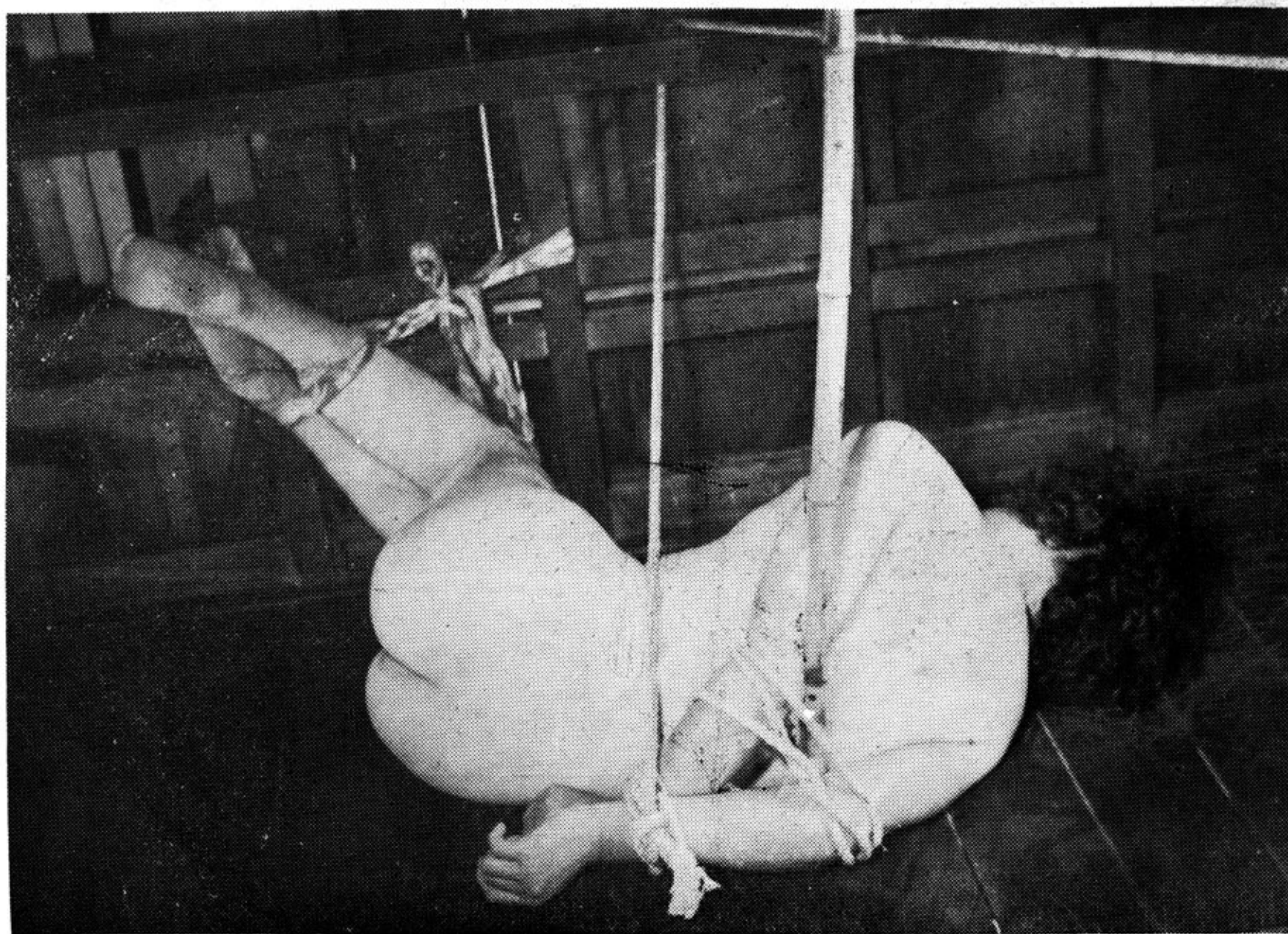


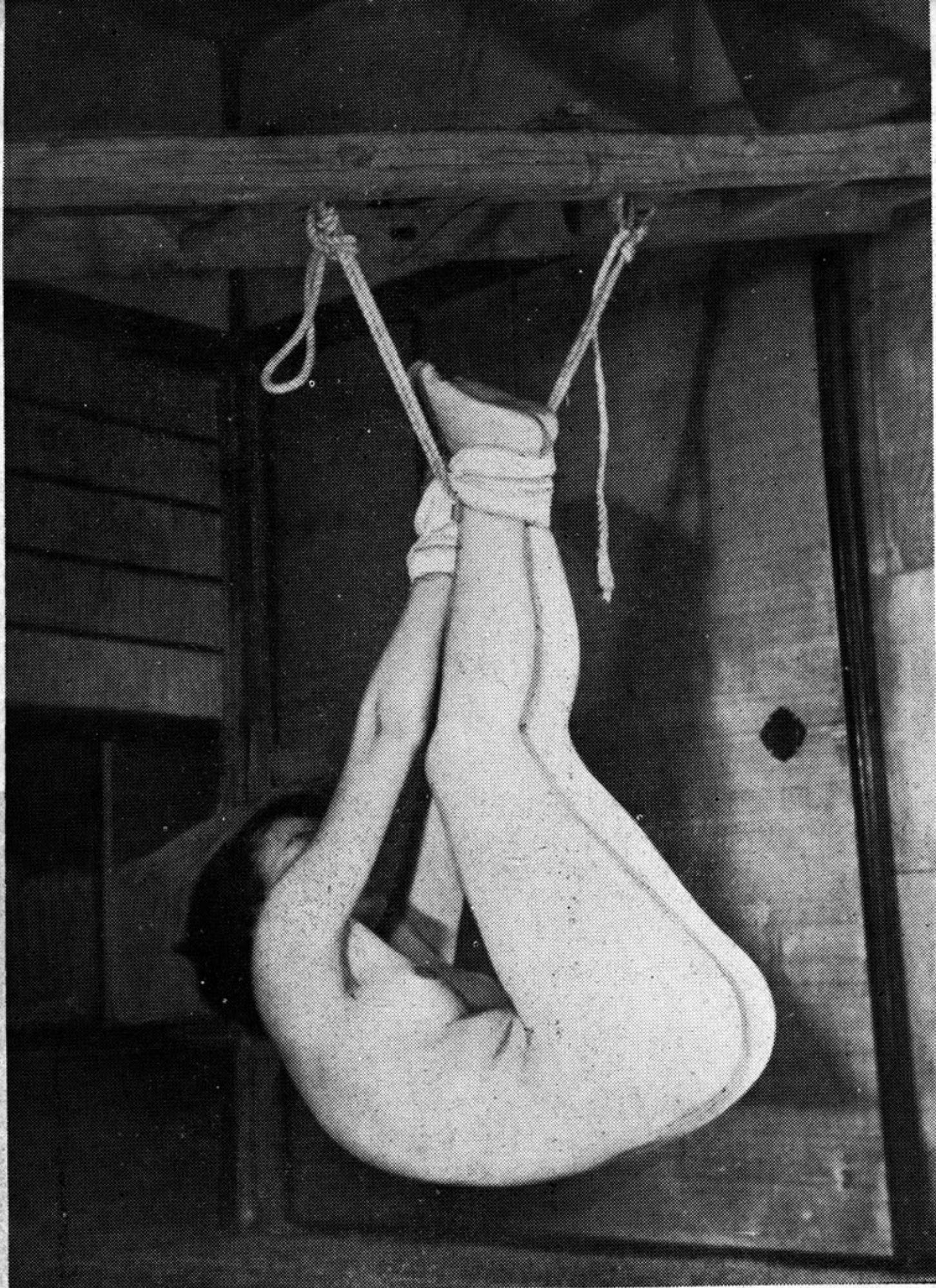
縛つた女を寫す

辻村隆

若しも縛られる事に興味以上の興味を感じる女性が進んでモデルとしてカメラの前に立つて呉れることが出来たとしたら、〃縛られた女〃というモチーフを追究する上に於いてどんなに素晴らしいであろうかと、常々思っていたが、従来、モデルに対して縛られるという事を納得させる為には、どうしても最初に「只縛る恰好をするだけですから、痛ければ痛い」と云って下さい。直ぐゆるめますから」と前置きする必要があつたので、どうしても十分満足のゆく縛り方が出来なかつた。それに縛つて、さてポーズをつけている最中でも「痛くないですか、辛抱出来ますか？」と度々尋ねて氣を使わなければならないので、もう此処で一息という所でも、モデル嬢が、「痛いわ」と云えば、折角のポーズも中止してしまわなければならなかつた。中には背後へ廻つただけで、まだ縛らない中から「痛いッ」という女さえあるので、いつも撮映前に考えていたアイデアの何分の一さえ満足することが出来ない有様であつた。

扨て本日は愈々逆さ吊りを敢行する事になつたが、胡魔化しやトリツクのきかないものだけに、モデル嬢の理解と協力が最も必要な条件となるのだが、幸いに川端棚子嬢の全面的な協力の申出によつて、我々は勇氣百倍の思いがした。場所は前から予定してあつた郊外の空家。もう一ト月も閉めきつてあつただけに、畳の上にも廊下の板の上にも埃が積つているので、折角洗つてきた彼女の足の裏が忽ち真黒になつてしまつたのには弱つたが、





とにかく林に囲れた野中の一軒家だけに誰に気兼ねする必要もないのが嬉しかった。

先ず最別は平凡なポーズから椅子や机を用いて撮映にかゝるライト三個つけても心配していたようにヒューズもとばないカメラの調子もよしモデル嬢も今日も出来る限りの苦痛も辛抱しようという有難い申出なので、腰巻一枚の棚子嬢の両手を高手小手に後手に縛り上げ、さて肩から胸、腹部、脛と次第に足首迄ロープを巻きつけて、足首の所では腰巻の下へ日本手拭一枚を忍ばせて、幾分でも綱の喰い込むのを防ぐ手段とする。

長さ三尺ばかりの檜の心張棒に滑車をつけて釣り上げる用意をする。何にしる全身ぐるぐると巻にしているので、長く時間がかかることが出来ない。足首から垂らしたロープを滑車に通して心張棒を立てかけた梯子の上端に通す。



・ライトもカメラもOKという所で足首を上にした縛られた女体はじり／＼と天井へ向って引き上げられてゆく。半ば釣り上ったところで猿轡をしていない事に気づき、釣り上げを一時中止して、豆絞りを口に巻きつける。

滑車が動いて慙々頭の先が畳から離れた時であつた。十四貫五百の重さに耐えきれなくなつた心張棒がメキメキという異様な音と共に折れかけた。走り寄つて抱きかゝえ、事なきを得たが折角三十数分を費した逆吊り撮映の第一歩も、無惨な失敗に終つてしまった。高手小手に縛り上げた両手が下敷きになつたので流石の棚子嬢も痛い痛いと呼んで、縄を解いても暫くは次のポーズにつく事が出来ない位疲労しきつていた。

○九月号 特集 倒錯の告白○

口絵 倒錯の告白画集	竹中英二郎
玲子習作二十態	喜多 玲子
縛られた女の写真集	美の 緊縛
狂い咲くカンナ	羽村 京子
白い腋窩の幻想	三富 浩生
僕という男	中野安太郎
妖しい花びら	寺尾 修治
弱者の醍醐味	村井 健司
憂鬱症の転機	蘭 守
サディストの悲哀	天野 一郎
足部憧憬の悲願	山本 貞輔
鎖夏怪異漫語	嵯峨あきら
変態心理を衝く	波多野 新
彫刻と性について	池 長味
記 録 係	岡田 咲子
中国艶話 夜譚随録	皆田 仁
邪恋の焰	松井 籟子
サド侯爵と殺生関白秀次	高取 辰治
処女性の神秘	的場 通
洋パンを囲む座談会	辻村 隆
加虐淫虐症の種々相	仁比山 等
吉原の淫虐魔	緑 猛比古
陸軍御用達千夜一夜	松本 公恵
ケンプエル江戸参府紀行	伊吹慶太郎
平城夜話 俠盗犬磨	庄司 浩平
桜姫全伝 曙草紙	山東 京伝

○十月号 特集 切支丹迫害史○

口絵 責め場面挿絵集	喜多玲子・構成
切支丹迫害史画集	五井野弘・画
縛られた女写真集	辻村隆・構成
切支丹迫害史	漆島 迫平
氷責めの断罪	赤城 芳年
遊女花菱の受難	花山 剣作
江戸の刺青模様	潮 マリ
マリヤ・マグダレナ	桂 牧次郎
性慾の昇華	赤坂 剛
或る医師の告白	亀岡 恭二
大衆文学に現れた女の責め場	高月 大三
愛と苦痛の錯交	鳥上 源一
恋の烙印	松井 籟子
少女の像	栗村 由美
呻される夢	波多野 新
男色の海	井口 正憲
あらたま村の奥にて	二俣志津子
アブニストの記 へぼきうり	鬼山 絢策
夫婦愛と緊縛の考察	辻村 隆
サーニン	戸森 暁
宿命に哭く	浅田 正人
悪 女	岡田 咲子
江戸時代の墮胎医	福森 耕司
縛られた妻	早川新二郎
遺 書	小峰登美子
猿轡五態	喜多 玲子・画

○十一月号 宗教刑罰戦慄画譜○

口絵 宗教刑罰戦慄画集	風俗便所考 淫書開好記
緊縛の受難(縛られた女の写真)	松井 籟子
悲恋の管刑	高野 雅和
局部装飾としての文身	鬼山 絢策
続・へぼきうり	波外野 新
羞恥と潮紅	朝見 速夫
ストリップ変態記	染田 玄
現代陰間茶屋談義	鷺見 東一
好き者放談	岡田 咲子
続・変態艶書	小田 利美
誌上雑感	嶽 牧一
少年矯正院体験記	藤安 節子
桃色の地獄	三富 浩生
反戦論者の弁	三村 幾夫
夢性の美少年	阿久津 猛
墮胎と出産風俗	井村 幸男
珍版・南国随筆	赤坂 剛
羞恥心の発達	中河津規男
都会の異態交響楽	畑村 連治
江戸奇習 縁切寺	桂 牧次郎
悪魔と口紅	杉山 清詩
癡狂文学者の研究	井口 正憲
ジャン・ベルネル夫人の狂楽 シャルロット	紀市 郁栄
男性魔の虜	漆島 迫平
性愛描写の文学	
切支丹迫害史	

囚^{しゅう}衣^い

古川裕子

出^い会

私が始めて現在の夫と出会ったのは、終戦後間もない昭和二十年十一月頃の事でした。あの凄じい東京空襲の日、たつた一夜のうちに天涯孤独となつて、この世に残された

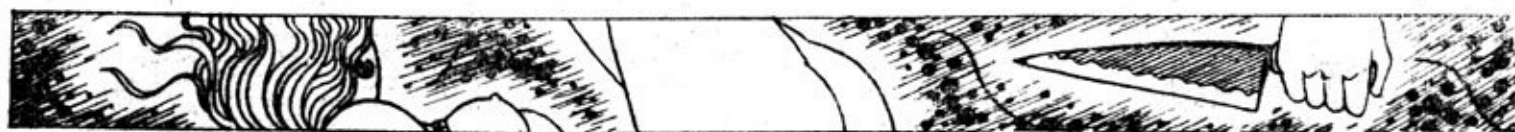


私は二十五歳の自分自身を、自分以外には誰も養つてくれるものはなかつたのです。私はある運送会社の事務員に雇われました。二十五才とは云え、一度は何の興味もなかつた結婚生活を体験して来た私は、——しかし戦後の、のびのびした開放感のうちに何かしら再生の喜びを感じていました。一食食べれば次の目当てのない当時の食糧難も、それ程苦痛とは思われませんでした。私の仕事は、トラックに積む荷物の記載、仕事を終えて帰つたトラックの帳簿上の整理事務などでした。従つて多くの運転手や助手達とは仕事の上で大いに接触がありました。まして何と云つても破婚したとは云え、現在は一人在る女です。目にも立ちますし、そうでなくても、齢には見えなく小柄で子供っぽくぼつてりと太つた私が、運転手たちの恰好なからかい相手となつたのは、ごく自然な成行きでした。それらの運転手の中に現在の夫が居たのです。荒つぽい彼らのうちで、彼はむしろ細面のインテリらしい、おとなしい人柄でした。口数がすくなく比較的色白の顔に眉が濃く、そして背が高く殊に彼の指は驚く程白く長く——まるで芸術家、それもピアノリストの手のようでした。神経質そうだが優しみのある彼は、当然多くの女事務員達の注目の的となつていました。妙なことに、彼はいつもマスクをかけていました。始めて私がこの会社に入つたのは十一月の始めでしたが、それから翌年の四月頃まで彼の顔からマスクが離れたことがありませんでした。真白い大きなマスク、それはいつも清潔で、ちよつと外科医のようにさえ見えました。当人は、

集 惑溺の愉悅

せられ、その上から縛られて一晩を雨中の木

「戦争中外地で硝煙にのどを痛めてからひどく風邪をひきやすいので」と云っていました。私は彼に、いや彼の人柄よりももつと、このマスクに魅惑されてしまったのです。と云うのは、私自身マスクに対して特別な感覚をもつていたからです。私は少女の頃から恥しい悪習がありました。元来このようなことは、普通の人は、それ程それに溺れきるということはないのでしようが、特別な精神病的な素質があつたためでしょう。私は全くそれに耽溺致しました。私はひまさえあれば、夜と云わず昼さえもこの秘密の楽しみにふけつていたのです。ある日それを母に発見されました。母から父に伝えられ、厳格な父母は懇々と不自然行為の怖しさを述べ、一人娘の私を訓戒しました。そして二度とこの悪習をくりかえさぬことを誓わせられました。しかしどうしてこの身の中にうずくような快感を捨てきれましよう。二度三度と発見されているうちに折檻を受けるようになりました。秘密の楽しみに恍惚としていた私は、忽ち細引で固く後手に縛られ膝足首まで括られてしまいます。その時、口には誓いを破つて嘘を云つたかどで、厚いマスクをかけられました。私は下半身の偶からつきあがつてくる悩しさに縛られた身を畳にこすりつけて猶も身悶えるのです。だんだんとお仕置は激しくなり、ゴムの合羽をき



に括られたこともありました。その時でさえ私の口には必ずマスクがはまつていたのです。私はこの辛い折檻に、いつの間にか激しい愉悅を覚えるようになりました。身にくいこむ縄の味、口鼻をピッタリとふさぐ厚い厚いマスク、フードや肩を叩く雨の音を一晚中聴いているゴム引のレインコート、そんなものが中途半端で無理矢理やめさせられた、Onanieの感覚と一緒に、何とも云いようのない楽しみとなつたのです。これが私が感じた最初のマゾヒズムの感情でした。ですからマスクや縄やレインコートは、私にとってOnanieの時の性感と直結していました。後年一度結婚しましたが、結婚後でさえそれを止められませんでした。そして正常の交渉には全く不感症で、その方に対する興味は全然ありませんでした。しかし今、彼の大きな厚いマスクを見ていると不思議に小娘のように、やるせない胸の波立ちを覚えるのでした。私も次第に彼と同じように顔の半分もかくれてしまうマスクをつくつて、会社への往復は勿論仕事でも尤らしい理由をつけて、出来る限り離れませんでした。そうした私を視る彼の眼が、異常に輝いて

【筆者略歴】

大正十一年、官吏の一人娘として東京に生る。東京某薬専中退、二十才にて結婚、約三ヶ月にて破婚となる。戦災にて天涯孤独の身となり、終戦後某運輸会社に勤務しのち現在の夫と結婚東京西郊T町に居住、夫は独立して陸上運送会社を経営す。

いるのに気がついたのは、それから間もなくの事でした。ある日彼は、そつと寄つて来て休日に郊外に行くことを誘いました。私は何か待つていたものが、とうとう来たような思いで早速承知しました。私たちは約束の日、二つのマスクをならべて郊外に行きました。そしてその日の終りに二人は大きな厚いマスクをへだてて始めて接吻しました。奇妙な接吻！これがこの二人の異常性欲者の出会いでした。彼のマスクに対する特別な愛——呼吸を防ぐことによる充血感——の理由をきいたのもこの日でした。

一月後、私たちは急速に結婚しました。

新 居

私達が同僚や職場の課長等に祝福されて結婚して間もなく彼は会社をやめました。割合に目端のきく彼は、終戦のドサクサに、いろいろの手ずるで相当まとまったものを揃んでいたのです。私達は東京の西郊の田舎町にささやかな新居をかまえ、しかも独立してトラツクをもち、その街と東京の間の、小さい運送業を始めることが出来ました。結婚後約半ヶ月は殆ど何事もなくすぎました。私たちのその間の交渉は至つて平凡なもので、特に私には大した興味を持ち得ませんでした。私は結婚したことを何か損をしたようにさえ思いました。しかし交拝時夫も私もマスクをかけたまま、行くことが、以前より少しはましでした。私はただマスクの魅力によつて、かつての折檻の楽しみを想像することによつてのみわずかに興奮を感じるばかりでした。そ



して満足は相い変わらず Onanie に求めました。又その際の惨酷な凌辱への連想が感情をかきたてるのでした。

その頃のことです。夜十時頃夫は何時になく酒気をおびて仕事から帰つて来ました。そしてあたたかく火を入れた部屋に入るなり、私を組み敷き、上半身を裸にして細引で後手に縛りあげてしまいました。余り突然だったので私は呆然として、少女の頃の父の折檻を受けているような錯覚にとらわれました。私の口の中には容赦なく布片がつめました。齒と齒の間には手拭を喰まされて、うなじで括られました。そして日本手拭でその上から、しつかりと口鼻をおうてしまうと、夫は私を姿見の前にひきずつてゆき、鏡の前で私の腰紐を一つ一つ解いてゆきました。私は恥しさと悩みに身悶えながら、それでも苦しい呼吸の下から目をひらいて鏡に写る自分の姿をかいま見ていました。一枚一枚と私は着物を剥がれ、遂には、猿ぐつは以外には私の身体を蔽う一枚の布片もなくなりました。私は全身をねじ切られるばかりの興奮を感じました。部屋は火を入れてあるとは云え冬の事です。相当以上寒かった筈ですが、私には、むしろむしろされるような、汗のにじみ出る思いでした。夫はそうした私の足をしつかりと細引で縛つてしまうと、私の上半身を台の上にうつ伏せにし、竹の物差しでピシリと背を打ち始めました。私は思わず身をよじります。すべては鏡の前で行われているのです。私は苦痛と快感とのいりまじった気の遠くなるような恍惚感の中に居ました。やがて夫は私の身体の乳房の部分を、自分の分泌物で汚して

しようと、私を抱きあげて猿ぐつわをとつてくれました。苦しい息は楽になりましたが、口内につめられた布のために、口の中はカラカラに乾き、すぐにはものも云えない有様でした。しかし心の中には今まで感じたことのない夫への限りない愛情に溢れてきたことに気づきました。夫は私を抱いて「苦しかったかい」と聞きました。私はだまつてコクリとうなずきました「怒つた？」私は静かに首をふりました。そして縛られた身のまゝ夫の胸ににじりよりながら「嬉しかったわ、私は貴方のもの、あなたの好きなようにしていいの」と想いをこめて申しました。

男性に心からの愛情を感じたのは、これが生れてから最初でした。夫の目は歓喜に輝きました。私はそこで鏡うつる、まる裸の後手姿の自分を見つめながら、それまで誰にもうちあげたことのなかった、前にも申した少女時代の体験を語りました。縛られる楽しみ、むしろ折檻を待ちもうける気持、厚いマスクをはめられた時の息苦しいが、しかし、甘美な孤独な、しいたげられた想い、口をふさがれるとおこる身体の一部のやるせない充血感、縛られた素膚にさわるゴム引羽二重のレインコートのぬめぬめしたゴムの感触、そしてフードや肩をうつ雨の音、異常を云い出したかねた前の結婚生活の味け無さ等々。夫はびつくりしたように私のとぎれとぎれの話聴いていました。話が終ると、縛られた私を、しつかり抱いて「俺は幸福だ。今まで遠慮していたのがおかしい位だ。自分も女の責めに強い興味を感じている。マスクの好きなこともその一つの現わ



れだつた。この二人が出会つたことは何という幸いだろう。これからは二人で心ゆくまで楽しもう。世間の人が誰も知らない。二人だけの秘密の楽園を持とう」と情熱をこめて申しました。あゝ二人が一致していたのはマスクに対する感覚だけではなかったのです。私はたゞ「私は貴方の奴隷、貴方は何をしてもいいの」と歓びにふるえる声で低く答えるばかりでした。

それから

その日から私達の準備が始まりました。

ひまがあると二人同伴で出ていろいろな道具を買い歩きました。これは二人にとって、秘密の楽しい買い物だったのです。いろいろな種類の麻縄、犬の鎖、そして犬の頸輪も各種そろえました。これは私が嵌めらるべき首枷手枷足枷をこの頸輪と針金と錠前とを組合せて作るためです。乗馬用の鞭のほか、革紐、ゴムベルト私の囚衣たるべきピンク、赤、茶、銀ねずみ等いろいろな色のゴムレインコート等々。準備がととのうと、今度は折檻の標準表を二人でこしらえました。つまり私の体力も考慮して、末長く二人の遊戯が楽しめるように一定の基準を作ったわけです。夫の仕事の関係上、休みは必ずしも一定してはいません。むしろ留守勝でしたが、やはり心ゆくまで遊ぶ日は週に一度と決めました。しかしその他の日でも軽い遊戯はしないこともないのです。

このようなサディズムとマゾヒズムとの第一歩は何と云つても縛ることと鞭打つことでしょう。これが基本となつて、それに多くの変化が与えられるわけです。このような遊戯の理由は、必ず私が夫から微罰を受ける形式にしました。精神的にもマゾヒストの私には「虐げられる」という感覚が是非必要だからです。微罰の重さの判定は夫がきめます。その方法は私と夫の趣味を考慮して、いろいろ工夫しました。

私は玄関のコンクリートのたたきの上に、じかに正座させられて判決をうけます。刑罰がきまると、直ちに一切の衣類をその場で剥がれ、素膚の上に囚衣である羽二重ゴム



引レインコートをきせられます。罪の重さによつて、この囚衣の色がちがうのです。犬の頸輪二つを針金でつなぎ、片方ずつに頑丈な錠前をつけた手錠が私の手首に嵌められます。大抵は後手錠です。口にはやはりゴム布製の大きなマスクをさせられます。これは厚いガーゼが入っており、鼻孔にあたる部に小さな二個の呼吸孔があけてあります。マスクはびったり鼻と口をおほいつくして、呼吸はわずかにその厚いガーゼを通して二つの小孔から出来るだけです。そしてフードをすっぽりかぶらせられ、フードもろとも、太い犬の頸輪で首枷として咽喉をしめつけられ、その首枷につけた鎖で背中の手錠と連絡しています。私は前かがみになつて、丁度苦行を受けている修道女のような姿となります。足には矢張り犬の頸輪製の足枷をはめられますが、これはやつと歩ける程度に両方の足枷間の鎖が三十糎程の長さにしてあります。そして夫は手錠についた鎖の縄尻をとつて女囚の私をひつたてゐるのです。私はよろめきよろめき、折檻部屋におくられてゆきます。

折檻部屋は、地下室で、それまでは物置に使つていたところでした。丁度六畳ばかりの広さがあり、茶の間の床をあけると階段がありそこへおりてゆかれます。息抜以外には一つの窓もないコンクリート壁の地下室で、階段の尽きるところには鉄の扉があります。私たちはこゝを片付けて舞台装置をしました。壁の四方及び天井には鏡をつけ、鏡をおけない場所には、黒い紙をはさんだガラスをその代用としました。つまりこの室内で行われる行動は、あらゆる方

面からそれらにうつつて自分たちに見えるようにしたので
す。勿論これらの装置は一つ一つとそろえていつたのです
床には赤い毛布をしきつめ、寝台用のマットをおきました
この部屋は、鉄の柱や天井に近い部に鉄の梁がありますの
で縛つたり吊したりするには、もつてこいなのです。又こ
ゝで呻いても叫んでも殆ど外部に洩れるおそれはないので
す。夫がこの家を買つた理由の一つは、この地下室があつ
たからです。

夫にひつたてられた私は、不自由な危げな足どりで階段
をおりて来ます。そしてこの部屋につき入れられます。こ
こには、電燈も赤いシェードをかぶせてあり、折檻部屋ら
しい怪奇な雰囲気をつたえています。私は大きな鏡の正面
においてある椅子に縛りつけられます。足枷はそこではす
され、囚衣のレインコートの裾はひろげられて、私のもも
と膝と足首は、椅子の両方の脚に別々に括られます。レイ
ンコートの下は全裸ですので当然私のももは正面の鏡にま
ざまざと写っています。身悶えするばかりの恥しさ！夫は
私をそうしておいてゆつくりと折檻の準備をします。麻縄
鞭、猿ぐつわ、ローソク、その他各種の責道具等。……
私は時々目をあけて正面の鏡にうつる自分の姿を眺め、折
檻の用具をそろえる夫を見ます。

集 惑溺の愉悅

すつかり
用意がとと
のうと、夫
は私の背後

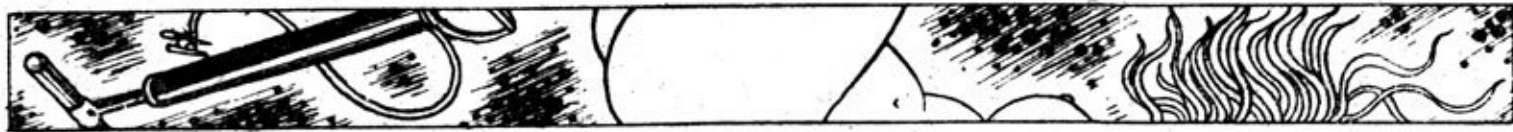


に廻り、まずフードをぬがせ、ゴムマスクをはずして、口
の中に布片をつめます。この布片は夫の汚れた靴下か、或
る時は私自身の今剥ぎとられたばかりのズボースであるこ
ともあります。そして口と鼻をおくう嚴重な猿轡。この猿
轡は夫の臭の泌みこんだ禪をもつて行われます。しかし
一番汚れた部分を口に当てられ、私の苦しい呼吸は、夫の
排泄物や分泌物や汗がついた布を通ってくる空気以外には
吸えないのです。次に手錠をはずしレインコートをぬがせ
全裸にされ、その日の微罰の限度に応じて、或は荒縄で又
は鎖で括られます。一つ一つの縄の締めあげ具合、背中の
手首への吊りあげ具合など、すべては私の罪の程度により
ます。縄のかけ方も沢山の責めの絵や写真によつて二人で
研究した結果にもとずいて、あらゆる方法を用います。え
び責、手足を背中一つにして括つてしまつたり、その日
の折檻の方法にもつとも適応した体位にされます。そして
鞭打。最も普通には長さ一米、幅四厘の厚い革のバンドを
使います。臀や背中には勿論、好んで内股や下腹部や乳房
など、肉のやわらかい部分を力一杯打たれるのです。みる
みる赤いミミズ脹れが走ります。私は一打毎に歓喜と苦痛
がいりまじつた不思議な陶醉に悶えこるび、猿ぐつわの下
からの呻き声は、おさえようもありません。私はそれだけ
で歓喜の頂点に達して、したたるばかりになります。しか
しその歓喜の呻きも猿轡に圧しひしがれて奇妙なうなりに
しかならないのです。最高刑の場合は、最後に猿轡をはず
され、これも外科医の使う麻酔用の開口器で、無理矢理口

なく通過しました。こんな馬鹿々々しい遊びでも、この本
当に狂人の夫婦にはスリルにみちた楽しみなのです。

このように書いて来ますと、そのような凌辱によつて私
の身体はだんだんと瘦せ細つてくると御想像なさるでしょ
うが、そこが異常なのでしようか、反対に元来小柄ではあ
るがムツチリと白く脂がついて来て、自分乍ら、ますます
不思議になまめかしい肉体となつてゆくのです。勿論、身
体中に生傷が絶えませんが、銭湯などへは到底行けませ
ん。着物をぬぐことはすべて自宅ですましてしまうように
しています。とにかく空襲で天涯孤独となつていたので、
やかましい親類もなく、夫の方も東北の田舎に兄が一人い
るだけで、まことにのんきな身の上です。更に隣家が遠い
ので余りうるさい近所附合いありません。しかも夫は平
常はまことに優しい人で、私に満足しています又私も私の
異常性にビタリと合っているこの人をのぞいて、他にどこ
にもつと適当な夫たるべき人がおりましよう。私はいつま
でも世上の新婚の夫婦のように交情は蜜の如くなのです。
これは近所でも評判で街を歩くときは、いつでも二人一緒
です。二人ともおとなしい優しい夫婦として見られている
ので、多少の近所附合いの義理の悪さなどは余り責める人
もないのです。

私は、—そして私達は、今本当に幸福と思つてゐます。
勿論私達は、私たちの浅ましい異常性はよく存じています
おそらく二人は、この異常性に殉ずることになるでしょう
そしてこのような異常な血を後世に残そうとは思つていま



せん。幸か不幸か夫の精虫は私の膈内に入ることは全くな
いのです。結婚後最初の三回を除いて、その後は、そのよ
うなことが全くななくなつてしまいました。従つて子供が出
来る可能性は全然ありません。一つは私達二人だけの楽し
みのために、一つは狂人の血を後世に残さぬために、これ
は却つて幸いです。私たちは周到な注意をして、私たちの
楽しみを末長くつづけてゆけるように考慮をはらつていま
す。しかし結局は、このために身を滅してしまふでしょう
このような悪魔に魅入られた夫婦の異常性は、正常な人
間性への冒瀆であり、神の赦し給わぬことであることはよ
く知つています。しかし私たちはもう、こゝから抜け出せ
ません。善いにつけ悪いにつけこれに殉ずるほかはないの
です。これは遺伝の宿命というべきでしょうか、又悪魔に
屈した私たちの意志の弱さを責めらるべきでしょうか。

この告白がいつたい何の役にたつかは存じません。たゞ
一つ価値があるとしたら、これが「すべて事実だ」と云う
ことです。精神科の医師の研究材料になるなら、それも本
望です。これを私は、夫と二人で頭をつき合せて書きまし
た。何の作為もなく、私たちの性の生活を、ありのまま述
べたにすぎません。

今夜も又この二人は、本当に仲良く、少しでも雨模様な
らば、ゴム引羽二重のレインコートの腕を組み合せ、寒く
なれば厚い大きなマスクを二つならべて街の雑踏を歩いて
いるのです。

(終)

女囚私刑体験記

小坂多美枝

二十五才(仮名)



(記) 中国地方の或る都市で小学校を卒業後ずつとそこに居住していましたが、或る事件で入獄、出所後来阪、只今接客婦として働いております。はからずも貴誌を拝見して私の過去の苦い思い出を拙い筆にのせる機会を得ました。若し御発表になるのであれば、どうか適当な仮名でして下さるよう御願ひ致します。

——原文のま——

◎ 私 は現在二十五才の接客業を職としている一女性です。三年前、ふとした事から獄舎に繋かれ、皆様の想像もされないような女刑務所に於ける悪夢のような生活を体験致しましたので、こゝに恥を忍んで御報告しますのも或は何かの御参考になる事と存じまして、敢て筆をとらせて戴きました。

原爆によつて一切の財産と父とを失つて戦後のインフレの中に多くの家族を抱えて途方に暮れていた私は少しでも収入のよい仕事と職を探しましたが、小学校より出ていない私には事務員にもなれず、その頃募集していましたが広島市のバスの車掌を志願しました。

激動する車内で一日中立ちずくめの仕事は女にとつて決して生やさしいものではありませんでした。私の収入を唯一の目当として

一家の生計をとにかくにも支えてゆく事が出来たので、生理休暇の日でも務めて休まないようにして一生懸命に働きました。

仕事が無れるにつれて、私達従業員の間で醜い裏面の事が目につけてきました。それは同僚のバスガール達は、相棒の運転手と共謀したり、或は単独で勤務が終つて後、売上金を秘かにシャツの裏に作つたポケットやズロースの中に隠して二百円から五百円位の金を盗み出しているのです。

極度の貧窮のうちに育つた私でしたが、度々同僚や運転手達から誘惑されましたが、そんな恐ろしいことだけは、どんな事があつても決してやるまいと固く決心して拒絶しておりました。そんな私でしたのに、悪魔に魅せられたとでも云うのでしょうか、今でもはつきり覚えておりますが、丁度六月の給料日の二日前でした。朝、家を出る時、母から今日の米の配給があるので千円程入用なのだが、なんとかならないかと言われたのです。気の弱い私は前借を申出ることも恥しくて、ついふらふらと皆もやつている事だもの一回位なら分りはしないだろうと、見様見真似で勤務中に便所へ行き、売上金の中千円をゴマ化してズロースの中へ忍ばせてしまつたのです。

然し運の悪い時は仕方のないものです。その日、入庫と同時に一斉に厳重な身体検査がありました。慣れない私の事ですから、勿論すぐ見つかりました。平常から無口でお世辞も下手な私は上司からの覚えもよくなく、容赦なく警察へ突き出されてしまいました。

出来心による最初の犯した罪であることを言い解く術もなく、娘心を踏みにじった警察に於ける無慈悲な取調べに幾分反抗的だった私は常習犯と見做され検察庁から裁判所へ廻され、判決は懲役六カ月でした。

私はともかくも悪い事をしたのだという自責の念がありますので、私一人を頼りにしている貧しい家族のことに心を引かれ乍らも深く服罪する覚悟で控訴もしませんでした。そして悲しみの中に、山間の盆地にある某女囚刑務所へ護送されました。八月の末の残暑の厳しい町には、つくつくぼうしが哀れな声で鳴いているのを覚えております。

その日の午後は身体検査や身上調書の作成等で時を過し、夕刻入浴の後、草色の作業服のような獄衣の支給を受けて、それを身につけました。下着類は初めは入所の時のまゝだそうで、食べるにやつとの貧しい生活をしてきた私はシユミーズも持たず、つぎはぎだら

けの色の褪せたズロース一枚だけで、若い女看守にじろく見られて穴へでも入りたい思いを致しました。

夕食後、一人の女看守と取締りらしい年かさの女囚に連れられて、いよく鉄格子の檻の中——雑居房——へ入れられることになりました。廊下を通つてゐる時、附添いの女囚は、そつと小声で囁きました。

「お前、ズロースの中へお金をかくして来てるだろうね？」

「いゝえ、何んですの？」

と何気なく答えますと、その女は唇を曲げて変な笑いをして

「今夜は又大騒ぎか——」

と呟きました。私には、はつきり事情が掴めませんでした。無一文だと酷い目に会わされるのではないかと不安で生きた心地もありませんでしたが、やがて、第六雑居房と書かれた部屋の前迄来ますと、女看守は鍵で鉄格子の戸を開け

「室長、新入りだよ」

と言ひ乍ら、どんと私の背中を突きとばしましたので、私は転がるように房内に投げ込まれました。室長と呼ばれた女は、二十三位の、一目であばずれ女と判る二の腕に入墨

をした女囚でした。（後で聞くと淫売婦上りの殺人犯で十年の刑を受けて入つてゐるのだそうです）冷たい蔑むような目付で私の方にちらりと視線をうつすと

「新入り、十時迄そこに坐つてろ」

と言つたまゝ、又ごろりと横になりました。二十畳位の広さのこの房内には三十四五人の女囚が目じろ押しに詰め込まれて、皆一様に異様な臭気を発散して、蒸し暑い空氣がムツとしていました。間もなく一同は寢床の準備にかゝりました。

刑務所の就寝時間は八時半で、それから担当看守の巡視があります。巡視が終るや否や室長は「全員整列」と叫びました。（後で知つた事です）が、此処では夜の十時以後は全く取締りの目の届かない、生き乍らの地獄のような浅間しい所になるのです。皆はそろそろと起き出して、室の両側に二列に並んで坐りました。

何が初まるだろう、と思つていますと、皆がじろじろと私の顔を眺めますので、あゝこれはいよく何かやられるのかと思うと、じろと冷汗が腋の下を伝つて流れました。

「新入り、挨拶だ」

という室長の声と共に、やはり淫売婦上り

らしいパーマをふり乱した女囚が二人、両方から私の両手を捻じ上げ、ずるずると室の真中に連れ出しました。

「おい、新入りお土産を股倉に挟んで来たろうな、早くお出し」

此処へ入ってくる時には、股倉にお金を五千円程隠して入牢し、室長に差出すのが定めになっているのです。そんなお金を何に使うのかと不思議に思われるでしょうが、室長達が女看守を買収してヘロイン等を差入れさせる元手となるのです。だから此のツルを持たないで入獄した女囚は、四十才以下の者ですと「娼婆忘れ」という淫靡で卑猥な踊りを一糸まとわぬ素裸のまま、獄内の真中に於て女囚たちの環視の中で踊らされるのです。

室長の問いに私はおすおすと慄え乍ら

「何も持つて来ませんでした。どうかお許し下さい」と答えますと

「なに、又文なし、太いあまつちよだ、ツルなしでよくも、のこくと此の地獄へやつて来やがつたな、よし、挨拶は股のぞきをさせてやるから股間から顔を出して立ちな」

両側に並んだ女囚たちが好奇心の眼を輝やかせて見ている中で私は前屈みに坐らされ、室長の股の間から無理に顔を出させられました

私が室長の両股に顔を挟まれている時、二人の女囚が走り寄って私の囚衣の裾をさつと捲り上げたので、つぎだらけのズロースが満座の中で丸出しにされ、思わず私は自分の頬が染まるのを覚え、無意識で腰を下げますと、

「しやんと、しやがれツ」とお尻を蹴とばされました「汚いズロースをはいてやがるな」と室長が顧つて言う、一同はどツと笑い声を挙げるのです。それから私は、股の間から顔をのぞかせ乍ら、名前、年齢、何んで食らい込んだか。男を知っているか、等を答えさせられました。此の挨拶が終ると

「新入りに娼婆忘れを踊らせろ」

と、室長は自分の近くの女囚に命じました。大柄な二人の女囚が踞っている私に躍りかゝると、必死に抵抗するのを無理矢理に一枚一枚と囚衣を剥ぎとり、ズロース一枚としてしまいました。余りの事に私は「キヤーツ」と悲鳴を挙げると、二人は愉快そうに私を見下し乍ら、ズロースに手をかけてズル／＼と脱がしてしまいました。

素裸にされた私は両手で前を押えて、うずくまつて、しく／＼と泣き出してしまいました。そうです。最初から私をひどい目に遭し

ていた二人の女囚です。泣いている私のお尻を力一ぱい蹴つて

「こら、踊らんか」とけしかけました。

「どうして踊るのか知りません」

と答えると、室長はさも憎そうに口をゆがめて言うのです。

「明子、新入りはトウシロだとよ、何も御存知ないんだ、お前さん手本を示してやんな」

明子と呼ばれたでつぷりと肥った三十位の年増女が、前に出て寝衣を脱ぎ乍ら

「ズロースだけは御免なさい」

と両手を畳についてへいつくばりますと、室長は「よいよい、早く踊れ」と答えます。

黒いズロース一枚になつた明子は室長の前に立つてさつと一礼すると

「スツテン、スツテン、スツテンテン、スツテンばかりは参りませんお次はよいのが参ります。スツテン、スツテン、スツテンテン」

と大声で囃子ながら、丁度相撲とりが四肢をふむ時のような仕草で、股が裂ける程開いて、片足を頭よりも高く挙げたり、或は両足を開いて自分の股の間に頭を入れて股のぞきの恰好をしたり、お尻を調子をとつて上下に揚げ降しする奇妙な踊りなのです。

明子の手本がすむと愈々私の番なのです。

然し運の悪い時は仕方のないものです。その日、入庫と同時に一斉に厳重な身体検査がありました。慣れない私の事ですから、勿論すぐ見つかりました。平常から無口でお世辞も下手な私は上司からの覚えもよくなく、容赦なく警察へ突き出されてしまいました。

出来心による最初の犯した罪であることを言い解く術もなく、娘心を踏みにじった警察に於ける無慈悲な取調べに幾分反抗的だった私は常習犯と見做され検察庁から裁判所へ廻され、判決は懲役六カ月でした。

私はともかくも悪い事をしたのだという自責の念がありますので、私一人を頼りにしている貧しい家族のことに心を引かれ乍らも深く服罪する覚悟で控訴もしませんでした。そして悲しみの中に、山間の盆地にある某女囚刑務所へ護送されました。八月の末の残暑の厳しい町には、つくつくぼうしが哀れな声で鳴いているのを覚えております。

その日の午後は身体検査や身上調書の作成等で時を過し、夕刻入浴の後、草色の作業服のような獄衣の支給を受けて、それを身につけました。下着類は初めは入所の時のまゝだそうで、食べるにやつとの貧しい生活をしてきた私はシユミーズも持たず、つぎはぎだら

けの色の褪せたズロース一枚だけで、若い女看守にじろく見られて穴へでも入りたい思いを致しました。

夕食後、一人の女看守と取締りらしい年かさの女囚に連れられて、いよく鉄格子の檻の中——雑居房——へ入れられることになりました。廊下を通つてゐる時、附添いの女囚は、そつと小声で囁きました。

「お前、ズロースの中へお金をかくして来てるだらうね？」

「いゝえ、何んですの？」

と何気なく答えますと、その女は唇を曲げて変な笑いをし

「今夜は又大騒ぎか——」

と呟きました。私には、はつきり事情が掴めませんでした。無一文だと酷い目に会わされるのではないかと不安で生きた心地もありませんでしたが、やがて、第六雑居房と書かれた部屋の前迄来ますと、女看守は鍵で鉄格子の戸を開け

「室長、新入りだよ」

と言ひ乍ら、どんと私の背中を突きとばしましたので、私は転がるように房内に投げ込まれました。室長と呼ばれた女は、二十二三位の、一目であばずれ女と判る二の腕に入墨

をした女囚でした。（後で聞くと淫売婦上りの殺人犯で十年の刑を受けて入つてゐるのだそうです）冷たい蔑むような目付で私の方にちらりと視線をうつすと

「新入り、十時迄そこに坐つてろ」

と言つたまゝ、又ごろりと横になりました二十畳位の広さのこの房内には三十四五人の女囚が目じろ押しに詰め込まれて、皆一様に異様な臭気を発散して、蒸し暑い空気がムツとしていました。間もなく一同は寢床の準備にかゝりました。

刑務所の就寝時間は八時半で、それから担当看守の巡視があります。巡視が終るや否や室長は「全員整列」と叫びました。（後で知つた事です）が、此処では夜の十時以後は全く取締りの目の届かない、生き乍らの地獄のような浅間しい所になるのです。皆はそろそろと起き出して、室の両側に二列に並んで坐りました。

何が初まるだらう、と思つていますと、皆がじろじろと私の顔を眺めますので、あゝこれはいよく何かやられるのかと思うと、じろと冷汗が腋の下を伝つて流れました。

「新入り、挨拶だ」

という室長の声と共に、やはり淫売婦上り

らしいパーマをふり乱した女囚が二人、両方から私の両手を捻じ上げ、ずるずると室の真中に連れ出しました。

「おい、新入りお土産を股倉に挟んで来たらうな、早くお出し」

此処へ入ってくる時には、股倉にお金を五千円程隠して入牢し、室長に差出すのが定めになっているのです。そんなお金を何に使うのかと不思議に思われるでしょうが、室長達が女看守を買収してヘロイン等を差入れさせる元手となるのです。だから此のツルを持たないで入獄した女囚は、四十才以下の者ですと「娼婆忘れ」という淫靡で卑猥な踊りを一糸まとわぬ素裸のまま、獄内の真中に於て女囚たちの環視の中で踊らされるのです。

室長の問いに私はおずおずと慄え乍ら

「何も持つて来ませんでした。どうかお許し下さい」と答えますと

「なに、又文なしか、太いあまつちよだ、ツルなしでよくも、のこくと此の地獄へやつて来やがつたな、よし、挨拶は股のぞきをさせてやるから股間から顔を出して立ちな」

両側に並んだ女囚たちが好奇心の眼を輝やかせて見ている中で私は前屈みに坐らされ、室長の股の間から無理に顔を出させられました

私が室長の両股に顔を挟まれている時、二人の女囚が走り寄つて私の囚衣の裾をさつと捲り上げたので、つぎだらけのズロースが満座の中で丸出しにされ、思わず私は自分の頬が染まるのを覚え、無意識で腰を下げますと、

「しやんと、しやがれツ」とお尻を蹴とばされました「汚いズロースをはいてやがるな」と室長が顧つて言う、一同はどツと笑い声を挙げるのです。それから私は、股の間から顔をのぞかせ乍ら、名前、年齢、何んで食らい込んだか。男を知っているか、等を答えさせられました。此の挨拶が終ると

「新入りに娼婆忘れを踊らせろ」

と、室長は自分の近くの女囚に命じました。大柄な二人の女囚が踞っている私に躍りかゝると、必死に抵抗するのを無理矢理に一枚一枚と囚衣を剥ぎとり、ズロース一枚としてしまいました。余りの事に私は「キヤーツ」と悲鳴を挙げると、二人は愉快そうに私を見下し乍ら、ズロースに手をかけてズル／＼と脱がしてしまいました。

素裸にされた私は両手で前を押えて、うずくまつて、しく／＼と泣き出してしまいました。そうです。最初から私をひどい目に遭し

ていた二人の女囚です。泣いている私のお尻を力一ぱい蹴つて

「こら、踊らんか」とけしかけました。

「どうして踊るのか知りません」

と答えると、室長はさも憎そうに口をゆがめて言うのです。

「明子、新入りはトウシロだと言、何も御存知ないんだ、お前さん手本を示してやんな」

明子と呼ばれたでつぷりと肥つた三十位の年増女が、前に出て寝衣を脱ぎ乍ら

「ズロースだけは御免なさい」

と両手を畳についてへいつくばりますと、室長は「よいよい、早く踊れ」と答えます。

黒いズロース一枚になつた明子は室長の前に立つてさつと一礼すると

「スツテン、スツテン、スツテンテン、スツテンばかりは参りませんお次はよいのが参ります。スツテン、スツテン、スツテンテン」

と大声で囃子ながら、丁度相撲とりが四肢をふむ時のような仕草で、股が裂ける程開いて、片足を頭よりも高く挙げたり、或は両足を開いて自分の股の間に頭を入れて股のぞきの恰好をしたり、お尻を調子をとつて上下に揚げ降しする奇妙な踊りなのです。

明子の手本がすむと愈々私の番なのです。

黒いズロースをはいても、中々官能的な踊りなのですが、私はズロースさえ剥ぎとられて丸裸なのですから、見る方にとつては此んな面白い見物はないでしょう。今迄親兄弟にも見せた事のない隠し所を人もあらうに女囚達の前に踊りながら完全にさらけ出さなければならぬのです。死ぬ思いで立ち上つた私は見真似で

「スツテン、スツテン、スツテン……」とスツテン節をはやし乍ら、無我夢中で踊るといふよりも、手足を只動かしているばかりでした。女囚達は食い入るような目付で私の身体、特に或る部分を息をはずませて見つめているのです。恐らく私の一生の中で、此れ程口惜しく、恥しかつた事はありませんでした。

然し、これがまだ序の口で、口にも筆にも出来ないような恥しい浅間しい目に遭わされました。例えば素裸のまま四つん這いになつて、淫売婦上りの女囚の身体の或る部分を口と舌で一時間以上も……等ですが、これ以上とても筆にする勇氣はありませんから、これ位でお許し願います。又次にでも、続きを書かせて頂く機会があると思います。

讀者通信

○
此れは性的女責に対する単なる告白文ではない。深刻にして貴重な真の体験記である。小説とか理想空想論や美辭麗句の羅列では勿論ない。自讃ではあるが、これ以上の真正体験記はまだ世上にはないと思つてゐる。自分は会社々長で他に重役も二三兼任してゐて、現在四十九歳、常住地は東京都内と大阪市。妾の一人に待合をさしてゐて、自家用車を自分で運転して時折通つてゐる。

近頃性的女責に対する世上の興味意外に多い事を考え、こゝに過去廿年間、あらゆる型の女によつて経験してきた自分の体験記を告白したい。自分は女責と同時に女の脚に対して崇拝狂であることを附言しておく。

この告白記を貴誌に発表される意志あれば次号の編集後記にでも希望の旨を述べられたい。失礼乍ら謝礼は要せず、貴誌への微意と同好者への参考に資したいのみ。自

分は敢えて住所氏名は発表しない。然し自分の言行は必ず実行する。猥文ではないから危険性はなく此れを読んだ同好者は一驚し、礼讃し、大センセーションを巻き起す自信あり。

自分はかつて女に不自由した事なく、従つて真の理想的処女（顔、肌、肉、心等一切）に多く接したが、マゾヒストの育成に成功したのは唯一人あつただけである。然し現在次の理想的女性を探究中。

十一月号を讀みて

大阪駅にて F・T生

（御投稿下さい。）

編集部

○
貴誌の性研究の徹底的なのに驚くと共に非常な魅力を感じます。毎月の配達を回を重ねる毎に待遠しい位で、赤裸々な告白は作り話では出来ない境地が表れていて興味深々たるものがあります。精力的な活動力のある人は必ず或る程度迄所謂変態的になつて行く事がそしてそれが素質的にも含まれてゐるという事が判つた様な気がします

（沼田邦人）



香^テ具^キ師^ヤ放^フ談^{ダン}

浮家鷹三



私は以前から現代香具師の真相に就いて書いてみたいと思つていたので、それを余り赤らさまに書くということは、今現にこの商売をして居られる方々に、或は御迷惑にならないとも限らぬ事を考え躊躇して居りました。

とは云え又皆さん方の中には、彼の街頭で賑かに面白い説明をし乍ら商売をしている人に就ての認識の足りない為に、時として、「飛んでもない品物を買つてしまった」と今更の様にコボシている人や、オトシマエ（解決）間際の彼の人達には最も大切なソノ瞬間に、得にもならぬ余計な差出口を叩いて恨まれて殴られたり、又、「あれ程実験証明して見せているのだから大丈夫だろう」多年苦しんで居た持病の妙薬だと思ふが買つて間違いないだろうか？等、種々この道に就いての事を、知り度い。聴き度い。と思つて居られる方もお在りになるだろうと考へますので――

そこで私は現在商売をして居られる香具師の人々には、「時代の差」で迷道をこしらへ迷惑を掛けない事にして、それでい

て一般の方々には或程度迄「成る程」と満足をして頂ける様に、する為に私が二十年程前の働き盛りの時代に約六ヶ年余を香具師の仲間として実地に活躍し、またそれに依つて糊口をしのいで参りましたその体験談の形態の中にいろ／＼と皆さん方の求められそうな事柄を織り込んで綴つてみましょう

(一)

私が不図した機会から本職を放棄して香具師の仲間に入つたその動機と云いますのが、当時私はメリヤス生地専門の婦人子供服製造販売をやつていた毛織工場に、その裁断師として勤務中、工場内に転がつている毛紡糸の巻芯に眼が止まつた事に初まるのですから、思えば人生航路程不可思議なものはありません。

その毛紡芯と云いますのは、バット（煙草の名）の吸口（昔はバットを買えば、紙の吸口が付いていた。）を延長した形の総長十三厘位の硬触紙パイプで、その一本の巻芯の中からバツ



トの吸口と同じ位の太さ長さのものと、それと、もう一と廻り細い同じ長さのものと二本取つて残りは捨てるのです。

取つた二本は太さが一と廻り違いますから丁度釣魚竿を継ぎ合す時の様に重ねる事が出来るので、これを口笛調音器と名付けて太細共に各々美しくラツカー塗装をしたものを終日露店へ持ち出して売り始めたのです。

いまから考えますと、随分人を食つた話ですが、これが又奇妙によく売れたのだから、全く世の中と云うものもおかしなものです。

「じゃ、ろう」

だから、香具師のものは嫌いなんだ。

「もう、絶対に買わないぞ」

等と息まかずにまあ〜お持ち下さい。

一体人間は物を買つて、騙したとか騙されたとか云つても、それは極めて微妙な問題ではないでしょうか？

例えば露店で反物を買つたと致します。

水の中で揉み苦茶にしても、これこの通り丈夫ですと実験して見せて呉れたのに買つて帰つてその通りやつてみたら直ぐに破けてしまった。インチキだ。もう絶対に露店では買わない。

とカン〜に怒っている人があります。

よく調べて見ますと、その反物は縦地が非常に強く横地は割合に弱い。そう云つた反物の生地を売手は目茶苦茶に揉み苦茶にしている様に見せ乍ら、実はその縦地の方ばかりに力を入れていた。だが買つて帰つた人は縦も横も目茶苦茶に引張つたから破けてしまった。

右の様な場合はたとえ警察へ訴えられても、問題に成らない事は当然で

「ヨーシ。何奴だッ」

などと飛んで来るお巡りさんなんか、余程世間知らずのお若いのでない限り、マア〜ありませんですね。

それやアその筈ですよ。こんなのは売手の商売上手宣伝上手の一手に過ぎませんからね

「だつて、君。有名デパート等では、そんな紛らわしい事なんかして見せないよ」

と仰有いますが？仲々。どう致しまして。私は何もデパートでインチキをするとは申しませんが、然し吾々香具師仲間であし羽振りの良い、まとまつた資本を動かせる自信のある頭の良し者は、デパート内部に店を出して、そこで宣伝打といつて彼の面白い説明入りで商売をする場合もあるのですから――。

まあ、くどく申し上げなくても、この辺のところでは読者諸賢には合点が参るだろうと存じますが、もう一言つけ加えてから次の項に移りましょう。

かく云う私が、未だ香具師仲間に入る前。本職の洋裁をやつて居た時の事です。

或る有名デパートへ納品する高級別珍生地（ヤシ）の男児服を縫い上げましたが、何しろ生地がズル〜逆に亘るので、縫目に段が付いて、どうにもこうにも恰好がつかなくなり「これアいよ〜弁償ものだぞ」と覚悟しましたがその頃既に新聞紙上に売出期日の公告をして終つた後なのでどうにもならず。

「エーイ、まゝよ。どうにでも成れ」



とばかりそのまゝ納入してしまつたのです。然しやはり気になるので其の売出日にデパートへ出掛けて行つて見たのです。何と、アノ出来損いの服が堂々とウインドの中で、マネキン人形に着せられてソツクリ返つてゐるでは有りませんか。こつちは冷汗がタラ〜です。

だのに、どうでしょう、途方もなく高価なその男児服は至極アツサリと売れてしまつたのでした。

勿論後になつても何の苦情もその買つたお客さんからは来ませんでした。

と、云う様な訳で私はこの時程人間の出鱈目さを感じた事はなかつたのでした。

総ては思ひ様です。誰が見ても判る筈のその出来損いが、デパートなるが故に苦情もなく売れてしまつて行くのです。

これが露店で香具師の売つた物だつたらどうだつたでしょう。この辺でまた先程の私の新考案口笛調音器の説明から面白い香具師符號の話など致しましょう。

口笛調音器と云いますのは、極めて当り前の理屈の物で、少しも珍らしいとか不思議なとか云える代物ではなかつたでした。それは、先ず自分で口笛を吹くのです。

口笛を吹いて、自分の唇にそのバツトの吸口の様なものを軽くあてがい、口笛の音が、つまり鳴りつゝある息がうまくその中を通る様に致します。

口笛の音は細い管の中で充満し反響するので、普通肉声のまゝのより遙かに強い良い音になる。と、こゝろ云う物ですから自然口笛の吹けない人は駄目と云う事になるのです。

私は伴奏楽器のウクレレ等と合奏させ乍ら終日夜店の街頭の一角に立ちましたが、然し何時も間違つて買わない様にと、「口笛の吹けない人は駄目ですよ。口笛の吹けない人は鳴りませんから、子供さんは飽いても買いなさい」と、何度も云うのでしたが、楽器と云うものゝ持つ魅力は余程大きいとみえまして、未だ電気も灯けていない先から、いつも押すな押すな盛況でこの、原価無代に近い様なものが、高音器、低音器と名付けた太細二本の一揃十銭の値段で飛んで行つたのですから、嬉しいやら空恐ろしいやら、何と奇妙な氣持でした。

「そうれ見ろ、矢つ張り、そんなインチキなものを売るんだらう？」つて又もお叱りですか

然し私はこれで結構その頃の夜店礼賛堂を欣ばした積りなのですが――

私の売つた調音器を、「友達が買つて持つて居るから――」と言つて、深夜の道をわざ／＼電車賃迄使つて私の出て居る処を訪ねて来られて「素晴らしいものだ。こんな便利なものゝ有つたのを今日迄知らなかつた。今持つて居るだけみんな分けて下さい」

と云つて聞かなかつた人もあつた程でしたからね。いやもうインチキだの何だのと云つても、矢張りものは思ひ様使い様です。香具師の事を一般の皆さん方は（ヤシ）又は（テキヤ）と呼ばれますが、どちらかと云えば（ヤシ）の方が判り易く呼ばれて居る様です。

私達仲間の者は、お互いを「ヤア様」と呼び合ひして、元は古くは中々因縁故事来歴のある威勢の良いものでも有ります。



私達ヤア様は皆それ／＼思い／＼の商品を持つて商う露店とは申せ、これでも一個の商人である事に成りはありません。

吾々には露店営業組合があります。

尤も永い年月の間には、これと云う資本も失つてしまつて苦し紛れに俗に謂うボツタクリ式の事をやる不心得者も出ないでは有りませんが、然しそう云う不心得な商法は、露店組合としても成る可く許しませんし、又多少でも教養のある人間ならばそんな末恐ろしい商法は執りません。

例えば街頭五目竝べや、張つたバクチ等は本人達が何と云おうとも、是は露店組合の責任では有りません。

従つて又、香具師の仲間でもありません。

香具師は野士とも云いまして、その昔は武士の失業者つまり浪人者の救済の為に、神社仏閣等の縁日の人出の多い処で大道商いをする事を許され（種々と異説もあり）たものだと思へられて居りますが、何しろ武士は商法にはとんと

ウトいのでして、——殊に縁日大道で商売をするにもその場所たるや、それが皆んな彼の土地の顔役親分達の縄張の内になるのでしたら、自然そこに町人とのつながりの必要が生じ時代を追つて今日に至つたものだ、私等も伺つております。

香具師の前身に就ての経緯は彼の、大衆股旅小説の作家、長谷川伸先生や近くは、村上元三先生の、伊太郎××と題した大衆小説にも現れて参りますが、何れも矢張り香具師の前身は歴としたものだと思つて居られる様であります。

また其れなればこそ、ヤア様などと敬称を以て呼び合ひ露店



営業組合のその上の源は全国神農会に依つて発し、その守り神様は神農神社をお祭りしてある訳なのであります。では皆さん方は、香具師と、そうでない一般商人とをどうして見分けるのか。露店で青空の下で喋つてゐる者は全部それと見て間違いないか？等々お知りになり度いだらうと思われまふので、この点も少しお話致しましょう。

露店商人を大別して、ジンとコロビの二通りに別れます。

「ジン」と云うのは、その出し店の間口を広く、一間半から二間位迄出ます。尤も、どのどの世界にも在る様に、顔に物

言わす所謂顔役なる者は二間半もの店を出ける事もあります（カチケン）が流石に三間の店を出す者は在りません。

但し、ジンは黙つて居てお客様を待つのですから、その点少々店が大きくてもいい訳です。コロビはそれと反対です。

店の間口は一間を最大と限定し、小さいのは、密柑箱一つ位のそんなものでも構いません。

一間半もの店を出けると云つたら、それこそ「厚かましい」と云うより「阿呆かいナ」と一笑に附されて、新米扱いの馬鹿にされてしまいます。

皆さんがよく街頭で説明販売をして居る人の店の多きさを御覧になればわかります。

薬草屋さんの様に、厚紙等を地面に敷いて座つて居る人も在りますが、そんな人でも、地面が汚なかつたり湿つていて困る時は大抵どこかの家の扉を一枚借りて来て地面に敷いて居ます



し、台を組んでその上に商品を並べて居る人は勿論、その台に載っている店の大きさを現わしている板は、矢張り扉が多いでしょう。

これは、何も扉を借りなければ成らない等と、そんな事は決つていないのですが、何しろ旅先で扉を貸して貰えば手荷物が助かるのと、それもあります。何と云つても先程申しましたコロビの店の大きさが、その、家の扉一枚に依つて即決する故なのであります。

無論、家の扉と雖も大小長短はあります。窓の扉の様に短いものもありますが、その小さいのが丁度自分の商品には都合よくお誂え向の様な時もあります。

又、表戸等で普通より少し長いものもありますが、そんな時でも「扉が是しか無いんだ」と云う時は「少し大きいな」と思つても、余程の周囲の事情の無い限り、まあ見逃して貰えます。

さきにも述べました様に、ヤア様の初まりの理屈からゆきますと、大道商人は皆ヤア様だと云う事に成るのですが、近世ではどうもその辺のところがアイマイになつて（無論判然させればさせられるが）いる様で――

と云うのが、近時「ヤアさん。と云うのは俺達香具師の事だコロビ、が、ヤアさんなんだ」と考え吹聴し自負する人も多い事であるからです。

コロビ。はジンの。様に黙つていないで、手振り足振りいくらでも面白おかしく説明し乍ら商売する事が出来ます。

従つて又それだけ「精悍無類」口下手や無精な者は無論コロ

ビ等やるべきではありません。やつて見ても失敗の原因です。

コロビは、儲ける時には恐ろしく儲けます普通家店にない、特殊な品物を仕入れて来て売るので、腕次第でウンと儲けます。ジンの人々が重い車を、遠い道程を喘いでいる頃。もうサツサと風呂にでも浸つて、好きな彼女の事でも思つています。然し人生勝利の軍配は矢張りそのジンの方に挙げます。

手軽い品物で儲けが荒ければ荒い程、それだけに身を持崩す場合も多い様です。

コロビを永年続けていた人で、最後に金を残したり出世したりした人は殆んど無いと云つてもいい位です。

ジンの商売は、その商品がいつも略々一定しているので自然顧客本意になり且つ荷物等も多いので、精々自分の土地の近くの縁日夜店で我慢しているに反し、コロビは商品が奇抜で手軽なので、日本全国を股にかけて何処にでも素つ飛します。

それこそ「今日西に在るかと思えば、明日は東に在り」ですコロビでもジンでも「真面目に働いて行く行くは店舗の一つも持ち度い」と云う気持のある人は、その積りで資本を貯めて置いて、一番手近かな方法として、軒店でも良いから定着の屋根の下に入る事を考えます。

ですから露店でないから、あれは香具師ではない。と決めてかゝるのも間違つてゐる時がありますし、又、香具師だから必ず悪い品物だと決めてかゝるのも間違つてゐます。

コロビが一生懸命になつて説明している時皆さん方の中に、何の気なしに云われた一言が非常に香具師の神経を昂ぶらせ、遂にその一ト商売がオジヤンになつて、カン／＼に怒つたその



香具師、つまりコロビの人に殴られた。と云う様な場合はありませんか。

香具師が説明売をやる場合は、オトシマエ（解決）の下手上手に依つて商運が決まります。

つまり私達コロビ商人は、面白い話や方法で人を大勢集めますが、話している裡に、前後左右に立つて見ている人々の、どの人とどの人が買つて呉れそうかな？と云う事がチャンと判つてくるのです。

熟練です。そしてその買氣の一人でも多く付いた最高潮の時極めて好妙に値段を発表するのです。その瞬間の呼吸がピツタリと合わなければ折角懐の財布迄握つて居られるお客様もみんな散つてしまいます。

この瞬間は正に喰うか喰われるかです。

途端に自動車の警笛が聴えても、子供がワツと泣き出しても神経が尖ります。

今や解決をつけようとしたその瞬間「雨やア」「ウワア大きな蛇や」とか。一寸こんな事を云われたら致命的です。

それア雨が降りそうになつていた時、とうとう降つてきたから、そう言つたのなら怒る方が無理ですが、青空で一向に雨は降りそうにないのにそんな事を云つたとしたら、殴られても仕方がありますまい。

(一)

露店商人の活躍時は何と云つても夜店です。

戦前を御承知の方は、十日目に一遍位の割合で、自分の家の

程近くに賑かに開かれるアノ夜店の盛況を御覧になり、また楽まれた経験がお有りでしょう。

その縁日夜店は我々商人側から言つて、どのような種類分けになるかと申しますと次の様になります。

コロビ。ジン。ハボク。ヤホン。パチンコと云う具合です。

コロビ及びジンは先に述べましたが、説明付販売をコロビ。説明をしないで黙つて店を出している露店商人をジンと云います。ハボクと云うのは植木屋の事でヤホンは古本屋。またパチンコとは射的遊戯の事です。

その他、夏場に限つてはギョキン（金魚掬い）又はこれに類した水遊びと、スイ（冷し水物）がジンの中に交つて毎年の決り土（場所）を取ります。

古本屋や植木屋や射的等は、委しく尋ねればまあ、ジンの部類に入るのですが、大体ジンやでもコロビやでもない特定の場所。つまりその夜店の各々の外れに出店している筈ですから、戦前を御存じの方は思い出してみて下さい。

又これから先の縁日夜店がある時は、よく氣を付けて見て下さい、きつと今言つた様な店の出し方になっていますから――

むし暑くてとても宵の口からは寝付かれそうにない真夏の頃は、とり分け夜店は繁昌します。その真夏の夜店に私はアノ新考案の口笛調音器を猶も売り続けました。

私のこの時の服装が大いにふるつていました――何しろズブ素人であつた私の思いつきの香具師始めなのでしたから、りうとした背広姿には、ベークライト側の優美な水筒を肩から斜に



掛け、いとも堂々たる香具師振り——と云う事も後で判つたの
でしたが——

一体コロビ衆（説明売の人達）は各自銘々の商品^{ネタ}に依つて皆
それ〴〵の服装を整えます。

例えば、神仏のお守り売る人は、手に数珠を持つたり宗匠
頭布を冠つたり、また八ツ目鰻等売る人は、釣魚人^{ツリビト}がよく冠つ
ている様な三角型の帽子を冠つて、オラが言葉を使つたりマア
種々と細工をします。

こう云う事も又一つの腕の競いの中に入ります。

ところで私のこの時の背広姿が、エフ打ち（
笛売り）には最上のものであつたそうで、笛に
限らず楽器売りは、コロビ仲間でも相当強敵視
されている処へ、りうとした背広の水筒持ちで
す。いくら私が

「素人ですからよろしく」

と挨拶しても相手はそう受取つては呉れない
のです。

最初の裡は、何処か他所の土地のこの道の一流どころとでも
思つて居たらしいのですから、奇蹟とも云えばまあそんな処で
しようが然しアトで考えるとこれも矢張り冷汗ものでした。

実力の無い者はやがては落ちる。

御覧下さい。その証拠には、あんなによく売れた私の口笛調
音器も、夏が終りに近づく頃になると次第に売行きがガタ落で
時には一文の商いもなく、其の夜の電灯代と衛生費（後片付け掃
除代）を自腹切らねば成らない情けない日も出て来ました。



そんな或る晩の事。今夜も皆目客が寄
でもあり續に触つて、未だ宵の口だと云うに店を片付けて帰路
につきましたが、一つこんな時に悠くりと自分達の夜店の有様
を眺めおいてやろう。と云う氣になつてあちらこちらの店を覗
き乍ら、その夜店の外れ近く迄来かゝつた時、何と素晴らしい楽
の音が聴えて来るではありませんか？

「おやッ」

と思つて私が音する方に近ずいて覗きますと何とどうでし
う？。私等は到底足元も寄付けそうにない、然も私のと同じ
様なものを商つているお友達（同業者）を発見
したのです。

その堂々たるタンカ（説明）と楽器伴奏の実
力に私はしばし呆然として立ちすくみました。
そして其の人こそは、これが真正の私のもの
より先の発明者でありその商品も、セルロイド
で作つた巧妙優美なものでした。

あとで話をきけば其の人は、元東京警視庁外事課に勤務した
事があると云う歴とした前歴のある人で、矢張り好きな道から
今では香具師の仲間入をして居ると云う変り種でした。

道理で、アノネのオッサン（故高瀬実乗）と共に仲良く写し
た当時の台湾慰問の写真や話を余興にして、お客達を笑わせ楽
しませ乍ら悠々の商売が出来るので、最近内地に帰つて夜店を
廻つて居るとの事でした。

この夜以来私は宛ら羽根をむしられた小鳥の様に、自信を失
つて足掻きがなくなりました。



秋風が寂しく梢を渡る頃。私は食わんが為に、今や本腰を入れて香具師の道に研究のメスを入れ、今時に又必然ネタ（商品替の要に迫られたのでした）。

只今迄は縁日露店の裡に主に夜店の話でしたが、読者の皆さん方の中には、間には夜店どころか屋店も出ない恐らくは、年に一回か二回の氏神様のお祭りの時位にしか、露店商人の群にお会いにならない田舎の方々もお有りでしょうから、是からそう云う方面の話に移りましょう。

露店商人はその各々の住居が何処に在つても、何時何日には何処の何と云う町村にお祭りがあつて、しかもその祭りは我々商人にとつて大か中か小かと云う事迄チャンと判つて居るのです。

それには又その日付本と云うのが有りまして、この道の先輩や有志の手に依つて出版された物が有り、大阪でも戦前ですと新世界通天閣下等にも一軒置いてある店があつた筈です。その内容の二三を被露してみます。

（高市の部）

何月何日 播州姫路総社祭 （大）二日

〃〃〃〃 大阪天満天神秋祭（同）二日

〃〃〃〃 泉州堺もつ八幡 （中）一日 以上

ところで先程から申します田舎の氏神様のお祭りとか、何々観音様の御命日とか云つたつまり、四季の祭りとも申せばお判りでしょうか。（四季の祭りの場合は都会も同じ）そう云つた祭りの時に、我々露店商人が各地から出張して店を出す時の事を高市と呼んでいます。

この高市にも小さい処では、僅かに夜だけしが店の出ぬ処もあります。まあ高市と名の付いた以上大抵は、宵宮。本祭りと二日続きで屋夜共出店を致します。

偕。我々コロビの連中がその高市に乗り込みますと、先ず大体コロビの寄場と云うのが言わず語らずの裡に決つていますので、その辺に荷物を下して寄り集ります。

そうすると、若し自分と同じ商品を持つて来て居る者が有るか無いかと云う事が、たとえ顔見知りでない同志でも略々判つて来ますからそこで、其処の高市で二人が同商品で鉢合つたらどうするかと申しますと、マア種々と前々から打合せや約束がしてあつた場合は別ですが、大体同商品で二人位ですと、その高市でのコロビ士の肩と下つまりお宮様の境内に限られた出店ですと、表門と裏門の方に当る二箇所。又、境内の外に出て人家の軒等に店を並べる時も先の要領で肩と下です。

また別に〃打ち込み〃と云ひまして、二人分の場所を一つに縮めて取り、その代り普通より幾分良い場所を取りまして、二人合間で商売をし後でネタ歩（商品原価）を差引いたヨロク（儲け）を折半する方法もあり、この方法ですと、余程売行きと儲けに大きな期待と自信のある場合は三人でも打ち込みでやる時もあります。四人も五人もの鉢合せでは、いくら儲かりそうでも分け合えば先ず〃何しに遠い処迄乗物代を使つて出張したのか訳が分らなくなりますから、そんな時は早々お互いが話し合つて、籤でも引いて負けた方が勝つた方からせめて乗物賃でも貰つてゴイ（帰る）する方が無難でしょう。

ところで私は先程から場所を取ると申しておりますが、これ



は決して勝手に取るのではなく、チャンと場所割りの役目の人から割当て、貰うのです。

取ると云うのは我々仲間では「シヨバを取る」と申しますが、實際理論的に場所を決め取れるのは、その高市での場所割りの責任者及び身内の者か、又はその土地の顔役の出店場所にのみ通用する言葉でして、其他の一般コロビ師は場所は貰うのです（ジンも其通り）場所割りの責任は大抵その土地の、この商売での顔役が当りますが、顔役にそれだけの貫禄がない場合や、また昔からの仕来りで大都会から、何々組。何々会。の親分やその重立つた身内の者が出張して、共に協力して場所を割る場合もありますが、まあ後者の場合は相当な大高市での事でしよう。

場所の割り方は、昔から順々の仕来りに依る事は勿論ですが、お客は出店の方向に添って自ずと通路を求めて行く事になるので、場所割り。出店の種類。境内に留まる客足の多少。この三つが直接神社なりお寺の賽浅箱に影響を及ぼす事になるのですから、高市での我々露店商人の存在は、或る意味に於ては賽浅箱の一級上のドル箱だとも云えば云える訳です。

以上簡単でしたが大体高市の模様も判つて頂けたでしょうか、今度は平日と風市に就いてお話し致しましょう。

私はひと頃のアノ口笛調音器を全然癡めまして、商品からみても正に百八十度の転換をやりました。それは子供の手工玩具チエノ折紙あの、紙で鶴や三宝等を折り上げて行く教育玩具です。

何しろ子供相手の幼稚園にでも行つた様な気持で、朗かに振舞つて先ず子供達に親しまれ、親しまなければ此の商売は成功しないのだから大変です。

子供相手も決して馬鹿にはなりません、親が付いて来て買つて呉れない限り、子供自身には大した経済力は有りませんから、自然我々商人の収入も大人相手のそれに比べると相当劣ります。

其の日その日さえ食つて行ければそれで満足している様なのなら別ですが、人間誰しも慾があり、食つてチヨンなら不時の場合にも困りますから、収入の少い者は夜店だけに依存せず従つて、これからお話しする風市。平日等も打つ（商する）事になる訳なのです。

平日と云うのはその字の示す通り、縁日でも何でもない間の日の事で、人通りの多そうな通り道の片わらに一寸した場所を自分で見付けて出店するか、又はお宮様やお寺の境内にのんびりと焦らぬ気持で売をする事もあります。

私なども大阪では皆さん御承知の、南森町の天満天神の境内でよくこの平日の御厄介になつたものでしたが、その頃の境内にはこの平日を拾年間も打ち続けて居るコロビ師の、MさんやTさん等ともよく仲良く並んで売をした事もありました。

また、天神様のその境内には、ジンの店で毎日決つて場所も定着で出店している表札屋さんに、ガマの油。細引縄。眼鏡屋がらくた古物店等一寸老人の子守がてらの休息所には甘酒茶屋もあると云つた具合の、境内平日としては打つて付けの場所でした。



戦後も七年のこん日。もうそろ／＼そう云つた平日は復活しているのでは無いでしょうか。

次に屋市と云うのは、これも文字の通り屋間にのみ行われる出店市で、大阪近辺での例を執りますと、宗禅寺馬場の屋市。河内久宝寺の市。旭区赤川町の屋市。と云つた具合のものですが、この屋市の場合は、日用品や古着類なら兎も角も、他の一般コロビ師の持つ商品では余りお客には不向きの様でした。

大体が出物市式なものなのですから――。

猶、この平日及び屋市には、会社の勘定日を当て込んで、その会社の門前近くに出店する場合や、バイチ廻りと云つて公私設市場の附近へ出店する事も有りますが、出店に先立つては必ず古参株の者が場所の面倒を見て呉れる筈ですから、決してだんまりで勝手に店を出さないことです。

誰に断つてよいか判らない場合は、自分より先に店を出して居る人の誰かに、

「世話人さんは、どの人ですか？」

と尋ねれば誰でも気軽に教えて呉れます。

世話人さんに、私は何々のネタですが一つお願いします。と挨拶すれば其の人が何処の店の隣りへつけなさいと指示して呉れます。

帰りがけ、決つたショバヒン（場代）や衛生（掃除代）を忘れずに、世話人に預ける事は勿論です。

では、最後にヤサ打ちを御紹介しましょう。

「ヤサ打ち」と申しますのは、人通りの多い繁華な土地の店の間や軒等を賃借して道路の交通に邪魔にならぬ様、店や体を

家の中に入れて商売をする事です。

何しろ露店の時よりも、店の賃借料だけでも其の収入の中から支出する訳ですから、余程儲かる自信がないと下手すると商品迄喰い込んで了つて動きがつかなくなります。

それだけにまた我々の仲間内では、ヤサ打ちをやる人を甲斐性者と認めます。

結局、腕がよい。と云う事に成るからでして、このヤサ打をやる場合の商品には、ともすると一般商人のそれにも劣らぬ程の元手を必要とする場合もある位です。

デパートの地階売場等で宣伝販売でも始める様に成つたら、先ず露店商人の域から一階級昇つたと言つて間違ひありませんし、やがては心掛けと奮闘次第で、家持ちの商人になれる登楼門とも見る可きでしょう。

さり乍ら、露店商人だからと云つて決して卑下するには当りません。

小資本で生活の道をひらくには、こんな手軽い良い商売は先ず他には無いでしょう。

◎ 次号 予告 ◎

「交悦に伴う責めの衝動心理」

KK通信第二号にて発表致しました読者座談会の速記録を掲載します。

ソドミイに関する珍裁判

鳴尾善治

——これはソドミイに関する事件の物語である。多くの人々はこういう話を極端に嫌う。然し嫌うのは知らずに嫌っているのか、さもなければ生れながらの偽善者である。——

シカゴにフリッツ・ランゲという男がいた。初めは司法官試補であつたが、賭博に身を持ち崩して、アメリカへ流れて行つた。ボーイ血洗い、広告貼り、馭者と何でもやつた挙句最後に幸運に見舞われて、或る洗濯業者の娘と結婚した。その洗濯業を彼は自分も習い覚えて、やがて年寄が死ぬと、彼は商売を引継ぎ、店を拡張して、今では全市に二十何箇所も注文引受所を散在させて置くほどの営業振りになつていた。

そのフリッツ・ランゲがひどく周章で、私のところへやつて来た。是非私の力を借りたいのだという。彼の十一人の使用人が警察へ挙げられた。何れも中国人で、いうまでもなく、中国人は洗濯夫としてアメリカ中で一番優秀なものとされており、それに一番安くも働く。私の力を借りたいというのは、その事件の係りの警察判事が私の知合の間柄だから何とかしてくれというのであつた。

それは判事マック・ジンテイで、私はこの男とは一週に二度や三度ボーカアを闘わす仲だが、至つて人好きのいゝ、話のわかりの早い男である。フリッツ・ランゲはどうしてもその中国人を釈放してもらわないと困る、それだけの数の中国人の洗濯夫を早急の間にも一度取揃えることは、容易でないという。

では十一人の中国人が何故挙げられたかといへば、みんなて寄つてたかつてアイルランド土人の子のジャツキイ・マアフィーという

ロマンチックな サデイズム

森山美歌

若しもロマンチックな悩ましいサデイズムという形容があるとしたら妾はきつと此の言葉に当てはまる女だと思ひます。それはいくら普通とは一風変つた性慾を満足するにしても、妾は余りにも不潔なや、程度を越して血を出したり傷つけたりするのは嫌いなんですもの。

でもはちぎれるやうないゝ身体を平素はダブルの背広なんか包んで上品に銀座を歩き廻り、又会社では課長なんかと威張っているのに、妾との閨房ではもう只肉慾の権化となつて恥知らずの恰好をさせられ、奴隷よりももつと酷いあらゆる恥しめを受けて苦悶にのたうち廻るのを見るのがとても愉快ですわ。

人間は誰だつて、人知れず爆発させてみたい性の奔流つてものがありますわ。思ひのまゝに振舞いたい衝動はある筈です。所が俗っぽい体面だの、懐越しの部屋だとか

今年十四才になる紅毛^{あかつけ}の悪童を死ぬほどに打据えたからというのであった。

私は訊いた。

「何だつてそんな目に遇わせたんだね？」

「その子供に××を犯されたからだ」

フリッツ・ランゲは答えた。

「そうか、そういうことなら割合簡単にすむと思う。あの男も本来はアイルランド人だから、打つちやつて置けばその不良少年の方の肩を持つだろう。しかしウイスキーでも飲みながら、何とかうまく話をつける方法もあるうよ」

「それがすこし事面倒なのだ！」とランゲは声を弾ませた。「その××のことを花嫁と奴等はいっているんだが、それが一人の男の持物ではなく、十一人全体の花嫁なんだ！ それも白色とか黄色とかいつた種類の花嫁じゃない！ 手つ取り早くいうと、人間の花嫁じゃなくて、四足の花嫁なんだ！」

「それをジャツキイが犯したというのかね？」

「如何にも」と前司法官試補はうなずいた。

「一体中国人は此国^{ここ}へ来て恐ろしく儉しい生活をして、明けても暮れても金を貯めることばかり考える、そうして最後に財布をふくら

ませて国へ帰るのが理想なんだ。

ところがそういう彼等にもたつた一つ儉約ではすまされることがある——それは何等かの形で性の満足を得ないわけにいかないからなんだ。彼等は洩^{はな}々のように旺盛で、その前には何もものもない。何とかしてそれを満足させようとする。

そこで僕のところの奴等は十一人共同で一疋の豚を買込んだものだ——経済的の見地から見ると、これほど安上りのものは先ずあるまいというわけさ。奴等は共同で或る家の地下室を借りて、そこに寝起きして、花嫁も一緒に棲まわせて置く。ジャツキイというのはその家の管理者の息子なんで、それが奴等のそういう秘密を嗅ぎ付けた。——そこで自分も非常に好ましくなつたものだから、持主達が仕事場の方へ行つてゐる間にその地下室へ侵入して、やんごとないその求愛者団の頭数を完全な一ダースにしたというわけなのだ。

それを十一人が感付いたものだから、恋に盲^{めくら}いた彼等の心の中に嫉妬が激発して、この紅毛^{あかつけ}の猥褻児を半殺しの目に遇わせたというわけなんだ」

「やれ／＼！」と私は叫んだ。「そいつは甚だ穩かでないね。で、その事情は判事先生に

いう環境がみんなの其の欲求を抑えつけているのではないでしようかしら。

誰だつてお金があつて、適当な相手があつて、どんな事でも振舞えるとしたら、それはとても奔放な淫乱になると思ひますわ——という妾の氣持ですので、自分の許す範圍の環境の中で妾は妾なりの慾望を最大限に満足させていますの。

妾の彼氏は三吉という可愛い男、二十九歳、十九貫の肉体美、いゝ男ですわ、これが妾の性慾のけだものなのです。妾は三吉に誓約書を一枚書かせてあります。これはマゾガワ^{マゾガワ}ンダに書いたものなんか足もとにも寄れない様な徹底したもの。何れ何かの機会に皆様に公開致しませう。

三吉が妾の家に來たらいつでもどうされるか——妾は二十七歳のお妾さん。三間の一軒家に住んでいる氣楽な身分、そして三吉は妾の間男。奥の寢部屋を妾は拷問部屋に工夫してゐるんです。ダブルベットを置いても遊戲の場所は六畳位残るのです。このベットにカーテンを掛ける為、太い鉄の棒を空間にはめ込んだのです。これだと少しも不自然ではありませんもの。簞笥の抽出しの中には、いろんな鞭、ロープ、しごき

すつかり知れてるのかね？」

「勿論判事は知っている！ 初めにジャツキイの父親が奴等を訴えたので、奴等は早速挙げられたんだが、奴等は自分達のしたことをしきりに正当だと主張するんだ。ところが相手のジャツキイの方の申立によると——ジャツキイも直ぐに拘禁されたんだが、そのジャツキイが泣き喚きながら語るところによると——自分はそのことではみんなの仲間だったからしたんで、そういうことは初めてこの中国人達に教わったところ申立て、いるんだが一体君この事件をそのまゝにして置いたらどういうことになるだろう？ イリノイ州の法律から行くと、少なくとも二十年の懲役は食うことになる——こゝではドイツのようなお手柔かなわけにはゆかないからね！ おかげで僕は腕のいゝ職人を一どきに無くしちまうことになる！ たゞ事件はまだ警察の手にあるだけ、裁判所の手へは移っていない。」

その警察の方は僕が自分でうまく運動して見るから、ひとつマツク・ジンテイの方を君よろしく引受けてくれ」

そういつて彼はポケットへ手を突込むと、七面鳥の卵ぐらいの大きさかと思われる一個の硬玉を取り出した。それは眼の醒めるよう

な緑色の細工の、驚くばかり精巧な、堂々たる石で、二三百ドル、或はそれ以上の値打のある品と思われた。

「どうだね！」と彼は叫んだ。「これを奴等が僕に寄越したんだ。奴等は何時でも何かいざという時の役に立つような、こういう値打のあるものを何かしら秘藏している。これをマツク・ジンテイ判事のところへ持つて行けば——吞込んでくれると思うがね」

よろしい、というわけで記者はそれをもつてマツク・ジンテイ判事の家へ出かけた。判事は不在だった。細君が出迎えた。もう四五という齢にしては若々しい愛嬌のある女でなく、品もあり、姿をととのえることのうまい女であつた。

私は直ぐに石を出して見せた——見る／＼彼女の眼は大きくなつた。

「これは人から贈られたものですがね」私はさもなげに／＼出した。「これを御主人に幾らかで引取つていたゞきたいと思うんです。丁度二三十ドル金の必要が出来たもんですから」

と、そこへマツク・ジンテイが帰つて来た。「これを譲つていたゞいて頂戴！」細君はいきなり夫に叫びかけた。「丁度こういう石を

それに鎖や革で作つた枷が一ぱいあります。三吉がいけない時は鉄の棒はカーテン掛けとなり、いろんな拷問道具は簞笥に収められ、只何気ない静かな寝室となる訳です。」

では、次に妾達の變つた面白い遊戯をお話ししよう。三吉がこの寝室へ入りますと、妾はもう残酷なサデイストになるので、妾は彼に丸裸になることを命じると、彼の髪を掴んで簞笥の前まで引きずつてゆき、「早く、お前が苦しめられる用意ををし！」と言うと彼は／＼と抽出しから鞭や鎖やいろんな小道具を取り出して揃えます。それから天井の鉄の棒には滑車をかけ、これにロープを下げて、自分の首には犬の首環をはめて

「さあ、死ぬ程、鞭でびし／＼と打つて苦しめて下さい」

と恭々しく鞭を妾の手に握らせると、犬のように四つん這いになるのです。此の哀れな男の姿を見ますと、妾の攻撃性は益々昂じてきて、矢庭に頭を蹴り飛ばして、くた／＼になつたところを足で踏んずけるのです。三吉が淫らな恰好でヒ／＼悲鳴を挙げるのへ情容赦もなく鞭を振り挙げて、裸の尻を打ちまくりまします。三十分位も続

あたし何年欲しくつていたかわかりませんわ。これを極く安くお手故しになるつて仰しやるんですもの、たつた——」

判事は見事なこの石に暫く見入つた後、それをポケットの中へ落し込んだ。

「来たまえ」と彼は私にむかつていった。

「僕はこれを捨値などで攫うような真似はしたくない。兎も角もこれを商売人に鑑定させて見ようじゃないですか」

そういつて彼は、細君が即座に取引をすませてくれと嘆願するにもかゝらず、私を表へ連れ出した。「ねえもし、五十ドルぐらいじやいかゞでしょう？」背後からそう呼びかける細君の声を我々は耳にした。

「一体どういう事情なんですか？」

通りへ出ると彼はこう訊いた。

「判事、君も御承知でしょう、昨日挙げられた中国人のことは。奴等を使っているのは僕の友人ランゲという男で、どうも困るものだから何とかして釈放してもらえないものかと考えているのです。その石は奴等が、それを金に替えて自分達を救い出す費用に充てゝくと、主人へ託したもののなんです」

マツク・ジンティは鋭く私の顔を見返した。「僕はまだよく知らんですがね——一体何をやらかしたんです？」

「何、大したことじやないんです」と私は嘘をいつた。「十四になる子供を殴打して負傷させたというんで」

「それだけのことですか？」尊敬すべき判事は目にもものをいわせながら私の顔を見て、脇腹を軽く笑いた。

「まあそんなところでしようよ！」と記者は笑つた。

判事マツク・ジンティは咳払いを一つしてそれからいつた。

「よろしい、それじやこの石は譲ってもらいましょう、家内があんなに欲しがっていることだしするから。しかし、それにしても十ドル以上は出せませんね。じやあ——これを！

弁護士のジム・マツク・ナマスのところへ行つて、この十ドルを提供するんです——いや、待ちたまえ、もう一ドル足して置こう——これで一人一ドルずつの割りです。そうして置かないと、先生もアイルランド土人だから、どうしても子供の方を弁護するようになりますよ。先生にこういつてくれたまえ、今夜六時までに警察裁判所の方へ来てもらいたい、この事件を急いで片付けてしまいたいと僕がいつていたとね。さあ、では、この辺で

くかしら。

これが妾達の前戯というもののなのでしょか。やがて高手小手に肉が喰ひ込む位に縛り上げ、部屋中を鞭でしばき乍ら歩かせるのです。まるで猛獣使いのように——。

それが終ると天井の滑車に吊り上げるの左右の足首は別々のロープにV字型に縛り上げてぶら下げるのですもの、それはそれは変な恰好ですよ。肌に喰ひ込むロープ裂けんばかりに広がった両股。なんといふ氣味でしょう。

妾は二本のマツチの棒を持つてきて、三吉の肛門ともう一つの穴へ突込む。「苦しいよ苦しいよ」三吉の苦悶に泣き叫ぶ顔とても素敵だわ、大の男がひい／＼泣いてなんていゝざまでしようかしら。泣いたりしたら妾余計に引つばたいてやるの。

何んといういゝ氣持だこと、妾のしたいのはこの様な三吉の姿を見乍らもう一人の男がいたら何時も思うの。三吉の姿を看に別の男と戯れたら、どんなに素晴らしいかしら。

——それから三吉を下におろして、妾は一休みするの、勿論三吉は縛りあげたままよ、妾はウイスキーを飲んで疲れを休める

失敬しましょうか——早くこの玩具を家内に持つてつて見せてやらなきゃならん、何しろあれほどまいつているんだから」

彼はポケットの中でしきりにその石を弄んでいた——に違いない、判事マツク・ジンテイはその値打をよく知つて居るのだ。

夜になつて私は警察裁判所へ行つて見た。

一人の警官が、十一人の中国人は少年マアフィを殴打して負傷せしめたと言をなした。マアフィは何も吐こうとはしなかつた。中国人側も尙のこと何も吐こうとはしなかつた。弁護人は寛大な処置を求めた。判事マツク・ジンテイは加害者一同を各一ドルずつの罰金刑に処し、少年の父親に対して各一ドルずつの賠償金を支払うように申し渡した。

フリッツ・ランゲは即座に廿二ドルを提供した上、なお裁判手続費用として廿四ドルを支払った。一同は大満足で家へ引取った——この間五分と懸らなかつたのである。

それから一週間経つて、フリッツ・ランゲが私を呼びに来た。中国人共が君に感謝の意を表したいといつて居るから、これから一緒に行つてくれというのであつた。

そこで彼にしたがつて、やがて我々は中国

人達の地下室へ下りて行つた。十一人がみんな揃つて居る中に、紅毛のマアフィ少年も交つていた。一同鄭重に私を招じ入れて、酒をすゝめ、米飯をすこし私の前に並べた。これからいよいよ酒宴が始まろうというのであつた。

そこには焼豚があつた。

彼等は嘗て喰かしたに落し入れた——おかげで非常に高いものについた。

「もう誘惑されるな」と彼等は考えた。

そこで彼等は彼等の花嫁を屠つた。

そうして今や盛んに食うのである——羨むべき食慾をもつて。

私は前から思つていた。自分は大抵の食物の前に僻易しない男だと。

だが、この時ばかりは流石に御免を蒙らざるを得なかつた。(終)

次号予告!

喜多玲子・画

吊り下げられた女各態

果してどんな奇抜なポーズが飛び出すでしょう、どうぞ御期待下さい。

の、でも男を虐めるのつて疲れるものなのよ

今度はベットの脚を利用して大の字に縛りつけ、妾は彼の脇腹、太股、お臍とあらゆる性感態を振り、針で刺し、彼の苦悶の表情をじつと見るのが大好き、それからあの嬉しい快樂の表情も飽かずに見てやるの。妾のしなやかな指は器用に働くわ、足の裏と腋の下を擦つてやるときの、表情つたらないわ。呻めき、そうです。のたうち呻めきとでもいゝますかしら、——それを妾はじつと見つめて手の指だけは敏捷に働きを止めないのです。

彼がぐつたりとのびたら、又後手に縛つちやうの、これから、もつとく、凄惨な二人だけの遊戯が展開されるのですけど、それは又次の機会に書かせて頂きます。

妾と同じようなサディストの女性に会いたいわ、本当は妾二人で三吉を苦しめたいのよ。そうしたら、妾や三吉の喜びは何倍になるか知れないわ。妾、その方と同性愛になるかも知れない。そうしたら、どうしようかしら。

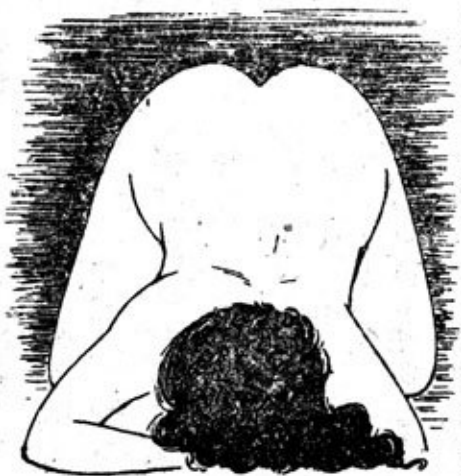
(編集部より——森山美歌さん編集部へ御住所をお知らせ下さい)



狂い咲くカンナ

(其の後の告白)

羽村京子



これは十一月号の読者通信でお約束した「創作」ではなく、九月号の私の「告白」の補足です。

私と夫との奇怪な生活が始まつてから、早いものでもう半年余り経つてしまいました。私の肉体を害わないように注意しながら、私たちは次第に新しい方法に慣れ、深みに落ちこんで、今では倒錯の悪魔にすっかり魂を捧げてしまいました。後悔してはいませんが、肉体つて何て恐ろしいものでしょう。

私は身長一五一糎、体重五〇瓩です（夫は身長一六三糎、体重五五瓩です）が、幸いなことに、こゝ一年ばかり体重には大した増減はありません。腹をこわし易いとか、肛門の具合が悪いとかいうことも時にはなかつたようです。

私の肛門にはいろんなものを突つこむので少し充血したり痛かつたりすることは勿論ありますが、それもしばらくの間で、すぐもとになります。始めは括約筋が思うように開かないので、無理におし拡げられてかなり苦痛も感じましたが、この頃はずい分大きなものを押しこんでも痛みなしに開くようになりました。筋肉が弛んで穴が大きくなつたのか、それとも神経が麻痺したのでしょうか。例えば私の肛門にはビール瓶の口がすつぽり入りこむことが出来ます。前以大腸を空気で膨らまして置けば、こうして肛門からビールを飲むことが出来ます。ビールと入れ替りにビンの中に入つて来る空気がないと、ビールは腸の中に入らないからです。また私は、女でありながら鶏姦されることを好むようになり

ました。普通鶏姦は男同志の間で行われるのですが、私はおかまのように鶏姦されるのを何とも思わないのです。

肛門から腸の中に空気や微温湯を入れるにはポンプで押しこんだり、管を突つこんで吹きこんでもらう方法、高い所からの水圧を利用してゴム管で入れる方法、また一立位ならば、漏斗で流しこむ方法がありますが、その外に、じかに口をあてゝ息を吹きこんでもらつたり、前述の、腸の中の空気と入れ替えにビンで入れる方法などがあります。夫の頭をまたぎ、その顔の上に大きな柔かい部をどっかり落ちつけている私の肛門に、夫が下からふーつ、ふーつと吹きこんで来る空気が、私の腹の中で太い腸の管をむくくと膨らまして行くのが分ります。私の白い腹が風船のよ

うに少しずつ大きくなり、下腹部の皮膚がぐつ、ぐつと張つて来て、快い体内の圧力が胃の中の空気をゲーツと圧し出して来ます。あとで腹の中の空気が一度にぶすーつと肛門から出て行く時の快感も忘れがたいものです。また、ビンの中の生温かい液体が、すつかり押し開かれてしまつてゐる私の肛門を通つてごぼ／＼と腹の中に入り、そのぬくみがずーんと下腹部に滲みわたつて行く時の快さ私たちはこんな他愛もない、意味のない遊びに、夢中になつて興奮するのです

私たちはまた、子を孕んで膨らんでいる妊婦の腹に異常な興味を寄せたのでした。今年の七月の初めに私の友人のS子さんがしばらく私たちのところに行ったことがあります。彼女は妊娠十ヶ月の身重で私たちの家のすぐ近くの産院で分娩するために、産気づくまで置いてあげたのです。S子さんのご

主人はもう二ヶ月も病気で寝ていて、経済も苦しいように見受けました。その気の毒な彼女を私たちから無理にすすめてうちに来させ今から思つても恥ずかしい、破廉恥なことです。その弱味につけこんで、若干のお金と

引きかえに泣く泣く彼女を承知させたのです。そのお金はきつと、彼女の国許から送つて来たとても云つて、彼女の入院費や彼の薬代に使われたことでしょう



私たちは邪まな情慾のために鬼になつてしまつていたのです。

私たちはまずS子さんを薬で眠らせておいて心おきなく彼女の肉体を鑑賞しました。

私たちは彼女をすつかり裸にしました。私

より少し浅黒い皮膚の、大柄な美しい裸体で大きなまんまるい腹にくつきりと妊娠線があらわれていました。二十三歳の若い体が膨満した腹部から腰部にかけて一種の勢いを持つており、はちきれそうな腹は皮膚が引っぱられてきん／＼と張つていました。手で触つてみると、本当に、よく熟れた西瓜と同じで、固く、叩くとポ／＼と音がするのでした。次の日は丸裸の彼女にいろ／＼な姿勢をとらせて写真に取りました。立たせたり座らせ

たり、仰向けや横倒しに寝させたり、四つん這いにならせたり。その度に、彼女の腹の、膨れてぼこんと突き出した大きな妊娠子宮がだらんと下に垂れたり、むつくりと盛り上つた形で骨盤の中に納まつたり、再びごろんと転げ出して来たりするのでした。時々胎児がびく／＼動くのが分りました。S子さんは泣き出しそうな顔をしながら、一言も口を利かずにおとなしく私たちのいう通りになつていました。私が四つ這いになつた彼女の後ろから、クリームを塗つた指を、肛門にぎゅ／＼と差しこんだ時は、じつと動かないままです。つむいた彼女の目から涙がぼた／＼と畳の上に落ちました。

臨月の妊婦にこんなことをして何ともないわけはありません。あとで聞いたら、幸いに胎児の位置は変らなかつたが、臍の緒が首に巻きついて一時赤ちやんを気絶させたのだそうです。

私は毎日S子さんにすまない／＼とあやまりました。涙を流して許しを乞う私に、S子さんは唯（仕方がないわ）というだけでした。しかし夜になつて夫が帰ると、私はまたどうにもならない慾望に駆られて誘惑に負けてしまふのです。そうして、「縛られた妊婦」の

構図のグロテスクなエロ味に有頂天になつた私たちは、とうとう大きなおなかをしたS子さんの裸体を縛つて何枚かの写真を取りさえしました。その中には、（それだけは）いやがるS子さんを、可哀そうに天井から逆さ吊りにぶら下げて写したものもあります。

話をもとに戻しましょう。

私の肛門や腸が、まるで私が実験用の動物でもあるかのように弄ばれ、いわば実験台の上でなぶり殺しにされるようなもので、そうされる私の側としては勿論かなりの苦しさに伴います。しかし私にはその苦しささえもが奇妙に快いのです。そして、私の糸も縄わぬ全裸の肉体を縄でぎ／＼と縛られるのが私にはたまらなく快いのです。私の柔かい体は無惨に折り曲げて縛り、白い肉塊のようにごろつと転がした写真や、きつくきつく締めつけられた胴のくびれがが／＼と折れて、喰いこんだ縄が上下の腹をひつつけてしまっているようになった、柱に縛りつけられた私の写真など、私たちのアルバムはこれらの奇怪な写真で充満しています。私はまた私の体を縛つて宙吊りされるのが好きです。私を最も興奮させるのは鶏のように両の足首を括つて真逆様に天井から吊り下げてもらうことで

す。時には四股を縛り合せて部屋の真中に猿のようにぶら下げられ、ゴムまりのような私の体は振り子のように振り廻されたり、独楽みたいに回転させられたりするのです。

拷問の真似事も私たちの楽しい遊びの一つです。柱に縛りつけられた私の肌を蠟燭で焼いたり、天井から逆さ吊りになつた私の背や腹や尻を鞭で打つたり、漏斗で無理に水を吞ませたり、髪の毛で吊したり、夫は私をさん／＼／＼とくさむのです。また私は中腰でしか立たないように縛つて立たされ、よろめくと首がしまるようになっていくのです。机の上に仰向けに大の字なりに縛りつけられ、胴のくびれを縄で締めつけて丸く膨らんだ下腹の上に重い漬物石をのせられたこともあります。しばらくたつとだん／＼苦しくなつて、蒼白い額に汗が出て来ました。無理に下腹に詰めこまれた腸がぐる／＼と動いて、やがて肛門からガスを排出しました。夫は時々石の上に乗つて圧えつけたり、私の肛門からポンプで空気を入れてみたりしながら、その度に私がウーン、ウーンと呻き声をあげて苦しむさまをニヤ／＼笑つて見ているのです。気がついて見たら、私は大小便をすつかり洩らしてしまつて股の間をグチャ／＼に汚してしまつた

しかし私の苦痛に耐える力にも限度があり、本当に殺されてしまうことは出来ませんからあとは空想の領域で我慢するより外はないのです。また、私以外の若い女性の体が入ったとして、それを裸にして拷問したり、解剖したり、料理したりしてしまふことは出来ません。空想の中でならどんなことをしてもいいし、またそれを紙に書くことも出来ます一つのまとまった話をまとめ上げることは大変むづかしいことですが、断片的に一つ一つの最も興奮させるような場面を想像することは誰にでも出来ることです。

私が最もよく想像するのは、大きな姐の上に腹をさつくり断ち割られて横たわっている私の姿です。私ののけぞった顎からすーつと下に、肛門の括約筋の片側までが、よく切れる刺身庖丁できれいに左右に切り離されています。両手首と両足首はそれぞれ結び合されて自然に前に投げ出され、体は横倒しになっています。たてに断ちわられた腹からは、一かたまりになつた腹わたが、どろつと姐の上に流れ出しています。水をかけてきれいに洗つてあるので血は少しもついていません。ちようど料理しかけの魚のようです。やがて料理人が現れて、私の臓物をすつかり出してしま

い、頭を切り離し、皮をはぎ、白赤い肉になつた私の両脚を開いてY字形に逆さに吊り上げ、大きな鋸で股を下へゴリ／＼と引いて行きます。こうして私の肉はいくつかに分けられて冷蔵庫にしまわれ、贅沢な人たちの食卓を賑わすのです。一方、姐の上に盛り上つたまゝ残つてゐる私の臓もつの方は、子宮や卵巣、肝臓、膀胱などは珍貴な料理になり、他の部分は捨てられてしまいます。頭も分解されて脳漿がとり出されます。私の舌は珍重されるでしょう。

私はいゝ氣になつてとんでもない妄想にまで走つてしまいました。私の告白もこれ位で筆をおいた方がいゝようです。

——一九五二、一〇、三

次号予告!

マゾヒスト誕生 峯村佐吉

初恋の女を縛られ、鞭打たれて欣喜の声を挙げるマゾヒストに仕上げた現在の某富豪青年時代の告白、これこそ本誌が双手を挙げて読者に推奨出来る甘美な一大ロマンである。次号新年号に堂々発表!

ハナヲタカクスル

問 私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻術というのをよく聞きますが、効果があるものでしょうか。

答 先ず特殊薬注入法があります。鼻すじだけ通じたいという人には理想的な方法です。次に象牙挿入法は今から三十年前から初め、アメリカでも使用され捨て難い方法です。合成樹脂も最近材料がよくなり使用され出しました肉質法は少しづつ高くし度い方には良い方法です。以上は費用何れも六千円です。

更に当院独特な永久不変な弾力性物質が発明され、その自然性においては如何なる方法も追従を許しません。従来の象牙合成樹脂のもつ欠点は一掃されました。将来は当院で発表すれば、如何なる人も皆この方法で行うべき運命をもつてゐるのです。費用は八千円以上です。

大阪市北区梅田新道
交叉点東一丁電車通

三山整形外科内

三山隆鼻法研究所長談



夕映え燕の教訓

~~~~~ 中年女に戀うるの記 ~~~~~

丘 正 雪

「夕映え燕」なんて俗語が、世の中に今迄存在したかどうか私は知りませんが、私の様な男の事を試みにかく呼称してみました。

「事實は小説よりも奇なり」と、眞実ほど迫力や興味のあるものは無いでしょう私のこの告白の記の取得は、実話であることゝ告白への勇氣の二つだけかも知れません。自分がいざ書こうとして始めて喜多、岡田氏等を始めとする先人の、その敢然たる勇氣に、敬服することが出来ました。

皆様の告白とは少々違つた行き方をしてみましたので「教訓」なんて一見生意気な題をつけましたことを、御寛恕下さい

現代の若い女性が同年齡位の若い男性には警戒心や輕蔑心ばかりで、それほどにも興味が無いのと全く同様に、私も若い女性には愛情は十二分に持てるのですが、さつぱり性的魅力を感じないのです。しかし夕日のような年齢の女性には美醜を問わず、胸がキューツとなり、もうたまらなくて身震いするほどの魅力を抱いてしまうのです。

貴誌に掲載されている記事や、グラビヤ版は、私には赤チャンばかりの様に見え、ガツカリしている次第です。

私と同じ年輩の男性なら、赤チャンから十才位迄の女の子の裸体や被虐姿に性的亢奮を恐らく感じないでしょう。私には如何に努力しても年下の女性は赤ちゃんに見えて仕方ありません。簡単に云えば若い女性の弱点の第一は、話題の致命的貧困。

第二に誇大妄想狂的鼻持ちならぬ自惚です。第三にフローベルは「首から下は別のもの、悪魔のもの」と、年増女を讚美しているように、若い女の情事への無知、これはまだしも精神的要素の皆無、すつからかんのカラ頭これは腹も立たぬほどに、うんざりしてしまいます。

それに引きかえ卅五、六才以上の女は僅かこの三ヶ条だけですら正反對です。

新緑よりも、紅葉した枝葉に、秋の夕日が赤々と映え溶け合う趣は丁度大年増をつくりで実に美麗な色彩です。秋の蒼然たる浅黄色の夕暮、その微細な美を見出す能力のない又はその氣持のない男や夫は何んと勿体ないことをしているのでしょう。……暮秋の懐かしい魂を洗ってくれるような匂いが泣きだしたくなるほど奇蹟的な寂寞と、冬の、そして



夜の暗黒さを前提としている風の響きをお感じになりませんか、きつとその響きの奏でる妙なる雰囲気驚かされることでしよう。

豊熟の美、奔放な大胆さ、脳殺的性的技巧さ、女、このころの満足の幸福感は夕映えの偉観の中に見ることが出来るのです。

女性がたゞ一度しかない夕映えもしないで暗雲一色のまゝ落下してしまうのは、その女の周囲、特に夫の責任でありましょう。夫が妻の夕映えに愛情を持っていないので、私が夫等の代用品になつてきてしまつたのでした妻が山積みの苦悩を労して来たのに、夫を始め、身辺にある忘恩者と利己主義連中の不理解に、女は女性としての魅力を犠牲にされて来たのに気がつきます。すべての寂寞無味衰頹感を味つている時、彼女は自分の性的魅力の凋落しつゝあるのに暗然として、若い女への羨望、嫉妬から、もう一度女の否人間の歓びを経験してみたい。否してはなかつたことに後悔いたします。

私と関係して来た女は皆「人生に世の中にこんな幸福なことがあつたのに」と泣きながら「遅かつた、もう女として終りに来てしまつたのに」と後悔しました。彼女等は氣の弱さより来る世間体や、幸福とは金がかかるも

のだとの盲信が彼女達を誤らしたのです。

然し、私にとつてはこれらの女の黄昏の夕焼けは、私に恋心を吹きこみあやつる生命でもありました。これまでの四、五十代、時にはゴマ塩の薄毛の女性との関係は、すべて、彼女等の艶麗、纖細、壮嚴、神秘的夕映えが寂しき一羽の燕に夢のような昂奮への陶醉を与えてくれたのでした。

これらは論理や道徳を超越した世界のことですから、論理道徳で思考して戴いても御理解願えないかも知れません。私は女の哀愁感と迷える子羊の孤独感とが犇と接近させてしまつたのは事実です。

「男は上淫を好む」という俗言の中には年上上流階級女性への男の加虐性がありますが、この見地から同様に年齢的に年長の人物、社会的上位の女への「責め」こそこの道の最高のものではないでしょうか次に私が何故「責め」に関心を持つようになったかを語りたいのです。

## 二

終戦後、間もなく疎開先の父母の故郷へ復員して来た私が再び大阪へ出る迄の三ヶ月間の間に近所の十一才年上の戦争未亡人に片想

いしたのは、前述のように当然だつたとはいへ当時は初心で純真だつた私は、死ぬほど想つていくくせに、あまりにも崇拜憧憬しすぎて畏怖の念が起り、彼女の姿から避けよう避けようとするばかりでありました。彼女の姿を見た時屋間でも彼女の姿は舞台の暗黒の中にスポットライトに光り浮び出されているようにも思われました。

私にはアドルムも効かなくなり今は死ぬばかりになりました。一日中絶えず彼女の面影が頭から去らなかつたので、勿論仕事は全く手につきませんでした。とにかく昔流の恋患いになつた私は二年後遂に死を快意しました死の前には図々しくなつた私は、せめて胸の痛みの理由だけでも覚えておいて貰おうと彼女の家で一ヶ月療養させて貰うように頼みしました。尤もこれは先方の厚意の上なら、その様なことをして貰つても何等不思議でない知人関係でもあつたのです。

或る日、おばさんに話のしたいことがあると頼んで離れの一室で対談しました。併しこんな嚴肅に畏こまつた雰囲気席ではどうして話が運ばれましょう。只私は悲哀絶望と興奮の余り鼻血を出してしまいました。

当時と比べて現在の自分は何と変つた事で



しようか。私が学校で教つて来たことは何の役にも立ちませんでした。私にも少し利己的欺瞞的不正義的非純真的で、情事の知識を現在の万分の一でも所有していたならば、或はよい意味での不良青年の知識が少しでもあれば、当時の彼女の私に対する好感の程度や、その背景より、半分は自惚的に判断推察すると、彼女とは幾分はいゝ仲にもなれ、彼女も転落せず、私も墮落して多くの人々に迷惑もかけずハッピーエンドになつていただろうと思うのです。

流石にゲーテは、世の中のさも得意気に妄言している修身、倫理、宗教家等と違い、フアストの中で云つています「女をうまく扱う

### 私の略歴

大正十五年、大阪にて生る、廿七才

昭和十八年、同市、某商業学校卒

昭和十九、M軍需会社事務員

昭和二十年、現役入営、復員

昭和二十一年、自由業

昭和二十五年、工員、人夫、商店員等転々

昭和二十七年、公務員（事務）

尙念の為に、前科はありません、独身

ことを修業しなくてはならぬ、女という奴はこゝが痛い、かしこが苦しいのと、いろいろな言葉の絶える時はない、それが只一ヶ所から直すことが出来る。」

こう云つた意味から「責め」も常識的形式的皮相的に考えても悪いことではなく寧ろ善いことである理由を私の体験上から申しあげてゆきたいのです。

無縁だつた彼女（明子さんと言いました）が、それより二ヶ月後、某会社事務員に就職したのは結果的に私にとつては寧ろ幸せでありました。競争心という型の闘争心の気持が私の心に湧出して来て死ぬのは一先ず見合せたからでした。私の苦悩は更に倍加はしましたけれども……。

彼女明子さんの居住している地方専門の担ぎ屋に、いつの間にか私はなつていました。生活苦の担ぎ屋仲間の云動を見えますと、半数以上の男女は、たゞ情交のみが可能な許された唯一最大の慰安娯楽らしく思われます。自暴自棄の私の前に、いろ／＼の未亡人等が現れましたが、しかし女は当然に自分の情交を秘密にするものですから一切が秘密のまゝでありました。

### 三

或る日、それは私が女を縛つた最初の日でした。今のその甘い回想、甘いアブノーマルの想い出の初まりは、それとは全く反対に、その日の官憲の担ぎ屋への冷厳な取締りに出くわしたことから話が始まるのです。やはり気の小さい、しかも打算的な中年女のこと故駅で諦め悪く米をよう捨てなかつたが為に、私迄がまきぞえを喰つて、その終列車に乗れず野宿しなければなくなり、その日の相棒の二人の連れの女の米と三人分の米を担いで山を越すというよりは追われて山中に逃げこんだ夜でした。

女はともに未亡人でミネさん四十九才と、栄さん四十三才、の二人でした。峠に昇りついで、樹林がその黒い影をシルエツトのように聳かしている隙間から銀色の冷たい青白い色に染めている仲秋の月光のその境目に照らし出されている麓の、村々の家々の灯を見た時、私の頭には昨日のことが……（それは明子さんが二人の男と事務所で残業しながらまるで恋女房のように歓談している彼女の幸福に光り輝いていた美しい表情を見たのが）その時より未だに一分の間も去ることなく私の



記憶にまぎ／＼とあつたのです。勿論身体中の血が全部無くなつてしまつたような嫉妬で一睡も出来なくて、現在の時間に至つて私の疲れた目に、同じ月光に浮び出されてゐるみすばらしい、惨めな、みつともない自分の姿が入つた途端、私はもはや一步も歩く気がせず、不愉快な荷物を投げ出してへたく／＼と坐つてしまいました。

「どうしたんさ、休憩かい？」

「体の工合が悪いの？」

と彼女等は傍に寄り添つて来ました。私はもう何も云い度くはありませんでしたが、齒の間から空気を押し出すような氣持で

「こゝで寝るから、おばさん等は何処へでも行つて夜を明かしてくれ、」と云うと彼女等は何かしきりに喋り合つていたが、私は何一つ聞えぬ振りをして死んだようにしてじつとしていました。榮さんが三人の寝るのにいゝ場所を捜しに谷間へ下つて行つた事を臆氣乍ら氣付いたのは、ミネさんが膝枕をして、両手を私の首に捲きつけて悩ましげに喘ぐような途切れ／＼の愛撫的囁きをしだしたからでした。

爛熟した女の臭と母性的親切さに私は、いつもなら一ぺんにフラ／＼となつたでしょう

が、しかしその時は私の頭には明子さんの事で一杯で爆発しそうでした。そうだ、これから彼女の家に侵入して暴力で山中へ誘拐してくればその私の熱意に感じて愛を受け入れてくれるかも知れない。いや彼女の前で自殺しよう、いや、それよりも、……と悶々としている頭悩の底から、突然武者振いするほどの激しい氣力が湧いて来るのを、まぎ／＼と感じ彼女の家へ駆出した。衝動が起つた時、ミネさんの狂つたような燃えた息と共に、私の口の中に彼女の舌が突込まれたのです。

ミネさんを通じての明子さんへの激怒は、私をして彼女を突き離せしめました。私は憤然として立ち上りました。併し彼女は私の心境に氣ずかず「榮さん？……榮さんの来ぬうちに何処かへ……」と、暗黒の木立の方へ行こうとし私の腕を引張つたので、坂道の為二人とも重り合つて転倒してしまいました。もうすつかり亢奮してしまつてゐる彼女は我無沙羅に獅噛みついてきました。が私には未だに明子さんのことしか念頭に無かつたので自分が女の立場にあるような氣持でミネさんに抱擁されたり接吻されたりしている時、突然帰つて来た榮さんに、彼女は私の上から引き離されました、暫時の女同志の醜い口論の

末、榮さんはミネさんを憐笑しながら自分の荷物を担いで急いで去つて行きました。ミネさんは聞えよがしにフンと鼻を鳴らしていましたが、榮さんの姿が見えなくなるといきなりガバツトと身を伏せてシク／＼啜り泣きだしました。

私も榮さんから六十三才のお婆さんとの關係や何かで色情狂とか、余程女に餓えてゐるとか、能無しのかせにだとか、眼の前が暗くなるような感じがする程侮辱せられて、うなだれていました。あまりに全身の力が無くなつた為か、動悸だけしか感覚に無いような氣がして、その動悸が段々大きくなつてゆくための胸騒ぎも静まつてくると、再び反動的に失恋した明子さんへの長年押えて来た遺恨や嫉妬、絶望感が、灼熱して破裂寸前のダイナマイトのような氣持ばかりの身体となつた瞬間、私は無意識で目の前のミネさんを抱きしめていました。そうしなければ私は疾風のように明子さんを求めて山を駆け降りていたでしょう。

しかし私がミネさんの体を求めかけた時、意外にも彼女は

「いやっ！やめて頂戴！榮さんの言う通り私は悪い女だつたわ、危いとこだつた。死んだ



うちの人に済まない……」

と言いつながら後ずさりしてゆくのです。彼女が必死になつて抵抗している女らしい恐怖振りを見た時、私はこれが本当の男の性慾そのものといった亢奮を、心に、肉体に感じました。もう山の中にいる淋しさも気味悪さも何もかも吹っ飛んでいました。それに今迄の他の女との合意の上の情交は、どうしても明子さんが他の男とそれをしてることが想像されて、完全なリビドが起らなかったのに、今は明子さんのことすらほんの少しも眼中になく、従つて真の快感が得られる予感がしました。その時彼女は本当に真剣になつて拒絶していると思ひました。思ひましたと云う訳は、彼女とそれから三度目の憐れい時、あの日、山の中で必死に抵抗したのは、つまり、「いやっ！やめて頂戴……」の始めから、あの日の終りまですべて彼女の狂言芝居だったことを、私に告白したからです。

その二回目の関係の日も彼女の哀願で縛られました。彼女は普通の性交ではアクメを感じないと云つて、鞭を持出して来たので、被虐、加虐の世界のことなど何も知らなかった私は只茫然となりました。その上、彼女は若い頃「責め」研究愛好者連で組織せられた

秘密クラブに、モデル商売五年間もしていたことを告白しました。

その山の中の出来事に於ける彼女の入神的名演技を想ひ出し、私の開いた口は、暫しは開いたまゝでした。勿論彼女を軽蔑など全然していません。だから二人はお互いに喜悅感激のあまり犇と抱擁して一時間以上もそのまゝでいたのです。

#### 四

いゝ面の皮の私は、そんな事は何も知らないうものだから、あの山の中の夜、いゝ氣になつて、と云うよりは、息の切れそうなのを我慢して、悲しい道化者の役をやらされていたのです。今迄の彼女とは打つて変つた女らし



い仕草で言うのです。

「勘忍して……。もう暴れないから……。あんなの云う事をきくから……。その代り、あんなみたいなつまらぬ男に死ぬほどいやらしいことせられたら妾の心にも、死んだうちの人も申し訳ない、ねえ、女の妾の氣持を察して……。妾が身動き出来ぬように縛られてしまつてゐるのなら、どんなにおもちやにされても私の恥ではなくなるから……。お米の荷造りの紐で……。」



そちらは面子が立つかも知れないが俺の方の体裁はどうなるのだと思つたが、この場合彼女の申し条は至極尤もなことであるので、何も舌舐めずりせんばかりの気持のみではなく坊主憎くけりや袈裟までで明子さんを始めとする、女と云うものを思いきり責めてやりたい気持の私は、荷造りの紐をほどいて、倒れて顔を草に埋めていた彼女の両腕を後ろに廻して後手に縛りあげました。

その瞬間彼女は「やつぱり、いやつ、やめて！ 解いて！ 誰があんたみたいな子供に！」と気が狂つたように猛然と身悶えたので、大汗かいて胸へ紐を廻してグル／＼まきにしましたが、大声を出したり、噛みついたりするので手拭を口の中に押しこみ他に布が無いので禪をほどいて猿轡をはめました。念には念を入れてと、後頭部で猿轡をしめなおした途端、少しの隙を見出した彼女は、脱兎のようになつて逃げ出しました。

私は益々挑発されました。彼女は後日の告白の通り、逃げおはせる目的でなく、結局は私にとつて、又その逃げるという型の抵抗や、捉まりかけのスリル等を享樂する為であつたのですがこうなればもう喜劇か悲劇か判りません。捉まえた時、彼女が脚をばたば

たするので、恥かしい場所は丸出しになつてしまいました。手足をがんじがらめに縛つた彼女を、横抱きにしたり、肩に担いだりして御馳走を喰べる適当ない場所を物色して歩いているのは、恰かもハイキングの風食のいゝ場所を求めているのと変りありませんでしたが、私としては雲助的掠奪行動への自己嘲笑感や、女への罪障感や、人生への絶望状態への恐怖を感じていました。

「でも私は運命を怖れず、それから脱れたいとも思いませんでした。……神経過敏なための驚きが過ぎ去つてしまうと、私の心にはおろしい運命をむしろ自分から進んで受けとろうとする気持が湧いてきました。いや却つて絶望的などん底に自分が落ちこんでゆくことに官能の悦びさえ感じるのです。私はあまりにも大きい不幸に身を護られているようにさえ思えるのでした。死ぬことさえ、私には怖くなくなつて最悪の場合には、死ねばいいのだと思うようになると私は嬉しくさえなつてゆきました」（ローマの女下巻）私がこのような気がしている際、彼女にもひよつとして、このまゝ絞殺されたらと云う恐怖があつたかどうか知りませんが、二人ともこの様な捨身になつたことによつて幸福が掴めたので

した。

バルザックは「土地と云うものが魂に及ぼす影響は全く注目し値するものだ」と云つておりますが、彼女としては責められる雰囲気のお膳立が揃つていると云うよりも、山という大自然が彼女の自然（本能）に感觸したのでしよう。女は相手を愛するようにならなければ、即ち情を移さなければ絶対と云つてよいほど、見知らぬ男などに情交を求める慾望をおこさない。魂から肉へとゆくが、男のようには肉から魂へとゆけない。山の靈氣を含んだ土の重くらしい魂のふるさとのように懐かしい生温い感じが、屈辱的無残な白い肉のむせかえるような臭いと共に私の鼻に迫つて来たのです。

「明子さん／＼」と私は胸の中で絶叫して「恋しい！」と口でつぶやいてミネさんを息も止まれと抱擁しました命の限り燃えている私の目に、月光を浴びた彼女の、本当の羞恥に身をくねらせて、身も世もあらぬ赧い表情が写りました。彼女の様に技巧でなくとも、この様な女こそ娼婦も顔をそむける赤裸々な媚態をするようになる女で、その責められてゐる際に羞恥が強くなればなるほど女が亢奮して来ていることでもあることを、何人もの



被害性の女と関係してから知りました。

女達は私から彼女の最も望ましいものの価値と、陶醉の熱情の大胆さと、残酷な加虐の責めの愛撫の勇敢さをひき出そうとして、私の臆病さをなくそうとして、益々全身で、彼女の感情を説明するあの真似の出来ないマゾヒズム女特有の才能で、羞恥的抵抗をするものだが、勿論ミネさんは丁度それでした。しかも彼女は筋金入りですから無知だった私は早くも感覚がしびれてしまい、焦躁するばかりでした。

私の運動に比例して、彼女は何もかも奪われて口惜しい筈なのに、女体の哀しさは女のものに表われてきていました。加虐と云う陽電氣と、被虐と云う陰電氣が接合一致一体となつて、一つに溶けて世界の恍惚的法悦が、そこに一つに集まつて妖しくも陶醉しつゝある天国の浄地がまだコイトスはしていないのに、そこに展開されてゆくのでした。

紐をほどかれて自由にされたのに彼女は死んだようにぐったりとしています。彼女と私の衣類全部を布団の代りにして、夜寒も感じませんでした。

私は生れて初めての秘密的スリルの魅力に十二分に情熱を沸騰させた満足や、女を征服

して一切を奪つた男の幸福を味う勝利感を持ちました。併しそれは彼女の後日の告白までの間だけのことでした。口惜しいのは寧ろ私の方であつたかも知れませんが彼女の方が快感を味つたのだから。

私の、男の、陽性的、積極能動的誇りは、彼女のアブノーマルな、又は女の魔物性的陰性的陰虐性、もしくは大自然と同様の偉大な受容抱擁性、柔軟強韌性に蹂躪征服せられ、反対に私の方が一切を奪われていたに過ぎなかつたのです。

私は酷い姿態に、責め道具に彼女をかけたりましたが、いつも彼女に負けているのを意識して、如何にしたら彼女を征服できるかとムヤミに責めたてましたが、ずつと後になつて考えて見ますと、孫悟空が十万億里を飛行したつもりでも、實際は三僧法師の掌の中をチョロ／＼したに過ぎなかつたのと似ていました。無防備無抵抗の勝利彼女はまるでガンヂーのような女でありました。

しかも女の秋の夕映えの大自然の圧倒さには、私は単なる一羽の男らしいと云えば男らしい軽躁猪突横暴なちつぽけな燕に過ぎなかつたのです。私には未だに、あの初めてのアブノーマルな情熱の夜が忘れられません。美

しい月の光線で彼女が美化されて見えた訳でないことは、その後屋間にでも又電燈の下でも、見て来たことですから確かです。月の青白い光りが木々の為に縞になつて斜に蕩然と光りを刷いて微風にさぐめく木の葉末にあやしげに夢幻に砕け散る下で見た彼女の、芸術的に惚れ／＼する淫虐美に（裸になつてもそれだけではいつもみすばらしいさつぱり美しくない容姿の彼女なのに）私の魂は脳殺されて、その他に理由もありましたが、アブノーマル性慾の俘虜になつてしまつたのです。それから私の「責め」の研究が命がけで（明子さんへの失恋でそれまでに自殺未遂もしました）始まつたのでした。

## 五

ミネさんに別れて以来次々と多くの女性が私の前に現われては去つてゆきましたが、それは相手は皆世間の常識上、老婆でしたから愛し合つても、先方は居候の身分ばかりの關係上から、相手の女の家庭を破壊するのを何よりも私が恐れたからでした。

大抵の男は女を責める事に興味を持つてでしょう、併しマゾヒストの女はマゾヒズムを實行したいのですが、如何なる場合に於いても



マゾヒストの女は、たゞ彼女にとって本質的に真に深く望ましい欲望の満足のものゝ方へと無理責めにされることを望んでいるというこの簡単な事実の「責め」の初歩のことすら悟ることが出来ない人は、マゾヒストの女から見ればそれこそ変態男と思われるでしよ



う。と云うことはエリスも述べております。先方から別れ話が出た際、責めたてるのはアブノーマルのアブノーマル者で、真のアブノーマル者ならきれいに別れる筈です。私は明子さんへの、諦めの悪さの失敗からの、悟りから、ミネさん以後の女性には極めて淡泊な交渉ばかりを持ちました。

光源氏の例で云えば、四十七才の彼が、正妻の女三の宮が他の男、中納言と不義の関係になり、その男からの恋文を布団の下に隠しておいたのを見つけ、妻の無慮のやり方を「自分が見つけておいてよかつた。若し第三者に見られて妻の密事が世間に知られたら妻

はどうするつもりだ」と、女房をねとられたのを忘れて、妻の無慮のやり方を軽蔑し、又その恋文に第三者にも、その仲が判然と判るような表現をした。その男の低劣浅薄さを憤慨したと云う有名な話の床しい粹雅さを、特にアブノーマルの情交関係にも持ちたいものです。

私が明子さんに失敗して命がけの地獄の苦しみをして転落してしまったのは、私の明子さんへの感情的な手紙が他の人に読まれたのが最大の原因でした。釈迦に説法でまことに生意気ながら申し上げたいことは、相手との情事の秘密は死んでも第三者に他言せぬ、見つからぬとの確約を与えたなれば女を得るのはさして難事でもなくそれ等多く得られた女の中から被虐性慾の女は、捜し易いでしょう「責め」は接吻と同様で、一度成功すると後は簡単にいくらでも出来るし、女もされていくうちに快感や興味が湧いて来るものですが同意を得て初めて責めをする女性に対して、きこちなく愚図々々しては、前述の世間体への秘密や、不安警戒心を起し、パツと逃亡してしまいうあとはいくら頼んでも駄目ですから、

こゝに於いて何が最も必要であるか、勇氣



と決断、上品に云えばそうなりますが、つまり図々しさが必要なのです。そして輕薄になることを惧れてはなりません。これに反して臆病と重厚は失敗の基となるでありましょう」(パスカル瞑想録)以上の点を如実に物語つています。

「静かなること林の如く、疾きこと風の如し」私は「責め」のこつ?の一つにしていきます。男は責め方のいろ／＼な秘訣を全部知らなくても女への責めは面白いことですからたとえ永続しなくとも、相手を満足させることが出来なくとも、大抵の男は興味を持っていますので、マゾヒストの女は相手に不自由はせずともよく、やはり女は得なものです、私の知れる大抵の男は

「女が(或いは男が)縛られたり鞭で撲られたり加虐せられて快感を覚えるなんて、そんな馬鹿なこと!」と一笑にふされるようでした、それはそのお方がノーマルな幸福な方か、或は加虐的傾向のある人であると云う意味にはなつても、被虐性者のデリケートな心理を知っていることの証左にはならない。こんなお方に責められたら、そこには無機物的接触の不満足あるのみでしょう。

それほどにも、或は全くに愛情のない夫婦

は何と世の中に多いことでしょうか、換云すれば世の中の変態でない夫婦と云うものは何と合法的強姦、合法的淫売の要素が多々あることでしよう。世の奥さん達は大概は生きて行くために、心から愛してもない夫に身をまかせている淫売ではありませんか。人間ですから、その性交には幾分かの快感はあるでしょうが完全なオルガスムスの過程をぬぎにしている単なる玉つきの物理的摩擦のみです。

不感症不能症の不幸ユウツから私達を救つてくれたものは、私達の場合、ミネさんの陰な立場の女性としては最高最大の美である被虐の雰囲気技巧でした。私は普通の態度では、もしくは前戯に「責め」なしでは、失恋の明子さんの情交振りが妄想せられて、快感どころか悲しくて、当然に男の責め武器が濡れた脱脂綿のように、役に立ちませんでした。情交は双方で要求する雰囲気の中で無限の態度と、その運動とを以て、双方に満足しなければ、前述の夫婦のように、それこそ強姦であり、淫売であり、変態でありましょう。私達は表面は責めや強姦の型でありながらも、結果は、正反対に幸福でした。

甘い汁粉や、ぜんざいの中に、塩が含有されてあるのを批難する人々は、真理への常識

がないことの恥を証明しているに過ぎません。香水の製造過程中に、必ずアンモニアが添加注入されるという現実を見て、果然となつて、鼻をつまんで嫌悪するのは子供にだつて出来ることです。大人は、電気の感電漏電等の弊害の為に、電力の恩恵と意義を忘却して電気を輕蔑攻撃などはしません。私にも所謂変態性慾者のミネさんが、いてくれなかつたら又会う機会がなかつたら、如何なる偶然たる不幸が到来したでありましょうか。私はどんな女をも責めなかつた。強姦しなかつた。機関車の蒸気穴や、気笛の排気安全弁を閉鎖してしまつたら一時は一層早く馬力が出るかも知れないが間もなく汽罐が爆発して多数の死傷者が出て一切が失われるでしょう。

伊藤晴雨氏の言葉を拝借すれば男女お互いに「自分の破滅」への「脱線行為の抑制」と「社会的に一種の安全弁」でありましょう。

私の体験から、最後に結論させて置くことを許していただきますなれば、若しこの種の幻想仮擬的闘争、遊戯、演劇、ゲームがなくなつたなら世の中には(私の場合だけではなく)悲哀と、不幸と、憂鬱と、破滅と、犯罪との絶望が、どれだけ多く増加することでありましょうか。

(完)



## セックスの記憶

(此の告白をKKの読者に捧げる)

綾 久 江



記憶と言うものは、遠くなればなるほど純化され、ロマンチックになり、神話的なものなのです。

しかし、セックスの記憶だけは生々しく、深化され、不思議な色彩にいろどられ、常に新らしく生きつづけているのです。これは私だけのことでしょうか？ 私がアブノーマルなんでしょうか？

## 小学生の頃

私は早生れで、七才で学校へ行くことになりました。私は何故か眠れなかつたことを覚えています。もう夜半で、私はその頃まで起きていたことは一度もなかつたのです。夜は神秘です。簞笥が何か喋り出しそうです。ねずみが私を喰べに来るかもしれません。で、

私はふとんをかぶつて一生懸命に眠ろうとしました。すると余計様々な物音が聞えてくるのです。二匹の大きな獣が争っている。呻いで、揉み合つて……私は恐る恐るふとんから顔を出して、薄目をあけ物音のする方を見ました。そして、私は思

わず驚きの声をあげるところでした。風間、あのように仲の良かった父と母が殆んど裸になつて摺み合つているのです。私は一人娘でまだおっぱいを時々飲んでいました。その母のふつくらとした乳房を、父の手がぎゅつと掴んでいます。

そのうちに、私は恐ろしくなつてふとんをかぶり、声を殺して泣きました。母の泣声と父の獣のような呻きに耳をふさいでいるうちに、私はいつの間にか眠つてしまいました。朝、優しい母の声にゆり起されました。父も食卓に向つてにこにこ笑っています。昨夜のことなどまるでなかつたようです。私は、昨夜はきつと夢を見たのだ。と、信じました。私はいつも夢の話をお父や母にするのですが、昨夜の夢だけは何故か話そびれてしまいました。私は母に連れられて学校へ行きました。

その夜も私は父と母の夢を見ました。それ



以来私は度々その夢を見ました。そして、もう恐ろしくはなく、何故か興奮して胸がどきどきするのです。私はそれをだんだんはつきり見ることが出来るようになりました。母が父の……を口に入れた時は、思わず汚いからやめなさい。と、叫ぶところでした。父も母の……口をつけていることがありました。それから私は父も母もきらいになりました。父や母が私にキツスしようとする時はいつも逃げてまわりました。

いつか私は母のおっぱいをのんでいる時、内緒でその夢の話をしました。すると、母の胸が鳴り、乳房まで赤くなりました。そしてその夢の話はだれにもするものではありませんよ。と、恐い顔をしましたが、それから母は何となく私に気兼ねするようでした。

その頃、街の子供達の間では「悪漢ごっこ」が流行っていました。それは汚い着物を着た長屋の子供達で、本当に面白そうなのです。

或る日、私は仲間に入れてくれと、申しました。大將は十四、五の炭屋の小僧です。彼は私を敵意に満ちた眼で見ていましたが急ににやにや笑って、よし、入れてやる。と言いました。私はお金持の令嬢で、長屋の文子

と千代が私の女中なのです。警官や探偵はみんなやられてしまつて、私や女中達は縛られて空屋へ連れ込まれました。くもの巢のある埃だらけの汚い家で、悪漢達は、私達をつねつたり叩いたりするのです。私は怒つてあばれました。すると足もぐるぐるに縛つて、服に泥をつけるのです。猿ぐつわをはめられているので、声が出ません。俺達の言うことをきくか。と、炭屋の小僧が言うので、いやだと首を振りましたが、文子も千代も肯いたのです。今迄みんな肯いていたようです。文子と千代は縄を解かれ、ついでに服も脱がされました。私はそこで父と母の夢を実際に見たのです。まず炭屋の小僧が文子とそれをやり千代とそれをやるのです。それから子分達が代る代るに文子と千代にそれをするのです。そして二人は服を着せられて戸外へ突出されました。悪漢共は私の周囲に集りました。どうしてやるか。みんなで手や足をもつて、そしてやれ。と、炭屋の小僧が恐ろしい声で言うのです。足の縄だけ解かれました。私は炭屋の小僧の股を、偶然に蹴上げました。と、炭屋の小僧はひっくり返ってしまいました。私はみんなが騒いでいる隙に手を縛られ猿ぐつわをされたまゝ戸外へ飛び出して交番へ馳

けつけたのです。それ以来私はその横町を通れなくなりました。

もう私は、夜の夢が夢でないことをはつきり知りました。文子と千代に聞くと、初めは大そう痛くて血が出たが、今は慣れているからかえつて気持がいい、と言うのです。文子と千代はいつもそこをいじっているのです。私は、もうこんな下品な子供達と遊ぶまい。と、心に決めました。

五年生になつた時、稲垣と言う若い美しい女の先生が私達の受持になりました。前々からその先生を私達は好いていたので級中大喜びなのです。私は一年の時からずーと級長でしたので、先生がすぐに私を覚えてくれたことに私は内心鼻高々でした。

或日、先生が私を自分の家に呼びました。目の見えないお母さんと二人暮しで、先生は学校から帰つてきてもお母さんの世話をなさつたり、食事の仕度をしたり、それは忙しいのです。その日は少し遅くなつて、先生と一緒にお風呂に入つてから帰りました。

先生は度々何かと用にかこつけては私を呼ぶようになりました。そして、いろいろお話をし合うのです。私は夢の話や悪漢ごっこの



話を先生にしました。先生はもつといろいろなことを私に聞こうとなさるのです。しかし私はそれ以上な話することがありませんでした。先生はよく私をきつく抱くのです。久江さん、私を本当に愛している？。こんなことをしていやにならない？。私、久江さんになにもかも知ってもらいたいよ。先生は私の手を取って、暖い柔い胸をさわらせ、お腹から、すつと、手をすべらされたのです。私は全く触れたことのない柔い毛にふれさせられました。私は羞しくて真赤になつて手を引こうとしました。いいの。いいの。そう云う先生も耳の根から頸から紅色でした。先生のしなやかな手が、私のお尻をなせているうちにやはり、そこへすべつてきました。秘密よ。二人だけの秘密よ。私は背きました。体身中がぞくぞくする喜びを感じました。

稲垣先生はいろいろなことを教えてくれました。私は、教壇に立つている先生をまぶしく眺めながら、私は先生の乳房を知っている柔かい腕も知っている。すべすべしたお腹も知っている。何も彼も知っていると云う誇りで一杯でした。柔い毛のあるところにキッスするのがもう汚くも何ともありませんでした愛しているのなもの！。

私が卒業する時、先生と私はいつまでも抱き合つたまゝ泣きました。そして、卒業しても時々会うことを約束しました。が、私は女学校の寄宿舎へ入ることになつていたので私は、一週間に一度は訪ねてくることを誓いました。

### 女学生の時

その頃、私の胸も蕾のようにふくらみ、また桃の皮のような柔毛が生えてきました。稲垣先生はそれを喜んで、まるで自分が生やしたようにはしゃぐので、私はかえつて羞しくなりました。そうよ、みんな、誰でも、でも生えない人も居るわ。久江さんのが金色のだったらどうでしょう。いえ、きつと、漆のように黒いわ。

先生は御自分のと同じ香水を私にくれました。香水の香がしているのは寄宿舎では私だけでした。誰も、どこから匂うのか気がつかないのが、私には嬉しくて手を叩きたい気持ちでした。

寄宿舎には一つの伝説のような話がありました。それは、影のような、不思議な盗賊が夜毎寄宿舎に入る。と、言うのです。何も盗んで行かないので警察でもそのまゝにしてい

るのだ、とのことなのです。

私達は夜になるとその盗賊の話で持切り、いつもびくびくしていました。昨夜は隣の部屋よ。だから今度はきつとこつちだわよ。

その盗賊が私達の部屋へとうとう来たのです。黒い布を頭からかぶつて。ピストルを持っていました。私達の部屋には四人居りました。私達は、そろつてふとんを覆つてふるえていました。英子さんの呻声がふとんの中からもれてきました。みんなはいよいよちこまり、今度は自分が殺されるかもしれない。と、観念しました。私は、ふとんからそつと顔を出しました。英子さんのふとんがまくりげ上られ、白いちゃんまりした英子さんのお尻が、窓からさす蒼い月に照らされているのです。さつきの呻声はズロースを脱がされる時の泣声だったのです。私はすっかり見ました英子さんはまた泣き出しました。幾代さんがそのつぎでした。澄江さんの時は盗賊の様子はすっかり弱々しくなっていました。

私のズロースが引きむしられました。冷気がそこから胸へ吹き抜けました。私は唇を噛んで泣くまいと思いました。

「駄目か畜生。一番いい体身をしている……うむ、こつちから先にやれば……うむ。」



私は盗賊の泣きが校長先生の声にそっくりであるのに気付きました。

盗賊は足音を忍んで消えてゆきました。私はたゞ股がぬらぬらと濡れただけでしたのですぐに起りました。三人はまだお尻をむき出したまま泣きつづけていました。

私はそのことを早速稲垣先生に話しました。すると稲垣先生は顔色を変えて、それは校長に違いない。と、きつぱり言い、今度は久江さんだけをねらつてくるだろう。と言いました。ピストルは玩具だから恐れずに抵抗しなさい。そして、相手の万年筆でも服のボタンでも何でも、証拠になるものを取りなさいと、教えてくれました。

盗賊は又来しました。英子さん達は待つていたようにふとんをかぶりしました。が、賊は真

直私のところへやつてきたのです。私はいきなりはね起きて、覆面につかみかかりました。

黒い布が落ちて、それはやはり校長先生なのです。校長先生は私を振払って逃げて行きました。英子さん達はびっくりして逃げてゆく校長先生の後姿を眺めていました。

私はすぐに警察に駆けつけました。しかし署長は少しも取り合わないばかりか、私が淫売でもしているように取扱うのです。私は級友と相談して、寄宿舎の盗賊のことをビラに書いて町の掲示板に貼りました。

校長は退職させられ、私は、母校の不名誉を公表した理由で停学させられました。

私は父母の希望で稲垣先生の家から学校に通うことになりました。手許においてよく指導してくれるように、と、母が稲垣先生のと

ころに頼みに行つたのです。父も母も夜のいとなみを私に見られるのを明らかに恐れていたのです。が、私はもつけの幸いでした。

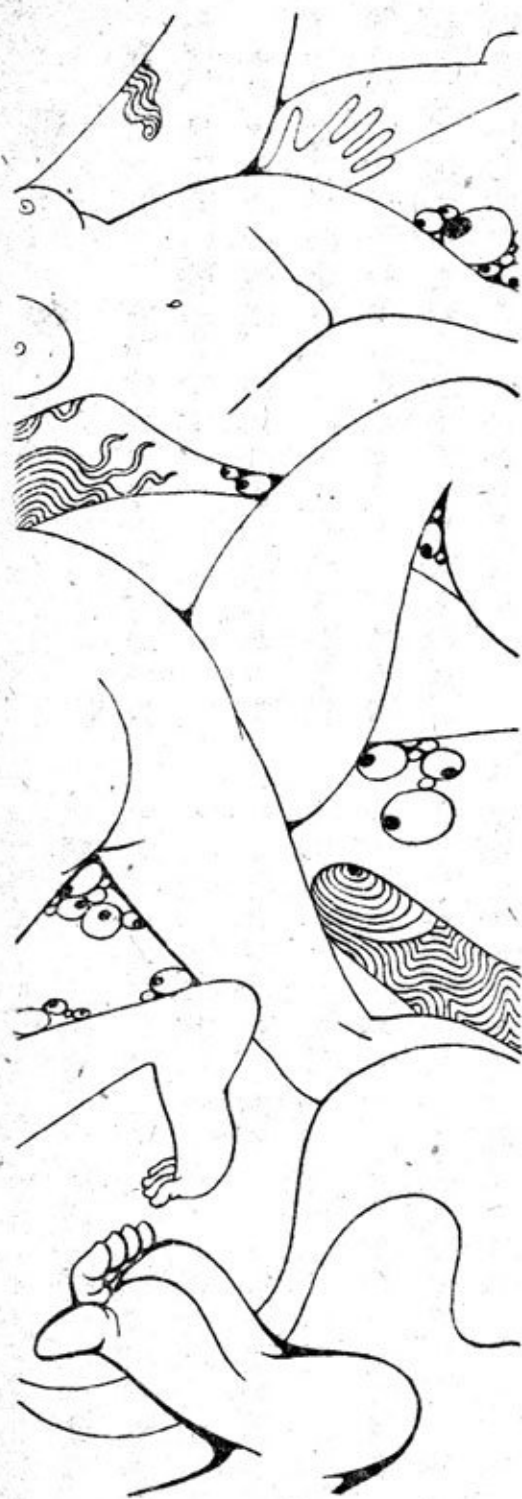
稲垣先生は真面目に承知しました。と、母に答えて、それはよく私を指導してくれました。私は夜がどんなに楽しいか、それをこゝに書き現すことは出来ません。どちらの方が熱が高いか体温計を入れ合つたこともありま

す。私達はもう切離せない間柄になつていました。屋は、先生は小学校のよい先生です。そして私は、真面目な、成績のいい女学生です。私は淫りがましい話には絶対に加わらないのです。

太平洋戦争が始まりましたが、私達は、世の常の夫婦のように、召集令状で引裂かれることがありませんでした。

私達は学徒動員で工場へ通わされました。先生は私をいたわってくれました。が、或る日の空襲に先生も先生のお母さんも焼け死んでしまいました。先生はお母さんを背負つて門のところで息絶えていました。私はこの時ほど戦争を呪つたことはありません。

稲垣先生とそのお母さんの葬式は私の家から出しました。





## 戦後

私はアブレゲールではありません。言うならば、最も若い戦前派です。

セックスの記憶は、拾えばまだ沢山あります。処女膜が保全されていることの方が不思議な位です。予科練の青年達にセックスの奉仕として出された時、私はどうしてあの逞しいものから脱れ得たのかわかりません。

稲垣先生は私に多くのものを残していつてくれました。その一つがフランス語です。しかし、何と言つてもセックスに関する精神的肉体的知識が一番大きいのです。

私達一家は敗戦直前山奥の小さな田舎町に疎開しました。そこで私は戦後を経験しつつあるのです。

戦後、私は町の青年男女と共に小さな文化団体を作りました。そして、春、夏、秋にはポーターブルを持つてピクニックに行くのです。第一回目が山の発電所が爆撃された、そこへ行つたのです。六畳一間の小屋が一軒ありました。青年が四人に若い女性が八人でそこに泊りました。カンテラが唯一の灯りなのです。猪や他の獣の要心のために戸締りを厳重にして……夜半に、いつかカンテラが消

えて全くの闇でした。手が、そろそろと体身に這つてくるのです。乳房をそつとゆすり、そして唇をつけてくる……私は知らぬ振りをしている。闇のそこで動く気配がしている。手が、おずおずと、下腹や太股にさまよつていて、私が一寸動くと、びくつと引込める。毛を、指がそつと分ける。まだ大丈夫。そして私はなお知らぬ振りをしている。指が次第に大胆になる。私は、突然、腕の肉を力一杯ひねり上げました。

翌朝、私は小西唯夫の右腕に紫色の斑点があるのを見た。私は他の三人の青年達がそれぞれ満足を得ていることを直感しました。

私達は谷に沿つて更に奥へ進んだ。岩から岩へ伝わつて、ふと、偶然に唯夫の腕を借りた時、彼の耳に、ゆうべ、ごめんなさい。と紫色のところを眼で示した。彼は全く思いもかけなかつたようにへどもどした。

蒼く澄んだ淵では、みんなが一糸をまともに水浴びをした。青年達は、太陽の下では流石に女性達の裸像がまぶしいらしかった。発電所の小屋では、誰が誰と関係したのかまるでわからなかつた。そして、四人の女が妊娠した。男達は内緒でくじを引いた。そして唯夫が最も不器量な恵子を引きあてた。そ

してそれぞれに結婚し、今もつて離婚しないでいるのは唯夫夫婦だけです。

その文化団体は丸一年でつぶれてしまいました。

やがて戦後の騒々しさが影をひそめ、私は誰からとなく小町と言われ始めました。古くさい名称ですがこの街にはびつたりするので。なまじミス何々よりも……。私は所謂小町にさせられてから、青年と腕を組んで歩くことをやめました。盛り場へ出ることをやめました。

或日、恵子が訪ねてきました。そして、唯夫が結婚しても一度も身体に手をふれようとしないし、離婚も許してくれない。と、涙を流して訴えるのです。唯夫は久江さんを愛しているのです。私、ちやんとわかるのです。いえ、何も言わなくなつてわかります。あの人は私が悶え死にするのを待つているのです。ワ。え、そりや、浮気もしないし……見掛は立派です。ワ。しかし、夫婦が夫婦としての勤めをしないのは罪惡に等しい。ワ。それじゃ、あなた、離婚なさりたいの、いえとんでもない。私は唯夫のすべてを私のものとしたいだけです。ワ。そうね、それはあなたの当然の権利かもしれないわ。でも男つて、女が近





くに居て、プラトニックなもので耐えることが出来る筈がないわ。どうすればいいのかしら。あなた達喧嘩もしたことないでしょう。喧嘩しなさいよ。喧嘩を。まあ、私、そんなこと出来ないわ。だめだめ、喧嘩をしてぐいぐい迫つてやりなさいよ。なるべく取組合いでね。まあ、あなたは他人のことだからと思つて……。唯夫はあなたを愛しているのよ。いえ、私は唯夫さん一人に愛されているのじ

やないわ。いちいちそんなこと気にしてなんかいられないわ。驚いた。それ正気？。

私は唯夫が恵子を愛せないのは無理ないと思ひました。どこか抜けている。唯夫はくじけを引き当てる時に覚悟したのだろう。私は小柄な寸のつまつたような恵子をあわれみました。そして心の中で呟やきました。離婚されないことを幸福と思ひなさい。と、

翌日から恵子は子供を連れて行方不明になり、数日後に、発電所の小屋で服毒自殺しているところを発見されました。世間ではその理由が全くわからないとの事でした。

その後、唯夫は私に結婚を申込んで来ましたが言下に断つてしまいました。彼は言外にあのことを言いふらす。と言いましたが、私は平気でした。噂なんかいくらまかれたつて平気だわ。私は絶対に噂に負けることはあるまい。と自から信じていました。唯夫は噂をまきませんでした。そしてすぐに他の女と結婚し、すぐに子をもうけました。

私は、男なんて他愛ないものだと思いますが、私は性関係にしばらく遠退いていることが何としても淋しくて仕方ありませんでした。父も母も、私が少女になつてからは、私の目のつくところで情交をしませんでした。

私は記憶を引き出しては、もう一度でも二度でも、成長した目でそれをよく見たいと云う願望にとらわれていました。肉体がうずいていました。しかし、書店へ入つても、夫婦雑誌の類のあるところには絶対に近寄らない。すまして近代文学や新潮を手に取ります。

私の家の小さな湯殿で、私は四つ這いになったり、仰向けになつて足を抱えたりしました。と、急に稲垣先生が恋しくなつて、胸が波うちました。私は急に可愛い少女を探すことを思ひました。私は湯にひたつて、離れのような少女を想ひ描いて、稲垣先生の私を愛した心がやつとわかつてきました。

私は、ながながと湯の中に身体をのぼし、先生が漆黒の色になると言つた柔毛を分けて欲情を激発させながら少女の姿をあれこれと脳裡で選び、えがいていました。私は、より多くの、より様々のセックスの記憶を引出していました。私は今欲情している……。悶えて、胸を波うたして、肢体をくねらしている。

×

×

×

×

×

×



## 前 書

最近私は都内の二三の劇場で女剣戟の脚本を度々執筆したが、責められる女の姿態に思うような演出が出来ない現在の環境が半ば恨めしくすらある。責め抜かれる事によって表現される女のエロチックな肢態の美しさが、芝居の観念を超越した醋寛を観客にアツピイルさせる迄の徹したリアルなアトモスフィアを創造する事が出来なくて責めの醍醐味は到底望むべくもない。私はそうした責めの舞台を頭の中で考案してはあてどもなく、街を歩く。小ぶとりな若い娘の後姿を見ると、その豊満な尻のくねりに対しての連想はこの姿をズロオス一枚に削い

で縛り上げ、思うさま拷問にかけて見たいという事だけである。その時の絶望的な姿の瞳に私は美を感覚し、私の芸術的意欲は馳り立てられる。恐怖と羞恥と苦痛の三重奏にのた打ち廻り、嗚咽と呻吟の中に喘ぐ女体の臭いが女の五官に歓喜の情を伴って奏する幻想曲が、即ち私の言う責めの本質であり、女性の真実の美であり一つのアブノーマルな完全芸術の境地であると信ずるのである。以下私の背神的な行状記をありのままに記して行こうと思う。此の告白によりいさゝかでも私の悪魔的な魂の安泰を得れば幸いである。

## 錯 乱 の 倫 理

|| サデイストの懺悔より ||

近 藤 規 矩 也





## 【1】

大正十年、私は東京の屋根の下で呱呱の声を挙げた。生れ落ちてすぐ父の仕事から一家は神奈川県の大船に転居、そこで小学校の一年生となる。ついで温泉地で著名な湯河原に赴任、次が国府津、千葉の船橋、次には、浦和市、又ぞろ大宮市と転々と小学校を渡り歩いて尋常科を卒業するまでには何と九つの転校を試みた。不思議と成績は何時も良く、常に優等を続け、級長も二度ほど勤めた。こんな事があつた富士山麓に近い、大月町に移つた際、私は前校との進学の振り合いで、やゝ進み勝ちな学科に骨折つたせいと二年を修了する時、二位に落ちて賞状を貰つた。一位が従妹の栄子（母の姉の子）であつた。私は口惜しくてならなかつた。帰途、私は磐殿山の見える製材工場の角で彼女を躰りつけて、履いていた下ろしたての日利下駄を前の小川に放り込んで後も見ずに馳け帰ってしまった。可愛い朱塗りの青い鼻緒の小さな下駄それが清冽な流れに乗つてどん／＼漂い去つてゆく。栄子は大声で美しい顔をゆがめて泣きわめいている。そばにはうり出された一位の優等賞状と紫の風呂敷に包まれた褒賞の修身書とノオト類、——私はこの場の印象が未だに鮮かに頭脳を去らない、お下げ髪の彼女が小さな色白い脛を投げ出して泣き叫んでいる姿、私はいさゝか流飲を下げた思ひだつた。後年の私のサジスト的な片鱗はすでにしてこの時萌芽していたのかも知れない。私は確かに早熟であつたらしい。小学校四年頃までに少年倶楽部や小学館の所謂少年雑誌に飽き足らぬものを感じ、祖父の読むキングや富士の類を、そつ

と盗み読みすることに興味を覚え出していた。当時のこうした雑誌にはきまつて探偵物や仁侠小説と題する舞台で謂う、白塗りの二枚目が縦横の活躍を遂げ、危機一髪の間美女を救い出すのが通俗な落ちになつて大団円となる説物が三つや四つは掲載されていたものである。——曰く、（猿轡に後手に縛り上げられた湯文字一つの美女、これを鞭打つ女衞の熊、果して彼女の運命や如何に？）（洞窟の奥深く、くさりでいましめられた裸女の群像、不気味な土人達の打ち鳴らす太鼓が高く低く響く……）と云つたサブタイトル、加えて神保朋世、岩田専太郎、伊藤晴雨、志村立美、田代光等の縛られた女、女、女の挿絵が、私にはたまらない刺戟となつて官能をゆさぶるのである。

私の此の偏つた性癖はその素因を遠く小学校時代に始まる。私の母は私の口から言うのもおかしい話だが美しい容貌の持主で俗にいう横町小町であつた。

母は好んで街中に用事を求め、殊更に繁華街を散策する。芝居は缺かすことがなかつた。後年私が歌舞伎好きになり、三階席の常連におさまつたのも母の影響であつた。爾来女剣戟に興を覚え、ストリップの脚本に手を出し、地方廻りの劇団に淡いノスタルジヤを感じてボヘミアンをきめ込んだのもこのあたりとそのモメントをもとめてよいだろう、話はもとに戻るが、母と観た田舎歌舞伎の「番町皿屋敷」の、お菊の井戸端責めが私の嗜虐性を育くむ結果になつたのもその一つ。次が南北の「四谷怪談」の地獄部屋や、三角屋敷、小平の惨殺場面、歌舞伎には殊に責め場や殺し場が多い、この異常な場面のシイクエンスが新しい刺戟となつて私に或る種の興奮と性慾を覚えさせてし





まつたのである。特にそれがきまつて美しい女性を対象としたものであつただけに、女性を責め、さいなむことが、ひそかな悦びになり、それを観んが為めた私の歌舞伎通いが中学、大学と続き遂には女形に変質的な嫌悪を感じ、女自体の演ずる責めでなくては満足出来ぬものを裁つてしまつたのである。そこで次には、未だ女剣戟の誕生しない当時（昭和五、六年）であつたので私の眼は小芝居の剣戟に移つた訳なのである。もつとも不二洋子や大江美智子の劇団は既に結成されてはいたが、今流行の女剣戟とは全然観念的にこととなつたものであつた。浅草の公園劇場や昭和劇場（既に、戦時中に強制整理されてしまつたが）松竹座の金井修、梅沢昇、青柳龍太郎、市川百々之助の剣戟一座の木戸をくぐることになつた。演し物も必ず四本建て、美女が縛られて拷問されたり、鞭打たれる場面が二つや三いは、きまつて出て来た。金井修の若かりし頃の「風雲将棋谷」では、原作の角田喜久雄も書いていたが、将棋谷女主人のお姫様を蠅道人が責めるシインは巧妙に使われたスポットライトも手伝つてか、凄艶な感じを出し、もたえ苦しむ深川波津子演ずる白絹姿のお姫さまは絶品と云いたかつた。私はこの場面を観るため、都合三十銭の料金を四度払つて、埼玉県浦和市から浅草まで出掛けたものであつた。就中、二幕目の返して今は金井修の良き妻君である中条喜代子の女御用聞、神田の仁吉親分の愛娘になる彼女が湯上り姿の帰り途、寺院の境内、風間の遺恨を果たさんと、ならず者や不浪人にかどわかされ、後手にしごきで縛られ、豆絞りの手拭で猿轡をかまされて、かつぎ上げられて、もがく肢態の色つぽかつたこと、緋の湯文字が白

い脛にからんで股の付け根まで覗けそう、——勿論黒いズロオスをはいてはいたが、……私は覚えず生つばを飲んで魅入つてしまつた。

戦後軽演劇が一時流行、往年のムウランルウジュで踊り子がズロオスを落したとかで学生が騒ぎ出し、それからと云うものムウランは日大、明大、立大、法大、慶大、早大生の良き憩いの場所となり、山口正太郎や野々耕介、並木瓶太郎、左朴全などか活躍し、外崎恵美子は明日待子並んで踊りの小柳ナナ子と双璧をなしたことがあつた。そのムウランも小議会と名が更り、外崎は新国劇に馳り、伊馬鶴平（春部）なく、中江良夫の独壇場であつたが、このムウランが暫く小議会と袂を分つて渋谷の東横四階劇場に公演を続けたことがあつた。この時、今のストリップバーX小夜の夫君である沢村い紀夫が主演の「火あぶり」（原作鈴木泉三郎「火焙り」）が掛けられた、劇団として当時一か八かの打つ手だつたに違いない。これがやゝ当つて次の解散手前に演じた「肉体の門」までの喰いつなぎになつたエロ劇であつたのである。こゝで画家の沢村が妾をくさりて柱に縛り付け、スケッチするが、幕切れで書生との逢引きを識つて長襦袢一枚に素足、鉄くさりに繋いで庭先の銀杏の幹に結え付け、下から火焙りに掛けて責め痛めるのである。女は年増の色気を燃やし、悶え苦しむ。髪は崩ずれ、何時か猿轡も外れて、肩を抜けた衣紋は胸のふくらみを僅かに覆うばかり、太股までひろげて縄の掛つた脛に火のあおりがめら／＼と絡み付く。……がつくりと氣を失つた女の頸の白さ。裾を割つた股倉から純白のズロオスが覗かれて、妖艶なこと、歌麻呂の浮世絵を見る





思い。——さら／＼と落葉が、病葉が、二ひら三ひら、女の死んだような蒼白な顔を敲いて散つて行く、からすが一声、尾をひいて啼き過ぎる、野分きの音が、肌寒い、寂としたこの一瞬画家は靈感に打たれたように急ぎ駆け込んで画帖を掴み取るやとつて返して女の肢態を舌なめずりしながらデッサンし始める……そして静かに幕と云つた光景である。私はこの女優の演技力もさることだが、迫真的な舞台より更に女優自身のセンジュアリツク肉体に魅せられて、知らぬ間に、エクスタシーに達してしまつていたのである。

## 2

埼玉県の大宮市と云えば、氷川神社で著名な都市である。私は茲で県立の浦和中学を卒業した。中学一年に入つた四月の中旬、母が急性肺炎で死逝、父は上越に赴任、私を始め弟妹達は祖父母の家に引き移ることになり、母を喪つた私達は封建の家憲に縛られて各々成人しなければならなくなつた。人一倍、母を愛した私は、母に代る慈愛が欲しかつた。一種のホウムシツクに駆られた訳で、映画や演劇に寂しさを紛らわすことで僅かに哀みを押え続けて行つたのである。

私は講談興業部やキングを熱読した。就中、邦枝完二の「お伝地獄」や「高尾太夫」の裸責めや、強姦の場面に血を湧かしマスタアベイションに寧日ない程、変質的な日常のリフレインに終始するのであつた。小村雪岱の線の細い女の肩や腰は美しい夢を次々に生んで呉れた。私は吉川英治の「鳴門秘帳」の責め場や拷問場には顔面が充血するまで激しい愉悦を感じた。こ

の頃から私は月おくれの雑誌を買い漁り、責め場や折檻場を綴じた場面を抜きとつて挿絵と共にスクラップすることにした。何時かそれが二冊となり五冊となり、遂には秘本の蒐集を始め類系の冊子は六百余を数えるに及んだ。江戸川乱歩は特に好んで味読した「パノラマ鳥奇談」の大詰は、たまらぬ恍惚境に私を引きずり込んで熄まなかつた。傍ら浅草の小芝居やオペラ館の小便臭い小屋のバラエティにも、ひそかに胸を躍らせていたのである。

当時のオペラ館は踊り子も三十人近く居たし、バンドも十人程の腕達者が揃つていた。私は、かぶり付きでバラエティを娯しむのである、この頃の入場料は夜七時から割引で七銭で観られた。モギリ嬢の手から番付を買つてバラエティの場割を読む。踊りが十二景、歌が四景、スケッチが三景、たつぷり一時間、私は嬉しめる訳なのである。踊り子は皆、自前のズロオスであり、赤や緑の所謂劇場側のコスチュームは使わない。と云うのが、仕込み費の勘い小屋のことなのでなるべく自前がよるこばれるからである。

現在ストリップアになつている大半が、このオペラ館で踊つていたワンサ・ガアルなのであるから面白い。私はコスチュームのパンティには何の魅力も感じないのであるが、彼女等が平常腰間に帯びているズロオスその儘で踊る肢脚に不思議な興奮を覚えるのである。それが、カブリ付きに居ると最もよく解るこんな美人が——と思う女優が、うす汚れたズロオスを穿いているかと思うと、平素眼にも掛けなかつた踊り子が清潔な純白のズロオスを穿いていたり。時に局部の辺りが黄色く汚れてい





たりするのを脚を挙げた際、発見して、(この女は便所で紙を使わずに小用を足しているな)と、私のみだらな想像は逞しく発展する。中にはスロウダンスで後ろ向きのボウズに極つた時尻の割れ目辺りが薄茶に汚れているのを見付けて、(はゝあ、この女は下痢して大便を付けてやがる)と悦んだり、凡そ愚かな淫嚚に身をふるわせて悦び浸るのであつた。身体の肥つてゐる割に、腰にびつたり嵌まるよう小さなズロオスを使用している踊子がフットライトの近くまで舞い踊つて来る時には私の眼は異様に輝き、私の指先きが猛烈な運動を起すのである。何故なら彼女のズロオスは股の附け根までゴムが喰い込み、逞ましい陰毛が白いズロオスから七本、八本と数えられるばかりに這い出しているのではないか。これはカブリ付きならではの壮観である。ストリップのなかつた当時、この秘密の発見は私をすつかりアトライティブにしてしまい、とうとう入営前までオペラ館の小便臭い小屋を訪ねることを忘れなかつた。

又、映画は大都や極東系のものが好きであつた。こうした小企業の映画会社では常にポピュラーな作品を発表してミイ・ハア連の人気を得ていたのである。従つて今で謂う、スリラー物や探偵物、捕物、強姦、責め、そうした大衆受けのするジャンルのプリントが熾んに上映されたのである。ハヤブサ・ヒデトの活躍する大都映画にはきまつて令嬢が悪漢達にかどわかされ、後手に縛られて、猿轡を噛まされ、倉庫の中で悪漢達の親分から鞭打たれると云うヒロインの悲運が、プロットの総べてであつた。又大都の松山宗三郎は苦み走つた二枚目の遊び人姿で長脇差をふるつては悪代官を斬りまくつた。現在の小崎政房の前

身である。こゝでも三条輝子が町娘に紛して縛られ、代官の人身御供に捧げられるシチュエーションが織られていた。

常盤座の「笑いの王国」死んだ関時男や、生駒雷遊が今のフランス座の座長格である雪丘純や、彼女房である秩父照子を相手にまげもの喜劇で女を責めたり、バラエタイで女の裸付を戯画化して観せた。その活弁華やかなりし頃の彼等は現在、浅草のロック座で活弁劇団を組織したり、活弁ドラマを放送したりして昔をしのんでいるが、女を責める点では公私共に生駒なぞその道の最たるものだろう。

さて、こうして私は日大の文科に籍を置いて古典の色情文学を研究しだした。フランス文学に新らしい欧風の責めの類を発見したのもこの頃である。中国の秘本と謂われるものも大抵は読み漁つたが、これはと思う責めのスタイルについてはもとむるのが勘かつた。

この頃から支那事変は次第に長期戦化し、書籍や映画、演劇のジャンルも、それらの面から制約され、最早や私の陶醉境は完全にシャット・アウトされた恰好になつた。私は熄むなく別の方向にはけ口を探さなくてはならなくなつた。ようやく学校を了えた私は官庁に勤務したのを機に、祖父母達と別れて市の郊外に小さな借家を見付けて自炊生活を始めた、然し物資の統制は強化される一方で、何かと日常生活に不便を囀つ有様であつたので殆んど三度の食事は祖父母の家で摂つていた。

こうした傍ら私の文学熱は高まり、週刊朝日の大衆文芸に三位入選したのを機会に、大衆文壇の雄、×××の門を敲き、××会員となり新百人一首の受賞や読売歌壇の入賞に暫く、私の





悪鬼のような血潮は眠っていたかのように見えたが、再び頭を拾いだめたのは、入営間際の三ヶ月間であつた。私は第二種であつたので建民修練に駆出されることになつた訳である。熱海から半時間、白砂青松の勝地、綱代の海岸で三ヶ月の予備訓練を施行された。私は幸い監督官庁勤務であつたため、第三小隊長を命ぜられ、五十人の現場関係の人々の隊員の指導者として行動することになつた。

宿舎は駅近い堤防の上に建てられた大きな民営旅館で、茲の二階全部が私の小隊、階下の左右を二小隊に分けて生活が始まつた。朝は五時半起床、夜の就寝は九時であつた。

九月に入つたばかりの湘南の地方は末だ暑さもきびしく、燃えるような残暑の熱気を浴びた。連日の訓練はそれは苛酷を極めたものであつた。育ち盛りの私達はさらぬだに足らぬ食事に極度の空腹を訴え、一策を案じて私は隊員七、八人を語らつて漁師町の乾物の肴を盗み集めることにした。それを浴場の湧口に浸して、適度の温度でゆであげたのを採り出しては、むしやく喰べ散らした。現場出身の隊員たちは実にこうした事にかけては巧妙に立ち廻り、最後まで教官達に尻尾を掴ませなかつた。十月の声を聴くと、もう朝夕はめつきりと肌寒を覚え、乾布摩擦の吐息は白かつた。今日は珍らしく、全員の栗拾いである。晩は演芸大会が開催される。

負けず嫌いな私は栗拾いにも小隊の成績を挙げたかつたので規則外の地域まで歩度を延して駆け廻つた。こゝで瀬戸の小学校の女学教員達四名に会つた。智的な感じのする彼女等は皆すく／＼健康美に輝やいていた。久し／＼地方人の圏外にあつた

私達には新らしい刺戟となつて眼に映つた。紫の袴に白足袋、一昨年師範を卒業して、遠く瀬戸の小島に教鞭を執ると云う彼女等の話題は豊富で、ロマンチックでさえあつた。年は二十を越えて間もあるまい。何時か私を中心に隊員の山本、石川の三名と二名の彼女等だけが環になつて密柑山の中腹に腰を下ろし四方山の話に花を咲かせ、時を忘れて打ち興じてしまつていた秋の陽射しが快よくあたりの霞んだ雰囲気溶け込んだ。

私はサツカレイやディッケンズを語り、彼女等は鷗外や露伴を口にした。社会主義から文学論、紅唇から皓齒をのぞかせて発散させるパッションに、私は別の女性美を感じた。私の女性性に対する即成概念は、虐げられる以外に女の美しさはないものとしていただけに、苦悶も懊悩も、羞恥も呻唸もない、知性の情熱だけが女性の美しさの総べてであるかのような、この場合の想念に、何か底知れぬ圧迫を感じて、私は早々話を切り上げてしまつた。彼女等は今夜自分達の家の蜜柑山を案内するから風呂敷を持つていらしやいと云つて笑つた。

その夜、演芸大会で私は「野晒」を一席やつて一等賞を獲得した。総得点も第三小隊が最優秀であつた。就寝前の点呼を終えると、私は石川と山本に連絡をとり、二階から帯をつないで下りることにした。

月の美しい夜で、秋らしい夜気が新鮮な海の香を伴つて、すゝきに白く戦いでいた。彼女等は砂浜に影を踏んで佇んでいた蒼流した赤い三尺を垂らした新子と云う女の腰の辺りが変になまめかしく映つた。私達は一時間余り海岸で費やして、山道にかゝつた。甘酸っぱい香りが、何処からともなく鼻を衝いて、





夜眼にも黄色い果実が点々と両側の砂丘に望まれた。蜜柑山は明るかつた。もう人の行き来も絶えた時刻で、見透かす沖の漁船の灯りが時折点滅しては揺らいでいた。新子の畑で風呂敷に一杯蜜柑がつまつた頃、もう一人の女は遅くなるからと云つて歸つて行つた。駅通りまで、ものゝ五分とはかゝらなかつたが山道のせいか人通りは全く無かつた。新子は畑の木戸の鍵を下ろすと私達に帰ろうと言つた。腹一杯で喰べ散らしたの蜜柑の皮を片付け乍ら私達は尙も冗談を云い合い新子を中心に山木と石川が各々右左から彼女の肩を抱いて歩いた。私は新子の後ろを踏んでついてゆく。やゝ広い砂山に出た。こゝを下りると、もうアスファルトと舗装路が駅まで続き、街灯が現れる。予期していたかの様に山木が、いきなり新子の胸に掌を廻して抱擁を迫つた。驚いた彼女が逃げ腰になる処を石川が前に立ちはだかつて道を防いでしまつた。泣き声になつて彼女は今度は私に救いを求めて来た。私に彼等を阻止する自信はあつた、然し悪魔が私の耳に囁くのである。(高慢な女じやないか、風間お前はこの女に圧迫され続けていたのだぜ。構うものか、この女の苦しみ悶える姿を心ゆくまで眺めてやるがいのさ)

私は黙つて彼女に背を向けてしまつた。山木は新子の両手を川石は腰を抱いて、もう砂地に押し倒していた。新子は激しく抵抗を試みたが所詮は無駄である。大の男二人、しかも現場上りの逞ましい四本の腕が、足が絡み合つては、女の纖手ごときは凡そ問題にならなかつた。たちまち着物の前がはだけ、黒いブルマに石川の手が掛る。胴を締め付けていたゴムが持ち上げられ、彼等の赤黒い指が彼女の肌に触れた。月明りに女の腹

が波打つた。彼女の唇は彼女自身の袂を詰め込まれ立派な猿轡となつて声を挙げる術もなかつた。うつすらと額に、汗が行つて、その眼は観念しきつた色をしていた。彼等は私の代りに見張りに廻つた。私は輕蔑しきつたような女の瞳に、ふと嫌なものを感じた。風間饒舌つた文学論が浮き上つてしまつていた。それは難解な思想をてらいもなく弁じ立てる大道学者のようと言葉だけのものとなつて雲霧散散してしまふであらう。私は正直、かなしかつた。弱い自分を恥じる前に私の倫理が掴みかつた。理性はそれすらも肉慾に押えつけられ、熱い血潮が耳孕に燃える頃には、私は実にあつけなく新子の身体を征してしまつていた。

私は彼女の袂から落ちた京花紙のうつすらと桃色ににじんだ紙たばを何か尊いもののように握り締めてみた。私達は彼女を抱きかゝえるようにして山を下つた。彼女の家の二階には未だ電燈が明るく灯つていた。華やいだ黄色い声が流れている。同僚の女教員達のざわめきであろうか。彼女は私達に小さな声でさようならと言つた。私達が通りまで来て顧ると、未だ彼女は戸口に立ち尽したまゝ、私達の方をじつと見詰めていた。私達は三人共、不思議な興奮で宿舎に帰るとお互いに口もきかず床に入つてしまつた。横になつた時、ころ／＼とズボンのポケットから小さな蜜柑が転り出て一間程疊を這つた。押しつぶされて捻じけた蜜柑に私の眼が吸いつけられようにして喰入つていった。階下の大時計が、ものうく二時を告げた。このごろにしてようやく私の胸は早鐘を打ち鳴らし始めた。思えば私の童貞は斯く悪魔的営なみのうちに破られた訳なのであつた。





——新子はその後、日成らずして瀬戸の小学校に帰つたそうであるが、間もなく、妊娠したとか、子を墮したとか、その間の消息は探るべくもなかったが、二期修練生の話では、旅館宛数度に亘つて女文字の封書が郵送されたとか、勿論変名を名乗っていた私達に届く手紙ではあり得なかったが。……

### 【3】

召集、海外派遣、敗戦、復員というおきまりのコースを辿つて再び官庁に復職した私は埼玉県大宮市の祖父母の家から東京まで通勤することになった。父は継母を迎えて熊谷市に移転したので私一人、茲に残つて働くことになったのである。これには色々の事情もあつたが、要するに七ツと違わない年若な後妻を母と呼び兼ねたし、それだけ本当にやさしかった母の面影をそつと秘めておきたかつた私の安易なセンチメンリズムが父一家と一緒にすることをがえんじなかつたのである。

祖父母は実にやさしくいたわつては呉れた。然しその愛は所詮母のそれに及ぶべくもなかった。つまり愛は愛でもこまかな処に手のとぐく母としての愛情には質の異つた盲目的な祖父母達の愛情は、結極、私をして、わがまゝな変質的な性格を植え付ける結果となつてしまつたのである。

私は放任主義の祖父母の膝下にあつて、実に自由な生活を送る身分であつたが、不思議なことに、母の情愛の缺如が私をして、意古地な、ひがみ根性と、左傾した学問の分析力から富める者や美麗なものを憎み、自分以外の他の幸福を破壊したいと云う変質的性格をます／＼つものらせることになつてしまつた。

それが何時しか、サジズム的傾向となり、特に美人に対して淫虐を加えたい慾望が、烈しく私の血汐をたぎらせる。雑誌や単行本の影響から女の責めを覚えると、それを實際にこの手で持つてみたい。美しい女の悶え苦しむ有様を、眼のあたりじつくりと味つて見たい。この衝動は日一日とつものるばかりである。然し、半面、美しい女のズロオスや腰巻をぎゅつと抱きしめたり、舐めたりもしてみたい。又、性器から弁する小便を飲んでみたい。このフェチズム的傾向も私の錯乱した脳裏の片隅に芽生えている。そしてこの悪魔的思考の果てが實際に行なわれる秋が来たのである。昭和二十一年六月下旬の一日だつた。

もう世の中は衣更えに急がしい夏を迎えていた。当時私は吉川英治の「宮本武蔵」に熱中していたものである。パンツ一つで離れの四畳半に寝転び乍ら、特にお郎の責め場をたのしみつゝゆつくりと味読するのである。そして夢幻の陶醉境に浸つてしまふのである。この時であつた。不図、チリ紙を用意していなかった私は、急いで周囲の見廻した。拭くものを求めていたのである。何か洗濯物はないかしらん、と思つて湯殿に入つてみると、隅のたらいに沢山固めたものが入つてゐる。(どうせ女中の浜子が後で洗つてくれる、どれか使つてやれ) そんな氣持で掻き廻しているうち、ふと黒い布が眼に付いた。祖母以外女ツ氣のない、この家で黒いネルのズロオスは女中の浜子のものに違いない。私は妙な好奇心から、そつと摘んでみた。やわらかな手ざわり、股を締めるゴムを拵けてみる。あの十八になる尻の大きな浜子に合う大型のズロオスだ。よく見ると、黒い布地なので氣が付かなかつたが、浜子の大事なものの当る箇処

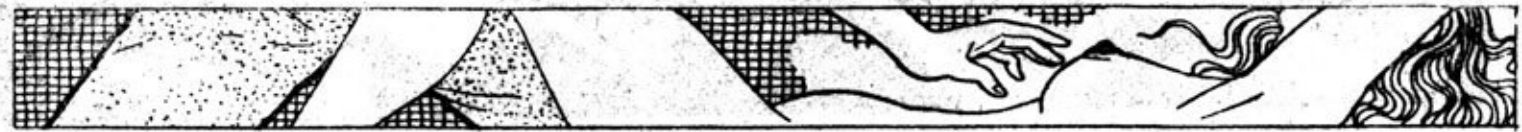




が赤黒く固まっているのである。(あいつ、月経だったのか、それで昨夜も風呂に入らなかつたんだ) 私はそんなことを考えながら、その部分の臭いを嗅いでみた。決していゝ香りではない、然し、興奮し切つた私の感覚はもう堪まらない悦びで一杯になつていた。恥毛が一、二本血のかたまりにこびりついている。きおい立そた私は夢心地でそのズロオスを抱きしめていた。二時間後、何も知らぬ浜子はそのズロオスを湯殿で洗滌を始めていた。田舎出の健康さにはち切れそうな四肢を誰も見ていない広い湯殿で思うさま伸び拡げて洗っているのである。私は暑いのを我慢して締め立てた障子の棧をそつと外してのぞいてみた。白いズロオスが股に喰い入っている。尻の割れ目まで判然とする薄い夏物のズロオスだ。私は思はずぐりと生唾を飲んだ。彼女の洗濯は私のシャツや祖父の浴衣などで半時間程かゝつた。その間中視続けた私の識り得た女の生息は実に幻滅に近いものであつたのである。浜子は最初流行歌の「愛染かつら」を軽く口誦み、次に国民歌謡の「椰子の実」から「ロオレイ」と、ロマンチックにはなつていたが、その途中で二度鼻くそをほじくり、一度は濡れ手のまゝズロオスに手をつゝこんで搔いた。そして堂々と放屁を発したのである。夏物のワンピースの踊んだ胸もとから豊満な乳房がゆさ／＼と揺れていた。まだ男を識らない乳頭は桃色に染まり、何か美しい淨らかな雰囲気を胸の中で護つていた。洗濯が終わると湯槽の掃除にかゝつた。服の裾をズロオスのゴムに巻き込んで、太腿の辺までまくり上げて桶の底を洗い始めた。そして栓を抜くと、どうしたのか、いきなり簀の子の隅に行つてくるりと尻をまくつたの

である。尿意を催したので先刻から独り居の女の世界にあきれ返へつてしまつてしまつていた私は今度こそまつたくびつくりしてしまつた訳である。ズロオスを下ろす。隔む、もう、じゃあつと音を立て、心地良さそうに放尿を始めた。黄色い尿は溝に落ちてその儘、湯気と共に下水に流れ込んでしまう。丁度私の覗いている眼の前に踊んだ訳なので嫌でも浜子のものはまる見えである。白い奔りは暫く続いた。そして二三度尻を振ると、すつと立ち上つてズロオスをひっぱり上げる。パチンとゴムが胴を締める。右手がズロオスの上から軽く押える。紙を使わぬのだ。私は、浜子のこうした動作に女の大胆さを知つていさゝか空想していた美人の生活概念が崩れかけたきらいがあつた。夕刻浜子が街に使いに出た折を確めて私は玄関の四畳半に入つて行つた。この部屋は浜子と私の共通の部屋で、私達はこの部屋で寝起きをしていたのである。祖父母達は奥の八畳で昼寝をしている。勝手に続く六畳は皆の食事や雑談に使用する部屋だし、別の八畳は来客用の為、畳も新らしく、私とて滅多に入りすることを祖父から禁じられていた。湯殿の側の離れは私の勉強部屋になつたり、浜子の裁縫に使われる。私は襦を締め切ると、唐紙を開けて浜子の下着の入っている行李をひき出してみた。毎日寝起きしていて気の付かなかつた女の持物は、それは大変なものであつた。四つのトランクと二つの行李、この外、風呂敷包みが三つ、いづれも衣類である。下着類は二つの行李にぎつしり積まつていた。肌着、白足袋、股引、が小さくぱりと洗濯のにおいを残してたゞまれてあつた。白のズロオス三枚、黒ズロオスが三枚、腰巻はネルとメリンスがそれ／＼





一枚づゝ、外に脱脂綿の包みが一つ、月経バンドが一つ、これは新聞紙にくるんだ儘、隅の方につゝ込んであつた。この他、毛糸のパンツ、割烹着、シュミイズ等が綺麗に重ねて積まれていた。私は桃色のネルの腰巻をひき出すと、柔らかなネルの肌ざわりに思わずそうを汚してしまつていた。私は額の汗を拭う間もなしに、汚した腰巻を、もとの様にたゝんで行季の中にしまい込んで喰わぬ顔で部屋を出て行つた。

#### 【4】

その夜、私はまんじりともせず時刻の過ぎるのを六畳の部屋で待つていた。祖父母達は八畳の奥で、ぐつすり寝入つてゐる。時刻はよし、私は二燭の電球に切り替えて蚊帳をくぐつた。浜子は風の疲れで、寝いきまで立て、少々の物音では眼を覚ましそうもない。私は殊更に落付いて計画通りの実行にかゝつた。その夜は又、特にむし暑い夜で、風の死んだあたりの熱気は、じつとしていてもにじみ出るような汗であつた。メンスが昨日で終つたらしく、夕方風呂に入つた浜子はメリンスの赤い模様のある腰巻と肌襦袢一つで私の布団と、畳一枚離れた位置に真つ白なシャツを掛けた布団に深々と身体をうづめて死んだように眠りこけている。淡い電灯の光りで女の額や腕が汗ばんでいるのが見えた。私はそつと這い寄つて先ず予定通り腰巻の裾をそつと持ち上げてみた。丸々と肥えた健康そのものの太腿は傷一つない、艶やかな色で熟し切つた桃のむせ返るような女の臭いがまつわり付いていた。

「——うゝむ……」

女は一寸うめいてその儘、私のなすがまゝにまかせて、ぐつすり、寝入つてゐる。繻絆の襟は軽く指先きで左右に開けた。鼠間見た豊かな抜けるように白い二つの乳房は重そうに胸の上に乗つて、ふれれば暖かい体温と共に溶けてしまふかと思われればかり……。

「痛い、あゝ、痛いから、もう止めて、ねえお願い、止めてえ——」

何時の間にか私は浜子の両手を頭の上で腰巻で縛りつけ自由を奪つていたのである。

「手を解いて下さい。恥かしいから」

哀願したが私は無情にもそうした浜子の裸像を長いこと眺めて熄まなかつた。時計が一時を打つた。私は小刀の端で乳房や腋の下をチク／＼とこずき廻して痛がる浜子を面白そうに眺めて愉しんだ。

「よし、もう許してやる。だが明日からはお前は僕の秘密の妻になるのだ。今夜の事をお爺ちゃんに云い付いたら非道いぞ、解つたな、お前はこれから何時でも僕の云う事を利かなくてはいけない。お前は僕のおかげで一人前の女になれたんだ。分つたら早く便所へ行つて始末して来い」

女の手をほどこいてやると私はその儘、ぐつすり寝入つてしまつた。征服慾を満たした大らかな気持ちと、心よい肉体の疲れで朝まで何も識らずに眠つてしまつた。眼が覚めると、枕許の小刀も懐中電灯も皆片付けてあり、彼女は台所で鼻唄で何やら瀬戸物の音を立て、炊事の最中らしかつた。

こんな夜があつてから、浜子の私に対する態度はすっかり一



変してしまった。何時の間にか私のシャツは買つて呉れる。パンツは洗つてある。眼に見えない気の付かぬ事にまで、そうした行為が察しられた。然し浜子の打つて変つた態度に反して私の加虐的な本能は、つゝの一方、土曜日になるときまつて彼女を映画や観劇に誘い、御馳走をしてやつた。そして日曜の半日は離れの四畳半に彼女を拘束して表に出さなかつた。私は浜子を時に裸にし、時に衣類の上から縛り上げ、学生時代に使つた剣道の竹刀で打ち据えたり、ズロース一枚にして足首を縛り逆さに吊して鞭打ちの責めを試みたりした。この場合、痛さにあたえ兼ねて、きつと浜子は小便をもらしてそこいらを汚したものである。こうして最初の頃は、泣き喚いた浜子も二ヶ月、三月の後には、むしろそうした変態的行為を好むようになり、苦痛がいつか悦楽に変つて来たようであつた。

或る時私は罪人を罰する様に細引で全裸にした浜子をがんにがらめに縛り上げると、湯殿から洗面器を運んで来て彼女の前に置いて、傍にあつた薬罐やかんを取り上げた。かねて探偵雑誌で読んでおいた拷問の実験であつた。それは薬罐の水を女の口から強引に注ぎ込むのである。水には塩を多分に交ぜておいてあるので、女はしきりと数十分後には小用を訴え出すのである。私は浜子の尿道にガアゼの端を詰め込んでその上から持つてこさせた腰巻とズロースを使つて緊縛したので、排泄が出来ず生理的な苦痛はいよゝゝ烈しくなつて来ると云つた仕掛である。私は嫌がる浜子の頸に手を掛け、齒を噛み合せて閉ぢたがる唇に漏斗を当て、無理に押し込むと薬罐の塩水を次々と注ぎ込んだむせび悶える浜子の顔に汗が浮き出て、美しい顔は一層美しさ

を増した感がある。私は革バンドで七八回股の付根を腰巻の上から打ち据えて云つた。

「苦しかつたら僕の命令通りにしろ、嫌ならもう一ト責め責めてやろうか、まだ水は沢山あるんだ、どっちがいい」

勿論浜子は私の云い付けにがえんじない訳にはならなくなつた縛つてあつた両手を解いて腰下を緊めていた腰巻やズロースを外し、ガアゼを引き出して、浜子に浴衣を与えてやつた。裸身を掩うと、彼女は私の前に坐つて私の裁きを待つのである。

「よし、じゃア、この洗面器に小便をしろ、紙は昨夜あれに使つた紙を伸ばしておいたからこれで拭くんだ、早くやつて見せろ」

あきれたような顔の浜子は、それでも観念したものか、私の手から京花紙を受け取ると、洗面器に跨つて浴衣の裾をまくり上げて跪み込んだ。

「よし、早く始める、眼を閉じるな。僕の顔を見乍ら出すんだ一寸でもそしたら次のもつと恐ろしい拷問に掛けてやるぞ」

浜子は、はいと応えて、放尿をして私に見せて呉れた。別に何の変哲もない、生理の処置に過ぎないのであるが、たゞ便所の中で、他人に見せぬ行為だけに、不思議な魅力が私を興奮させるのであつた。勢よく放出された尿は洗面器をはじいて、飛沫が彼女の股下に散つて顔を近づけていた私の眼にまで沁み込んだが、私の錯乱した情感は火の如く燃え抜いて、総べてが夢中であつた。私は次々に尿意を訴える浜子にもう一度放尿を許し、花紙で拭く動作を吟味して観察した。三度目に私は浜子に便所に入る処から用を終えて扉を閉めるまでの動作をやれと命





じた。浜子は云うなりに行動しなければならなかった。真新しい京花紙の束を渡すと、浜子はそのうちの五枚程を無難作に握んで、右の掌で握ると、洗面器を跨いで、浴衣の裾をまくりズロオスを下ろして踏み込んだ。小便が終ると、静かに右手がたんねんに股下を撫で廻し、すつかり拭き取ってから、その儘洗面器に捨て、立ち上った。ズロオスを上げ、裾を下ろし、扉を開けて出ると云った恰好である。この動作をゆつくりと私に判るようにしてやつた。私はやゝ満足したが、未だ便所の秘密は残っていた。それは女の大便をする有様である。これを浜子に命じたのである。洗面器の後ろに彼女の腰巻を敷き、新聞紙を更に二枚に折つて敷いた。

「これが便器のつもりだ。こゝで大便をして見せて呉れ、そうしたら出してやる、やれ」

浜子は泣き顔で、それでも、顔面に朱にそいで、いきみ返り乍らあお勦い健康的な便を肛門一杯開いて脱糞した。臭気が部屋中に立ち籠めた。しかし、私は嬉しかった。更に私は一杯になつた洗面器の液体を飲むように命じた。ためらつた彼女は（もう許して）と哀願したが私は許さなかつた。私は五寸釘を彼女の前に置いて、

「嫌なら、拷問に掛けるばかりだ。よし、一度苦しみ直せ、その方がきゝ分けがよくなると云うものだ」

私は声を立てられぬようにズロオスを浜子の口の中に押し込むと、腰巻で猿轡をかつて両腕を後ろ手に縛り上げ、うつ伏せに倒して尻を上げさせた。そうして五寸釘を肛門に刺し始めたのである。ひきつるような呻き声を挙げて悶える浜子の背に革

帯の鞭を二つ三つ呉れて、静まらせると再び釘を、ゆつくりと挿入した。肛門の口をすばめて抵抗する浜子の腰部を腕でかゝえ込み乍ら、私はこの楽しみはとうてい味わえるものではないぞとひそかに悦びつゝ五寸釘の拷問を終つたのであつた。浜子は半分以上肛門に挿入された釘の痛みで、少しでも身体を動かせば、それだけきり／＼無いして苦しむことが解つていたのか案外素直に私の命令に従うことを誓つた。彼女は自分の排泄した小便を、身も世もあらぬ思いで飲み込んでしまつた。私は小便を拭つた京花紙を喰べてしまふことを命じた。無理押しに、紙の固まりを口に詰め込んでのみ終ると、彼女は、

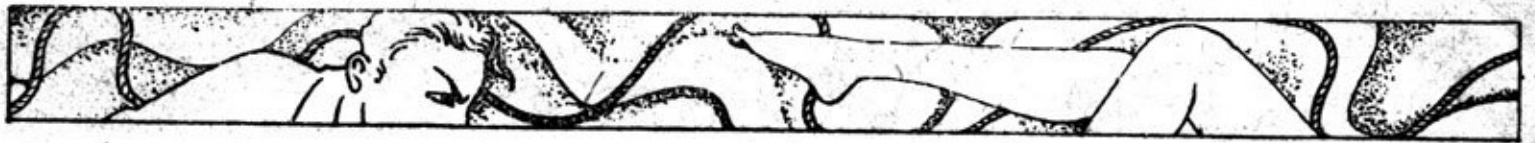
「もう殺して下さい。苦しくつて、苦し／＼つて、ああ許して下さい、お願いです」

顔をゆがめて私の足にとりすがつて哀願した。私は散々女を苦しめ、なぶつた上、

「では今日はこれ迄だ、来週は、お前は火責の刑を受けるのだいゝな」

仰向けに押し倒し、十ばかり鞭をくれて台所を追いやつてしまつた。それでも彼女は私の為にセイターを編み、靴下を買つて呉れた。彼女の給金の大半は私の為に費やされたものの様であつた。まつたくこの頃の私は鬼畜の有様である。この年の終り、十二月の末に浜子は附近の農家の次男に見込まれて、嫁に行くことになり、祖父の家を辞して行つたのであるが、その最後の晩私と浜子は一睡もせずして情慾の海に朝を迎えた。彼女は私のパンツを、私は彼女の白いズロオスと赤い思出の腰巻を各々形見に頒け合つて、お互いにそれを身につけることを約し





て別れた。

間もなく一月の半ば頃、彼女は離婚したと云つて祖父の家を訪ねて来た。私の子を孕つていたのがわかり離別されたのだそうである。私達は離れの四畳半で久し振りに語り合い、肉体は一つとなつて暫く燃えた。子を墮<sup>おろ</sup>すことになり、私は給料と暮のボーナスを与えたが、彼女はいらないと云つて受け取らなかつた。彼女は大きくなつた腹を見せて、パンツの紐を解き乍ら、「こうして貴男のパンツを穿いて来たわ、貴男は？」

と云つて私の顔を見た。私とて同じである。あれから二ヶ月の間、私は浜子のズロオスを穿いて役所に勤めていたのである。汚れると腰巻に代え、祖母の眼を盗んでは四畳半に洗濯物を乾して、身に付けていたものである。

「嬉しいわ、私、貴男にうんといじめて貰いたい、ねえ、何か形身になるように私の身体にしろしを付けて」

久しく会わぬうちに、こうまで美しくなるものか、豊かな黒髪はバアマで調髪されて高貴な感じを与えた。桃色のストッキング、唇紅の付け方も覚えたらしい。うす化粧がこの場合、かえつてこの女の美しさを適当に發揮させている。紺の上衣は女学校の教師を思わせる。清楚な美だ。元来が美しい容貌であつた処に、マツチした美容が施されたのであるから、私が眼を見はつて驚いたものも当然であつたろう。

私は最早躊躇すべきではなかつた。

「少し痛い但我慢出来るなら、素晴らしい記念を作つてやるよ」

「ええ、いゝわ、裸になるのね、きつと辛抱するから早くして」

「よし来た、じゃズロオスをぬいで腹這いになつて御覧」

浜子は、ひるむところもなく、無雑作に服をぬぎ、シユミイズも脱いだ。私のパンツを解いて全裸になると、尻を高くしてうつ伏せの姿勢で眼をつむつて云つた。

「お尻に釘を刺すんでしょ、痛いなあ、」

「今日のは違うんだ。もつと苦しいかも知れないぜ、いゝね」  
こつくりする彼女の美しい横顔を眺めて、私は部屋の戸を閉めて電灯をつけた。台所から蠟燭、マツチ、割り箸を集めて準備に掛つた。私は浜子の肉体に一生消えぬ烙印を押そうと云うのである。ジリ／＼割り箸の端が焦げるのを待つと浜子に声を立てぬように言つた、浜子は、もう馴れつ子になつていたものか、自分でハンカチを噛んで猿轡にして眼を細めた。ぶす／＼いぶる割り箸の端を臀部に当てがうと、

「ううっ——」

と呻いて尻の肉をひく／＼させたが、その儘、じつとこらえるべく歯を喰いしばっている。じく／＼と柔らかな肉が焦げ始める。二三度箸の端を焼き直して肛門に当てがう中に赤く爛れた臀部のまわりにねつとりと汗が浮き上つて来た。浜子は苦痛を忍んで頑張り通してしまつた。

「よくこらえたね。流石に浜ちゃんだ、偉いよ、だけどもう一つ君の身体にしておきたいことがあるんだ」

私は今までかくしていた西洋剃刀を前に出して云つた。むしろ笑つてその意味を察したらしい彼女はハンドバックから、脱脂綿の小さな固まりを取り出すと、器用に指先で肛門に詰め込み乍ら、あお向けて寝転んで見せた。





「私、メンスが今日あたり終るんだけど、だから……、せめて貴男の仰る通りにして預きたいの。」

私は何か哀しい寂しさと、憤りであつとなつてしまった。

何も識らない純真な田舎娘をこんな変態的な言辭を吐く、淫虐好みの性格の女にしてしまったのは総て私の犯した恐ろしい罪惡のなせる業なのである。今は虐げられることにのみ悦びを感じ得る浅ましい劣性の女に浜子は更つてしまったのだ。あの美貌な浜子の発洩とした健康的な心の明るさは既に遠い忘却の彼方に消え、ひたすらに暗い惨虐の血の世界に悦びをもとめる性格破壊者に落ちてしまったのだ。私は女に加える淫虐はこれが最後だ、許して呉れ、と自分自身の浅ましい情感をさげすみつゝも、浜子の恥毛を剃り落してしまった。

### ○愛読者からの便り○

編集長自ら御多忙中にも不拘、御手紙お寄せ下され、ありがとうございます。奇クの一番興味があるのは人にも云えず人からも聞けない話がタツプリ読めるからで、その点各人各様の性歴や告白が何んといつてもトップ記事です。読者投稿でもついている本だという人もありますが大体アブノーマルな人々の投稿があんな面白くスラ／＼読める文筆の才能を持つているとは思えずその点筆を入れてお

られる先生方の御苦勞はよく分ります。今後とも「絶対人から聞けない、人に云えない性の打ち明け話」を続けて下さいますよう祈ります。

さて先生方の御苦勞今更乍らお察します。軽症の中はよいですが、重症サドマゾ、ソドミーからルストモルド、フェチズム、尿淫症、糞淫症まで相手にして居られたんでは、精神病院の医師の如く、時にはヘンになるかも知れませんが十月号で鬼山氏の言われたようにアブの海は無味乾燥なノーマル砂漠より誠に面

それから一月ばかりして幸に彼女は大宮工機部(鉄道工場)に勤務するK君に貰われて華燭の典を挙げた。彼女は今では二男一女の良き母である。世間並みな生活に落ち付いているであろう彼女の昨日今日は知るべくもないが、懺悔の一念は私の胸を強く締めつけて只彼女の幸福を祈るのみである。彼女は埼玉県与野町の豪農の娘で都築と云うのが本姓であつた。

扱て、私のいよ／＼つる変態奇行は我ながら懼ろしくなる一方、罪深き行為を重ねつゝ、浜子の件以来マゾの世界に変わった性慾の嵐は、依然として、惡魔の血潮を馳け巡り、吹き荒んで熄まなかつた。それは祖父母達の相次ぐ逝去で東京に出た昭和二十二年の春、桜見物ににぎわう頃からであつた。

未完

白いですが、下手をすると底なし海へ沈んでしまいます。読者の声を聞こうともせぬ独善も困りますが一部の重症アブニストの御機嫌とりにならぬよう御発展を祈ります。

小名木貫一

(御忠告ありがとうございます。幸い編集長以下各編集員はその道の強心臓の持主ですが、十分注意はします。その中我々の赤裸々な告白物でも誌上に載せますか)

箕田 京二



性愛コースの  
チャンピオン

## 雄雞・山羊・牡牛

神

崎

稔

十ヶ月もかゝつてタツタ一人の子供か、うまくいつても双子とか産めない人間にくらべると他の動物界は、孜々営々まことに能率的であります。

雄雞、山羊、牡牛なども、性欲の道では優秀なチャンピオンであります。むかしギリシャの寺院で発見されたブライエーブスの胸像はその頭を雄雞とし、その嘴を男茎とした珍重すべきものであつたといわれ雄雞の多淫性が往時すでに男の活動をシンボライズしていたことが頷けます。

昔はオリンピアの勝利者に贈つた花瓶にオンドリを描いたといわれ、現代人でも雄雞をコックと呼び覇者を贅える具に用いていますが、ニッポンの猿田彦命なども鳥の兜を冠つて旺盛なエネルギーを謳歌しています。



エジプト人は牡牛と山羊をとくに神聖視しましたが、牡牛はいまもなお印度では生殖の権化として諸寺に祀られております。

山羊の荒淫は動物界に尤たるものがあり一夜にして能く八十頭の牝羊と交り疲れを知らぬといわれますが、古人がこの限りない淫慾と活力に驚嘆措く能わず、山羊を偶

像に祭りあげたのでありまして、牡牛のすさまじき牽引力といふコントラストをなすのであります。

デュロール氏の説によりますと、牡牛と山羊は一陽来福のシンボルであり、子を欲するエジプトの女はメンフェイスに祀られた聖牛エービスの前で、その恥部をあらわに見せたが、山羊の信仰もエジプトの一地方で行われ、その地もまたメンデス（山羊）と称せられたといわれる。

また、古代ローマ人の敬える神々は山羊の脚と耳をもち、ルーパカリの祭壇に供した山羊の皮で作つた紐で裸体の女を打つて子を孕まし、或は牡牛を殺して改宗の徒に浴せかけたのも、みな信仰上のしきたりでありました。

これらの神々としては牡牛の角をいたゞ



くジュビタ・アンモン、山羊の脚をもつパン神、サイリーナス、山羊の耳を有するサターの名をあげうるが、強力な生殖を誇るこの動物の性器が弱い人間に大きな憧れを抱かせ、それを神の高さにまで持ちあげたことは想像に難くないのであります。

パン神はこのように肉慾的な娯楽の守護神でしたが、ギリシャ人がこの神を理想化し、最敬礼をしたのも、人間としての最高最大、最深の享樂と法悦をもとめようとした結果でありまして、メイメイと鳴く山羊の声に音楽的なリズムを感じたわけではありません。

伝説によると、パンは豊饒の神で、とくに牧羊者と獵師を保護し、ハーミーズと森のニンフの間に生れた子であるといわれ、額には角あり、羊鬚曲鼻、耳尖り、尾と脚は羊のごとく不恰好でした。

パン（汎）なる意味は、オリンパスの神々がこの醜怪なる貌を見て、すべてこれを愛したからだといわれていますが、性器の恰好も見ずに外貌だけで相手に飛びつく人間たちとはさすがにケタが違っています。

後代、パニック（恐慌）という語がパン神より生れたといわれていますのは、この神が寂しい徑で恐ろしい声を出し旅人を驚かしたゆえだと伝えられますが、山羊にする牡牛にしる、声の点は自信があるとは申せすまい。

声では、キリスト教のシンボルであり、聖靈である鳩が性的な魅力をもつて、神々の寵をうけました。

一五四二年ヴェニスで、教会の權威により描かれた「聖母の珠数」をみますと、聖なる鳩の投ずる光が聖母の胎内に宿り、キリストを孕んでおり、鳩が陽因たることをしめしていますが、或るときには陰因のシンボルとして扱われたことは、神話の女王セミラミスの象徴となつたことによつても明らかであります。

鳩がこの女神に神聖視されたのは、その陰にこもつたような鳴き声がアッシリアの男女が囁く交接の呼吸に似ているという意味深長な説もあります。

天二物を与えずといいますが、神はまさしく二物を恵み給わず、谷渡る流行歌手た

るウグイスのいかに貧弱なる性であることか、牡牛や山羊の貌醜しといえども何とその性の豊満なることか、世の婦人はすべからく古ハの故智にならない、肉体の貌、真実の味が腰より下にあることを研究して、女の幸福をつかむべきであります。

世の男子また然り、醜婦をあさつて性の醍醐味を知つた家康、或はかんばせ拙い妻の貞節を基礎として武運をつかんだ吉川元春の心を知り、せめて雄雞の精力にあやからねばなりません。

（完）

## 次号 予告

### 或る死刑囚の告白

### 赤につかれた男

赤い色にのみ、性的アツピールを感じるその男の暗い生涯には、そんなになるだけの一つの必然性があつた。母親を責め虐げて狂喜する淫虐的な父親の血を受けて、彼の濁つた血潮は狂うのだ。サチズムとマゾヒズムの舞い狂う此の百枚に及ぶ告白は読者の胸を打たずにはおかない。御期待を乞う。



## 原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
- 一、内容は本誌に相当と思われるものでしたら如何なものでも結構です。
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品発表作品には発行後相当の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、挿絵、口絵、写真、漫画、小話、笑話等も募っております。

奮て御応募下さい。

(奇譚クラブ編集部)

## 躍進 新年号の威容

乞御期待

特異な題材を引つ提げて、号を追うて躍進と内容の充実刷新を續けている本誌が次号新年号を機会にその眞価を読者に問うべく、編集陣の総努力により、こゝに異色風俗誌の金子塔を礎きあげました。新年号の発売を刮目して御期待下さい。

## ◎玲子画帖◎

限定版締切御礼

編集部に対して、いろ／＼の御批評御助言を賜り厚く御礼申し上げます。続篇刊行の際にはよろしく御援助下さるようお願いいたします。只今文書編輯のため、御照会御問合せに對しての御返事の遅延は御猶予下さい。

## KK通信

大好評、増頁断行

本誌愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いのパンフレット、見本十円切手にて急送。半年分実費概算百円御送付下さい。

## 先ず書店へ

御予約下さい

熱狂的な本誌ファンが増えにより、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

## ◎編集方針について

読者のお問合せをお待ちします

尙本誌の内容編集方針について読者の御意見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい

- 一、縛られた女の写真に關して (辻村 隆)
- 二、男子同性愛の件について (染田 玄)
- 三、縛られた女の絵について (喜多玲子)
- 四、編集方針の一般について (箕田京二)

その他、松井籬子、藤安節子、二俣志津子等の作品についての御意見、御問合せに關しても本人よりの御返答を掲載いたします。

☆旧号は送料共一冊九十円にて御送付申し上げます。本年六月号以降より毎号若干保有しております。御申込下さい。

## ◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)二百七十円  
半年分六冊(送料共)五百四十円  
一年分十二冊(送料共)一千八十円

毎月品切れにて御迷惑をかけています。御買得の機会に是非直接購読の申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方にはおまけの女の写真三枚一組一年分御申込の方にはヌード・アルバム一冊サービス品として贈呈申し上げます。外KK通信贈呈

## 奇譚クラブ

第六卷第十二号  
毎月一回一日発行

十二月号 定価九十円

昭和二十七年十一月三十日印刷  
昭和二十七年十二月一日発行

編集人 箕田 京二

印刷人 上田 庄之助

発行人 吉田 稔

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙 書房

振替口座大阪三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。